

この素晴らしい仲間達
に救済を！

ネギ鷺

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある人は言った。《求める》だけではいけないと。それでも、青年は「賛辞」を、女神は「共感」を、少女は「共存」、王女は「自由」を求めた。これは持たざる者たちが求める続ける冒険譚。4人全員がハッピーエンドに辿り着く保証はない。それでも、助け合ひ、葛藤し、もがき続けるから得られるゴールがある。

それは、自己犠牲から生まれる平和。願いの苗に育った想いは。《仲間たちに救済を！ルート》

妥協の末の最短紅伝説。全てを振り払い青年は戦う。盪回しの答えの先へ。《ゆんゆんルート》

物語の真理。女神守ると誓った青年の、全てを賭けたグランドファイナーレ。《エリス
ルート》

果して青年の辿る旅路は……

現在エリスルートを更新中です。

目次

キャラ設定(第一章〜二章まで)	1	改稿前の原案です	35
エリスルート 主要キャラ紹介	9	プロログ(改稿前)	41
近況報告と映画の感想(がつつりネタ バレあるので観てない方はブラウザバツ ク推奨です)	15	第1話 ああ、女神様! (改稿前)	48
報告 2020年5月3日	20	始まりの街アクセル編	
共通ルート閑話		プロログ(改稿後)	58
クリスマスのお話	22	第1話 ああ、女神様! (改稿後)	※
BADEND集		ルート分岐	70
		第2話 キャベツは飛ぶんです。 は	89
		第3話 金髪ロリ剣士は王道!?	

第8話	男の戦い	225	第16話	彼の商売がこんなに辛いわ	379
第7話	なぜ、この世界は俺に冷たいのか	206	第15話	なんちゃって幹部のバニルさん	362
ユウマ		180	第14話	クリスの花	345
この仲間／zero	エピソードオブ	165	第13話	変態とぼっちと爆裂魔と	328
第6話	極限の瞬間(改稿)	148	第12話	この不毛な裁判に論破を!	306
第5話	変態首なし騎士に制裁を!	131	第11話	残念なフラグ回収	272
編			死闘! 悪徳領主編		
第4話	この駄女神様と商売を!(後)	121	第10話	決戦! 機動要塞デストロイヤー	244
編			第9話	異世界へ行こう	
第4話	この駄女神様と商売を!(前)	104			

けがない。 | 403

第17話 自信を胸に | 413

第18話 二人だけの日 | 428

第19話 覚悟 | 437

第20話 この悪徳領主に天罰を！ | 551

450

人類最前線 紅魔の里編 | 560

第21話 そして後日…… | 477

第22話 新たな旅 | 487

第23話 アルカンレティアで大騒ぎ | 498

第24話 道中 | 511

第25話 ようこそ紅魔の里へ！ | 629

527

第26話 紅魔の里観光ツアー | 540

540

第27話 魔王軍幹部 シルビア襲来 | 551

第28話 決意の瞳（前編） | 560

第28話 決意の瞳（後編） | 571

第29話 一人のためのヒーロー（エ | 588

リルート）※ルート分岐 | 599

この仲間達／Zero エピソードオ | 613

ブレリス | 629

第30話 for you | 613

世界観 | 629

六花の王都 王国の女たち編

第31話 私の日常 633

第32話 正体 641

第33話 別れ 650

第34話 欠けた日常 665

第35話 結界魔術 674

第36話 王城の決戦 正義の義賊対

正義のヒーロー 680

第37話 エゴ 700

第38話 厄災の獣 709

第39話 永久に輝く勝利の剣

727

世界最大のダンジョン編

第40話 戦いの次はまた冒険

753

第41話 旅立ち 768

第42話 夜空の下で 782

第43話 勇者佐藤 800

第44話 それが一番大事 817

第45話 怒り 836

第46話 ありうべからざる日常

856

第47話 選んだ道は 865

第48話 求めたもの 885

第六章 防衛決戦 アクセル編

第49話 変わったものと変わらない

					もの	
					第50話	最も近く、遠い場所から見
					た話	902
					第51話	悪魔の取引
					第52話	覚悟の瞬間
					第53話	針鼠のジレンマ
955	閑話	女神からまごころを込めて				946
						938
						925
						917

キャラ設定（第一章～二章まで）

メインキャラクター

・工藤悠真

今作の主人公。

職業？ウイザード↓アークウイザード

十七歳（後に十八歳）の高校生で陸上部所属。

高いポテンシャルと努力で、関東最速のランナーまで上り詰めたが、無理がたたり過労死。

小さい頃からの周囲（特に父親）の評価が乏しく、否定的に育つたため、自己評価が低い。

誰が見ても認めてくれる、人間を目指すあまり、一種の執念にも近い自己犠牲と努力が身に付いている。

また、多くの分野に精通しているが、裏返せばこれも人に認めてもらうために無意識

で身につけたもの。

・エリス

ルート次第ではヒロイン

職業？アークプリースト

元天界異世界担当。

我らのポンコツ女神様。

才色兼備で慈悲深く、非常に面倒見がいいと評判が高い。

パーティーでは家事の大半を担い、パーティーのおか……お姉さんの存在。

過去に先輩女神たちに教わっていたおかげで料理の腕は一人前、めぐみんいわく三ツ

星レベル。

悪魔、アンデットにはアクア以上に容赦なく、見つけ次第バトルファイト。

ちなみにパット疑惑があったらしいが下界の際、サツキの正体隠しの魔法によって、パットがつけられなくなった。

・イリス（キャラ設定2に続く）

謎の妹キャラX

職業
????

ユウマからの第一印象は礼儀のいいお嬢様。

話が進むごとに周りや打ち解けていき、今ではパーティーの小悪魔的存在。

年のわりには人を観察することに長けており、ユウマいわく、いろんな人間を見てきた目らしい。

愛剣は多分皆さんご存じのあの聖剣。

・ゆんゆん

ルート次第ではヒロイン

職業？アークウィザード

二章の中盤で仲間になった魔法使い。

人との関係作りが苦手らしく、友達は植物のもよう。本人いわく、めぐみんはライブルらしい。（めぐゆんはいいぞ〜）

紅魔の里の族長の娘で魔法使いとしての素質は一流。

その他のキャラクター

・カズマ

我らの原作主人公。

今作ではユウマパーティーのおかげで本人の幸運が殺されずにすんだため、借金を抱えてない。

そのかわり、ゲスさにステータスが振られ、パンツを剥いでからスカートめくりという、究極のコンボ技を特技としている。

・アクア

我らのポンコツ女神様その2。

ただし、今回はエリスがいるのとユウマが女神扱いするため、見栄を張って女神している。

聖水のおかげで序盤から金には困ることがなく、裏では好き勝手している。

時々、ユウマの家に呼ばれては、エリスの酒を飲ませられたりと、いい思いをしている。

・めぐみん

今作でも安定の爆裂狂。

とにかく爆裂、爆裂！

ボスでも安定の爆裂魔法でレベルが一番高い。

デストロイヤー戦以降はユウマに爆裂魔法の勝負を毎日申し込んでるらしい。

原作通り、アルカンレティアでは自分が蒔いた種のせいでトラウマに苦しんだ。

・ダクネス

残念ながら今作では一番、台詞量が少ない人。

ただし、今回はデユラハン戦での借金が無くアルダープに貸しを作っていないため、裁判では強くでれたなど、何気に被害を受けてない。

今後の活躍に期待してください。

・ウイズ

貧乏、店主、爆乳、師匠、リッチー、残念美人と属性たっぷりなお方。

聖水の儲けをすべておじやんにするなど、商売センスは健在である。

・バニル

ぶっちゃけ魔王より強いかもしれない悪魔さん。

相変わらずの挑発でエリスとぶつかりあうのは日常茶飯事。

結界魔術や洗礼詠唱が使えたり、怒り時には一人称が俺になるなど、オリジナル要素を盛り込んだキャラです。

・クリス

盗賊の少女。

エリスが下界へ行ったことでパスが切れて自我を持つことができた人。

今作ではカズマに盗賊スキルを教えてなく、メインメンバーで関わりを持ったのはユウマだけ。(カズマに盗賊スキルを教えたのは下界に降りる前のエリスです。)

つい最近、悪徳領主の別荘に忍びこんだらしいが返り討ちにあい、現在は資金集めからやり直し中。

・サツキ

記録の女神。

今作のオリキャラ。

平行世界を含め記録されている能力ならなんでも使用可能なチートキャラ。

しかし下界にいるときはその能力が劣化するらしい。エリスの下界後は全能神の命

令でエリスの役割を引き継いでおり、隙を見つけては下界でクリスと盗賊活動に勤しんでいる。

敵キャラの皆さん

・ベルディア

魔王軍幹部の首なし騎士。

なんだかんだ、不遇な人。

ただ、補足としてベルディアさんは、けして弱くはありません！

ユウマに負けた理由はあくまでも、アクアの強化魔法がベルディアさんと対等に張り合えるまであげることのできる、チート能力だっただけです。

・アルダープ

悪徳領主。

今作では救いようのないクズ。

このあと彼の待っているものは皆さんの予想通りの結果が待つ裁判です。

ですがそれはまだあとの話です。

原作との違いとして、彼自身、マクスウエルのことをよく理解してます。（原作ではたしか名前すらわかってなかったとか）

・マクスウエル

真実をねじ曲げる悪魔。

地獄の公爵。

この悪魔の実力は相当なものではあるのですが、あまりにバニルが強すぎたのと、投稿者の文章力のせいでもませキャラになってしまいました。

ちなみに、バニルの洗礼詠唱により地獄からも完全に消滅しました。

エリスルート 主要キャラ紹介

登場人物

《主要メンバー》

工藤悠真（くどう ゆうま）

本作の主人公。異世界転生者にして冒険者。カズマなどの日本人からは悠真、この世界の住民からはユウマとカタカナで呼ばれている。身長は178cmと平均よりやや高身長。黒髪、黒目の日本人特徴だが、読書や真剣な考え事の時は眼鏡を着用している。作中では年齢が17歳↓18歳へと歳を取っている。

死ぬ気でやれば基本的になんでもできるを座右の銘としており、作中では周りが無理だと思ふことをはんば無理やりこなすこともしばしば。

自分自信にかなりの自信をもっているわりに自己肯定感が低い。カズマいわく努力家の癖に妥協を知っている。今まで褒めてもらったことがないから、周りからの評価を

感じられていないらしく。ユウマ本人に気づかせるには寄り添う他ないとのこと。

エリスとはアクア祭の後正式に恋人同士になっており、周りに公言していないがほとんどが周知の事実となっている。そのためアイリスやめぐみんからはよく冷やかされている。なお、エリスとの恋人関係について同じパーティーのゆんゆんは気づいてないもよう。

職業はウイザード↓アークウイザード

エリス

本ルートのメインヒロイン。エリス教の御神体にして幸運の女神。天界ではこの世界の死者の管理を担当していたが、先輩女神のサツキによって強制的に下界させられた。才色兼備で慈悲深い反面、好奇心旺盛で珍しいものや挑戦が好きでまれにどこか抜けてポンコツになる。酒癖が非常に悪く、また他人に強要することもしばしば。一度アイリスとゆんゆんの目の前で酔った勢いでユウマとR18行為に走ろうとしたことがあり、以後酒癖がマシになったとかなんとか。

アクアの持っていた日本の漫画に影響され薙刀に憧れ、何故か槍をマスターした。

人付き合いのうまさや包容力の高さを持つが、本音の部分では長年の死者たち理不尽な暴言や恨みによって精神的に追い詰められていた。また、霊核として自我が目覚めて

から、他人から自身に対する全うな評価をもらったことがなく、加えた浴びせられてきた理不尽な暴言によって受け身がちの性格になってしまっていた。本ルートでは紅魔の里でユウマからのフォローもあってから悪夢からは解放された。ユウマへの依存が強くなってしまったことが自身の悩みとなっている。

アクア祭の後ユウマと恋人同士になっていこう、シルビア戦で負った神核の傷を癒すためユウマと夜を共にしている。なお、キスまでのようで行為には発展してないもよう。アイリスいわくウブ、めぐみんからは焦れたいと言われている。ちなみに本人いわくエツチなことをすると霊核が落ちるとのことだが、果たしてキスはエツチにはいるのか？

アイリス

本ルートにおいての準ヒロイン。通常ルート、エリスルート（第4章六花の王都 王国の女たち編）が一応アイリスルートとなっている。作中では年齢が12歳↓13歳になっている。年頃の女の子らしい幼さな残る天真爛漫な性格でパーティーのムードメーカーとなっている。またたまにみせる小悪魔の片鱗によりパーティーリーダーのユウマだけではなく裏のパーティーの長であるエリスすら手込めにする恐ろしい顔を持つ。幼い頃から城内で大人の世界を見てきたため人間分析を得意とし、英才教育に

よって時にユウマたち歳上を凌駕する判断力と決断力を発揮する。その反面、幼いときから第一王女として決められた役にうんざりしており、ある人物から自身の真名を隠すことを条件に自由を求め城を出た。王都では自身を王族から救うことを目的とした力ズマと自身の決断を尊重するユウマの戦いを見て、自身の在り方を決め、魔王軍との戦いの最前線を王族として民を導くことを理由にユウマパーティーへ戻った。なお、ユウマとの関係は全ルート通して憧れを通しており仲間、相棒、友達の関係であるため恋愛感情はないもよう。なおカズマにたいしては異性として好意があるのかなんとか。

ゆんゆん

本ルートにおいてはユウマの相棒兼友人。作中での年齢が13歳→14歳になっていく。温厚かつ大人しい性格で物当たりの良さが評判。しかし、極度の引つ込み思案で、おどおどしく初対面の人と上手く話せない。言うところでは物事をはつきりいい、勝負の場面では戦闘に立つとう芯はしっかりしている。世界最大のダンジョン編ではユウマからのアドバイスで人間関係、人付き合いに少し吹っ切れたもよう。パーティーの中ではアイリスと仲が非常に良く、実の姉妹のようだと言われている。

《サブメンバー》

佐藤和真

原作主人公。アクセル一の問題児たちをまとめるリーダー。最弱職の冒険者でありながら、多彩のスキルと機転で数々の難所を乗り越えており、ユウマパーティーやアクセルのギルド役員たちから実力を高く評価されており、ピンチの時は参謀として作戦を指示する。また、観察眼に長けており、作中でユウマの核心を理解している数少ない人間。王国の女たち編ではとある仮面悪魔の被り物を身につけ、王都の冒険者、兵士たちを圧倒、ユウマとは互角以上の戦いをし、実力を見せつけた。本作ではこれといった恋愛沙汰はないが、本人曰くいつかモテ期が来るだろうと。密かな趣味としてアクアが貰ってくる酒を迷惑行為の度に没収し一人で楽しんでいるもよう。

アクア

エリスの先輩女神にしてサツキと同期の女神。本ルートでは特に女神としての部分の色濃くでており、ユウマとエリスの行く末をなんとなく分かっている見守っている。天界時代にエリスに対して自身の不甲斐なさで迷惑をかけたこと、エリスの悩みを知っているながら、手を指し出さなかったことに後悔しており、その裏返しでエリスに強く当たってしまったこともあったが、エリス本人が幸せであることに安堵している。

サツキ

エリスの先輩女神にしてアクアの同期の女神。ユウマを異世界転生させた張本人である。女神としての包容力だけではなく、温厚な性格でほのぼのとしている。また、お茶目な一面もありユウマ曰くエリスの天然な部分はサツキ譲りであると予想している。女神としては珍しく、人間として死後女神になった。下界に探し人がいるらしく。ときどき下界に降りてはクリスと共に盗賊をしながら探している。

クリス

エリスの下界での分身。エリスの下界後は自我を持ち、残った権能を使いながら盗賊家業に勤しんでいる。王国の女たち編ではカズマと盗賊団を結成。エリスに対して複雑な想いがあるもよう。

バニル

仮面の悪魔。元魔王軍幹部にして、現在はウイズの魔道具店で働く苦勞人。思わせ振りの口調と煽りで相手から悪感情を貪っている。過去になにやら深い因縁があつたらしく、過去の自身とユウマを重ねることがある。

近況報告と映画の感想（がつつりネタバレあるので観てない方はブラウザバック推奨です）

皆さんお久しぶりです！

とってつけた不定期更新タグで逃げ続けててすみませんでした。

やっぱり映画の力はすごいですね（笑）。

迷走していた指が勝手に動いて話を作ってくれます。

今回は映画の感想ですが、近いうちに必ず次の話を投稿するので気長に待ってください。
い。

正直オリジナル展開を広げたはいいけど、どう終わり方に結びつけるかに困っています笑

今のセレナ編が自分の中ではどうしてまとまらなくて……。

自業自得なんであれですが、必ず完結はさせます！

どうか、もう少し時間をください！

もう少しあともう少しで煮詰まるので!!

さてここからは映画の感想になりますが……。

ネタバレありなので嫌な方はここでブラウザバックしてください!

← 準備OKな方はどうぞ下にスクロールしてください!

←

←

一つ目は紅魔の里の全体図です。

正直ここまで日本チックだとは思ってませんでした笑

ひぐらしを連想させる白川郷のような土地。

正直、自分は盆地のようなのを連想していましたが、考え方が一新されました。

二つ目に終盤オリジナル展開でのカズアク要素。

最高ですね。それしか言えません。

お互いを相棒と呼びあうこのシーンはまさに僕の理想のカズアクでした!!

尊い……。

最後にほどよい改変ですね。

全体的に五巻の最初のほうをかなりカットしまくりで、後半のオリジナル展開への結びつけ、めぐみんとカズマの恋愛要素の大幅カット。

これでアニメこのすばが完全に恋愛要素を捨てていくのが分かって自分的にはすつきりしてます。

このあと3期をやるならアイリス様登場とダクネスの争奪ですが、制作会社も変わって戦闘描写や背景が更にクオリティアップしたので恋愛抜きでも物凄くわくわくします。

そして相変わらずの切れのいいギャグが最高!

カズマとシルビアの融合は多分、遊戯王のラーの翼神竜。ゆんゆん、めぐみんの合体技はプリキュア？ですかね。

オマージュが素晴らしかった！

とくにゆんゆんとめぐみんの合体技はライトオブセイバーの属性を爆裂魔法に付与？した感じでしょうか。

ここの解釈を自分も本編で書いていたので、答え合わせできて良かったなーと。全体的に文句なしのいい映画でした！

すごい満足できましたし、見終わったあとの充実感もまた良かった。

エリス様のゲ○シーンという新たな面も観れて最高でした！

今回の感想はここまでとなります。

繰り返しになりますが、なんとか完結させるので気長に待ってください！
よろしくお願いします。

報告 2020年5月3日

皆さまどうもネギ鷲です。

最初に約1年ぶりの更新となったこと、読者の皆さまにお詫び申し上げます。
今回の報告は主に2点。

一つ目は本編の加筆、修正についてです。前々から誤字報告を受けていてこの一年間、時間の合間にちよびちよび修正はしてきましたが、ここで一回全体的の見直しをさせていただきます。また加筆に尽きましては、更新に間が空いてしまい少し変化した今後の展開との相互性を取るため行わせていただきます。一応加筆の箇所につきましては加筆後にサブタイトルに目印を入れますので、もし良ければ読み直して頂けるとうれしいです。

二つ目に更新にペースについてです。このたび、当分の間加筆、修正をメインにさせて頂くため週一投稿より遅くなると思います。既に本編53話目に関しましては書き終えていますので近い内に投稿します。

物語も既に終盤で、今年中の完結を目指しています。なんとしても書ききってみせますので、皆さまどうか引き続き応援よろしくお願いします。

ここから先は字数稼ぎとなります。

共通ルート閑話

クリスマスのお話

北からやってきた寒さは街を包んで、吐いた息は白く空に舞っていきます。

「お母さん、ケーキ！ケーキ！」

「もう、わかったから。いい子じゃないとエリス様からプレゼントを貰えないわよ」

目を引くような飾り付けのされた道で、親子の会話を聞きながら歩く。

そんなこと、少し前まではありえない事だった。

あれから色々あつて、彼らのパーティの一員として魔王討伐の目指すことができる。

そうして、あの城の中では感じることに、見ることに、知ることのなかったこととふれあうことができる。

本当にこの1年は素晴らしいことだらけだ。

「よってらっしやい、見てらっしやい！本日はクリスマス。エリス様のご誕生日！それを記念してクリスマスケーキ一つお買い上げにつき、エリス人形を一つプレゼント！」

今の掛け声はいつもエリスさんと、アクアさんがお世話になっているマイケルさんのお店からだ。

このお酒の美味しさが分かるようになったら一人前とアクアさんは言うが、お酒に違いなどあるのでしょうか？

そういえば、さつきからクリスマスとエリス様のお誕生日の話を聞きますが、本来はエリス様のお誕生日の日だけでした。

ですがある時、遠い場所からやってきた勇者様が、故郷のクリスマスという神様の誕生日を祝う日を王家伝えたことで、広まったらしいです。

一説によると、このお祝いされている神様は違う神様らしいのですが、どうやら同時の王様がエリス様と勘違いしたとか。

いろんな諸説が交わり、このクリスマスはエリス様のお誕生日を祝うと共にいい子に

はエリス様の贈り物が貰える日になったらしいです。

ちなみに私は、すぐにそれが嘘だと気づきました。

寝ていると、生暖かな風が当たるので目を覚ますと、エリス様の格好をしたクレアが鼻息を荒くしていたんです。

それが、私の7つの時のクリスマスでした。

……。

それはそうと、気を取り直してアクセルの門を出ると、銀色のカーペットの上に冒険者の皆さんがいます。

「お、ユウマの所の嬢ちゃんじゃねえか。今日一かい？」

「はい。ですので、今日はよろしくお願いします」

「人数も揃ったし、行きましようか」

数は私を含めて十人です。

なぜ、冬で休業中の冒険者の方々がいるか。

それは、これから街に飾る大きなモミの木を狩るからです。

—————

モミの木。

全長およそ40mに及ぶこの木は、冬の季節に姿を現す特殊な種類の物で、身につけた松かさには宝石のように煌めくとされ、別名知恵の木、もしくは聖樹とも言われています。

ただ、その神々しさゆえに……。

「で、でたぞー!!」

「こりやでけー!」

「後衛、強化スキル準備！前衛、一気に畳み掛けるぞ！」

最悪の場合死人が出るほどの凶暴さを持ち、あの冬将軍と同ランクの指名手配者です。

また、このモミの木は、炎や雷に弱く、上級魔法で一撃で沈むのですが、跡がつき、その価値を失ってしまうのも特徴となっております。

そのため、物理で中の核を崩さないといけないのですが、樹皮がアダマントナイト級で簡単には突破出来ず、強烈なタックルで安易に近づくこともできません。

「来るぞ！後衛！」

「「「「強化」！！」」」」

「前衛！」

号令と共に前衛の皆さんは核を目指して切り込みます。

しかし、四方八方からの斬撃はその皮に傷をつけることなく、消えていきます。

「な、通らない!」

「確かに、核を射抜いていたはず……、まさか」

「突然変異種か……」

ごく稀にですが、このモミの木には突破変異種がいると言われます。

上級ですら傷一つ、焦げめ一つつかないとされ、しかも、通常種とはこれといって違いが無いため見分けがつきません。

そして、倒しても、通常種とは変わらないため、出会ったら運が無い、死亡率が高まるなら、逃げて違うのを探したほうがいいと言われています。

「引き上げるぞー!こんなやつに無駄に命を張る必要わねー」

後衛の皆さんはすでに、自分にも強化をかけて離脱体勢。

「嬢ちゃん、何やってるんだ逃げるぞ！」

通常種と比べて傷が付きにくい。

その一点が私にはありがたい言葉の限りです。

なぜなら、私の一撃は上級魔法以上だからです！

「へエクステリオン　＜！！」

今年も無事にクリスマスツリーの飾り付けが終わり、街はお祭り騒ぎ。

倒したモミの木はその偉大な姿をキラキラさせて、街を見下ろしていました。

そして、肝心の報酬はというとエリス教の孤児院に寄付させていただきました。

なんで、と思う方々もいるかもしれませんが。

現にギルドの方やご一緒させていただいた冒険者の方々は驚いていました。

実をいうと今回の冒険、ユウマさん達には秘密で行ったものだったのです。

もし、行くと言っていたら、皆さん絶対について来ていましたし。

そうなる、エリスさんの一撃で数々のモミの木達が無残になつていたかもしれないです。

ほら、エリスさん手加減が出来ないといいますが……その。

ともあれ、こうして無事にアクセルの街にツリーを用意することはできました。

めでたしです。

「ただいま帰りました！」

お家の扉を開けると、鼻をくすぐるいい匂いと共に街にも劣らぬ飾り付けが施されてきました。

「おかえり。ちょうど夕食の準備ができたところだから、はやく手洗いしてきな」

ユウマさんの言葉に従い、早く手洗いを済ませてリビングに駆け込みます。

「うわー！美味しそうです」

「どうぞ今日はより、腕によりかけた自信作です！」

「一人じゃないクリスマスを過ごせるなんて、私明日死んじゃうのかな」

「止めてくれゆんゆん、縁起でもない」

クリスマスの贈り物。

街の飾りやクリスマスツリーの輝きよりも綺麗で、かけがえのないこの瞬間が、来年も、また魔王を倒した後も続きますように。

「エリスちゃん寝ちやいましたね」

「今日も冒険で疲れたんだろう。それにいい子にはプレゼントが待ってるし」

「エリス様からのプレゼントですよ。私、いい子にしたのに貰えなかつたんです……」

「ええつと、ゆんゆんさん。あれは少し違うんです！」

表情を暗くしたゆんゆんに、エリスは慌てて言う。

「あーなるほど。そういうことか。考えてみれば、混ざりすぎだよな」

「え？」

「俺の故郷ではこのクリスマス。確かに神様の誕生日を祝うものなんだ。そんでもって

らもう一人サンタクロースって人がいい子にプレゼントをくれるんだ」

「サンタクロース？」

「はい、王家そのサンタクロースを解釈し間違えてしまったんです」

「つまり、エリス様がプレゼントを贈るんじゃなくて、サンタクロースさんがプレゼントをくれるんですか」

「正しくはそうだな」

「はい、それにエリス様は子供だけじゃなく、いろんな人に幸運を願い、贈るんですよ」

エリスは笑顔で言う。

まあ、その笑顔で焦りを隠しているのだが、それは黙って置こう。

「じゃあ、プレゼントは……」

「ほら、ゆんゆんも早く寝ないとプレゼント貰えないぞ」

「え、えー！あわわわわ。お、お休みなさい！」

慌てて自室に戻っていくゆんゆん。

その様子を俺はエリスと微笑ましく見る。

「ユウマさんも寝ないのですか？」

「俺を何歳だと思ってるんだ、立派な18歳ですよ。そういうエリスは？」

「私だって立派な女神です！」

お互いでお互いの言葉に笑い合う。

「それじゃ、仕事にかかるか」

「そうですね」

まずは、アイリスを自室に移動させる。
そして、真横にプレゼントを。

「メリークリスマス」

BADEND集

第29話 BADEND 独りよがり

1. エリスのために戦う。
2. 仲間のために戦う。
3. 自分のために戦う。↑

「ああ、分かってる分かってるさ。俺は結局、こういう生き方しかできない。俺は自分のために戦うよ」

祭やエリスのためになりたかったのも、イリスやゆんゆんを失いたくなかったのも、全部自分のため。

彼らは工藤悠真（クドウユウマ）という人間を唯一認めてくれる。

俺はその心地よさのために彼らのためになろうと思ってきた。

そう、俺には他の人間が見えてない。

いや、見ようとしてないんだ。

だから、この選択も結局は自分のためを選ぶ。見えてないものを選ぶことはできないからだ。

「そうか……」

青年は呟く。

きつと、俺がこういう選択をすることを分かっていたのだろう。

その言葉を俺は当たり前だよなと言ってるように感じた。

「君はクドウユウマじゃなく工藤悠真として生きていくんだな。これから同じ過ちを繰り返した後悔しながら」

青年は後ろに振り返る。

もう語ることはない。

薄れゆく視界の中、遠くに見えた花の名前を思い出そうとするが、出てこない。

それからしばらくして。

俺はただ一人、廃墟となった街を歩く。

微かに聞こえた笑い声はただの幻聴だろう。

ほんの少し前まで、ここは人々が昼も夜も関係なく賑わう愉快的な駆け出しの街だった。

俺があの答えを選んだ日からどれくらいたったのだろうか。

あのあと、俺は自分を襲っていた炎を振り払いシルビアと戦った。

諸刃の剣とも言える無茶な戦いかたで、ギリギリの戦いをした。

そして、やっと追い詰めたというところで、最後の悪あがきとして少し離れたところで倒れていたゆんゆんを襲われた。

そして、俺はゆんゆんの命と引き換えにシルビアを倒した。

シルビア戦後は少しバタバタした。

族長への謝罪、数の減った紅魔族を手伝い里の復興。

それからしばらくして、イリスはパーティーから外れた。

別れ際の彼女の言葉は今でも覚えている。

「悲しすぎます。誰かにすぐることもできたのに。あなたはこれからもずっとそんな顔をして生きていくんですね。今にも泣きそうな顔なのに」

それは、到底12歳の子の口から出るとは思えない言葉だった。

きつと、イリスは。

イリスも気づいていたのかもしれない。

ただ、俺は何も言わず、去っていくイリスに背を向けて、エリスからカズマ達から離れた。

といつても、はんば別行動みたいなものだった。

王都では、魔王軍幹部とめぐみんが約束した時間より、少し早くに呼び出しその幹部を討伐した。

エルロードでは、街一つ犠牲にしドツベルゲンを誘き寄せ殺した。

アクセルでは師匠にまわりつく墮天使を影武者として闇討ちした。

その後、アクアを追い出し、カズマに追い詰められたセレナを遠距離から狙い射った。そして、魔王とカズマの対決を見た後俺は各地を回って自分が納得いくまで悪と言われる者を殺し続けた。

そして、帰ってきたらこの有り様だった。

聞いた話によれば、魔王討伐後、職を失った冒険者達は反乱を起こし王都軍と戦ったらしい。

理由は王都側が行方不明の王女の探索に膨大の金を使い、討伐の賞金を出せなかったとのこと。

そして、二年近く続いたこの戦いの最後は金銭的に苦しくなり内も外もボロボロになった王城で裏切り者がでて、王家一族を反乱軍に引き渡すというものだった。

だが、王家一族の最後は決して無様なものではなかったらしい。

特にまだ若かった第一王女の姿は最後まで毅然としたものだったという。

しかし、そんなものは民には届かずこの反乱を聞いた各国は次から次と反乱が勃発しないには外の国も関わってきてめちやくちやなものとなった。

川の近くの芝生で腰をおろす。

あれから、カズマ達はどうしたのだろうか。

魔王を倒した褒美で何を願ったのか俺は知らない。

パーティーを連れて日本にでも戻ったのだろうか、それともこの世界のどこかで……。

エリスどうしたのだろう。

魔王を討伐したことで無事に天界には戻れたのだろうか。

師匠やあの悪魔は大丈夫だろうか？

胸の中から、みんなの姿と心配が浮かんでくる。

それは、彼らを思っていることなのか、それとも自分を証明してくれた人達を失ってないかという心配か。

俺にはもう何が何なのか分からない。

そんな俺の気持ちなど知ったことかと、目の前の大空は雲一つない青空で全てが無くなった地を照らした。

改稿前の原案です

プロローグ（改稿前）

「死後の世界へようこそ。工藤悠真さん。不幸にも貴方は先ほど亡くなりました」

俺は目を覚ますと事務室できな場所におり、目の前には茶髪の女性が座っていた。

「え、死んだって……。俺はさっきまで走っていたはずじゃ」

「ええ。あなたは先ほどまで走っていましたよ。ですが、走り終わったとたん、今まで無理な生活で体に貯まっていた疲労がピークに達し、そのまま死んでしまいました。いわゆる過労死というものです」

たしかに俺は無理ばかりし続けていた。

次こそは結果を出すためにとえげつない練習をこなしてきた。

そう、そこまではよかった。問題はそれ以外のことだった。日の出ている時間帯は練習に時間を使っていたため、ゲームをする時間がなかった。そこで俺は寝る時間を削り、夜をゲームの時間に当てていた。当然、そんなことを続ければ練習に支障が出ると分かっていたが、俺はエナジードリンクと気合いで無理矢理抑えていた。

そして、このぎまである。

「普通の人間はどちらか1つに絞るのに、2つのことをそれも死ぬまで頑張り続けるとは、恐ろしい人ですね」

「いやいや、それほどでも」

「褒めているのではなく、飽きれているのですよ」

ま、死んでしまったからゲームもできるわけでもなく、走って結果を出すこともできない。

「あーあ。俺のやってきたことはすべて水の泡か。自業自得とはいえ、恵まれないなあ」

「自業自得とはいえ、あなたは真つ当な目標に向かって、文字通り死ぬほど頑張りました。これはしっかりと評価されるべきです。そんなあなたに良い話があります。あなたゲームが大好きですよ？それが死ぬ原因のひとつだったんですから」

「ええ。好きですよ。特に魔法とか使うゲームは」

「なら、充分です。これから、魔法のあるファンタジーみたいな異世界に転生してみませんか？」

「異世界に転生して、そんなことできるんですか!？」

「はい、できますよ。あ、自己紹介がまだでしたね。私はサツキ。世界の出来事を記録する女神です。以後お見知りおきを」

死後の世界にいるわけなのだから、天使かなにかだと思っていたが、まさか女神だつ

たとは。これは驚いた。

「それでサツキさん。ファンタジーみたいな異世界でことは魔王とかいるんですか？」

「いますよ。人々の生活を脅かす凶悪な魔王が。それをあなたには倒してもらいたいのですが、もちろんタダでは言いません。倒した報酬としてなんでも願いをひとつ叶えて差上げることができますし、道中で簡単に死なないように、チート能力、武器を転生前に渡すことになっております」

魔王倒せばなんでも願いを叶えてくれるなんて、こんな話乗るしかないのだが……

「これが、チート能力、武器の参考例です。あくまでも例なので、別にここに載ってるもの以外でもいいのですよ」

問題はどんなチートを貰うかである。当然、ここに書いてあるのはすべて却下である。

たしかに、魔剣やら特殊能力は魅力的である。しかし、これらを選んだ先人達は、魔

王を倒してないのである。つまり自分で考えなければいけないのだ。

「あの一。そろそろ決めていかないと、他の人たちを案内できないのですが……」

ここに書かれていないもので、先人達に足りなかったもの、それは……

「決めましたよ」

「そうですか。なににしたんですか？」

「お恥ずかしいんですが、俺、ひとりぼっちが嫌なんですよ。なので仲間をください。なんでも治せるプリースト、攻撃系で優秀なものを使える魔法使い、あとできたら剣士もお願います」

「ええ、わかりました。では、その魔法陣から出ないでくださいね」

サツキさんが詠唱のようなものを唱えると俺は頭の上の魔法陣に吸い込まれていく。

「さあ勇者よ。魔王を打ち倒すために旅立つのです！」

――

「サツキ先輩の言ったことは本当になりましたね」

さつき悠真さんが座っていた椅子の後ろから後輩の天使が現れる。

「彼の経歴を見れば、何を願うかは察しがつきますよ」

「ですが、本人の許可も無しに勝手に、転生者と一緒に下界に送るのはどうかと思います
よ」

「大丈夫ですよ。彼女ならすぐに悠真さんの欠陥している部分に気付いて、寄り添おうとします。それにこれは彼女自身の欠陥している部分を治すためでもあります」

「あの方の欠陥している部分ですか？」

「ええ、そのうちわかりますよ。それでは私は行きますよ。さつき、全能神様から、彼女の仕事を引き継げと命令が来ましたので。」

私は後輩天使を置いて部屋をでる。

さすがに強引なことをしたが、これは私のためでもあり、彼女のためでもあるのだ。

「期待してますよ。悠真さん」

第1話 ああ、女神様！（改稿前）

事務室できな場所から場面が変わり、中世ヨーロッパみたいなの街並みの風景が視界に広がる。

「す、すげー。マジな異世界じゃん！」

目の前にはエルフやららごてごてな装備を身につけた剣士やらが歩いている。

こんなの見せられたら興奮するにきまっている。

俺が歓喜の声をあげていると後ろから泣き声が聞こえてくる。声からするに女性の声をするのだが、どうしたんだ？

「なんで！なんで、天界に帰れないの!?!ひっぐ」

なんだろうこのシスターさんは。

て、急に頭が痛くなってきた。

（無事に転生できたようですね。工藤悠真さん）

ん、どこからかサツキさんの声がある。

（周りを見ても私はいませんよ。これは転生の時にあなたの頭にいれておいた録音です。だから返答はできません。ところで、今あなたの目の前には一人の女性が泣いてい

ると思います。彼女は私の後輩女神のエリス。この世界の国教として崇められてる女神です。一応女神としての権能はほとんど使えなくさせましたが、素のステータスはかなり高いので仲間としては申し分ないと思います。何も伝えずいきなり連れてきたのですこし動揺していると思いますが、聞き分けのいい子なので私の名前をだしてもらえば理解してもらええると思います。それでは、よい旅を！」

目の前のシスターさんはエリスさんと言うらしい。それにしても国教の女神さんを無理矢理連れてくるとは、なかなか大変なことをしてくれた。とりあえず、場所を移そう。周りの視線が痛い。

「ちよとついできてください」

俺はエリスさんの手を引いて路地裏に入る。

エリスさんは急なことに泣くのを止めてきよとんとしている。

「いきなり手を引いてすいません。エリスさん」

「え、どおして私の名前を!？」

「実は……」

俺はエリスさんにこの世界に転生したこと、サツキさんが俺のチートとしてエリスさんを送ったことを話す。思った以上に理解がはやく、今はサツキさんに呆れていた。

「状況は理解できました。本当、サツキ先輩いつもいきなりなんですから。」

「頼んだのは俺なんで…。ほんとすいません」

美女を泣かせただけではなく、帰れなくさせたんだ。謝っても謝りきれない。

「ユウマさんは悪くありません。悪いのはいつも思いつきで動くサツキ先輩なんですから。顔を上げてください」

俺は顔をあげるとエリスさんは微笑む。その微笑みは慈愛に満ちており、心が楽になっていく。俺、この人のためなら頑張れるにがする。

「安心してください。必ず、魔王を倒して、エリスさんを天界に返してみせます！」

「ありがとうございます。これから、よろしくお願いしますね。あ、あと私は呼び捨てでお願いします。そのほうがいろいろと楽なので」

「わかったよ。エリスさ…。エリス」

「ふふ。それじゃあ、ギルドに行きましようか。まずは冒険者登録しないと行けませんからね」

――

というわけで冒険者ギルドに来たわけだが…。

酒くさい、とりあえず酒くさい。

昼間なのにギルドの中は酒のにおいが充満していて、未成年の俺にはきつい場所だった。

てか、昼間から飲みまくりとか、この人達えぐいな。

「大丈夫ですか? 気分悪そうに見えますが」

俺が酒のにおいに酔いそう中、エリスさんは普通に声をかけてくる。

エリスさんは酒に強いのだろうか。それとも俺が酒に弱いのか?

「少し酒のにおいに酔っただけだから大丈夫だよ」

気を取り直して、受付に行こう。このままでいると、多分吐くかもしれない。

「冒険者ギルドにようこそ。登録にはお一人千エリスとなっております」

と、ここで問題が発生してしまった。金がない。

「あの一。もしかしてお金を持ってないんですか?」

エリスさんが心配そうに見てくる。んー、登録できないとなにもできないし、誰かに借りるしかないようだ。

「エリス、ちよつと借りてくるわ」

とりあえず、金を貸してくれそうか人は……。あの緑のジャージの人とか大丈夫そうかな。

「あの、すいません。俺、工藤悠真で言うんですが、少しいいですか？」

「別にいいけど、ん？あんたもしかして日本人か？」

「ええ。そうですけど」

「よかったー。やっと日本人に会えたぜ。俺は佐藤和真。見た感じ同年だと思うし呼び捨てでいいよ」

ビンゴ！まさか他の日本人転生者に会えるとは、今日は運がいいらしい。

「わかった。よろしくな、カズマ。でき、会ったばかりで悪いんだけど、二千エリス貸してもらえないかな。実は、転生したときに金をもらえなくて、登録費が払えないんだ」

「ああ、いいぜ」

「本当か！ありがとう。向こうでまつてる人がいるから、今日はここで。今度できたらなんか奢らせてくれ」

「おう、じゃーな」

来て早々、同じ年の日本人とかかわりを持てたのは本当についてるな。

「はい、確かに受け取りました。ではこの魔道具に手をかざしてください」

「どうやら魔道具にかざすだけで冒険者カードを作れるらしい。」

「この世界の魔道具で結構便利だな。これだけでいろいろわかるらしいし。」

「はい、ではクドウ ユウマさん。俊敏と幸運がかなり高いですね。それに魔力と知力も平均よりたかいです。ただ少し筋力が低いですね。これだと盗賊がおすすめです。俊敏がとにかくすごいので、すぐに敵から逃げれますし、幸運も高いのでお宝のひきなどいいと思いますよ」

「う、うん。筋力が低いのか。筋トレをサボってたツケがここできるとは。」

「まあそれはいいとして盗賊かー。正直微妙だ。」

「せっかく魔法が使える世界なんだから、魔法使いになりたい。」

「あの、魔法使いは無理なんですか？」

「ウィザードですか。一応適性はありますが、このステータスだと盗賊のほうが天職だと思いますが」

「全然大丈夫です。自分魔法使うのに憧れていたんで。」

「は、はあ。わかりました。それではウィザードで。」

「次はエリスだ。正直女神のステータスで気になるところだ…」

「す、すごいです。この前の人もすごかったですが、それ以上です！全パラメーター平均

よりかなり高めで、なにひとつ欠点がありません。……んん!?」

受付のお姉さんがなにやら苦笑いしてエリスを見る。なんだ?

「なにか問題でもありましたか?」

「えーと」

お姉さんの持つエリスのカードを見るとそこには赤文字で「トラブル体質」と書かれていた……。

「で、でも安心してください!少し周りよりトラブルに巻き込まれやすいだけですし、このステータスならなんとかなりますよ!」

いや、これはそういうのとは違うだろ。もめ事とかじゃなくて面倒ごととかのほうだろう。

「そ、そんな。私、これでも幸運の女神なのに……」

「だ、大丈夫。俺、これでもやっかいごと片付けるのは得意なほうだから。だから元気だして!な?」

幸運の女神なのにその運がまったくのお飾りで、トラブルに巻き込まれやすいだなんて、そりゃ落ち込む。

「と、とりあえず。職業はどうしますか?見たところシスターさんでみたいですし、アークブリーストでよろしいですか?」

「はい、お願いします……」

エリスが落ち込んだままで少し空気が重い。

「エリス、せっかく冒険者になったんだし、さっそくクエストやろうぜ！あの、初心者向けのクエストとかなんか、ありませんかね？」

「それなら、ジャイアントトードがおすすめてですよ。レンタルで杖をおかしてきますが、どうします？」

デカカエルの討伐か、最初はこんなもんだろう。

魔法もどんなのがあるか理解できてないし、今は1つしか無理だからエリスの支援魔法でなんとかしよう。

「それをお願いします。あとレンタルはダガーで。こんなスキルポイントじゃ中級魔法1つくらいしか無理だし、初心者クエストなら、エリスの支援魔法でなんとかなると思うんで」

「はい、では健闘をお祈りします」

でかい、でかすぎる。何メートルあんだよこのカエル、しかも動き速いし。

「ユウマさん、眉間を狙ってください！眉間を！」

眉間なんて、とどくかー。俺そんなジャンプ力ないんだよ。ほんと甘かった考えが甘かった。強化魔法でなんとかなるとかいったやつ誰だよ！

ちくしよう、俺だよ。こんなダガーでどーすんだよ。

「え、ちよつと、なんですか！私はおいしくくないですよ!!……助けてー」

「つ、このクソガエル。エリスになにするつもりだ。おらー」

くクエスト終了く

・ジャイアントトード×3

15000エリス

「カエルって鶏肉の味がするの……知りたくなかったな」

自分で殺したものを自分で食ってると思うとなんかムカムカする。

よくもエリスを食おうとしたな、このクソが。

「これしか稼げないと少しきついですね。さすがに毎日こなすのは大変ですし」

「一応俺は明日からバイトする予定だけど、エリスはどうする？」

「明日は教会の手伝いに行こうと思ってるのでその次の日から私も始めますよ」

「そっか、じゃあ明日はバラバラだな」

晩飯を食い終わりギルドを出る。寝る場所だが、パジャマやらなにやら買ったら金がほとんどなくなり、馬小屋になった。

「それじゃあ、おやすみなさい」

「ああ、おやすみ」

まさかエリスと一緒に寝ることになるとは、こんな美人と一緒に寝れるとか…。とくに考えないようにしよう。結局、その日は3時間しか寝れませんでした。

始まりの街アクセス編

プロローグ（改稿後）

人の一生は短く、案外容易く終わってしまうものだ。

そんなことは、テレビやネットで散々見てきたし、頭の中では理解してた。

けれど、いざ終わってしまうとあっけ無さすぎて虚しくなる。

ああ、せめて一度でも……。

「死後の世界へようこそ。工藤悠真さん。不幸にも貴方は先ほど亡くなりました」

ふと、誰かの声がした。

あっけなく終わったはずの俺の17年間は、この声によつて新たな道を歩むこととなった。

夏の暑さを残す9月の秋空。紅の木々たちは風に揺らされ、赤い地面を踏みしめる選手たちを見守る。競技場内は生徒達の応援や観客の声援、最後の周回を知らすベルの音に包まれていた。

『さあ、鐘が鳴つて残り400m!この一周の通過は55秒。以前先頭は昨年度優勝の村上君根岸高校。その後ろには今年の関東大会ベスト5の工藤が今か今か仕掛けの時間を待っている!!』

後ろを走る選手の足音、先頭との距離、走る選手達に向けられた応援。その全てが頭の中に流れ、思考をぐちゃぐちゃにさせる。

(あと何mでゴールか、 たった800mがこんなに長く感じるのはいったいいつぶりだ?)

バックストレートを抜け最後のコーナーに入る。

(肩は動かないが、 太ももはまだ大丈夫)

大丈夫じゃないのは俺の頭だけだ。 本当、 昨日の自分を恨みたくなる。 後で後でと、 夏休みの宿題みたいに引き伸ばした結果、 あと数時間でイベント終了という状況まで引き伸ばしてしまい、 眠らず朝方までやった結果この様だ。 ただですら、 支部予選のやりかしかあって、 必死こいてやってきて、 もう体はボロボロなのに。 さらに追い討ちを与えるとは。 自業自得もいいところ、 栄養ドリンクやら気合いのおかげで体はなんとか動いているが、 それももう風前の灯。

(関東であんな悔しい思いをしたのに、 相変わらずこんなヘマをするとか、 馬鹿を超えて愚か者だ)

自分に呆れながらも、 前の選手を睨み付ける。

(差は2mで所か)

まあ、 普段ならこれくらい差はどうてこともないが、 今は正直つらい。 でもだ。 試合前日にこんな舐めたことした俺が言うのも何だが、 諦めたくない。 こんなところで足

踏みしてる場合じゃない。勝って、来年こそインターハイ。

（そして、あの舞台に……）

ホームストレート最後の直線。突然前から押し寄せてくる強烈な風、人々の熱狂、会場の熱気。本当に、人は本気になればどこまでもやれると俺は思う。

走法をピッチからストライドに変えて勢いに身をのせる。普段から風の影響が強い田舎でこっちは練習をしてるんだ、風なんかで失速するわけがない。

『先頭は総南高校工藤君！後ろとの差をさらに広げてゴール!!記録は1分51秒。大会新記録！おめでとうございます！』

（大会新記録!?!）

「やったな悠真！大会新だぞ、大会新！」

「ナンバー1じゃねえーか！よくやったぜ」

1位か。わりと上出来だったと思うよ。

「どうしたんだよ、悠真。何か言えよ。つて！」

……。
なにみんなして集まってるの、次はお前らの試合だろ、アツプはどうしたんだよ？

ああ、駄目だ。体が動かない。そういうことか、無理しすぎたのかな。

……。

「死後の世界へようこそ。工藤悠真さん。不幸にも貴方は先ほど亡くなりました」

ふと、誰かの声で目を開ける。目の前にはこの世の者とは思えないくらい神々しい

オーラを放つ眼鏡茶髪の美女が座っている。

……なるほど、理解した。ここは三途の川の入り口ってやつだ。あの机の上に乗っている紙に俺の人生が書かれていて、今から地獄か天国かを決める審査を受けるんだ。

「私は記憶と記録の女神サツキ。あなたのセカンドライフを決めるお手伝い担当させていただきます。以後お見知りおきを」

現実には小説より奇なりというが、これは設定すら無視してる。日本って女神とかそういう文化じゃなかった気がするが、まあ、つつこまない方がいいか。

「えっと、サツキさん!?セカンドライフって言うのは」

「正しくはこれからの選択ですが。工藤さんはもう亡くなられておりますので、現世に蘇ることはできません。そのため、記憶を無くしてまた赤子としてやり直すか。それともこのまま天国に行くか」

ほう、どうやら地獄という選択肢はないらしい。

「ですが、工藤さんはまだお若いのです。本来ならまだまだ生きていくはずでした。そのため、もうひとつ選択肢があります」

「もうひとつの選択肢？」

「はい、記憶、状態はこのままで異世界に転生することができます」

……。
フア!?

「異世界って、あれですか!？」

「ご想像の通り、剣と魔法のファンタジーな世界です」

剣と魔法のファンタジー。それは、誰もが一度は憧れる世界。そこに行けるのか!?

「今まで走ることしかしてこなかった奴が、いきなり行っても殺される気がするんですが」

「それにはご安心を。確かにこのままでは魔王軍の手下はおろか、そこらのモンスターにすら簡単にはやられてしまいます」

魔王軍の手下？やはりそういうのがあるのか。

「そのため、転生を希望する方には特典として一つ。なんでも好きな物を持っていくことができます。例えば想像を越える超能力、または最強の武器。お使いのスマホから日用品まで、なんでも」

スマホを持って異世界……。うん、それは論外だ。

「渡された用紙を見る限り、本当なんでもありらしい。聖剣エクスカリバー（約束された勝利の剣）、魔剣グラムに超能力の一方通行、スタープラチナ。どれも、特別魅力的な力だ。」

「そして、この力を駆使し人類を脅かす魔王を倒したあかつきには、なんでも願いを叶えます」

「なんでも……!?!」

「ええ、なんでもです。例えば、あなたの心残りだって……」

心残りか。どうやら女神様にはすべてお見通しのようだ。

「決めました。俺、異世界にいけます」

「かしこまりました。では、特典のほうですが……」

どれも魅力の詰まった、俺TUEEな特典たち。しかし、これらを選んだ先人達は共通して、魔王を倒していないと思う。つまり自分で考えなければいけない。

「……」

ここに書かれていないもので先人達に足りなかったもの。それは……

「決めました」

「それでは答えをお聞かせください？」

呼吸を整え、目を見開く。

「仲間。仲間をください。知らない場所でききなり一人つてのは不安だし、少し心細いというか」

「もし要望が通るなら。そうだな。最強の剣士になんでも治すプリースト。それと多彩な魔法を扱える魔法使いをお願いします」

少し驚いた顔をするサツキさん。どうやら、こんなことを頼んだのは俺くらいらしい。これでいい。これが最善の手だと思う。

「ええ、わかりました。それでは、今から魔方陣を開きます。そこは動かないでくださいね」

しばらくして、サツキさんは席から立ち上がり、長い詠唱を読み始める。すると、詠唱に反応して魔方陣が光始める

「それでは、これではしのお別れです。ここからはあなたの戦いです。ご健闘お祈りします」

強い光を放つ光の柱に包まれて、体が浮き上がる、
これから、俺のセカンドライフ、人生の第二章の始まるのだ。

「サツキ先輩の言った通りになりましたね」

私しかない部屋にもうひとつ、声が響く。

「彼の経歴を見れば、何を願うかは察しがつきますよ」

「ですが、本人の許可も無しに勝手に、転生者と一緒に下界に送るのはどうかと思いますよ」

「大丈夫ですよ。彼女ならすぐに工藤さんの欠落している部分に気付いて、寄り添おうとします。それにこれは彼女自身の欠陥を治すためでもあります」

驚いた様子を示すのは、つい最近下界に落とされた女神の後輩。本来、この役目を担っている天使だ。

「あの方の欠落している部分ですか？」

「ええ、そのうちわかりますよ。それでは私は行きますよ。さつき、全能神様から彼女の仕事を引き継げと命令が来ましたので。」

私は後輩天使を置いて部屋をでる。さすがに少し強引だったかな。でも、これも彼女たちのため、そして……

「あと少し、あと少しで会えます。今度こそ救ってあげますよ。……期待してますよ。ウマさん」

誰もいない廊下でポツリと呟く。悪魔に落ちたあの人を救うために、どれ程の世界を歩き来したのか。

今回こそ絶対に。

第1話 ああ、女神様！（改稿後） ※ルート分岐

事務室的な場所から景色が一変、中世ヨーロッパのような街並みが視界に広がる。

「ハイハイ」

澄んだ空気が肺から全身に巡回して、少しスースーする。空は一面、晴れた青空。まるで、田舎のように空を近くに感じる。

それから一つ深呼吸をして、再び視界を戻す。目の前にはファンタジーの王道、エルフやらゴテゴテしい装備を身につけた戦士、軽装な剣士といろいろな人々が歩いている。

「す、すげー! 本物の異世界だ!!」

見るものが全てがゲームや小説に出てくる風景そのもの。走ることで心以外で心が踊るのはいつぶりか。ふと、看板が目がつく。

《始まりの街アクセル。別名、駆け出し冒険者の街》

なるほど、ここはRPGゲームお約束の駆け出しの街らしい。それにしても、さすがは女神様。

こっちの世界の言葉や知識もしっかり与えている。

それはそうと、少し肌寒い。

「これは?」

ポケットから一枚のコインが出てくる。どうやら、この世界のお金らしい。裏には美人な女の人がかかっている。

「サツキさんといい、このコインの女性にといい、ビジュアルの偏差値高すぎるだろ」

とは言ってみたものの、実はあの世界の女性など覚えてない。毎日走っては、男の汗の臭いに囲まれてたせいでそんなこと、考える暇もなかった。それも何故だかい思いだ。

それはそれで置いて、腹が減った。走り終わってからなんも食べてないからか飢餓状態だ。物価とかよくわからんが、とりあえず何かあるといいが。

「はい、毎度あり！」

というわけで、わざわざ異世界まで来て食べたものは焼き芋。基本的な物価は日本とあまり変わらない。しかしこの国の金、1エリスは日本の1円と同じときた。

金の単位が変わらないのはありがたい。ありがたいのだが……。

「さすがに無一文はハードコワすぎるだろ」

あのPモンスターですら、初期金額は30000円なのに1000円(1000エリス)しか持っていないなんて。笑えない、笑えなすぎる。モンスター以前に餓死するぞ。流石に異世界転生初日で、泊まる場所無し、飯無してのは話にならない!

ーと、剣も魔法も夢も希望も粉碎玉砕で、難易度ハードの現実には切羽詰まった時だった。なんで、こんな状態で他人の心配を出来たのかは俺にはよく分からない。俺が最初にいた場所で泣いている女性が目が止まった。

「なんで! どうして、天界に帰れないの!？」

その女性はとてもこの世の者とは思えない、絶対的美貌で。

「あ、あのー。大丈夫ですか?」

俺の考える間もなく声をかけた。あれ、この顔どつか見た気がする。確か、コインの裏に書かれてた女性に似ている。いや、それだけじゃない。この圧倒的美貌にさつき
の天界って単語。

「えっと、女神様？ですよね」

「そうですか。……じゃなくて！その私は通りすがりの修道女でして」

「いやいや、だってさつき天界がどうのつて。いや、まて。サツキさん以外に女神つていののか？」

「サツキ先輩をどこ存知なんですか！」

「知ってると言うかさつきまで目の前で話していて」

「……」

通りすがりの女神様がじつと見てくる。なんだか少し恥ずかしい。それにしても、見れば見るほど美人だ。触れなくても分かる艶のある銀髪に、綺麗な蒼眼。控えめな胸……。訂正、慎ましい体型だ。これが本当の美人というものだろう。

「この世界ではあまり見かけない服装に、黒髪黒目。なるほど」

「分かりました。あなたはあちらの世界から来た転生者ですね」

流石女神様。素晴らしい観察眼を持っている。

「そんなところですかね。それにしても、女神様はなんでこんなところに?」

「あの、女神様と言うのは控えていただけですか。……実は私はこの国の国教でして「国教? えーと、じゃあエリス様って言うのは」

「それだとあまり変わってませんよ! もっとくだけた感じで」

「じゃあ、エリスさん?」

「それは……。少し恥ずかしいです」

なんだろう、めちやくちや可愛い。あまり、慣れてないのだろうこうのは。顔を下に向けていると前髪でよく表情が見えないが赤らめているのはよくわかる。

「なんか、おもしろいですね」

「からかわないでください!」

「すいません」

「もう! いいです、許します。それで、あなたのお名前は」

「えっと、俺は工藤悠真」

「クドウさんですか」

「クドウって言われるのはちよつと慣れてないから、ユウマって呼んでもらえると」

「な、なるほど。ではユウマさんで」

「よし、それじゃよろしくエリス」

お互い、名前の呼びに納得がいったのか笑い合う。

「それで、エリスはなんでここに？」

「それが、私にもさっぱり。気づいたらここに飛ばされてまして。戻ろうにも戻れなく。そういえば、ユウマさんは、転生者なんですよ。特典は何を貰ったんですか？見たところ、変わった物は持っていないが」

「いやー、別に物とかは貰ってないというか。一人が駄目と言うか他力本願というか。道先案内人ついでに最強の剣士になんでも治すブリースト、多彩な魔法を扱える魔法使

いを仲間にくださいって」

「なかなか、業が深いんですね……。ちなみに、私はなんでもとはいきませんが、それに治す魔法は持つてるんですよ! これでも女神なので」

「さすがは、女神様! 治癒能力持ちとはすごい」

「そうですか?」

……。ん? なんでも治せるプリースト。ほぼ、なんでも治せる女神。

「……………」

「……………ごめんなさい」

俺はとにかく謝った。途中、エリスが頭をあげてくれと何度も言っていたが、俺は必死に謝った。

それから、必死に頭を下げた。謝りまくったせいで多少頭が痛くなったがまあ、大丈夫だ、問題ない。

「本当に申し訳ございませんでした」

「そんな、気にしないでください。本勝手なことをしたのはサツキ先輩の方なので」
本来立場が逆のはずなんだが、何故かエリスがバツが悪そうな顔をしている。

「まあ、別に帰れないわけではないんですよ。魔王を倒すことさえできれば、たぶん戻れると思います。それに、目的が同じのほうがいいじゃないですか」
「確かに」

エリスの眩しい笑顔に安堵する。何故だろうか、エリスといると安心できる。

「じゃあ、しっかりと魔王を倒して、エリスを天界に帰してみせるよ」

「はい、お願いします」

「つて、言っても今は一文無しだった」

「うふふ。それならまずは冒険者ギルドに行きましようか。魔王退治も、まずは冒険者登録しないと始まりませんし」

「おお、なんかそれらしくなったな!」

「それじゃあ、行きましようか」

というわけで冒険者ギルドに来たわけだが……。

「冒険者ギルドによろこそ。登録にはお一人様千エリス登録料が必要となります」

意気込んでギルドの扉を開けた方がいいが問題が発生。登録金が必要ときた。

「お金必要だったんですね」

これにはエリスも苦笑い。登録できないとクエストで金も稼げない。晩飯は抜き、風呂も寝床も無し。全て終わり。誰かに借りるしかないようだ。

「エリス、ちょっと誰から借りてくるわ。」

とりあえず、エリスにはカウンターで待ってもらおうとして、ギルド全体を見回す。飲んだつくれとまともそうな冒険者数名。ここはまともそうな冒険者の方に聞くとして。

誰にするか。壁際の席でトランプをしてる子にするか、それとも同じ年くらいの黒髪の青年にするか。

1. トランプで遊んでる女の子
2. 緑色のジャージ？を来ている青年

2. 緑色のジャージ? を来ている青年 を選択

「ここは同じ年くらいの人がいいかな？」

「あの、すいません。俺、工藤悠真で言うんですけど、少しいいですか？」

「別にいいけど。あれ、あんたも日本人か？」

「そうだけど」

「よかつたー。まさかここで日本人に会えるなんて。俺は佐藤和真。やっとまともなやつに会えてたぜ」

「ビンゴー! まさか他の日本人転生者に会えるとは、今日は運がいいらしい。」

「よろしくな、カズマ。でき、会ったばかりで悪いんだけど、二千エリス貸してもらえないかな。実は、転生したときに金をもらえなくて、登録費が払えないんだ」

「ああ、いいぜ」

「本当か! ありがとう。向こうでまつてる人がいるから、今日はここで。今度できたらなんか奢らせてくれ」

「おうよ」

気さくで年が近い、それも日本人とは幸先がいいスタートだ。本当、次会えた時はしっかりと恩返ししたい。

「はい、確かにお受け取りしました。ではこの魔道具に手をかざしてください」

どうやら魔道具にかざすだけで冒険者カードを作れるらしい。魔道具で結構便利だな。これだけで次から次へ、俺の情報が出てくる。

「はい、ではクドウ ユウマさん。俊敏と幸運がかなり高いですね。それに魔力と知力も平均より高めです。ただし筋力が低いですね。これですと盗賊がおすすめてです。俊敏がとにかくすごいので、すぐに敵から逃げれますし、幸運も高いのでお宝のひきなどいいと思いますよ」

筋力が低いのか。うん、知ってた。しかし、筋トレをサボってたツケがここできるとは。まあそれはいいとして盗賊かー。正直微妙だ。せつかく魔法が使える世界なんだから、魔法使いになりたい。

「あの、魔法使いは無理なんですか?」

「ウィザードですか。一応適性はありますが、このステータスだと盗賊のほうが天職だと思いますが」

「全然大丈夫です。自分魔法使うのに憧れていたんで」

「は、はあ。わかりました。それではウィザードで」

お次は注目のエリスだ。正直女神のステータスが人間に測れることにびつくりだが、結果ははたして……

「す、すごいです。この前の人もすごかったですが、それ同等です!筋力、俊敏性、知力に魔力、基礎ステータスがすでに完成されています!幸運は平均ですがさほど関係しないので、これならどのクラスにもなれます!」

「そ、そんな。幸運が平均って。私、これでも幸運の女神なのに……」

どうやら、相当心にきているらしい。それにしてもさすが女神だ。最初からステータスが完成されているのにはびつくりだ。

「どうなさいました？」

「いえ、大丈夫……です」

何を落ち込んでいるのかと、受付の人も頭にハテナをうかべてる。

「と、とりあえず、職業決めようぜ。受付さん。何かのオススメなのは」

「えっと、そうですね。見たところシスターさんのようだし、アークプリーストなんてどうでしょうか？なりたくてもなれない人が多いトップクラスの職業ですよ」

「はい、それをお願いします……」

エリスが落ち込んだままで少し空気が重い。

「エリス、せっかく冒険者になったんだし、クエストやろうぜ！あの、初心者向けのクエストとかありません？」

「それなら、ジャイアントロードがおすすすめです。レンタルで杖をおかしてきますが、いかがでしょうか？」

「デカカエルの討伐か、最初はこんなもんだらう。魔法もどんなのがあるか理解できてないし、今は一つしか無理だからエリスの支援魔法でなんとかしよう。」

「それでお願ひします。あとレンタルはダガーで。こんなスキルポイントじゃ中級魔法？を一つくらいしか習得できないし、初心者クエストなら、エリスの支援魔法でなんとかなると思うんで」

「はい、では健闘をお祈りします」

—————

「でかい、でかすぎる。目の前にいるのはジャイアントトードと言われるデカガエル。それにしても、何メートルあんだよこのカエル。ジャイアントの次元超えてるだろおい！しかも動き速いとか。」

「ユウマさん、眉間を！眉間を狙ってください！」

「眉間なんて届くかー！俺そんなジャンプ力ないんだ。ほんと甘かった、考えが甘かつ

た。強化魔法でなんとかなるとかいったやつ誰だよ！ちくしょう、俺だよ。こんなダガーでどうするんだよ。ダメージが入ってる気配ないし。

「え、ちよつと、なんですか！私はおいしくありませんよ!!」

「このクソガエル。エリスになにするつもりだ、おらー」

目を離れた隙に違うカエルが別方向から二匹。何が、初心者クエストだー。ちきしよーう!!

くクエスト終了く

・ジャイアントトード×3

15000エリス

「カエルって鶏肉の味がするの……。知りたくなかったなあ」

自分が食べられかけた相手を自分で食ってると思うとなんかやだ。てか、このカエル、臭味がなくてスッキリした味わいなのちよつとムカつく。

「これしか稼げないと少しきついですね。さすがに毎日こなすのは大変ですし」「一応俺は明日からバイトする予定だけど、エリスはどうする?」

「明日は教会の手伝いに行こうと思ってるのでその次の日から私も始めますよ」「そっか、じゃあ明日はバラバラだな」

晩飯を食い終わりギルドを出る。寝る場所だが、川の近くの馬小屋だ。これが思いのほか格安で助かった。本当だったら、しっかりとした宿で寝るつもりだったのだが。

「それでは、おやすみなさい」

「ああ、おやすみ」

……!?あれ、俺、一枚の毛布で女の子と寝ている!?

落ち着け、クールになれ工藤悠真。そうだ、とくに考えないようにしよう。無心。無心だぞー。……。

結局この夜は3時間しか眠れなかったのだが、それはまた別のお話。

第2話 キャベツは飛ぶんです。はい。

「すみません。宅配です」

「はい」

「ここにサインお願いします。はい、ありがとうございます。では、失礼します」

下級モンスターを倒してもたかが知れているので、装備が整うまでの間、宅配のバイトをすることにした。ちなみにエリスは、自分を崇拜しているという教会の手伝いについてる。昨日は生まれて初めて女の子と寝たわけだが、とりあえず最高でした。女の子で甘い匂いがして、いつも男の汗の臭いばかり嗅がされてた俺からするとまさに天国にいる気分だった。それはそうと、今ので今日のノルマはすべて終わったので、さっそく報酬を貰いに行こう。さあ、おいくらかしら。

「リーダー、ただいま終わりました！」

「おう新入り！ずいぶん速かったな。ほれ、給料だ」

3万エリスだと…。 たった5時間走り回っただけでこんなに貰えるとは。カエルな
んかと戯れるよりよっぽど楽だ。

「こんなに貰っていいんですか？」

「他の連中の倍の仕事をこなしたんだ。こんぐらいは渡さないとな」

「リーダー、さっき出たやつが1つ宅配物を忘れていきました」

「ほんとうがないやつだな。これで何回目だ」

何回も忘れて行く人がいるとは。現代社会なら一発アウトだろう……

「リーダー。俺がかわりに行きましようか？冒険仲間との集合まで時間あるんで」

「ああ悪いな。魔道具店のウイズさんの所だ。頼むぞ」

「うつつ。それじゃあ、お先に失礼します」

ということでも郵便局を出て15分、目的の魔道具店についた。人通りの少ない通りに店を出しているせいなのか、店の中は静かである。とりあえず中に入ろう。ドアを開けて中に入る、すると中には

「いらつしやいませー！」

とても豊満な胸を持った美人がいました。

「…あ、すいません、宅配です。ウイズさんでよろしいでしょうか？」

どうしよう。顔を見れない。とてつもない、魅惑が俺の視線を釘付けにする。

「はい、そうです。お仕事お疲れ様です。あの、いかがなさいましたか？」

「いや、なにもありません。ここにサインをお願いします」

とりあえず、受け取りのサインをもらって……。気をそらすために何か話をしよう。

よし、店内を見回して。

「いろんなものを取り扱ってるんですね。他の店では見ないものばかりだ」

しかし、どれも値段が高い。初心者の街で売るような物ではないような気がする。

「私の趣味で集めたばかりの物なんですけどね。あれ、もしかして冒険者さんですか？」
「昨日なつたばかりなんですけどね。あ、俺は工藤悠真って言います。一応ウィザードです」

「もう冒険者は引退したんですが、私もウィザード職だったんですよ。あ、そうだ！なにか持っていきませんか？最初のころはいろいろと大変ですし」

「いいんですか？」

「あまり高いのは無理ですが。ここら辺のものならぜんぜん大丈夫ですよ」

回復ポーションに、爆薬、初級魔法から中級魔法が書かれた魔道書が置かれている。どれにしようか探していると、一つ表紙がやけにボロい年期の入った魔道書物が目に入った。

「結界魔術？」

「それは古代文字で書かれた魔道書ですね。この文字が読めるなんてすごいですね」

読めるものにもこれは日本語だ。中の字の書き方を見るき他の転生者が書いたものだろう。

「まあ、少しかじったことがあるので。これ貰えますか？」

「ええ、いいですよ。多分置いていても。読める方は少ないと思うので」

「そういえば魔道書でどう使うんだ？」

「すいません、魔道書でどう使うんですか？」

「えーとですね。まず魔道書には二つの種類があります。一つはスキルポイントを消費して取得する物。もう一つは読んで練習をすることで取得できる物です。その魔道書は見たところスキルポイントを消費して取得する魔道書ですね。ただ、取得するのに条件がついてある物もあるので気をつけてください」

とりあえず魔道書を開けて確認する。

「今の段階だと、三種類しか無理だ。他のはレベルが足りなかったり、ジョブチェンジしないとイケなさそうだな。とりあえず、取得できるものは取得しとくか。て、消費少ない！」

「魔道書は限定のスキルを取得できるだけでなく、スキルポイントの消費が少ないのも取り柄なんですよ」

なんだろう。魔道書ですごいチートな気がする。まあ、とりあえず、この三つを取得して。

取得スキル

- ・ 固有時間制御
- ・ 三式結界
- ・ 固有空間

よし、完了。そろそろエリスとの待ち合わせの時間か。

「そろそろ仲間との待ち合わせ時間なんで行きますね。今日はお世話になりました」
「いえいえ、こちらこそ楽しかったですよ。今度はお仲間さん連れて来てくださいね」

軽く会釈して店を出る。せつかくだし、魔法でも使ってみようかな。確か加速の魔法があつた気が。

「固有時間制御 二重加速 《タイムアルター ダブルアクセル》」

周りの流れが遅くなる。この魔法は自分の体に、固有結界というものを作り、その結界内で時間の流れを操るものらしい。とりあえず通りを抜けて、ギルドの前の道にでるか。

「ぐはっ」

解除！やばい、身体中がだるい。特に肺や心臓がはち切れるくらいつらい。少ししか使っていないのに魔力の消費力も高いし、この魔術緊急の時使うようにしよう。本当に体

中が重い。

ギルドの中に入ると右奥の席でエリスが手を振ってくる。

「ユウマさん！こっちですよ」

ああ癒される。この声を聞くだけ心の疲れが取れるのだが、体はそうはいかないらしい。さっきの魔法の疲労がまだ来てる。

「すごい疲れてますね。とりあえず回復魔法をかけときましょう。《ヒール》」

さっきまでのだるさがとれて、体が風船になったように身軽になった。

「ありがと。おかげさまで疲れがとれた。そういえば、大丈夫だった？」

「え、なにがですか？」

「その、正体がバレたりとかは」

「ええ、そのことなら大丈夫です。どうやらサツキ先輩が誤魔化しの魔法をかけてくださってみたいので……」

ん？なんだかさつきとくらべて元気がない。下なんか見てどうしたんだ？

「どうしたんだ？急に下なんかで」

「いえいえ、なんでもありません！それよりユウマさんこそどうでした？お仕事。……
というより、さつきからアンデットのにおいがするんですが」

「え、アンデット？まだこの世界に来てから見てないが」

エリスがじーと、こちらを見てくる。なんだか少しおっかないな。

「とりあえず、手を出してもらえますか？」

言われたとおりに手を出すとエリスが握ってくる。え、本当どおしたの?!

『祝福を!』

身体中が優しい光に包まれ、暖かくなってくる。

「エリス、今のは?」

「おまじないですよ。これで大丈夫です」

さっきの真剣な顔からいつもの優しい笑顔になる。やっぱりエリスの笑顔は癒される
なく。

『緊急! 緊急! 冒険者の皆様は装備を整えて街の正門に来てください!』

周りがいっつもより騒がしくなっている。どうなってるんだ?

「ユウマさん。速く行きましょう! あれが来ますよ」

「あれってなんなんだ？」

「あとで説明しますから速く来てください」

街の正門には初心者とは思えないガチ装備を着けた冒険者達が多くいた。本当にここは初心者の街かよ。そんな冒険者たちの中にカズマを見つけた。

「よ、カズマ。」

「おー、ユウマも来てたのか」

カズマの回りに三人の美少女達がいる。カズマって見かけによらず結構モテるんだな。まあ、優しいし当然なのかな。

「異世界に来てさっそくハーレム作ってるのかー。カズマはスゲーな」

「冗談は止めてくれ。別にこいつらは俺のハーレムのメンバーでもなんでもねえ。たしかに見た目はいいが中身は最悪だ」

「さあ、めぐみん。たくさん捕まえて、今日は飲みまくるわよ！」

「今こそこの私の秘められた力を使うときですね」

「今年はどうな攻撃を受けられるのか楽しみだ。ジュール」

……うん、すごい個性豊かだな。

「探しましたよ、ユウマさん。素人が一人行動するのは危険なんですよ……せ先輩?」

「あー! 上げ底エリス、なんであんたがこんな所にいるのよ。て、今日はパットいれてないのね」

「ア、アクア先輩なんのことですか? わワタシハパットナンテツカツテマセンヨ」

え、パット? てか、エリス、めつちやかたことなんだが。

「そんなことどうでもいいわ。なんであんたがここにいるのか聞いているのよ!!」

「えつと、サツキ先輩が……」

「来たぞ!!! キヤベツの大群が!」

「あーもう、後ででいいわ。さあ、キヤベツ達! 私の酒代になるのよ!」

え!? キャベツの大群? なにそれ。て、

「なんで、キャベツが飛んでるんだよ!」

「えーとですね。この世界のキャベツ達は強い魔力と生命力をもっているんです。そのため貯めて腐って生涯を閉じないため、大陸を渡り、海を越え、人知れぬ秘境を目指して飛んでいくんです。できのいいキャベツは一玉一万エリスも値がつくので、かなり稼げるんですよ」

うん、とりあえず説明ありがとうエリス。キャベツが飛んでいるのはなんか、許せないが。少しでも楽に進めるためだ、いっちょやりますか!

「おい、ユウマー! 危ない」

「え?」

やばい、キャベツの大群がこっちにくる。避けられねえ。

「つつ、《固有時間制御 二重加速》《タイムアルター ダブルアクセル》」

キャベツの大群をなんとか避けることはできたのだが、おかしい。さつき使った時より体に負担がこない。

「間一髪だったな、ほら俺たちも捕まえに行こうぜ」

「お、おう」

その後は結界で動きを止めてはダガーで刺しての繰返しで、結果は30万くらい稼いだ。どうやら俺の捕まえたのは質がいいのが多かったらしく、高く買い取ってくれたらしい。ちなみにエリスは周りを回復しながらやっていたのだが、15万エリスも稼いだ。エリスの品質のいいのばかりだったのだが、原形をとどめてないのが多く、かなり値引きされていた。カズマ達は、カズマ達でなにやら賑やかそうにしていましたとさ。

「今回のかなり稼げたし、宿に変える？」

「もったいないので馬小屋のままでもいいですよ。馬達も可愛いので」

でもいつまでも、美人と一緒に馬小屋生活ていうのも少しつらい。いろんな意味で……

「どうです、この世界には慣れましたか？」

「うん、だいぶね。でも野菜が飛んだり、魚が畑にいるのは慣れきれないかな」

さつき飲み会でカズマからサンマが畑に植えられてたて聞いたときはマジで驚いた。この世界の生態系を作ったやつは頭がイカれているのか？

「大丈夫ですよ。すぐに慣れますよ」

「慣れたくないよ、そんなの！」

なんか、いろいろ疲れたな、今日は眠れそうだ。明日はどんなことがあるのか、少し楽しみになってきた。

「ふぁーあ、おやすみ」

第3話 金髪ロリ剣士は王道!?

あのキャベツ狩りから一週間がたった。生活習慣もでき、だいぶこの世界に馴染んできた。

「ユウマさん、今日はゴブリンの集団討伐クエストがおすすめですよ」

「おい、ユウマ！明後日の飲み会、お前も来いよ」

「ユウマー。今度の一緒にクエスト行かないか？」

まあ、こんな感じで周りの人達とも良好な関係をきづけている。それはそうと、今日エリスはカズマ達の所に用事があるらしくて一緒にはいない。少し心細いが、一人でさつき進められたゴブリンクエストでもやろうかな。

「おい、そつちはどうだ？」

「いや、こつちにはいなかったぞ」

「クレア様になんと、報告すべきか」

ん？あれは王都の騎士達かな。なにやら慌ただしいなまあ絡まれると厄介そうだし、さつさと行くか。

んー、二、四、六、八、十。十体もいるのか。思ってたより多いな。奇襲でいくかな。

「《空間結合》」

この魔術は文字どおり、場所とバシヨ繋げる魔法だ。まだ経験の浅い俺は、腕が入るくらいしか広げられないので、主に結界で作った倉庫と繋げて、物の出し入れに使っている。とりあえずこの前、ウイズさんから買った爆発ポーションでも取り出して投げる

か。このポーシオンは刺激を与えるだけで爆発する簡易爆弾ポーシオンなので結構気に入ってる。

ドカーン!!

ブラボー。威力こそ低いがゴブリン程度なら容易に倒せる。残りは六体くらいか。これならいつも通りの手順で倒せるな。

「《二式結界》！」

この魔法は相手を結界で拘束する魔術なのだが、詳しくいうと相手の部位を特定数拘束する物だ。今使った二式結界の場合二ヶ所、三式結界の場合三ヶ所と最大八ヶ所までバリエーションがある。ちなみに、上位の物は結界維持にそれなりの魔力を持っていかれるが、相手に壊されにくい。逆に下位の物は魔力の消費は少ないものの、壊されやすい。あと五式以上はジョブチェンジが必要だ。足を拘束されたゴブリン達は地面に横たわれる。あとは簡単。心臓ダガーで刺すだけだ。

ストーンストーン。

よし、こんなものだろう。

「さーて、帰ってカズマ達の所にも顔をだそうかな」

ということ、来た道を引き返す。ゴブリンの集団の近くには、初心者狩りと言われるモンスターがいる可能性があるらしいが、今回はいなかったか。別に一匹くらい出てきてくれてもよかったのに。

……はいさつそくフラグを回収しました。森を抜ける少し手前の所で、ゴ布林たちを斬ってる金髪の少女を背後から不意打ちをしようとしていた初心者狩りを見つけてしまいました。まさか他人を巻き添えにしてしまうとは本当すいません。あ、やっべ、初心者狩りが飛び出した。

「《固有時間制御 二重加速》」

そのの木に向かって初心者狩りをシュート！超エキサイティン！

「え!？」

金髪の少女は目を大きくして驚いている。そりや、いきなり背後で知らない男が初心者狩りをおもいつきり蹴り飛ばしたんだ。驚かないわけがない。

「グガーツ」

よろよろと初心者狩りが立ち上がって俺をロックオンする。その眼光はまさに野獣。

「はあ、あまり見つめないでくれませんかね？」

俺目掛けて飛び出す。とりあえず爆発ポジションを取り出して。

「いけ！モン○ターボール」

空中で初心者狩りに爆発ポジションがぶつけ爆発！見事に真っ黒焦げになり地面に落ちる。まあ、こんなもんですよ。

「えーと、大丈夫？」

「え、あ、はい大丈夫です」

今だに少女は驚いてますよ。そりや自分の後ろでいきなりこんなことが起きれば、誰だってこんな状態ですね。それにしても、よく顔を見るとめっちゃ可愛いですね。いや、別に俺はロリコンじゃないですよ、憲兵さん。

「あの、助けて頂いてありがとうございます。私は、ア、……イリスといいます」

言葉使いといい、お辞儀の綺麗さといい、すごい礼儀がいいのですね。こんな礼儀のいい子は現代だとあまりいないだろ。

「俺はユウマ。よろしくなイリス」

「はい、こちらこそよろしくお願いします。あの……」

ん、なんでもじもじしてるんだ？

「実は、帰り道がわからなくなってしまった。その、よければ一緒にギルドまで来てもらえませんか？」

上目遣いで甘えるように頼むイリス。マーベラス。こんな頼み方されれば男は断れない。

「ああ、いいよ。俺もさつきクエスト終わらせたところだったから」

「ありがとうございます！」

――

「俺のいた日本て国は、風景だけはいつちよ前によくね。特に春の季節は桜という花が咲いてすごい綺麗なんだよ」

「私もその桜という花を見てみたいです！」

俺はギルドに着くまでの間、イリスに頼まれて故郷について話していた。エリスと同じで聞き上手なため、話してて楽しい。まあ、そんなこんなであつというまにギルドについてしまった。本当、楽しい時間はすぐに終わる。不思議なもんだ。

「ユウマさんの故郷は私の知らないことばかりで、聞いてとても楽しいかったです」
「ああ、俺も楽しいかったよ。じゃあ俺はここで」

名残惜しいがここでお別れだ。俺はイリスに背中を向ける。

「あ、あのー！」

「ん?」

「もし、もしよければ、私をパーティーに入れてもらえませんか!」

え?なにを言い出すんだこの子は。確かにそれなりに仲良く会話してたよ。だからといって、会ったばかりの人に、それも男にパーティーに入れてくれるって。

「えーと。パーティーに入れてつて、大丈夫なの？だつて俺は男だよ。女の子が男にほいほい付いてきたら危ないよ」

「大丈夫です。ユウマさんは信じられる人ですから。だつて私のことを心配してくれてるじゃないですか。こんな優しい人が酷いことをするとは思えません」

落ち着いた様子で笑顔で浮かべるイリス。その目はいろんな人間を見て、悟つたような目でもあった。恐ろしい子だ。

「でも、宿とかはどうするの？俺達は金が少ないから宿じゃなくて馬小屋生活だから、プライベートもくそもないぞ」

「泊まる所があるなら大丈夫です。私、故郷を出てから、三日間ずっと野宿だったので」

笑顔でなんてことをいうんだこの子は。年端のいかない子が野宿でなんて。

「まあイリスはダメとは言わなさそうだし、むしろ歓迎しそうだからな。わかった。改めてよろしくなイリス」

「ありがとうございます！こちらこそ改めてよろしくお願いします」

うーん。眩しい笑顔だ。とりあえず、エリスに紹介しとかないとな。さて、どこにいるのか。

「ユウマさん!」

おつとラツキー。向こうから来てくれるとは。

「……て、こんな幼い子に手を出すのはダメですよ」

「エリス、ちょうどいいところに来てくれた。ってさ、あんたはいきなり何を言い出すんだ。この子はエリス。これから俺達のパーティーに入ってくれる子だ」

「よろしくお願いします」

「安心しましたよ。まさかユウマさんが社会的に危ない人だったのかと勘違いしましたよ。私はエリスと言います。よろしくお願いしますね。エリスさん」

エリスの怪しい人を見るような目が、いつもの笑顔になつてくれてよかった。それにしても、変態扱いされたのは心にくきたな。

《緊急！緊急！冒険者の方々はすぐに正門に来てください。》

「本当いつも、急だな。次はなんだ」

「ん、これは。アンデットがいます！間違いません。急ぎましょう」

「なんもわからないのだが、どうしてアンデットが昼間に来るんだよ。それに、正門からは離れているはずなのにどうしてわかるんだ？」

「わかるものにも、空気が違うじゃないですか！本当ヘッドがでます。せつかくのいい気分だったのに台無しにしてくれるなんて、灰のひとつも残らないまで叩き潰してやりますよ」

エリスは走って行ってしまった。めちやめちや恐いんですが。エリスはアンデットになんか恨みでもあるのか？

「とりあえず急ぐか。いくぞ、イリス」

「は、はい！」

「毎日毎日、俺の城に爆裂魔法を撃ち込んでくる頭のおかしいやつはどこだ!」

正門につくと、首なしのアンデット。デュラハンはものすごくお怒りモードでした。つて爆裂魔法なんて使えるのめぐみんぐらいじゃないか。なにやってくれてんだよ。

「ふ、まんまと騙されましたね、悪しきものよ! 我は紅魔族随一の魔法の使い手、めぐみん! 毎日爆裂魔法を撃ち続けたのはこうして貴方を誘きだすため!! さあ、覚悟してもらいましょうか」

「うそつけ!」

俺とカズマの声が被る。そんな見え透いた嘘をよく言えたな! 見るからにめぐみんの足は震えている。

「ん、そのイカれた名前は紅魔族の者か。まあ、いい今日の所は警告に來ただけだ。もう二度と爆裂魔法を撃つてくるなよ」

「いやです。紅魔族は一日に一回爆裂魔法を撃たないと死んでしまいます」

「いやいや、そんな物騒な民族がいてたまるか。」

「聞いたことないぞ！もういい、迷惑行為を止めないのならこちらにも考えがある」

「ん、エリス待て、何をするつもりだ？」

「めんどくさい茶番は終わりです。一撃で潰してきます」

「おいおい、ただでさえめんどどうな状況をこれ以上、ややこしくしないでくれ。エリスの袖を引くが、止められない。圧倒的筋力差に無念。」

「迷惑なのは貴方の存在です。ゴミはゴミらしく、ゴミ箱に入っていればいいんですよ」
「なんなんだ、お前は！」

「ゴミに名乗る必要はありません。さあ消えてください。《セイクリット・エクソシズ

ム》!!」

完璧な一撃がデユラハンに入る。しかし、今の一瞬で何が起こったのか。デユラハンはエリスの背後を取っていた。

「く、危ないだろ！貴様、シスターにしてはやるな。……まあいい」
「っ！しまった！」

デユラハンの邪悪な魔力が高まっていく。危ない！

「紅魔の者よ！貴様に死の宣告を与えよう」

「危ない！ッ」

「ダクネス！」

「おい、大丈夫か！」

「手違いがあつたが、まあいいだろう。紅魔の者よ、貴様の仲間の命は残り一週間だ。救いたくば我城にこい。フハハハハ」

「城にこいだなんて、絶対なんか仕掛けてくるつもだろ。なあ、一週間で呪いを解けねえのか?」

「残念ながら、一週間でデュラハンの呪いを解くなんて無理ですよ」

「めぐみんという通りだ。魔王幹部の呪いを解けるほどの人間はこの世界には数少ない」

カズマパーティーは早くもお通夜モード。デュラハンの呪い、どんだけ強いんだよ。

「あの、ララ、……ダクネスさん、本当に大丈夫なんですか」

「ん? 君は?」

「ああ、カズマ達のパーティーには紹介してなかったな。この子はイリス。今日、うちのパーティーに入ってくれたソードマスターだ」

「そうか、イリスというのか。大丈夫だ、特に違和感などは感じてない。心配してくれてありがとう」

心配するイリスに優しい笑顔で返すダクネス。こいつ、こんな顔できるのか。ただのDMだと思っていたが考えを改めよう。

「考えてても埒が明かな。仕方ない。デュラハンの城に行くか」

「ああ、そうだな。カズマ、俺達も付いて行くぜ。いいだろ、エリス? つて」

なにやら落ち込んでます。攻撃が当たらなかつたのがよほど悔しかったようだ。

「すまん、ありがとう。私なんかのために」

「困った時はお互い様だしな」

「仲間なんだから、当たりまえだろ?」

「そうですよ。ダクネス」

「それじゃ、デュラハンの城目指してgo!」

「《セイクリット・ブレイクスperl》!!」

は? 皆さん驚きのあまり、なにも言えてない。

「私にかかればデュラハンの呪い解除なんて朝飯前よ。さあ帰りましょ」

……。

「俺達の（私達の）やる気を返せ!!」

第4話 この駄女神様と商売を！（前編）

「うえ、気持ち悪い」

昨日は酷かった。デュラハンの呪いを解除したあと、皆で飲み会をしていたのだが、濃度の高い酒を二回も一気飲みをさせられ、更にアクアに頭から酒を被せられた。その後、イリスと大富豪をやったが、大人げない十連コンボをぶつけたら、横から入ったカズマに惨敗し、そのままイリスはカズマになつくという始末。冷静に振り返っても、弱いものいじめをしていたやつを返り討ちにしたカズマはイリスにとっては英雄だ。まあ、イリスとはさつき和解してご機嫌も治せたからよしとするか。それにしても、一週間後にはデュラハンがまた来るだろう。だが、この街の人達は昨日のことなどなかったかのように過ごしてる。多分カズマ達も昨日のことなど、とつくに忘れてるだろう。とりあえず、馬小屋を出る前にエリスに、手持ちの短剣十本にアンデット特攻を付けて

くれるよう頼んどいたが、正直物足りない。さーて、どうするか。

「ちよつと、そこのお兄さん。いい話があるんだけど」

後ろから袖を引かれる。この声は……

「お、アクアか。悪いけど、俺はそこまで暇じゃないぞ」

「大丈夫、大丈夫。きつとユウマも気に入る物だから。ちよつと、こつち来なさい」

強引に腕を持ってかれ、俺は抵抗できずにそのまま路地裏まで連れていかれる。筋力値……。

路地裏についてから、アクアはどこに隠していたのか、長方形の縦長の箱から何かを取り出す。なにやら、怪しい取引をするような雰囲気だ。

「ふふ、さあユウマ。覚悟はいいかしら」

「ん、どうした。そんな真剣な顔で」

そうすると、アクアは後ろに隠していた物を俺の目の前に出す。
こ、これは!!

「1／7フィギュア幸運の女神エリス 私服バージョンの石鹸よ!!」
「な、なんだと。これが石鹸だど!?!」

髪の毛の一本一本、指の先までしつかりと再現されている。現代フィギュアを遥かに越える完成で、しかも石鹸とは、女神恐るべし。

「この石鹸は天然素材だから、食べることもできるわ。それに、服の部分はお風呂で使っていくと、だんだんと……。まあ、石鹸だししかたないわよね」

なんと!!別にやましいことは考えていない。そう、これは石鹸。ただの石鹸だ。

「アクア。……十万里スでどうだ?」

「さすがユウマさん。話が速いわね。特別にこの私、女神の霊験あらたかのありがたい

聖水も付けてあげるわ」

十万エリスと引き換えに石鹼と聖水を受けとる。石鹼は後で風呂場でゆっくり観賞するとして《ポケット》で閉まておくとして。この聖水だが。

「なあ、この聖水でどんな効果があるんだ？」

「そうね。上級アンデットでも、致命傷になるくらいのはあるわ。人間には、呪いとかの解除くらいかしらね」

「ん、どれ。味見。」

ん。……。この味、どこかで。確か昨日……。

「ひとつ聞きたいんだけど。触った水を聖水に変えられたりするか？」

「私を誰だと思ってるの？水の女神アクアよ。ジュースでも、泥水でも、私が触れれば綺麗に浄化されて聖水になるわ」

あ、ピング。

昨日こいつに、散々水に変えられた酒と同じ味がすると思ったらまさか聖水になって

いたとは。いや、待て。泥水でも上級アンデットに致命傷を与えられる、最強聖水になるってやばくね？これは稼げる。

「アクアさん？簡単に稼げる方法があるんだけど、どう？」

「え、本当！なになに、教えなさいよ！」

掛かった。ここっからは俺のターンだ！

「500m1の聖水を大量生産してくれないか？俺は知り合いに魔道具店の店長がいるから、その人にかけていい商人を紹介してもらおう。そして、この聖水を買ってくれるよう頼む」

「値段はどうするの？」

「値段は10000エリスだ」

「なにそれ、安すぎよ。せつかくこの私が苦勞して作ってるんだから、せめて1万エリスにしなさいよ」

苦勞してて、水に指いれてるだけだろ。

「アクア。こういうのは量で勝負なんだ。いい質で、安い。これがポイントなんだ。変に高かったら、買う相手が限られる。でもお手ごろ価格ならみんなが手を出せるだろ？」

「そ、そうね」

「塵も積もれば山になる。10000エリスだって、たくさん買ってもらえれば億にだって届く。だから、これぐらいが妥当なんだ」

「とりあえず、たくさん買ってもらえればいいのね」

「おう、わかってくればいい。難しいことはこつちで全部やとくから、聖水作りに力を入れてくれ。あと、あの石鹼。違うシリーズも作ってくれないか？あれはあれで、いい売り物になる」

「わかったわ」

「それじゃあ、俺は早速準備に取り掛かるから、聖水作り頼むな」

俺はアクアと別れてウイズさんの店に急ぐ。これで、なんとかデュラハン戦の軍資金

が集まる。

――

よし、これでなんとか終わり。ユウマさんに頼まれていた短剣の対アンデット附与にかなり時間を取られてしまつて、もう夕方だ。イリスさんはまだカズマさんの所だろうか。それにしても昨日のあれは流石にやりすぎだ。仲直りしていればいいのですが。とりあえず、晩ご飯の支度をしないと。馬小屋の外に出るとユウマさんがちょうど帰ってきた。

「エリス、今帰つたよ」

「おかえりなさい。どうしたんですか？両手に何か抱えていますか」

「あ、これ？ふふふ、じゃーん！」

なんと、ユウマさんが両手の袋から取り出したのはこの世界ではかなり値の張る、高級牛肉だった。

「どうしたんですか！こんな高級品」

「実はちよつとした商売を始めたんですけど、予想以上に売れてね。少し贅沢したくなり
ました」

「ただいま帰りました！」

イリスさんがちょうどいいタイミングで帰ってくる。

「お、ナイスタイミングだ、イリス。今日は晩飯は高級お肉でしゃぶしゃぶだ。」

「しゃぶしゃぶとはなんですか？」

「そうか、イリスは知らないか。イリスはどうだ？」

「私も、アクア先輩から聞いた知識くらいで、実際にやったことはありませんね」

「そうか。じゃあ、俺が教えるから。みんなでやろう」

ユウマさんはお鍋の準備をしながら、イリスさんと楽しそうに会話をしている。どうや

ら、仲直りしてたみたいだ。

それにしても、本当ににぎやかな人だ。話題作りもうまいし、正直天界に居たときより、今のほうが楽しい。いつか、天界に戻るとき。ユウマさん達とお別れをする時。果たして、私はしっかりとお別れをすることはできるのだろうか。できれば、このままずっと。でも、許される訳がない。私は女神。この世界を管理する役目を与えられた者。本当だつたら、ここで、楽しんでいるのだから、許されることではない。でも…。赤い夕陽は月にみんなを見守る役目を預け落ちていく。

「おーい、エリス。鍋の準備終わったから、速くこつちに来て」

「そうですよ、エリスさん。速く来ないと食べちゃいますよ」

「こら、エリス。お行儀が悪いぞ」

「はーい、今行きます！」

――

ー寝床にてー

「どうかしましたか？」

「んぐ！ど、ドウモシテナイデスヨ。ハハハ」

今、何か人形みたいなのを隠した気が……

第4話 この駄女神様と商売を！（後編）

「ちよつと、エリス。疲れたんですけど〜」

「もうすこしの辛抱です。頑張ってください」

「イリス、結構歩いたし大丈夫か？」

「全然平気です！私、ピクニックするの始めてなんで、すごい楽しいんです！」

「へー、ピクニック始めてなのか。もう少しで着くから、着いたらお弁当にしような。ほら、アクアもイリスを見習ってくれ」

「私は女神なのよ。少しは奉仕をしようとは思わないの」

「子供が頑張ってるんだから、女神様も頑張ってくださいよ。ハア」

ということ。俺達パーティーメンバーとアクアは水源の浄化クエストもとい、聖水の製造のためアクセルの街の外に来ている。ちなみにエリスとイリスには浄化した聖

水を売ることは話しておらず、浄化クレストと飲み水の詰め込みと話している。

「よし、着いたぞ」

「なんとというか、典型的な泥沼ね」

「その泥水を浄化するために来たんだよ。これも億万長者への道だ。我慢してくれ。エリス、俺とアクアは浄化の準備に取り掛かるから、イリスと一緒に昼飯にしててくれ」
「わかりました」

「ちよつと、ユウマ。私もお腹減ったー」

「はいはい、わかったよ。ちよつと待つてくれ」

「めんどくさいのを、商売パートナーにしてしまったことだ。とりあえず、結界を張つて。」

「これでよし。アクア、エリス特製のお弁当だ。結界内でおとなしく食べてろ」

「水の中で食べるの!?!」

「当たり前だ。俺達の目的はあくまでも聖水の製造。浄化なんかで時間を使ってる場合じゃない。今我慢すれば、あとでいい酒がたくさん飲めるんだぞ」

「うぐぐ、わかったわよ」

「わかってくればいい。ちゃんと見張りはしてるから、安心してくれ」

さすがのアクアもここまで言えばわかってくれた。なんだかんだ言っただけで以外と物分
かりがいいな。

「ユウマ、紅茶欲しいんですけど」

「はいはい」

それにしても。泥水の中のアクア、以外と面白いな。アクアの周りが少しづつだが、
綺麗な水になっているのがわかる。紅茶のティーパックみたいだ……。暇だ。なんだ
か暖かいなー。

……。

「ヒィギャー。ユウマさんユウマさん。助けてー!!」

ん!?や、やべー。つつい寝てしまったって、うわー。なんか襲われてるんですが。

「アクア先輩どうしたんですかって、だ、大丈夫ですか!?」
「ユウマさん、流石に助けにいかないと」

俺のレベルが低いからか、結界にひびが入る。

「なんか、今、聞こえちゃいけない音がしたんですけど!」

ああ、見てないうちにこんなことに。

「わかりましたよ。やりますよ、やればいいんですよ!」

――

―二時間後―

チャポン。綺麗に澄んだ水を魚たちは優雅に泳いでいる。

「……、もう、誰も信じられないわ……」

「先輩、お気を確かに」

見ての通りアクアは廃人同然になった。正直、アクアには悪いことをしたと思う。見張りをサボって寝て、叫び声が聞こえるまで放置したんだ。アクアが好きで起こした騒ぎではない。

「エリス、アクアの看護頼む。俺はイリスと水汲みしてくる」

ああ、それにしても疲れた。ブルータルアリゲーターを十二体も相手するのは流石に大変だった。

……それにしても、イリスは何故か上機嫌だ。

「イリス、なんかいいことでもあったのか？すごい楽しそうだけど」

「みんなでピクニックするのは楽しいなーって思ってたんです。私、今まで身内の人しか外に出たことがなくて、仲間と遠出して、お弁当食べて、モンスター倒したりするのは始めてで、本当にすごい楽しくて」

俺はイリスの過去についてまったくといって知らない。始めて会った日の夜、過去の話を聞こうとした時に見た暗い顔が、あまりに印象的で聞く気になれないからだ。

「そうか、それならよかった」

イリスの笑顔を見てたら疲れがとんだ。うちのパーティーの女性陣の笑顔は本当疲れたときに効く。

「そういえばさ、イリスの剣て不思議だよな。姿が見えないし、風を纏っているというか。なんか不思議な感じだ」

「この剣のことですか？そうですね。ユウナさんには特別に見せてあげます。この事は周りの人には秘密ですよ」

イリスは小声で呪文のようなものを唱える。そうすると、風が舞始め中から蒼い持ち手のシンプルだが、一目ですごいとわかる剣がでてきた。

「この剣は私の一族に昔から伝わる神器です。名前は確かなんとかカリバーだった気が」

なんかカリバーで、おいおい。ん、カリバー？それって、アーサー王のエクスカリバーじゃね??いや、でもそれは俺の世界での剣だし。

「その剣で、俺でも使えたりするの?」

「神器は認めた相手にしか使えないらしいです。でも、認めらさえすれば」

物が使い手を選ぶか。なんか不思議な感じだ。

「俺は認めてもらえないな。秘密話してくれてありがと。よし、このボトルで最後。そろそろ、帰ろうか」

俺は最後のボトルを結界に入れて立ち上がる。日も少し傾いてきたし、街に着くのは夕方くらいかな。

「おーい、エリス。帰ろう」

「はーい。ほら、アクア先輩、立ってください。帰りますよ」

「……」

「しかたないな。こうなったのも俺のせいだ。俺がアクアをおぶるから。二人は荷物を持ってくれ。ほら、掴まれ」

よいしょつと。こいつ意外と軽いな。それじゃあ、太陽を背中に帰りますか。

――

アクアをおぶって二時間ちよつと、ちよつと夕方頃に街に着いた。

「ふう、やつと着いた。ほら、アクア。街に着いたからおりてくれ」

相変わらず反応は返ってこないで、変な歌が返ってくる。

「でがらし、女神が運ばれてーくーよー。きつと、このまま売られていーくーよー」
「いや、売らねーよ。俺は幹旋業者か！」

なんちゆう、歌を歌ってんだ。まったく、周りの視線が痛い。

「お、ユウマ！帰ってきたのかって、おいアクア、なにやってるんだ」

ナイスタイミングで、アクアの保護者さんが来てくれた。

「いいところに来てくれた。実はカクカクシカジカで、連れて帰ってくれないか」

「それは災難だったな。ほら、帰るぞ駄女神」

カズマは無理矢理、アクアの腕を引っ張る。しかし、いつもみたいに暴言を吐かない。そんなに怖い思いをしたのか。本当ごめんな。

「ちよつと、君。女神様になんてことしてるんだ！」

いい装備を身に付けた、茶髪の男がいきなりこちらに来て、カズマからアクアを離す。

「大丈夫ですか、女神様」

「ん、女神様？ そうよ、私は女神よ」

え、そんなことで復活するの？ この子はどれだけチョロいの？

「なんだよ、勝手に人のやり取りに入ってきて。おいアクア。誰だよこいつ」

「え？ えーと。誰だっけ？」

「覚えてないのかよ」

ひ、ひどい。自分のことを慕ってくれてるんだから、覚えてあげないと。

「御剣です、御剣響夜ですよ。あなたから魔剣グラムを授かった」

「あ、あー、いたわね、そんな人。結構な人を送ったから、忘れてたわ」

「はあ、まあ、思い出して頂いて光栄です。それにしても、君。女神様になんて無礼なことをしてるんだ。その君も何故止めようとしらない」

え、俺もアウトなのかよ。

「無礼もなにも、こいつは俺の持ち物だし」

「持ち物ってまさか、女神様を選んだのか!？」

「あーそうだよ。こいつが人の死に方を馬鹿にしたから。なんだよ、悪いかよ」

「その君もグルなのか！」

「え、いや、俺はカンケーねえーよ」

「ええ、ユウマさんは私と一緒に転生したので、別に関係はありませんよ」

「本当に君達はいい人に囲まれているのに。こんなに性根が腐っていると、二人とも前に出ろ。僕がその性根を直してやる」

こいつ、黙って聞いてれば人のことを悪者扱いしやがって。

「ああいいぜ、てめえーの腐った頭を俺が直してやるよ」

「おう、上等だ、やるぞユウマ」

「ちよつと、二人とも。落ち着いてください」

「エリス、イリスの目を塞いでてくれ」

「どつからでもかかってくればいいさ、悪いけど。僕は初心者相手でも手加減しないよ」

先にカズマが飛び出す。なんともめちやくちやな剣の振りなので全部かわされる。

「チツ」

「今度はこつちの番だよ」

御クソが魔剣でカズマを狙う。危ない。

「《固有時制御 二重加速》」

「なに！」

カズマの腕を引っ張って、攻撃をかわす。

「君、その動き。もしかして、盗賊か」

え、こいつ、俺がウイザードだって気づいてない？ラッキー。

「カズマいい考えがある。俺が演技をするから、あいつが隙を見せたら、一発ぶちこんでくれ」

「了解！」

「いくぞ、カスルギ。今度は俺の番だ！ステイール！」

俺は右手を出してミツルギの横を走りさる。

「え、なにも取れてないじゃないか。て、グフ」

呆気にとられてる間にカズマが、顔面を殴り、倒れたミツルギから魔剣を奪い、そのまま首に向ける。

「ゲームオーバーだ」

「悪いけど、俺、盗賊じゃなくて、ウイザードだから」

「そ、そんな。ガク」

「お疲れ、ユウマ」

「カズマこそお疲れさん、タイミング合わせるのうまかったな」

後ろでエリスとアクアは呆然としてる。まあ、騙しうちではあるけど、しかたない。正攻法で戦ったら勝てるわけないんだから。

「それで、この魔剣どうする?」

「あー、それ俺が貰っていいか。ちょうど武器が足りてなかったんだ」

ということで大ズマから魔剣を受けとる。

「ちよつと待ちなさいよ。それはキヨウヤの魔剣よ、返しなさいよ」

「返せもなにも、そつちからケンカ売ってきたんだから、これはそのお代だよ」

「それはキヨウヤにしか使えないのよ。あんたが持つても意味がないじゃない」

「ああ、わかつてる。別に本当の力は使えなくてもいい。ただ丈夫ならそれでいい」
「もう、なんでもいいから、返してよ」

しつこい奴等だな。本当こいつらは人の話が聞けないらしい。

「ユウマ、ここは任せてくれ。悪いが、俺は真の男女平等主義者だ。女の子相手でもドロップキックを食らわせられる。いつまでもしつこいと、公衆の面前で俺のステイールが炸裂するぞ？」

「お、覚えておきなさいい」

流石鬼畜の所業カズマさん。そこに痺れる憧れる！（言ってみただけ。）

「流石、カスマさんだわ。あれは引くわ」

「えっと、その本当にそんなことはしませんよね？」

女性陣は完全に引いていらつしやる。まあ、普通に見れば、俺らは女の敵だよな。

「なんだよ、駄女神。そもそも、お前がとつと立ち上がらないのが問題だろ？」

「なによ。こつちにはこつちの、気持ちて物があるんです。それに男ならちやんと気遣いなさいよ、このヒキニート！」

「なんだと！《ステイール》！《ウインドブレス》！」

アクアのパンツはカズマの手の中に。そして、スカートが揺れて、見えグワ。

「ユウマさん、最低です」

エリスの右ストレートが俺の腹に決まる。

「カズマさんも、なにも公衆の面前でやるなんて。度がすぎてます」
「ウエ」

カズマは股間にエリスの右足がクリティカルヒット。その後アクアの泣き声をバツクに俺とカズマは夜まで、説教を受けました。後日、アクセルの街一帯には、鬼畜のカズマ、チンピラユウマ、鬼のエリスと広がっていました。

第5話 変態首なし騎士に制裁を！

「いらつしやいませ」

店のドアを開けると貧乏巨乳店主さんがいつも通りの優しい声で出迎えてくれる。

「お疲れ様です。ウイズさん、聖水十万本納品しに来ましたよ」

俺は空間結合で倉庫から大きな段ボールを十箱出す。この段ボールに一箱一万本の聖水が入っている。余談だが、この段ボールはとある国で盾の素材にされるほどの強度を誇っているらしい。中で段ボールな戦記でも戦われるのかな？

「はい、確かにお受け取りしました。……でも本当によかったんですか？せつかくお金

持ちになれるというのに」

この聖水は、ウイズさんを經由して王都の商人達へと売られる。200mlのボトルで以前に一本千エリス。それを今日は十二万本納品した。つまり一億エリス手にはいる。だが俺は五千万エリスづつでウイズさんと分けることにした。理由としては、管理が大変だからだ。というのはウイズさんの前での建前。本当はウイズさんの店が潰れかけているということだ。話を聞く限り、毎月家賃を払うのも必死らしい。それに、外見を見る限り発達がいい人だが、よく見ると肌が色白だったりして、健康だとはいえない。だから分け前を半分にすることにした。ちなみにアクアにはこの事は伝えてない。そもそも、ウイズさんに会わせてもいない。だって絶対なにかやらかしそうだもん。

「別にいいんですよ、仲間もそれで納得してるので」

嘘です。話してません。でも、これも人救いだし女神なんだから許してくれるよな。

「そ、そうですか」

ウィズさんは、納得してないようだ。なんかいい案はないかな。……ん、そうだ。

「なら、俺の魔法の講師になつてくれませんか？」

魔法の講師の代金も込みで受け取ってもらう。我ながらいいアイデアだ。

「魔法の講師ですか。ユウマさんがそれでいいとおしやるのなら」

よし。って、なんか、準備し始めたんですが。

「あ、あの。店はいいんですか？」

「ええ、別に開いてても、お客さんはあまり来ませんからあまり支障はでませんよ。さあ、さっそく特訓に行きましようか」

ええ、それでいいのか店主さん。

場所を変えて古城の近くの森で特訓することになったまあ、この場所なら、周りの迷惑にはならないかな。……、そういえばデュラハンが古城を陣地にしてるとかなんとかまあ、いいか。

「それじゃあ、まずは一通り覚えてる魔法をやってみてください」

「言われるがまま、俺は今できる魔法を使う。といっても、最初に覚えた三つとちよつとした応用で物を見えなくする魔法だけだ。」

「とりあえず、俺の使える魔法はこれくらいです」

「お疲れ様です。ちなみに、この中で普段使ってるのはどれなんですか?」

「んー、よく使う魔法か。固有時間制御ですかね。最初使った時は体が辛かったんですけど、二回目からは何故か楽になったというか、魔力の消費も軽くなったというか。」

まあ、便利でそれなりに負担がないんでよく使ってますよ」

この魔法に限った話ではない。他の魔法を使った時も魔力の消費が少ない。

「そうですか。固有時間制御ですか。そういえば今ユウマさんは魔力の消費が軽くなつたと言いましたよね」

「まあ、はい」

「それは少し違うんです。正確には言えませんが、ユウマさんは魔力の回復が異常に速いんです。さっきも固有時間制御を使った時に呼吸一つで魔力のもとに戻っていました」

魔力の回復が速いか。でも冒険者カードにはそんなことは書かれてないような。

「少し冒険者カードを見せてもらってもいいですか？」

「別にいいですよ」

冒険者カードを渡すと、ウイズさんはやつぱりかと頷く。

「本来、冒険者カードにはその人の体質やスキルがしっかりと書かれているんです。なのに書かれてないとは。やっぱり外部的要員ですかね」

外部的要員？心当たりがないのだが。

「でも、悪いことじゃないんですよね？」

「はい、悪い影響を及ぼすことはないと思いますよ」

「そうですか。なら今はこの話は置いときましょう。多分そのうち分かるような気がするんですけど」

うん、これは考えてもわからない気がする。とりあえず、悪影響がないからいい。

「そうですね。じゃあ、次は固有時間制御についてですが、この魔法は少し特別です。使い方次第では命に関わってきます」

そういうと、ウイズさんは真剣な顔を説明を始める。

「私の見た限りでは、この魔法は自分体内に小さな結界を張りその中で時間を加速することで、動きを速くすることが出来る魔法です。ですが、時間を操ることによって世界からの修正、元に戻そうとする力を受けます。この修正は使う時間が長ければ長いほど、強く働きます」

「この魔法で長時間の使用ができるんですか？」

「ええ、もしかしたらずっと使えます。さっきいい忘れたことが一つ、ユウマさんの魔法は使えばすぐに回復するのですが、それは使ってる途中でも、起きてるんです。水の入った入れ物に例えますが、水の入った入れ物から水を出すと中は減っていきまよね。ですが、ユウマさんの場合減りながらも、水が足されていくんです。基本的に、魔法は魔力が尽きるまで使えます。つまり、ユウマさんは多分ずっと魔法を使い続けられるんです。ですが、この魔法に限っては別です。さっきも言った通り、長く使えばそれだけ強く修正が働きます。今の状態だと二十分が限界でしょう」

「もつと長く使う方法とかはないんですか？」

「二応、あるにはあります。自分にエンチャント、強化をかけて、修正から体を耐えさせればいいんです。これなら、一時間は使えると思います」

「一時間もですか！それなら、長期戦でも使える」

「ただし、シフトチェンジだけは、絶対にしないでください。あくまでも、耐えられるのは二倍加速だけです。二倍加速から三倍加速へチェンジした場合、体は耐えられなくなつて、もしかしたら死に至る場合もあります」

シフトチェンジは使用禁止か。デュラハン相手に編み出した応用技だったのだが、そこまで危ないなら、使うのは本当に危ないときだけだな。

「……ここで、俺はとんでもない物を見てしまった。アンデット達が街の女の子を城へ連れてこうとしているところだ。」

「ちよつとウイズさん。あれ、あのアンデット達見て！」

「え、アンデットですか？て、……」

ウイズさんの顔を険しくなる。これは追うしかない。

ウイズさんと一緒に森の中を走ってアンデット達を追う。だが、さつきから隣の音で男としての理性も走ろうとしている。

「あの、ウイズさん。歩いて追いませんか？」

「いえ、私は大丈夫ですよ。さあ、速く追いましょう」

息を少しきつそうに上げ、とても豊満な胸を上下に揺らしながらも、ウイズさんは走り続ける。うん、思春期の男の子には本当に危ないです。そんなこんなで、自分の理性と戦っているうちに古城に着いた。どうやら、誘拐犯の親玉はデュラハンらしい。

「まさか、ベルディアさんが誘拐に手を染めるなんて……」

「え、ベルディアで。もしかして、」

「あ、言ってますでしたね。私、実は魔王軍の幹部なんです。といっても結界維持を手伝ってる、なんちやって幹部ですけどね」

衝撃のカミングアウト!ちよつと、頭が追い付かないのですが、それは。

「え、魔王軍幹部って。魔王に仕えてるあれ?敵?ヤバイやつですか?」

自分でも何を言ってるのか分かんなくなってきた。

「そんな、警戒しないでください。結界維持以外なにもしてませんから。人だって殺したことがあります。本当です!」

嘘じゃない。それだけは分かる。だって今まで親切に接してきてくれたし、なによ、この人は嘘が下手な人だ。短い間の付き合いだが、俺には分かる。

「大丈夫ですよ、信じてますから。でも、仲間をとつちめに行ってもいいんですか?」

「私は本来魔王軍にも、人間にも中立な立場をとってます。ですが、今の状況ではそんな

ことは関係ありません。ベルディアさんがしたことは全世界の女性を敵に回すことです。しかるべき対処が必要です」

つまり、なんだ。女の敵には容赦しないと言うことか。うん、女性は怖いなー。

「さあ、ユウマさん。行きましょう！」

俺は無理矢理、腕を引っ張られ中に入る。やっぱり俺の筋力は最低らしい。

――

中は以外と敵が少なく、簡単にボス部屋まで行けてしまった。

「ベルディア様、そろそろ例のお時間です」

「ん、わかった。お嬢ちゃん、せつかく来てもらって悪いがそこに立ってくれないか?」
少女は言われた通りの場所に立つが、別になんの仕掛けもあるわけでもない。なにを始めるんだ?—と、その時。

ドツカーン。

城が爆発した。城の内部は大きく揺れる。その直後、俺は見てしまった。いや、俺だけではない。ベルディアというデュラハンもその部下もみんなが見てしまった。少女のパンツを。

「?」

「いやー、ごちそうさん。安心してくれ。ちゃんと、街の近くまで送っていくから。おい、お前た……」

俺の横から物凄い殺気が放たれる。気がつくといズさんはデュラハンの前に立っていた。

「や、やあ、ウイズ。来るなら来ると連絡してくれればいいのに。ど、どうしたんだ？トツセンキテ……」

デュラハンの声が震えてだんだん小さくなる。こいつ、怯えていやがる。

「ええ、お久しぶりです。ベルディアさん。ところでさつきは何をしていらしたのですか？」

「い、いやトクニナニモ」

途端、周りの空気が冷たくなり、ウイズさんの足元に冷気が集まる。

「な、何をする気だ。ウイズ。や、止めてくれ。俺達は仲間だろ？」

「何を言っているんですか？ベルディアさん。私はただ、女性の敵を駆除しようとしてるだけですよ？」

目のハイライトの無くなった、ウイズさんは小声で何かを唱える。刹那、デュラハンの体は頭を残して綺麗に凍る。そして、氷で造った槍をデュラハンの目に近づける。

「悪気があつてやったんじゃない。たまたま、あの時爆発したんだ」

さらば、デュラハン。結局戦うことなる終わるとは。俺の準備はすべて無駄だ。その時だ。明らかに場違いなやつが余計なことをしてくれる。

「《ターンアンデット》！」

「ウギヤー!!」

デュラハンとウイズさんは真つ黒焦げになりその場に倒れる。

「ふ、虫けらがわざわざ集まって何をやってたのかしら? まあ、関係ないわ。今ならカズマさんもいないし、さあリッチー覚悟しなさい」

ああ、最悪だ。本当この女神様はなんてことをしてくれたのか。て、ウイズさんが、リッチー? まあ、そんなことはこの際どうでもいい。

「おい、アクア！なんてことをしてくれたんだ。あと少しでデユラハンを倒せたのに！！」
「あら、ユウマ。なんで、あんたがここにいるのよ？」

「それは、こっちの台詞だよ」

「めぐみんの散歩に付き合っただけだよ」

あーあ。めぐみんのやつも懲りてなかったよ。あとでカズマに報告だ。

「で、その、めぐみんは？」

「え？あれ、めぐみーん。何処にいるの？」

「アクア。いきなり落とすなんてひどいです」

めぐみんはめぐみんでお疲れのようだ。

「おのれ、また貴様らか！！」

デユラハンが立ち上がり、アクア達を睨み付ける。最悪なことに氷も溶けている。

「アクア!めぐみん!街に戻って、応援を呼んできてくれ。速く!」

「あんたはどうするのよ」

「一人でデュラハンの相手をしといてやるよ。あ、そうだ。俺に強化魔法をかけてくれ」

デュラハンはこちらに間合いを詰めて大剣を振り上げる。それを、空間結合で透明化した魔剣グラムを取りだし、受け止める。さすが、女神の強化魔法だ。しっかりと止められた。

「ほう、俺とサシでやるのか。いいだろう。これでも元騎士だ。正々堂々と戦ってやる」

デュラハンの胴体目掛けて剣を振るうが、ダメだすべてはらわれる。さすが元騎士だ。チャンバラみたいな適当な剣筋なんか通らない。どうする。どうやったら、まともな戦える?

『自分にエンチャント、強化をかけて、修正に体を耐えさせればいいんです。これなら、一時間は使えると思います』

ウイズさんの言葉を思い出す。そうだ、今はアクアの強化がある。固有時間制御で、

スピードをあげれば。……でも本当に、それで戦えるのか？ タイムリミットだって一時間そもそも、あの見切りのようなスキルを使われたらどうなる。ダメだ。勝ち目どころか、応援が来る前に終わる。

『なあ、ユウマ。何があつても走り続けろよ。お前は誰よりも速いんだ。だからきつと……』

その時。遠い過去の言葉が聞こえた。

そうだ、俺は誰よりも速いんだ。こんなやつに速さで負けるわけがない。

「ふん、つまらん。これで終わりだ」

デュラハンは俺の剣を左に弾じき、そのまま右から風を切り、襲ってくる。多分右肩から腹を切り裂き左の骨盤へ抜けるだろう。だか、通すわけにはいかない。

「《固有時間制御・二重加速》！」

第6話 極限の瞬間（改稿）

アクセルから少し離れた森の奥の古城で、その戦いは行われていた。魔王軍幹の首なし騎士と冒険者になって日の浅い魔法使いたちの剣の打ち合い。誰が考えても首なし騎士が有利だと思えるその戦いは、魔法使いが優勢していた。

金属音が響き合う中、デユラハンは困惑していた。

（見た目はただ適当に剣を振っているだけ。本来なら隙が見え見えのはず。なのに。なぜ、隙が見えない）

そう、ユウマの剣は誰が見ても素人同然。だが隙が見えない。見えるはずがない。弾かれてはまた打ち込む、誰にもできることを、誰にもできない速さでこなしているから

だ。

(あれからかなりの時間がたつたはずだ。それなのに何故、ペースが落ちない!?)

皆さんは「ゾーン」という言葉を聞いたことがあるだろうか。超集中状態。極限の集中からおちるその現象は痛み、疲れといった一切の負を忘れ本人のスペック以上を出すことができる。ユウマは今、その状態にあった。

(く、あそこは初心者の街ではないのか?)

デユラハンが一步引く。その瞬間をユウマは見逃さない。

「全剣連続投射! 《ソードバレル フルオープン》」

エリスにアンデット特效を付与させていた十本の短剣をデユラハンの背中に投射する。

「グー！」

二本の短剣が背中を貫く。女神の神気が籠められた短剣は、デュラハンに傷だけではなく、浄化の呪いを付与させる。

（さつきから、こちらが隙を見せる度に。すかさず短剣を飛ばしてくる。なんとという集中力だ。それになんだこの力は？魔王様の加護すら貫通してくるとは）

やっと、刺さった。回収できた短剣は八本。リミットもそろそろ近いはずだ。このまま押しきる！

……それにしても、久しぶりだ。筋肉の素早い伸び縮み。肺全体を駆け巡る酸素。張り裂けるくらい速く動く心臓の動き。場違いかもしれない。命を賭けていて、一瞬でも気を緩めれば首が飛ぶこの状況を。俺は楽しんでる。弾きが甘く、デュラハンの剣の刃が右腕に当たる。血が吹き出る。

（この男、笑っただと。今の一撃で右腕はかなりの痛手を負ったはず。なのに笑っただ

と!?こんな人間は、魔王軍に入ってから、いや、王国に使えていた時でも見たことがない)

三本の短剣がデュラハンの懐をエグル。

(今度は零距离からか……)

今度は三本。除霊がデュラハンを確実に蝕んでいる中でこの三本はかなりでかい。手持ちは残り三つ。次で仕留める。

(狂気。ここまで来たらただの狂気だ。さつきから、うすうす思っていたが。こいつはただのおかしな奴だ。一人でこの俺と戦い、命など惜しまない捨て身の攻撃。そして、今の不敵な笑み。イカれている。いったい、この街はどうなっているんだ?毎日毎日、爆裂魔法を打ってくる爆発魔。ここまで噂として流れてくる、公衆の面前でパンツを剥ぐ鬼畜魔。あの悪質なアクシズ教の女神だと自称するプリースト。悪魔より、悪魔らしいキチガイどもばかりじゃないか。俺はただ、ウイズを求めてここに来ただけなのに)

その時だった。ユウマ達がいる部屋の扉が盛大に開かれる。

私たちがギルドでおやつを食べているとアクアさん達が血相かいて戻ってきて、ユウマさんが一人でデュラハンと戦っていると報告をしてきた。それから、私とエリスさん、カズマさんのパーティーはすぐに古城へ向かった。古城の中はデュラハンの部下で溢れかえっていたが、ダクネス……さんは相変わらず当たらない剣を振り回し、アンデット達の攻撃を受け大喜びしてたり、エリスさんは片っ端さらアンデットをタコ殴りにし、その取りこぼしにカズマさんは止めを刺していた。アクアさんは端っこで魔力回復の見る限りただの水をめぐみんさんに飲ませていたりとめちやくちやな有り様になっていた。

「皆さん、デュラハンの部屋の入り口を守っていたアンデットはすべて駆逐しました。速く向かいましょう」

片手に顔が腫れ、息絶えたアンデットを横に、g oサイン出すエリスさん。いつもの優しいエリスさんはどこへ行ってしまったのでしょうか……。そんなこんなで、変な盛り上がりをしていた私たちが、扉を開けた瞬間。あまりの悲惨さに呆然とした。城の最上階の部屋、そこには短剣がいくつも刺さったデュラハンと、物凄い速さで剣を振る血塗れのユウマさんが戦っていた。

「…………!!」

言葉を失う。ユウマさんとはとても痛々しい姿でただの丈夫な剣となった魔剣で、デュラハンの攻撃に当りながら、懐を攻撃し続けている。後先なんか考えていない。ただ、倒すことだけを考えての無茶ぶりな攻撃。あまりの悲惨さに聖剣を落としてしまう。デュラハンがこちらに目を向ける。

「なっ、貴様らはどれだけ狂っているんだ!!」

デュラハンエリスさんの足元に横たわった、タコ殴りにされ息絶えた部下を見て激

怒する。

「《魔眼》」

デュラハンは頭を上げ、ユウマさんを投げ払い、剣を拾おうとする私目掛けて、一気に間合いを詰めてくる。

「イリスさん！」

「イリス！」

カズマさんとエリスさんの声がする。ああ私は……

グシヤ……。――

劍の落ちる音で、デユラハンが扉側を見る。そこにはいつものメンツがいた。

「貴様らはどれだけ狂っているんだ!!」

デユラハンは頭を上に向けて、スキルを発動する。次の瞬間、俺の攻撃をあたかもわかっていたかのように軽くかわし、下から大劍を振り上げる。

「グハ」

体が宙に浮く。ああ速くしないとイリスが……。デユラハンはいリスに間合いを詰める。左腕を動かそうとするが、どうやら今ので折られたらしい。これじゃあソードバレルを発射できない。右手も劍を握っているから無理だ。どうすれば。

そうだ、シフトチェンジ。地面に足を着けた瞬間にシフトチェンジしてデユラハンの本体の頭を潰せば……。右手の劍で地面を軽く刺し、右足で体勢を整え無理矢理、踏み出す。

「《固有时间制御 三倍加速》《タイムアルター トリプルアクセル》！」

しかし、右足の踏み込みが変だったのか、力がうまく入らない。痛い。どうやら右足を捻挫したらしい。

すかさず、左足で踏み込み飛ぶ。

「食らえ、変態野郎！」

「なに、頭を狙うだど!? 貴様ー!!」

グシヤ。

デュラハンの頭を貫通させ、地面に落ちる。なんとか、間に合った……。意識が薄れていく。

何かが潰れたと同時に、デユラハンの胴体は私の前で剣を振り上げたまま止まる。

「……助かった？」

「ユウマさん！しっかりしてください！」

ユウマさんが倒れたユウマさんの元へ向かう。そうだ、ユウマさんは大丈夫なのか……。

「エリス、怪我人を揺らさないで。ほら、治癒魔法ぐらい持つてるでしょ。手伝いなさい」

アクアさんはエリスさんからユウマさんを離して治癒魔法を使う。いつものおふぎけはどこかにいき真剣だ。みるみるうちにユウマさんの体の傷は癒えていく。

「駄女神もやるときはやるんだな。いつもそんだけ真面目ならいいのに」

「エリスの後ろでこそこそと取りこぼしを倒してた人に言われたくないわ。それに、ユウマにはまだまだ、生きてもらわないと困るのよ。私の収入源なんだし」

「なに!?それで、お前、金持ってたのか!てめえー、俺が代わりに払ったつけを返しやがれ」

カズマさんはアクアさんの頭を叩く。どうやら、アクアさんはアクアさんのようだ。

「もう、なんで叩くのよ、このヒキニート!」

「なにが、ヒキニートだ。口答えしてると、昨日のあれをもう一度公衆の前でやってやろうか?ああ!」

それを聞いてアクアさんは勢いでよく首を振る。

「わかった、わかったから。後でしっかり返すから、カズマさん、それだけは許してください」

なんだかんだ、言っつてやっぱりカズマさんが最後に勝つ。さすがのゲスっぷりだ。

「あれ、ユウマさんとベルディアさんは？つてカズマさん達なんでここに？」

さつきから、部屋の横で倒れていた。とても豊満な美人さんが、起き上がってこちらへ来る。別に羨ましい訳ではありません。私はまだまだ、これからなんですから。

「おお、ウイズじゃねーか。こっちはいろいろ合つてな。ウイズなんでここに？」

「まだ、成仏してなかったのねリッチー！本当しぶといわね」

呪文を唱えようとするアクアさんを、ダクネスさんとめぐみんさんが止めに入る。

「止めろ、アクア。ウイズはいいリッチーなんだ」

「そうですよ。アクアよりもずーといい人なんですから」

そのままダクネスさんと、めぐみんさんはアクアさんを連れて部屋を出て城の外へ。カズマさんとエリスさんはユウマさんを担いで、ウイズさんと一緒に部屋をでる。

「……」

当りを見回すとデュラハンの胴体だけがなくなっている。いや、ありえるはずがない。急いで城の外へ出る。だが、恐れたことがそこにはあった。

「フッフ、フハハハハ。貴様ら、無事にここから帰れると思つたら大違いだ。無惨に死んでいった、仲間達の怨念。貴様らに思い知らせてやろう」

城の外で待っていた、デュラハンの胴体はまがましい怨念をまといその場に立っていた。

「そうですか。それはわざわざご苦労なことです」

めぐみんが前に出てデュラハンに立ち向かう。

「そもそも、元をただせば私が原因でしょう。私が相手をお願いします」

めぐみんは今まで以上に自信満々でデュラハンに言う。

「ほう、自ら。前に出るとは素直だな。頭のイカれた紅魔の娘よ」

デュラハンが言い放った瞬間。その足元に赤色の魔方陣が浮き出る。

「ええ、本当は古城への最後の一撃として詠唱を済ませて置いたのですが、思わぬ大物が出てきてくれました。さあ、これが、このクエスト最大のフィナーレです！《エクस्पロージョン》!!」

人類最強の破壊の一撃がデュラハンの胴体を怨念を、そんなのは知らないとはかりに無慈悲に焦がし爆ぜる。

「ふざけるな、こんな終わり方などあってたまるかー!!!」

デュラハンの叫びは虚しくも爆発音に遮られる。

「ふー、私の人生でこんなにもスッキリしたことはありません。さあ、カズマ点数を！」

「35点」

「え……。なんでですか!？」

「別によかったと思うけどさ。お前、誰におぶってもらうの？それに、帰り道も爆ぜたんだが」

「……え？」

この仲間／zero エピソードオブユウマ

そいつはとつても残念な奴だった。何が残念かというと、生まれてこのかた誰にも褒められたことがなく、第一の生を終わらせたことだ。

……でもまあ、そんなに酷い人生だったてことじゃない。

そう、認めてくれました人間はいたんだ。本人が気づいていなかったただけでね。

そういうわけで話をしよう。工藤悠真の第一の人生の話を。

――

「おい、工藤。今日さクラスの交流会でことで、飯食いにいくんだけどお前もこないか？」

「ああ、ごめん。最近金を使いすぎて無いんだ。また、今度つてことでよろしく」

ホームルームを終え騒がしくなった教室をでる。

「本当、あいつ付き合い悪いよな。普段は物静かだし、教室にいてもいなくても分からなくて感じだし」

「いや、小学校の時はあれでも結構活発だったんだぜ。その時全部出しきったてゆーか、今はガス欠みたいなものじゃねーの？」

中学校に、なつてから俺は人との付き合いがうまくいかなかった。

理由として中学では違う小学校の奴らも混じるから、それでうまく話をできず、いつのまにか溝ができてしまっていたのだろう。

「ただいま」

「あら、本当、帰ってくるのが速いのね。部活とかは決まったの？今日は部活動紹介だったんでしょ？」

「いや、特に。多分なにもやらないかも」

「もつたいない。あんた、足速いから。陸上部にでも入ると思ってたのに。小学校の時だって100mとか駅伝で選手として走ってたでしょ？」

「確かに、駅伝は選手として走ったよ。でもあれは祭の奴が速かったから入賞できただけ。100mなんか、三年間やったのに結局15秒止まり。所詮、ただの凡人に毛が生えたもんだよ」

そう自嘲して、自分の部屋に行く。結局俺はそんなもんだ。

……でも、さすがになんかやらないと体が鈍るな。

「軟式テニス部、関東大会出場。へー、うちの学校テニス強いんだ」

それから、俺はテニス部に入った。さすが、関東大会に出るだけあって、練習もなかなかハードだった。

「一年！学校周りを10周してこい！」

「はあ、またランニングかー」

「うちの学校ですぐにボール打たせてくれたけど、大会が近づくと俺達下級生はいつもランニングだよな」

「これじゃあ。陸上部だよ」

周りの奴らはランニングの時間になるといつもなんだかんだ言ってる。ランニングはどんな運動にも欠かせないもんなんだよ、バーカ。

「2000m通過6分15。この1000の通過は3分10です」

「祭！ラスト1000mは出しきって終われ！さすが、地区で一番速かったただけのことはある。これなら、今年の県駅伝は期待できますよ」

「そうだな。祭以外の一年もなかなか良いものを持っている。しかし、例の彼が入って来なかったのは予想外だったな」

「先生は祭より、その子に期待してましたからね」

後ろの一年生集団を大きく差を離し、走っているのは祭 祥也。

彼とは小学校の陸上部のときからの付き合いで、中学に上がる前まではよく遊んでいたが、最近話してすらいない。

俺とあいつでは全体的レベルが天と地の差がある。当然のことだ。

ということで、俺はあいつの邪魔にならないよう、この三年間はおとなしくテニスをすることにしていた。

く8カ月後 新人戦く

その日は冬のくせによく晴れて汗をかく日だった。

「7オール、デユース」

「工藤、相手はもうバテてるぞ。しっかり玉見て打てばこの試合GETだ」

市の運動公園で行われたこの新人戦は、初めてのオムニコートでの試合の喜びを、苦戦の連続による疲れが台無しにしてくれてた。

そんなもって、この準決勝は相手が嫌らしい所ばかり打ってくるため本当苦痛だった。

「ハッ」

「セイ」

相手のカットサーブを味方後衛の長谷がバックでかえそうとするが、思ったより曲がったらしく、返しが甘くなった。

「でやー」

もらい。相手も体力切れでドライブが甘い。ボレーで左に深く入れて終わりだ。

「あっ」

「BT（ボディータッチ）。3対2で勝者、水上中」

「あー、惜しかったな」

「よりによってボディータッチか」

「ドンマイ、ドンマイ。そゆうことだってあるよ。ほら、次はうちのエースがあいつらの相手なんだ、仇とつてくれるさ」

「ああ、そうだな。でもごめんな」

それから、二年に上がる前にテニス部は止めた。

勝てた試合を落としたのは俺の中でも結構シヨックになっっていて、二年生の一学期はなにもせず日に日に自分が腐っていくのを見ていくだけだった。

だが、終業式を控えた前日、そんな俺に転機が来た。

「よお、悠真ー」

この日は小学校ぶりに祭が話かけてきた。

「!?祭どうしたんだ。こんな時間に帰りなんて。部活はどうしたんだよ?」

「今日は協会のほうに先生が出張でき、各自自主練だから家に帰ることにしたんだ」

「へー」

祭とは約2年ぶりの下校で、その日は少し気分が上がっていた。

「すごいな。2000mを6分一桁で走るなんて。小学校の俺なんて7分30だったんだぜ？」

「中二になればそんなもんだよ。全国を走る奴らはは5分代でそれを通過して3000を走るだぞ」

「マジかよ、全国、化けもんだな」

5分代で通過する化け物達と戦おうとしてるなんて、やっぱり祭はすごいやつだ。こーゆう高みを目指している奴が、いつか山の神で言われるようになるのかな。

そう、俺は自分とは関係ない他人のように考えてた時だった。

「なあ、悠真」

「ん？」

祭が真剣な顔を俺に話してきた。

「俺さ、全国駅伝に出て、てっぺん取りたいんだ。俺と一緒に、てっぺん目指さないか？」

「え？」

突然だった。自分ではもう、遙か遠くの彼方にいる奴だと思ってた奴に、てっぺんを目指さないかと誘われたからだ。その時は曖昧な返事をしたが、後日しつかつとした返事をして、俺は再び陸上の世界へ足を入れた。

（俺を必要としてくれた人間がいたんだ。頑張りたい。こいつの夢を叶えたい）

俺はそこから必死に練習をした。

それから、一年がたった頃には800mで関東の決勝に残る選手になっていた。

「お疲れ、悠真。本当惜しかったな。あと1秒で優勝だったのに」

「相手のほうが、連続で試合することに慣れてただけだよ。安心してくれ、次はぜってー負けない。お前こそ、全中（全国中学校陸上競技大会）頑張れよ。俺は一足先に駅伝の練習してるから」

八月、全中に出る祭は飛行機で北海道に向かった。

しかし、結果は初戦敗退。どうやら、夏の北海道は予想以上に寒く、ウィンドブレーカーを置いていった祭はアップ不足で自身の記録より20秒近いロスで走った。

「悪いな期待させといて、初戦落ちなんて」

「しゃーない、しゃーない。俺だって夏の北海道は暖かいと思ってたし。それに、俺達の間標はこの先の全国駅伝だろ？」

正直この時の俺も、夏の北海道は暖かいと本気で思っていた。世間知らずは怖いね。こうして、俺たちは辛い練習を乗り越え、夏が終わる頃にはチーム六人の30000のタイムが8分代一人、9分一桁が三人、9分10秒代が二人と完璧に仕上がっていた。だが、関東大会を目前とした一週間前。

「痛い」

コースとして走っていた、野球のネットの調節ハンドルに腰を強く打ち付け、打撲してしまった。

「大丈夫か？悠真」

「あー。大丈夫、大丈夫。ちよつとぶつけただけだから」

「ちよつとじゃないだろ。思いつきりぶつけて転んでただろ。保健室行って診てもらえ」

「大丈夫だから。試合だつてもう近いんだ。今は最終調節をしつかりこなさないといけないんだ」

「ただいま」

「お帰りなさい。どう？試合にはしつかりと照準を合わせられてるの？」

「大丈夫だよ。むしろ完璧すぎるくらい」

「ふん、考えが甘いな。だからいつも足をすくわれるんだ。……まあ、過程なんてどうでもいい。結果を見せてくれ」

「お父さん、せめて、試合前なんだからモチベーションをあげる言葉ぐらいかけてあげてよ」

「安心してくれよ。親父。ご所望どおり、しっかりとした結果を見せるから」

「ふ、ちゃん体のケアだけはしっかりしとくんだな。関東の二の舞だけには、なるなよ」

ああ、分かってるって。今に見返してやる。

く 関東駅伝大会 当日く

「さあ、ついに試合当日だ。お前たちなら、全国に行ける力はある。しっかりと全力を出していろ」

「「「「「はく」」」」」」

「やっと、この舞台に立ったな」

「だな。先輩達だって立ったことのない関東の舞台」

「でも、こつからがスタートだろ？期待してるぜ、キャプテン」

「おう、一位で持ってくるから期待してろよ、花の二区」

そう、この日のために、頑張ってきたんだ。絶対に全国に行くんだ。

『さーあ、1区の選手が来ました。先頭は去年の全国覇者、芝松中その後ろを海原中、白中が追います』

「ラストだ、祭！」

祭は先頭と3秒差の二位で襷を繋いできた。

「悪い、一位で持って来れなかった」

「まだ、射程圏内だ」

轡を受け取り、先頭の芝松に張り付く。

何があっても全国に行くんだ。このまま一位で持っていく。

だが、ラスト500を切った地点で異変が起きた。

(スパートがかからない)

本来、右腰の打撲は走るのすら辛いものだった。

だが、それを押し通して無理をしたツケが最悪な形で返ってきた。

『ここで、白中、先頭の芝松が離れる』

「ラストだ上げろ、悠真！後ろから来てるぞ」

畜生、畜生。なんで、なんで、こうなるんだよ。なんで、いつも、俺は肝心な時に……。

襷を繋いだ時の順位は五位、そのあと必死で仲間達を取りかえそうとしたが結果は三位だった。

「おい、なんでこんな腰で走ったんだよ」

「止めろ、宮島。悠真だって必死で走ったんだ」

「だって、こいつ、補欠の俺らを信頼してなかったんだぞ。こんな腰になってるんだったら、交代して俺が走っていればタイム的には全国に行けてたんだぞ！」

「別に信用してなかった訳じゃ……」

「止めてくれ!!俺が悪いんだ。俺が不調じゃなくて、ちゃんと大会合わせて仕上げられてたら、悠真に余裕を持って走らせてやれてれば、全国に行けたんだ。責めるなら俺を責めろ、宮島」

祭の言葉で場が静まる。誰も祭を責められない。祭はいつだって自分を犠牲にして、周りのために、頑張ってくれていたからだ。

「だから、言ったら？お前はいつも、つめが甘いつて。せつかくの関東大会だからって休んで見に来ればこれだ」

「……」

返す言葉がなかった。あの時、親父は俺の腰を見抜いていたんだ。なのに、そんな忠告を無視つて。本当、俺は最悪だ。

それから、俺達は部活を引退し、受験に備えた。

そんな中、推薦で進学校が決まっていた祭は一人残りら走り続けていた。

だが、俺は来た推薦を全て蹴り。受験勉強すらまともにならず、また毎日を棄てて生きていた。

「もうすぐ、受験なのよ。推薦を蹴って、勉強で行くって行ってくつて言ったのはあなたでしょ？ しっかり、やりなさい。」

「……」

「はあ、まだ、関東大会のことを引きずっているの？」

うるさい。

「いつまでも終わったことばかり気にしてても、始まらないわよ」

うるさい。うるさい。今は話かけないでくれ。

「少しは祭君を見習いなさい。あの子はもう、前を見てしっかりと歩んでるのよ。あん

たもい加減めそめそしてないでしっかり向き合ったらどうなの？」

「うるさい。母さんに何が分かるんだ！俺があいつの夢をぶっ壊したんだぞ。それを終わったことにして、いいにきまつてるか！」

「いいもなにも、だったら、走りでしっかり結果出して謝りなさい」

「ッ」

「あの子。祭君はね。私に会うたびに言ってたは『悠真はいつも、俺の走りを見ると目を輝かせて、今度はどんなすごい走りを見せてくれるの？』て語りかけてくるんだ。だから、俺は頑張れるんだ。あいつの問いかけにしっかりと答えられるように。だって、あいつは、悠真は俺の憧れだから』って、あの子は嬉しそうに言ってたわ。あなたがそんなんで、どうするの？」

いつの間にか、俺は泣いていた。

そうだ、あいつはいつだって俺の問いかけに、答えてくれていた。

なのに、俺はあいつの問いかけにしつかりと答えてやれなくて。仕舞いには失敗に逃げていた。そう思うとくやしくて、くやしくて。俺はその日、一晚中泣いた。

くそれから、3カ月後　卒業式く

「これで、晴れて、みんなも高校生になります。高校からは中学とは違って義務じゃなくなる。これからは自分で決めて、自分で進んで行くんだ。それじゃあ、最後にそれぞれ前に出て将来の夢とみんなに一言で言ってくれ」

みんな、涙を流しながら、別れの言葉と将来の夢を語っていく。
そしてー

「それじゃあ、次、工藤」

「皆さん、えーと、3年間ありがとうございました。僕は馬鹿なんで、この学校で唯一一人だけ違う馬鹿学校に行きますが、これからも、自分の夢のために頑張ってください。……そして、僕の将来の夢ですが、……箱根駅伝に出て、てっぺんを取り山の神になることです。なので応援よろしくお願いします！」

そう、推薦も蹴って、受験勉強もしてなかったため、滑り止めは愚か、ギリギリ後期試験で定員割れした学校に入ることができた。

でも、問題はそこじゃない。走る環境が変わろうが、自分を変えなければいいだけの話だ。

校舎をでて、校門の桜並木を通る。そこには予想通りの人が立っていた。

「よー！悠真」

「久しぶりだな、祭」

「本当だな。それにしても、推薦蹴ったて本当か？」

「ああ、本当の本当だよ」

祭は少し残念そんな顔をする。

「なあ、ユウマ。何があつても走り続けろよ。お前は誰よりも速いんだ。だからきつと……」

「ありがとな。心配してくれて。大丈夫だ、一から初めての場所でやり直すことにしたから」

「……！」

「俺はインターハイに出て、箱根の山の神になる」

祭は、本当にできるのか？という顔で見ってくる。やってやるさ、だってそれが俺にできる全てだから。

「そうか、安心した。なら、俺はその先で待ってるよ。いつかお前と箱根で、戦うその時

トラックの上で受け、試合の時を待つ。

大丈夫だ、俺はもう、あの時の自分とは違う。

例えば、ボロボロになろうが、確かな結果を確実に掴んで、あいつの待っている舞台へ立つ。

『さー、県新人大会、800m決勝。選手の紹介をしたいと思います』

この選手紹介にはいつまでたっても慣れないものだ。今だに少し緊張する。

「4レーン 総北高校、工藤君」

手を上げ、観客席にお辞儀をする。

『以上の八名で開始します』

『on your mark』

静まったスタジアムにスタートのピストルが響く。

走り出す選手と観客の熱狂がスタジアム全体を震わす。

『さー、始まりました。800m決勝、今年の秋を制するのは誰か!』

これが物語が始まる一年前、誰にも褒められたことのない少年の第一の人生の話である。

この素晴らしい仲間達に救済を／Zero

エピソードオブユウマ

完

第7話 なぜ、この世界は俺に冷たいのか

「ん……。」

目を開くと見たことない天井が目に見えた。

体を起こして周りを見てみようとしたが、何かで体が固定されてて動けない。

「やっと、起きたのね」

聞き慣れた声ができるほうに顔を向けると、アクアが椅子に座ってくつろいでいた。

「本当、無茶なことやって。あんた、三日間も寝てたのよ」

アクアの言葉に驚いて、状況を説明してもらおうと思って口を開いたが、口の中が乾

「いていて声がでない。」

「なによ、そんなに苦しそうにして。水が飲みたいの?」

俺の顎でコップを指した合図が伝わったのか、コップに水を入れて渡してくれる。……が。体が固定されていて起き上がれない。

「駄目よ、そんなに動いたら。せつかく魔術回路をくつつけたのに。また、バラバラになつたら、今度こそ魔法が使えなくなるわよ。ほら、じつとして。飲まして上げるから」
アクアは強引に水を流し込んでくる。

「ゴホ、ゴホ。相変わらず強引だな」

「もう、文句言わないで。せつかく麗しい女神様が直々に飲ませて上げたんだから感謝しなさい」

あーあ。それ自分で言っちゃうのか。毎回毎回思うが、女神を自称して上から目線に、ならなきやいいと思うんだけどなー。

カズマはいつもアクアを駄女神って言うけど、俺は神話とかで語られるザ・女神で感じの、何て言うか予想通りの女神だなーと思う。エリスは、その、なんというか、聖女ジャンヌダルクみたいだなーと思う。

「てか、俺、3日間も寝てたの？」

「ええ、3日間、しっかりと寝てたわよ。本当、こっちの気も知らずのんびりと寝てくれてたわね」

そういうと、アクアは真剣な顔で話をする。

「正直に言うと。あんた、今でも相当ヤバイ状況なのよ。デュラハンと戦った時に無理な魔術行使したでしょ。そのせいで魔術回路のほとんどがバラバラになったのよ。本当、私があの場合にいたのが幸いだったわね。エリスは、私より大幅に弱体化してるから、あんたの魔術回路なんて治すことはできなかつたし」

魔術回路?なんだそれ。

「あのさ、魔術回路てなんなんだ?魔法のない世界の俺になんでそんなもんがあるんだよ」

「別に、あんたの世界に魔法がないわけじゃないのよ。魔術回路は産まれたときから備わっているものよ。……まあ、持ってない人間もいるけど。ちなみに、カズマにも少しだけどあるわ」

これは驚きだ。まさか、産まれたときから人間、誰もが魔法を使えただなんて。

「それで、その、魔術回路が壊れるとどうなるんだ?」

「普通なら、魔法が使えなくだけよ。でも、あんただけは特別。魔術回路が脳にあつたせいで、後少しで、脳神経ごとお陀仏だったわ」

へー、つまり俺は死にかけたってことですか。

「まあ、とりあえず当分は大人しくしてなさい。間違っても、魔法は使わないこと。死にたくなかったらね」

「心に止めときます」

アクアは部屋を出ようとしてドアを開けると、何か思い出したのか、立ち止まってこちらを振り返る。

「エリスに会ったらちゃんとお礼をしなさいよ。あの子、この三日間付きつきりで、あなたの看護してたんだから」

マジか、本当エリスには頭が上がないな。

「それと、ボロボロだったジャージ。縫い直しといたから。治療代込みで1千万エリス引かせてもらおうわね」

1千万エリスか。本当、お前はどこまで金の亡者なんだよ。

まあ、別にいいか。管理とかめんどくさいし。

俺は窓際にかかっているジャージを見る。すごい、本当に手縫いでやったのか、新品同様だぞ、これ。

それからしばらくしてから、散歩から帰ってきたカズマとめぐみんが見舞いに来てくれた。

「アクアから、目を覚ましたって聞いたから来てみたけど、調子はどうだ？」

「まあ、ボチボチで所かな。それにしても、ごめんな。わざわざ引越したばかりの屋敷で看護してくれて」

「どうやら、俺が眠ってた間にカズマ達は屋敷を譲り受けたらしく、馬小屋ではいろいろ不便だから、俺のために一室開けてくれたらしい。」

「なあに、困った時はお互いに様だろ？」

「本当、カズマには借りばかり作ってるな」

「お茶が入りましたよ」

「ありがと、めぐみん」

わざわざ、お茶を入れて来てくれるとは、しかも、きちんとした入れ方だからおいしい。めぐみんて家事とかできるんだな、驚きだ。

「なにを、驚いてるんですか。私は爆裂魔法だけではなく、しっかりと家事もできますよ。これでも、実家ではほとんどが私が家事をしましたので」

以外としつかりしてるんだな。

「それにしても、ユウマにも見せたかったです。この私がアンデットの復讐心を華麗に打ち砕くシーンを！」

「そのせいで、何時間歩かされたと思ってるんだ」

ははは。これはカズマさんお気の毒に。

「夕食の準備ができたぞ。お、ユウマ、起きてたのか。どうだ、食べられそうか？」

ウサギの刺繍が入ったエプロンを着たダクネスが部屋に入ってくる。以外と乙女な所があるんだな。

「なんとか、食べることはできるよ。本当ありがとな。」

カズマ達には世話になりすぎたな。そのうちしっかりとお礼をしないと。

「そういえば、エリスとイリスは何処にいるんだ？まだ、見かけてないんだけど」

あの二人には特に心配させたと思うから、はやく会って、お礼を言いたいんだけど。

「二人なら、ギルドにいますと思うぞ。デユラハン討伐の賞金が出てるみたいだからな」

ダクネスが、机を立てながら言う。そういえば、あいつ、魔王軍の幹部だったつけ。

「そうだ、ウイズさんはどうだったんだ？確か、城の片隅で焦げてた気がするんだが」

「ウイズならあのあと俺達と一緒に城を出たよ。そういえば、ユウマには渡したい物があるって昨日来てたぞ」

渡したい物って、多分聖水の件のやつかな。それにしても、無事ならよかった。

明日、店に向いてみようかな。

――

「後日」

あのあと、夕食を済ませた俺は、部屋でカズマから素晴らしい本を拝見させてもらっていた。

何年ぶりだろうか、中学生の頃の淡い思い出を思い出しながら、他のも見せてもらおうと部屋を出ようとしてした時だった。

戻って来てた、エリスとイリスに遭遇してしまった。突然、号泣したエリスが抱きついてきたので、勢いよく転んでしまい本を落としてしまった。幸い、エリスにはバレなかったがイリスには見られ、目を合わせてくれなくなってしまった。

「本当、あの屋敷は女性のほうが割合が多いことを忘れてた。気を付けないとな」

苦い失敗を思い出しつつ、目的の店についた。

あれから、4日も足ったのか。あれだけ、しっかりと教えてもらったのに、破ったんだ。さすがに怒られるよね。

少しおどおどと店の扉を開ける。

「いらつしやいませ。つて、ユウマさん！」

ウイズさんはいつもにまして明るく出迎え、こちらにくる。

「ウイズさん。お久しぶりです。……この度は本当にご心配おかけしました」

「本当、心配したんですよ。あれだけ、やらないよう言ったのに。…それにしても、ご無事でなによりです」

あれ、以外と怒ってない？

「これからは、厳しく指導するので、覚悟してくださいね？」

ウイズさんにはっこり笑顔で言ってくる。怖い、怖いですよ。

それから、聖水の金額を受け取り店をでる。これで、俺達の手持ちはデュラハン討伐の報酬、1億5000万エリスと聖水、半分の半分で2500万エリスの1億7500万エリスとなった。あ、アクアへの治療代で1千万エリスとんだのか。

まあ、1億6500もあれば充分だと思う。

ちなみにデュラハンの討伐金は3億エリスだったが、めぐみんが半身を倒したこのとで、半分に分けることにした。

「それにしても、何に使うかだ」

この金でうまいもの食ったり、装備を整えたりするのもいいと思う。現に俺はウィザードなのに素手で魔法を使っている。まあ、杖を使う必要が無いんだが。

旅行をするのもまあ、考えの一つではある。イリスは遠出をする度にすごい、楽しそうにしてるし。

……。

その時、俺の視界に文字が写る。

「不動産屋」

「そうか、家だ！しばらく、カズマ達の屋敷でお世話になっていたから忘れてたいたが、俺達の本来の宿屋は馬小屋だった。」

「どうやら、この世界の冬はえげつないらしい。いつまでも、風通しのいい馬小屋で過ごしていたら、綺麗な氷の彫刻になってしまう。」

「よし、買うか」

「と、言うわけで。ここが、俺達の新しい住居です」

「おー！」

二人とも、目を大きく開けて驚いてる。

なにせ、4LDKでラウンジと庭がついてるんだ。だが、驚くのはまだ速い。この家最大の特徴は……

「この草の床、いいにおいがします」

そう、畳の和室？があることだ。

正直、俺もこれにはひびつた。洋風の町並みに合うデザインで建てられた家なのに、なぜか内装は日本の家と大差ない。

つつい、懐かしくて買ってしまった。

「イリス、それは畳という俺の国の伝統的な床だ」

どうやら、イリスは畳が気に入ったらしい。畳の上でさっそく、ごろごろし始めた。

「あの、ユウマさん？今日の夕食はどうします？」

そういえば、決めてなかったな。正直、俺は今特に食べたいものとかないからな。

どうしようか。

「んー、エリスは何が食べたいの？」

「そうですねー。あつ！秋刀魚とかはどうですか？今年は生きのいい秋刀魚がたくさん、収穫できたと聞きますし。それに、お酒にもすごい合うので！」

はい、わかってますとも。魚が畑に生えてるのを、実際に見たからね！あれは本当にインパクト強かった。カズマから最初聞いたときは笑い話ですませたが、実物を見たら、声すらでなかったのはいい思い出。

それにしても、今エリスは、酒を強調して言ってたような。

「とりあえず、今日の夕食は秋刀魚にするか。今から買い出しに行くから、ちよつと待ってて」

「あ、大丈夫ですよ。しつかり、用意してましたので！」

エリスは笑顔で、秋刀魚と、酒の入った袋を見せてくる。あの、酒の袋が多いので

すが……

夕食後、俺は自分の部屋に入り、荷物の整理をする。

部屋の状態は自分の日本の部屋となるべく似せるようにした。そのほうが落ち着けるからだ。

「よし、こんなもんかな」

これで落ち着いて、アレができる。

馬小屋の時は隣のエリスがきわどい寝間着で寝てくれたお陰で毎晩毎晩危なかった。いろんな意味で、本当に苦し日々だった。

その時、ドアを叩く音がした。

「入って、どうぞ」

「あ、あの一」

パジャマ姿のイリスが、部屋に入ってくる。

「あの、一人で寝るのが、その……。」

あー。一人で眠れないパターンですか。

「エリスには相談した？」

「エリスさんが、どうせなら、みんなで下の畳で寝ましょうと」

え？

「もしかして、酔ってた？」

「はい」

だんだん、ポンコツになってませんか、うちの女神は……。何が悲しくて、一人酒で酔うまで飲んでるんだよ！

「わかった。ちよつとしたら下いくから、エリスのこと見張ってて」

イリスは何やら嬉しそうに下れ降りていく。あーあ、本当この世界は俺に厳しいようです。

下に降りると、床に、酒の瓶が散乱していた。

「あ、ユウマしゃん。ユウマしゃんも一杯どうでしゅか？」

「……」

本当にエリスなんだよな？ どうみても、ただの酔っぱらいなんだが。いつもの、慈愛に満ちた笑顔と優雅な落ち着きは何処にいったんでしょうか。

「どうしたんでしゅか？」

「俺、未成年者なんで酒は飲みません。ほら、そろそろ寝るから、今日はもう終わり！」

俺は無理やり、エリスから酒瓶を奪いとる。酔っていて力が入ってないのか、すんなり奪えた。

「えー。ユウマしゃんのケチ！」

「ケチじゃない。イリスだって布団で寂しそうに待ってるんだから。ほら、はやく！だいの女神がこんなだらしくなくてどうするの？」

とまあ、新しい家での夜はぐだぐだでしたとき。

第8話 男の戦い

よく晴れた冬の日の昼頃。ギルドへ続く賑やかな一本道を、しんどそうに歩く魔法使いがいた。

そう、僕です。

突然だが、この世界の冬はいろいろややこしいらしく、ギルドはまともなクエストを出さないため、冒険者達は休業するらしい。

じゃあなぜ、ギルドへ行くのか？というところ、ただ、単に暇だからです。

家にも、することがないどころか今日はカズマ達の女性陣を交えてお茶会をするらしく、いたるところで邪魔になるだけなのだ。

そんなこんなで、ギルドのドアを開く。

が、珍しく、いつものキツイ酒の匂いもしなければ、ドンチャン騒ぎもない。

どうやら、皆さん、本当にお休みになられてるようだ。

とまあ、立ち止まっても意味がないので、飯のスペースへ行く。別に腹が減ってる訳ではない。

なんとなく、誰かいる気がしたからだ。

すると、俺の勘は当たったようで、緑のマントを着た同い年の転生者に会いました。

「おう、ユウマ。お前も暇なのか？」

「Yes。カズマこそ、暇だろ？」

ああ、とカズマは水を飲みながら返す。

お互い、パーティーに同性が居ないから暇になるわけだ。

ウエイトレスさんが、運んできた水を飲みながら、俺もボート天井を眺める。

そうすると、カズマの方から珍しく提案をしてきた。

「なあ、これからすること無いんだったら、散歩でもしないか？」

「別にいいけど、カズマが散歩を提案してくるとは予想外だな」

「そうだな。でも、なんもなくよ、ユウマと一緒になら良いことに巡り会えそうな気がするんだ」

「そうかな、と返して席を立つ。」

俺も今、何かに巡り会えそうな気がした。

それから、15分。

人気のない路地裏に通じる道の近くで、二人の男性を見つけた。

「あれって、ダストとキースじゃね?」

ダストとキース。俺も前に少しだけ話した事はあるが、なかなか話やすい相手だったと記憶してる。

それにしても、何をこそこそしてるのだろう?

「おーい、なにやってんだ?」

カズマが後ろから声をかける。

すると、二人とも、慌てて振り返る。

「うわ！つて、カズマとユウマか。驚かすなよ」

「いやいや、そんなつもりはなかったんだけどな」

2人とも、周りを確認する。

そんなに周りを気にして何をするんだ？

「どうやら、女は連れてないみたいだな」

「安心してくれ。今日は俺達の女性陣は仲良く家でお茶会してるから。多分外をほつき歩いたりはしてねーよ」

「そうか、ならいいや。とりあえず、お前達口は固いよな？」

ダストが真剣な顔で聞いてくる。
本当に何を隠しているのか。

「まあ、隠し事ならちゃんと守るよ」

「同じく」

そうか。とキースはダストと小声で話し合う。

「まあ、二人は信じられるな。とりあえず、ついてきてくれ」

と、キースとダストは俺達の袖を引っ張って路地裏の中へ入っていく。
何が始まるのかと、少し期待を込めてたどり着いた先には、一つの扉があった。

「いいか、今から言うことは、絶対に女達には言うなよ」

キースはさつきより、少し崩した表情で、言う。

「ここ、サキュバスが店をやってるんだ」

「え、サキュバス？」

それって、素晴らしい本によく出てくる女の悪魔じゃなかったっけ？

「想像の通り、男の、精気を吸う。女性のモンスターだ」

「だが、どうやら、ここのサキュバスは街の男達と共存関係を築いているらしいんだ」

「ほら、馬小屋とかで、寝泊まりしていると、ムラムラしたときにナニもできないだろ？」

「まあ、確かにな」

本当、うちのパーティーはレベルが高すぎるから、横で寝てる時は辛かった。

「手を出したら、どうなるかわかったもんじやないからな」

全くその通りと、俺とカズマは頷く。

「そこで、このサキユバス達の出番でわけさ。俺達が寝ている時にいい夢を見せてくれるのと引き換えで、彼女達が、俺達の精気を吸うわけだ。結果として、俺達はスツキリ、彼女達も生きていけるといふことでWinWinでことさ」

つまり、俺達は男達は常日頃から賢者でいられると言うことか！

「素晴らしい！」

俺とカズマはびったり揃っている。どうやら、考えていることは同じらしい。

「そんなら、さっさと行こうぜ」

「そうだそうだ。これでやっと苦しい日常からおさらばできるのか」

というわけで、俺達2人は仲良く、店の扉をあける。

「いらつしやいませ〜」

扉をあけて一番最初に目に写ったのは、とても大人の色気を漂わせた服装のサキユバスさんでした。

「お客様は四名ですね？」

「「「はい」」」

「では、こちらにどうぞ」

俺達は案内されたまま、店の中を進む。

素晴らしい。店の雰囲気も最高に大人な感じだ。

「それでは、こちらの席にてアンケートを記入してください」

「ええつと、これは？」

「はい、まずはお客様の見る、夢での状況を設定していただきます。たとえば、ご自分の性別、外見、地位や職業などですね。英雄やご自身を女性にするなどと、自由にどうぞ」

そこまで細かくできるのか。夢なのにな。

「あ、あの。この、相手の設定はどこまで……」

「誰でも大丈夫ですよ。存在するしないに関わらず、ご自由に」

「ちなみに、相手の年齢制限は？」

「それも、一切ありませんので好きに書かれてください。全部夢なので、ご自分の好きなようにお書きください」

なんだと。そんな、広く対応してくださるとは、この方達は神様ですか!?

「それでは、本日の就寝中にスタッフがご希望の夢を見せに参ります。くれぐれもお酒

などは控えてくださいいね。熟睡されないと、お見せできませんので」

――

――

そのあと、俺達は別れ家に帰ったときにはもう夕方だった。

「ただいま」

「お帰りなさい」

玄関でエリスが笑顔で出迎えてくれる。ああ、いつ見ても癒される。あれ？なんか、リビングから美味しそうな匂いがする。

「今日はダクネスさんの実家の方々が送ってくださいった、蟹をお裾分けしてもらったので、お夕飯はカニ鍋にしました」

リビングに向かうと、イリスが箸を持って、はやくはやくとせかすようにいた。

「ユウマさん、はやく席に座ってください！ エリスさんが、みんな揃うまで食べちゃいけないって言うんです」

どうやら、イリスはお腹が空いていたらしい。

別に、先に食べてもらってよかったのに。

とせっかくのエリスの好意なんだ、そんなことは口にださない。

「ごめんな。ほら、みんな揃ったんだからいただきますこうか。」

イリスもにつこり笑って、いただきますを言う。

本当、いい子だな。

「ユウマさん。よかったら、お取りしましょうか」

「うん、ありがとう」

エリスも、通常時は本当にできのいいお嫁さんって感じた。本当、酒に手を出したりしなければね。

「エリス。今日は酒は飲んじゃダメだからな？一度飲み始めると酔いつぶれるまで、飲んじゃうんだから。今日こそはゆっくり寝たいから、お願いな」

「わ、わかりましたよ。私だって女神です。見境なしに飲んだりしません」

エリスは顔を顔を赤くして言う。

本当に今日だけは勘弁だ。いつもみたいに夜遅くまで、めんどろ見るはめになったら、せつかくのいい夢の見る時間が少なくなってしまう。

夕飯後、俺は風呂に入り寝床につく。

なるべく、こういうのははやく寝たほうが吉だろう。俺は未成年者で本当よかったと

思う。そうじゃなかったら危うく酒を飲んでいただろう。

それにしても、カズマは大丈夫だろうか？

さつき、エリスがお裾分けしてもらったという箱の近くにはギルドのメニューには書いてなかった、お高いお酒の瓶がいくつもあつた。カズマは自分が未成年者であろうと、がんがん酒を飲んでいる。

しかも、メンツがメンツだ。

めぐみんも未成年者だから飲めないにしろ、アクアとダクネスがいる。

あの二人は、エリスを酒の道へ落とした張本人だ。正直言つて危ない。

「まあ、カズマのことだ大丈夫だろう」

あくびがでた。それじゃあ、夢の中へレッツ・ライド！

ーああ、ここは夢の中のかな？

まだ、意識がはつきりしないせいかな少しぼやけて見える。

その時、軽く扉を叩く音がする。

「あ、あのー。ユウマさん。今いいですか？」

き、ギター!!今晚のメインディッシュ!

「ああ、別に大丈夫だぞ」

ゆっくりと扉が開かれ、エリスが相変わらずの、なんともきわどい寝間着で入ってくる。

「あの、実は相談ごとがありました」

エリスは恥ずかしそうに顔を赤くしている。あー、ヤバい。ヤバいよ本当。現実だったら、理性との戦いだ。が今は夢の中。

何をやったって、現実への支障は無い!つまり強く出れる。

「ほら、立ち話は辛いだろ? ベットのの上に座っていいよ」

エリスはえっ、て少し驚くが、赤面しながらベットに座る。

そして、俺はいきなりだが、エリスをベットに押し倒す。

通常時の俺なら、こんなことはできないが、今の俺は夢の中ということで、自信にみち溢れている。こんぐらい朝飯前だ。

「え、あの、その……」

エリスは今だ、状況を理解できず、さつきより、いつそう顔を赤くしている。

さあ、準備は整った。

童貞を守り続け、17年。夢の中だが、今大人の階段を踏み出す！

「ユウマさん……」

俺が、勝ちを誇ったその瞬間だった。

「ユウマさん、エリスさん！敵が入り込みました!!」

突然、雰囲気をぶち壊すように、イリスの声が廊下に響いた。

「え？」

エリスも何かに気付いたようで、赤面から、真剣な顔に変える。

「さあ、ユウマさん。はやくいきましよう」

今度は俺が状況を掴めないまま、階段を下り玄関に行く。

そして、玄関で動けないままにいる影を見て、俺は全て悟る。

『すいません、お客様。失態を犯してしまいました』

なんと、捕まっていたのはサキユバスのお姉さんだった。

「エリスさん、サキユバスということは狙いはユウマさんだったということですよね？」

「そうですね。サキユバスとは男性の精気を吸いとる悪魔。今まで、いったいどれだけ

の男性を襲ったのかは知りませんが、ここに来たのが運の尽きです。一発で終わらせてあげましょう」

サキュバスのお姉さんは相手にしている者の強さを感じ、もう逃げられないと悟ったのか静かに目をつぶる。

「え、ユウマさん!？」

「ユウマさん、何をしてるんですか。どいてください」

『そうです。お客様。これは私の失敗。お客様は庇う必要などありません』

俺はサキュバスのお姉さんにだけ聞こえるように話す。

「ここは俺が受けます。そのうちに、はやく逃げてください。……今度は、いい夢を見せてくださいね」

そうだ、これはすべて現実だ。

ここで、サキユバスのお姉さんを消されたは、俺はもういい夢を見れなくなってしまう。
う。

せつかく、俺の苦しい日々^に光を与えてくれよう^としてくれた人だ。何があっても必ず逃がす！

「さあ、はやく！」

『ありがとうございます』

「もしかしたら、サキユバスの催眠にかかっているのでしょうか？」

イリスは聖剣を俺に向けながら、エリスに言う。

「きつと、そうでしょうね。さすが悪魔。手口が汚い。ユウマさんには悪いですが、ここはやるしかないようですね」

エリスは拳を構えて俺を見据える。

俺も両腕を前に出し構える。今こそ、学校で習った柔道を使うとき。

漢、工藤悠真。

いぎ、尋常に、勝負！

「でや———!!!」

———
———

後日、俺は包帯で腕を差さえながらカズマの屋敷へ行った。

が、どうやらカズマも散々な目にあっただらしく、身体中アザだらけだった。

———そういえば、エリスの相談で何だったのだろうか…。

第9話 異世界へ行くこう

ある日のこと。俺はアクセル郊外の森で師匠もとい、ウイズさんと魔法の修行をしていた。

「なるべく力まず、魔力の流れを意識しながら結界に送ってください」

「魔力の流れ…」

俺は目を閉じたまま、魔術回路から結界へ魔力を流す。

「もう、止めて大丈夫ですよ」

魔力を流すのを止めて、目を開くと、まあこれは立派な、四角い結界があるではありませんか。

「思ってたより、はやく魔力制御をマスターしましたね」

ウイズさんは切り株から立ってこちらによつてくる。

「師匠の教えが上手いからですよ。元最強のアークウィザードは伊達じゃないですね」

「いえいえ、私の教え方なんて、受け売りですから。それにしても、私が一カ月かけたものを二週間でやり遂げるなんて。悔しいです」

ウイズさんは子供の頃から魔法を練習していたらしく、本当に悔しそうにしている。

…が、ウイズさんは子供の頃、俺は高校生だ。正直言つて俺が、当時のウイズと同じ年だったらもつとかかっている気がするのだが。

「それじゃあ、次の段階に進みましょう。次はですね、魔法の属性についてやりますか」

「魔法の属性ですか？」

「はい。魔法の属性を理解していただき、実際に魔法に属性を付与してもらいます」

「それって難しいですか？」

「コツをつかめばすぐにできます。と、その前に」

ん？どうしたんだ、荷物をまとめ始めて。

「もう、ユウマさんはアークウイザードになれると思うので、一度ギルドに行ってジョブチェンジしてきましょう」

夕日に照らされた町の川沿いを歩いて、家に帰る。

俺はあのあとギルドでジョブチェンジをして、少し修行の続きをしたあとウイズさん

の店で紅茶をご馳走になりながら柵を見渡していた。

その時だった。日本と書かれた赤い箱を見つけてしまった。ウイズさんに聞いたところ、どうやら日本という異世界に12時間だけ行けるというらしく俺はすぐさま購入。そしてすぐにカズマの屋敷に行き、明日さっそく日本へ行くことにした。

それにしても、なんだか懐かしく感じる。まだ、こっちに來てから二、三カ月くらいだろうか。この世界に慣れたことで、日本が昔のように思えてしまう。

服屋でコートが目にはいる。

日本だと、こっちのかっこは少し目立ってしまうだろう。俺はジャージでいいとして、エリスとイリスの分のコートでも買って帰ろうかな。

――

翌日

カズマ達のパーティーと囲んでいるテーブルに赤い箱を置く。

「これで、日本に行けるのか？」

「箱を開ければすぐにね。一応12時間しか行けないらしいから、それまでにやることをやってくれ」

俺はみんなの顔を見る。各自、心の準備はできてるらしい。

「それじゃあ、開けるぞ」

片手で箱の蓋を開けると、中から煙が出てきて部屋を覆う。

なんだか、浦島太郎の玉手箱みたいだ。

そして、あたりが真っ白になったとたん、気がつけば住宅地の道路に立っていた。

「本当に、日本に来れたんだな」

「カズマ！見てください。デストロイヤーが空を飛んでいます」

「めぐみん。あれは、飛行機という、人を乗せて空を飛ぶモンスターよ」

アクアはドヤ顔でめぐみんに説明をする。

「ゴーレムがこつちに来たぞ！」

「ダクネス、危ないから、端によれ。こつちに来て早々。交通事故は勘弁してくれ」

自らトラックにぶつかろうとするダクネスをカズマは端によせる。なんだか、大変そうですね。

「ユウマさん。これからどうするんですか？」

「イリスはなんだか落ち着いてるな。そうだな、ちよつと待ってくれ」

今日のイリスはなんだか、大人しい。普段なら、めぐみん達とは一緒にはしゃいでいるのだが。まあ、それはいいとして、ポケットから財布を取り出して残金を確認する。3000円ちよつとか。とりあえず、カズマはどうなのかな。

「俺は5000円あるぞ」

「結構持つてるな」

「まあな。あの日は限定品を買いに行ってたから、それなりに金は持つてきてたよ」

カズマは少し残念そうな顔をする。そういえば、死因を聞いてなかったな。機会があつたら、今度聞いてみるか。

「へー。俺はこれから、地元に行こうと思うんだけど、そっちはどうする?」

「俺はこいつら連れて秋葉に行くよ」

「わかった。じゃあ、今回はパーティーごとの行動だな」

カズマ達とはここで一回別れて、エリスとイリスを連れて、俺は地元へ行く。

「なにもしてないのに、ドアが開きました!」

「これ、アクアさんから聞きました。確か、自動ドアで言うんですよね!」

二人とも、盛り上がってますね。それにしても、飛行機とかで驚かなかつたのに、これは驚くのか。

それから、俺達は電車にゆられ1時間。俺の地元に着いた。

「電車って、速いんですね。すごい楽しかったです!」

「もしかしたら、デストロイヤーより、速いかもしれませんよ」

めぐみん達も言ってたが、デストロイヤーでなんだ?

ーと、駅を出た瞬間、一つの横断幕が目にはいる。

『高校男子5000m日本記録更新。 松山高校 祭 祥也。』

それは、あの日箱根で走ることを約束した、友人の横断幕だった。

「ユウマさん、気分でも悪いんですか？さつきからぼーとしてますが」

エリスが声で我に帰る。どうやら、駅の前で立ったまままでいたらしい。

「いや、別になんでもないよ」

その時、横からぐうとお腹の音がする。

「お腹が空いちやいましたあ」

イリスはお腹を押さえながら、俺の腕を引っ張る。時計を見ると12時を過ぎてい

た。

「もう、こんな時間か」

周りを見ると、午前の仕事を終えたサラリーマン達が、昼飯を求めて歩いていたり。どうやら、今は平日のお昼らしく、ここら辺の店は空いてなさそうだ。

「しかたない。夜はいいもん食わせてあげるから、昼は簡単なので我慢してくれ」

二人を連れて、コンビニニ入る。

平日は両親は二人とも仕事に出ていて、7時まで帰らないし、弟達も学校があるから4時までは帰らないので、この昼の時間なら、家に入れる。

俺はソーダとペヤングを三つづと、カキピーを一袋買い自宅に向かう。

この周りは平日の昼は人がそこまで通らないので静かだ。

「よし、着いた。今鍵を開けるから、待ってて」

財布の小銭入れから、鍵を取りだし開ける。

何か月ぶりかの家の中に扉を開ける音が響く。

いつも通りの、我が家だ。

「とりあえず、階段上がってすぐの部屋で待つてくれ。俺は昼飯の準備をするから」

二人にペヤングを取り出した袋を渡し、俺は台所へ向かう。少しくらい、ポットのお湯が減ってても家の家族は気にしないだろう。

ペヤングの蓋を開け、ソースを取りだしかやくとお湯を入れる。

この何気ない行為すら、本当に懐かしい。

それから、できるまで待つてっていると、上の部屋から二人の声が聞こえてきた。

ソーダを飲むのが、初めてらしく驚いているのだろうか。それにしても、人がいないとよく響くものだ。

それから、お湯を切つてソースをかけて完成。ゴミは袋に入れて、後で外で捨てよう。

「ほら、できたぞ」

久しぶりの自分の部屋に入り、二人の前にペヤングを置く。

「ユウマさん、これは？」

「カップ焼きそばっていうお手軽料理だ。青のりとか持ってきたからかけたかったら各自、お好みでかけてくれ」

エリスもイリス美味しそうに食べる。

それじゃあ、俺も。

うん、このソースの香ばしさがたまらない。

次にキンキンに冷えたソーダを開ける。開けた時の弾ける音が気持ちいい。

「そういえば、こんなものを見つけたのですが、何に使うんですか？」

エリスは小さい銀の袋見せてくる。

「うぐっ」

俺は慌ててエリスから奪い取る。

「これは、男のエチケットだから、女性が持つてちやダメだぞ」

なんで、こんなものがあるんだよ！

俺は人生でまだ、買ったことなかったのに。

「そんなに大切なんですか？」

「うんうん、大切大切。この国では男はみんな持つてるくらい大切」

俺は笑って誤魔化し、結界の倉庫の中に突っ込む。

「ユウマさん、この紙袋はなにが入ってるんですか？」

イリスがベツトの下から茶色い紙袋を出す。

やばいそれはパンドラの箱だ。

「おっと、イリス。見つけてくれたのか、ありがとな。これは紳士的な物で、イリスにはまだはやいから、俺がしつかり閉まっとくよ」

これはコミケで手に入れた芸術品だ。けして、やましい物ではないぞ！そう、少し薄いブックス！だが、男のロマンがしつかり詰まった貴重なものだ。

「よし、みんな食べたな！うん食べ終わったよね。この袋の中にしつかりと重ねていられてね。間違っても、そのゴミ箱には入れないように」

これ以上、ここにいたら、ボロが出てきてしまう。とつとつと、退散だな。

俺は部屋を見回す。机の上には遺影があった。

あまりの写真うつりの悪さに恥ずかしい。

ん？鍵のかかった引き出しの中になにか挟まっている。ここの鍵は俺しか持っていないのだが、一体誰がくれたんだ？

その引き出しを開けると、一枚の封筒がカードゲームの上に乗っていた。

「いれは？」

宛名も送り主の名前も書いてない。とりあえず帰ってから読もう。俺はポケットに閉まって、2人を先に家から出す。

誰も居なくなつた、部屋にはまた静寂が戻つた。

「……ありがとうございます」

部屋のすみにかかっていた、ユニフォームに挨拶をする。何故だろうか、もうここには戻つて来ない気がして自然と言葉に出していた。

それから、近くの川を散歩しながら隣町まで歩くことになった。

冬の川辺は風が吹くと寒い、もうすぐ、春が近いのか太陽は暖かい。

「ユウマさん」

ーと、エリスはなにやら、物言いたげな顔でこちらを見てくる。

「近くにコンビニはないでしょうか？」

あー、察しました。そういうことですか。

俺はこれでも、紳士を自称している。察しても、言わないで気遣うことはできるさ。

「すぐその角を曲がればあるよ。俺とエリスはこのベンチで待ってるから。行ってきていいよ」

すいませんと、エリスはコンビニに向かっていく。

ベンチに座ったエリスは手が冷えてるのか、息をはいて温めてる。

「ほら」

自販機で買ってきたココアを渡し、俺も横に座る。

「ありがとうございます。……わー、温かいです。」

イリスは両手で持った缶を頬ずりする。暖かそうだなによりだ。冬の日のココアは温かくておいしい。犯罪的だよな。

「ユウマさんは私のことをどう思いますか？」

イリスからの突然の不意打ち発言に、俺はココアを吐き出す。

「ぶは。どうしたんだよ、いきなり」

「何となく、聞いてみたかったんです」

イリスはクスクスと笑いながらこちらを見る。恐ろしい子だ。それにしても、どう思うか。まあ、あれだよな。

「どう思うて、仲間というか、友達というか、大切な人だと思ってるよ」

「本当ですか？」

「ああ、本当の本当」

俺は本当にそう思っている。イリスは出会った時は礼儀良く、育ちのいいお嬢様できな感じだった。でも、一緒に生活するようになってからは、愛想のいいおてんばな年相応な少女で、新しい発見があるごとに楽しそうにしてる姿を見ていると、こつちまで幸せな気分になって、今じゃ、俺という人間を支えてくれる大切な人になっていた。

「そうですか。じゃあ、一つだけ、質問していいですか？」

イリスは安堵すると、少し真剣な顔で話してきた。

「ユウマさんは、自分の役割を放棄する人はどう思いますか？」

突然の難しい質問に、少し戸惑う。

「じゃあ、例え話として、一国のお姫様がいますとします。そのお姫様は小さい時から、周りの言うこと聞いて、自分の意思を心のそこに閉まって生きてきました。でも、ある日。お姫様は自分の立場を放り出すことで自由になれるチャンスを得て、そのまま自由になろうと、お城を抜け出します。でも、そのせいでお城の中はめちゃくちゃになりました。ユウマさんはこのお姫様をどう思いますか？」

なんだろう、すごい壮大な例え話なんだが。

「どう思うかって言われてもなー。とりあえず、俺はお姫様を悪くは思えないよ。だって、今まで自分のやりたいことをできなかつたわけだろ？俺が同じ立場だったら、同じように抜け出す」

イリスは少し驚いて、俺を見る。

「でも、お城の人達にはすごい迷惑がかかっているんですよ」

「うん。確かにお城の人達には迷惑がかかってるよね。だから、お姫様はしばらく自由を満喫した後しつかりと、その事で向き合わないといけない思う」

お姫様が抜け出す理由を作ったのは、お姫様の気持ちを封じてきたお城の人達の責任でもあると思う。

でも、だからといってお姫様はいつまでも自由にしていちゃいけない。お姫様というのは、その国の象徴みたい人だ。そんな人がいなくなったら、国全体が不安定になってしまう。だから、お姫様も向き合わないといえない。

「ユウマさんは、そのお姫様が仲間だとしたら、どうしますか？」

「そうだな。俺が仲間だったら、お姫様の手助けをするよ。しつかりと、問題に向き合えるように。自分の気持ちを伝えられるように、全力で手助けをするよ」

きっと、それがベストなことだと思う。

イリスは少し切なそうに笑う。

「やっぱり、ユウマさんは優しい人です」

その言葉に何故か、俺も切なさを感じた。

「お待たせしました！」

エリスが後ろからくる。イリスはベンチから立ち上がりエリスのもとへかけていき、エリス分ココアを渡す。二人は本当に仲良しだ。

――

気付いたら、俺達は自分の家にいた。目の前にはカズマ達も座っている。

「あれ？なにをおきませんね」

「外はもう真つ暗よ」

めぐみんとアクアは首を傾げている。

「でも、確かにどっここか行つてた気がするぞ。どこに行つてたかは思い出せないが。とりあえず、もう夜だ、私達はおいとまさせていただこう」

ダクネスは立ち上がり、帰る支度をする。

確かに何処かに行つてような気がするが思い出せない。

赤い箱を結界の倉庫に入れた瞬間、クシャリと音がした。

「なんだ、この袋」

赤い箱の落つこちた先にあつた袋を取り出すと、中から未開封のカキピーの袋が出てきた。

「それ、カキピーじゃん。懐かしいな！何処に売ってたんだ？」

「いや、この世界ではみたことないんだけどな」

カズマはもしかしてという顔をする。どうやら考えていることは同じで、俺達は本当に日本に行ったらしい。

「とりあえず、半分くらい持っていてよ」

「マジか、ありがとな」

「ねえ、どうしたのよ二人とも、って、それカキピーじゃない！カズマ、私にも分けなさいよね」

「あーあーあ。わかったから、離せ。この駄女神。お前は本当食い意地が張ってるな」

本当、カズマとアクア仲がいいことだ。

カズマ達のパーティーが帰ってから、先に風呂に入ったイリスは寝室へ、俺は自分の風呂の番が来るのをリビングで待っていた。

それにしても、イリスは何か覚えてそうな感じだったが、まあいいか。
ん、何かポケットに入っている。

ポケットに、手を入れると中から封筒が出てきた。

宛名も送り主も書かれてない。

封筒を開けると一枚の手紙が入っていた。

――
――

皆さんは覚えていない様子だったが、私は日本でのことを覚えていた。

それにしても、今日はいっぱい歩いた。ユウマさんも疲れてるだろうから、はやく出てゆっくり休んでもらおう。

私はお風呂からでて、髪を乾かしながらリビングへ向かう。

「ユウマさん、お風呂空けましたよ」

ユウマさんは紙を持ったまま、テーブルに向かって泣いていた。

しかし、私がいることに気づき、腕で涙を拭き無理矢理笑顔を作る。

「ああ、エリスか。今日はいっぱい歩いて疲れたと思うから。夜遅くまで避け飲まないではやく寝ろよ」

ユウマさんは立ち上がって、リビングのドアのぶに手をかける。

手紙を読んでいて、今日の出来事を全て思い出した。そして、読み終わったと同時に、俺は泣いていた。

気がつくと、エリスが風呂から上がってリビングのドアの前に立っていた。

俺は無理矢理、涙を拭き取りエリスに笑顔で話、風呂へ向かう。

とりあえず、今は一人でいたい。

そう思つて、ドアのぶに手をかけた時だった、エリスが後ろから抱き締めてきた。

「どうしたんだよ。せつかく風呂に入ったのに、今の俺に触れたら汗のにおいがついちゃうぞ」

そんな、冗談を言つて、エリスから離れようとするが。

「もう、無理をしないでください」

俺はその言葉を聞き崩れ落ちる。

「ユウマさんは今日一日、私達が楽しめるようにと、無理に明るく振る舞ってましたよね」

「いいや、そんなことないよ」

「嘘です。今日だけじゃありません。いつもそうです。知ってますよ、ユウマさんが、一生懸命朝の時間に走りに行っていること。夜遅くに時々、台所で泣いていることも」

すべて、エリスにはお見通しだったらしい。そう、俺は死んだことを後悔していた。祭との約束をまた破ったことを後悔して、それを紛らわすために走り続けていた。

しかし、時々夢に出てくる時がある。あのときの約束が。

辛かった。でもそんなことで落ち込んでエリス達を不安がらせたくないから、無理演じていた。

「いいんですよ。私が許します。あなたの失敗を。私が認めます。あなたの努力を。だから……」

もう、休んでいいんですよ。

その言葉を聞いたとき気づけば、俺は泣いていた。

頑張つて止めようとした涙が、いつのまにか溢れていた。

その日、俺はエリスの腕の中で泣き続けた。

俺の嗚咽を、優しく返してくれた。彼女の返す言葉はとても温かく俺はその言葉に救

われた。

第10話 決戦！機動要塞デストロイヤー

昨夜の出来事でいろいろと吹っ切れたのか、今日はいつもより体が軽かった。町外れの静かな川原を散歩しながら、これからのことを考えていたときだった。

『デストロイヤー警報！デストロイヤー警報！冒険者の皆様は、装備を整えて冒険者ギルドへ！そして街の住人の皆様は、直に避難してください!!』

昼のほのぼのとした静けさは、日常の終焉を告げるアナウンスによって切り裂かれた。

――

逃げ惑う人たちを掻き分けながら、家に戻る。

――が、外とは逆に家の中には以外にも落ち着いていた。

「待っていましたよ、ユウマさん」

愛剣を磨きながら、静かにイリスは言った。

そして、その隣には準備を整えたエリスが座っていた。

「いつかは対峙するときが来るとは思っていましたよ。ユウマさんも、速く準備してきてください」

まるで、こんなことになることを知ってたような雰囲気を出す二人に俺は啞然とした。

「え、なんでそんなに落ち着いてられるの?」

俺の言葉にエリスが答える。

「慌てても何も始まりません。相手はあの最凶の賞金首デストロイヤー。こういうときこそ、しっかりと落ち着いて準備をしないとイケません」

当然のように言っているが、街の騒ぎようを見ると、とんでもないものが来ているのがわかる。もう少し動揺してもいいのでは？

とりあえず、逃げる選択肢はないらしいので部屋で調節していた、武装を結界に投げ込んでギルドへ向かう。

「よー！ユウマ。相変わらずの軽装だな」

急いでギルドに入ると、完全装備のカズマいた。

「これでも、使えるものは全部、結界にぶちこんできたよ」

ギルド内を見渡すと、みんなこれが自分の最高だろうという完全装備でいた。それぞれ、やる気は充分に感じた。

特に、男達が。

それにしても、よく見ると知り合えばかりだな。

―とその時、後ろから声をかけられる。

「やっぱり、君も来てたよね。クドウユウマ君」

振り返ると、そこにはいつぞやの高レベル剣士が立っていた。

「おう、久しぶりだな。まつたけ君」

ミツルギだよ!とツツコミをいれてくる。そういうばそういう名前だったな。

「それにしても、聞いたよ。魔王軍幹部を一騎討ちで倒したんだってね」

「そのあとの止めは仲間が倒したんだけどな」

まあ、めちやくちやなことをして勝ったんだけどね。あ、そういえば。

「これ、返すの忘れてたわ」

結界から魔剣を取り出して、ミツルギに渡す。

「俺がデュラハンに勝てたのはこいつがあつたからだ、ありがとな」

神器は選ばれた人間にしか使えない物らしいが、別にデュラハンとやりあうには丈夫な剣であればよかつただけだ。

ミツルギはうれしそうに受け取る。

と、ここである程度人が集まつたらしく、ギルドの職員が前に出てくる。

「お集まりの皆さん！本日は、緊急の呼び出しに応えて下さりありがとうございます。只今より、対機動要塞デストロイヤー討伐の、緊急クエストを発令します。皆さんがこ

の街の最後の砦です。どうか、よろしくお願いします!」

冒険者達がざわめく中、職員達は酒場のほうから持つてきたテーブルを中央に寄せ集めて、簡易的な会議室を作る。

ギルド全体の緊張感が高まってきたな。

それにしても、デストロイヤーてなんだ?

俺は肝心なことを知っておらず、考えながら職員の手指示で用意された席に座る。

「それでは、現在の状況を説明したいと思いますが。……この中で機動要塞デストロイヤーの説明が必要な方はいますか?」

俺とカズマを含む少数の人間が手を上げる。

それを見て、職員の方はデストロイヤーの説明を始める。

簡単にまとめるとこうだ、対魔王軍用のくも型兵器で、小さな城くらいな大きさなのに軽めの重量で、めちやくちや速くて、踏まれたら最後。そんなもって、国の技術を結集した強力な結界が張られてて、魔法での攻撃は効かない。おまけに、ゴーレムやら、バリスタなどが、配備されてるらしい。

気付けば、周りは静まりかえっていた。

正直に言って、こんなやつにどうやって勝つんだよ。

エリス達の落ち着いた表情を見て、頑張れば勝てるかなーって思ってたけど無理じゃん。

そのあと、冒険者と職員達のQ & Aが始まったが酷いものだった。

作った国は滅びただとか、落とし穴を仕掛けたらジャンプで抜けられたとか、なんだよそれ、めっちゃくちゃも大概にしてくれ！

そんな、前に全然進まない会議の中で一つの希望が生まれた。

「なあ、アクア。お前の力じゃ、結界をどうにかならないの？」

「やってみないと分からないわね。まあ、破れる保証はできないけど」

そんな、カズマとアクアの会話に、職員は大きな声を出す。

「破れるんですか!? デストロイヤーの結界を?」

そういえば、アクアは女神だったな。なら、わんちゃんあるだろう。それに、こちらにはもう一人女神がいるのだから。

「アクアでギリギリで感じなら、エリスの力も加わればほぼ絶対に壊せるだろ」

「それなら、完璧に壊せると思いますよ」

エリスの言葉にギルドの中が騒がしくなる。

「本当ですか! それじゃあお願いします。結界を壊せば、魔法による攻撃ができます。でも、下手な魔法は効果がありませんし……」

職員は悩み始めるが、一人の冒険者が呟く。

「火力持ちならいるじゃないか、頭のおかしいのが。」

その言葉に釣られ、あつちこつちから飛び交ってくる。

「そうだな、頭のおかしいのが……」

「頭のおかしい子がいたな！」

「おい待て、それが私のことを言っているのなら止めてもらおうか。さもなければ、私の頭がおかしいかを今ここで証明することになるぞ」

めぐみんは杖を持ち立ち上がる。

日頃の行いでやつだぞ。

だが、勢いで立つためめぐみんは、人々の期待の眼差しに耐えきれず、おろおろとし始め、

「わ、私の爆裂魔法でも、流石に一撃では仕留めきれない……と、思われて……」

めぐみんの言葉にまた、ギルド中に不安が広がろうとしたときだった。

「一応、私も爆裂魔法を使えます」

冒険者を掻き分けながら、ウイズさんが前に出てきた。

「おー、貧乏店主さんだ!」

「俺たちの天使、ウイズさんだ!」

「いつも、夢でお世話になってます!!」

また、冒険者達が盛り上がり始める。

「ーと、今おかしな言葉が聞こえたのだが……」

「店主さん、ご無沙汰しております。どうぞ、こちらに!」

ウイズさんは周りにペコペコしながら、職員隣のほうへ行く。

「それでは、改めまして、作戦内容をまとめます。まず、アークプリーストのアクアさんとエリスさんが、結界の解除。そして、めぐみさんと店主さんが、爆裂魔法をデストロイヤーに打ち込むと感じになります」

「そうですね、爆裂魔法は左右の足に打ち込むのはどうでしょうか、万が一破壊できなくても、動きさえ止めれば近づけますし」

その後、ウイズさんの提案を取り入れ、作戦は完成。あとは、実行するだけとなった。

正門の前には《クリエイター》を中心に街の住人達も集まって作った即席バリケード

の前に、地面に魔方陣を描いていた。

そんな、慌ただしく作業する人達の光景を門の上でイリスは見ていた。

「どうしたんだ? そんなにじつと見ちゃって」

俺はイリスの横に立つ。俺とイリスはデストロイヤーの動きが止まった後の非常用突撃部隊なので、作業をせずに英気を養っている。

「皆さん、この街が好きなんです」

前を向きながら呟く。

「そりゃ、そうだろうな。俺達よりも長くこの街に住んでるんだ。愛着が強いんだよ。」

イリスは無言でうつ向く

「なに、急に恐くなってきた?」

「いえ、別にそんな訳じゃありません！」

俺の冷やかに、イリスはこちらを向いて否定する。

最近、イリスは寂しそうにうつ向くことが増えた。どうしたのだろうか。

「皆さんすごい頑張っているんですから、私達はもつと頑張らないといけませんね！」
寂しそうな表情を捨てようと、必死に笑顔を作り意気込む。

「ああ、そうだな」

やっぱり、イリスの笑顔を見ると切なくなってくるな。

——魔法で拡大された職員の声が広い広野に響き渡る。

『冒険者の皆さん、そろそろ機動要塞デストロイヤーが見えてきます!街の住人の皆さんは直に街の外に避難してください。それでは、冒険者の各員は、戦闘準備についてください』

遠くの丘から、その姿が見えてきた。

少しずつ震動が強くなってくる。

「来たぞー!!」

誰かが叫ぶ。

でかい。ただその一言に尽きる。

デストロイヤーは今まで通るもの全てを破壊して来たその八本の足を不規則に動かしながら、こちらへ徐々に近づいてくる。

「ちよつとウイズ!大丈夫なんでしょうね!」

「大丈夫です。任せてくださいアクア様。これでもリッチー、最高位のアンデットです

から。アクア様が結界を打ち壊してくればあとは、なんとか。……、もし失敗したら、皆で仲良く土に還りましょう」

「めぐみん、ちよつと落ち着け。失敗しても、誰もお前を責めたりしない。失敗したら、皆で逃げればいいんだ、深く考えるな」

「だ、大丈夫です！……」

左右がとても慌ただしい。

本当に大丈夫だろうか。

「戦闘準備！」

冒険者の言葉にカズマは拡声器を持ち上げ、指示を出す。

『アクア！ エリス！ 今だ！』

「さあ、アクア先輩、やりましょう!」

迎撃地点に来たデストロイヤーに向かって、

「《セイクリッド・スペルブレイク》!」

羽衣をまとい杖を前に出すアクアと、聖槍を構えるエリスが呪文を唱える。

すると、二人の前に魔方阵が浮かび上がり、強い光を持った閃光が一直線にデストロイヤーへ向かって放たれ、その巨体を覆っていた結界を割る。

そして、ウイズさんと、カズマにのせられた、めぐみんが、詠唱を唱える。

「《エクスプロージョン》!!」

完璧といってもいいほど同時に打たれた人類最強の一撃は、全てを蹂躪してきたその足の一つ残らず粉碎した。

足を無くしたデストロイヤーは轟音と共に街に向かって滑る。

ーが、その巨体はバリケードにすら届くことなく、最前線のダクネスの手前で止まる。

それと同時に、めぐみんはうつ伏せに倒れる。

だが、依然としてウイズさんは堂々とたつたままだった。

俺の頭に、大きめな破片が当たった。

ウイズさんのほうは、欠片も残らず吹き飛んだが、めぐみんのほうは欠片が残っている。

圧倒的な一撃だったが、惜しくもめぐみんの一撃はウイズの一撃を超えることはできなかったらしい。

カズマはめぐみんを起こして慰める。

そして、みんなが安堵したその時だった。

「さあ、帰ってお酒を飲みましょか！ なんとたつて一国を滅ぼす原因になった賞金首よ。報酬はおいくらかしら！」

「ちよ、おま!!」

俺とカズマの声が重なる。

そして、その後が続いて機械的な音声が流れる。

『この機体は機動を停止しました。排熱及び、機動エネルギーの消費ができなくなっています。……危険レベル上昇中。搭乗員は速やかに避難してください。繰り返しします……』

カズマがアクアの頭をひっぱたく。

だが、もう遅い。

「ダクネスさんが、突っ込んで行ったぞ！」

冒険者の言葉で我に帰る。

「私達も行きましょう！」

ダクネスの後を追うようにイリスは走っていく。そう、俺達は非常用突撃部隊だっけ。

いっちょよ、やりますか。

デストロイヤーの上にとると、あたりに一面ゴーレム達がうようよとしていた。

「なんで、こんなにいるんだよ！ 《一式結界》」

ゴーレムの重い拳を止める。

そして、無防備になった懐にイリスが槍を刺す。

「はあっ！」

心臓部を刺されたゴーレムは崩れるように倒れる。

「エリスって、槍できたんだ」

「はい、アクア先輩が貸してくださった日本の本の主人公がやっていたのに興味を持ちまして」

うん、それたぶん薙刀だわ。

てか、アクアはいつたい天界でなにやってるんだよ。

女神が漫画読んでるのは流石にイメージ崩れるよ。

とまあ、話しているうちに後から登ってきた、冒険者達がゴーレム異常なペースで倒したため、あつというまに占領しきっていた。

それにしても、ゴーレム達の残骸はどれもボコボコになっていて、中には原型すらとどめてない。

夢を追う男は強いね……。

「……に、扉があるぞー!」

「ハンマー持ってこい!ぶっ潰すぞ」

バコンと大きな音をあげ、扉が開かれる。もう、これじゃあただのチンピラ集団だよ。

「開いたぞー！」

冒険者達の後に続き中に入る。

こいつらには、多分今は怖いものなど無いのだろう。

さつきから止まることなく、鳴り続ける警報も彼らの耳には届いていない。まったく、頼もしいものです。

建物の奥の部屋に着くと一人の冒険者が指差す。

その先には、白骨化した人の骨があつた。

「綺麗に成仏してますね。それも、未練も無くスッキリと」

え？

「いやいや、流石にスッキリとは無いと思うぞ。こりや、どつから見ても孤独死みたい

な感じ出してるとし」

後から来た、アクアにも聞いたが、エリスと同じようにスッキリと死んだと答える。

俺は、書類の積まれた机を見る。

すると、一冊の手記が見つかった。

中を開くと、日本語とこの世界の文字が混ざって書かれていて読みずらかったので、変わりにアクアに読んでもらった。

手記の中身はそれはそれは酷いもので、女性陣を抜いて、その場に行た冒険者達がそろって愚痴をとぼした。

それから、班行動でデストロイヤーを止める手段を探すことになり、俺とエリスとカズマ、アクア、ウイズさんで行動してたのだがー

「コロナタイト、真っ赤に燃えていますね」

ーと、ウイズさんが呟く。

流石は幸運集団。ものの数分で元凶を見つけってしまった。

太陽のように燃えているコロナタイトは鉄格子に囲まれ、そう簡単には取り出せない状況だ。

さてどうするか。

「ほら、エリス。あんたがその槍で突き刺して取り出せばいいのよ！」

アクアのやつなんと無茶なことを言うのか。エリスは戸惑いながらコロナタイトを見る。

「別にこの距離なら、こうすりゃいいんじゃないのか？ 《ステイル》！」

「あ！カズマさん!？」

ウイズさんが、何かを言う前にコロナタイトは格子をすり抜け、カズマの手におさまった。

ギラギラと燃えながら。

「うわあああああ」

アクアとウイズさんが、必死にカズマの手を処置する。

カズマ、哀れなり。

そして、カズマ手から離れたコロナタイトは俺の足元に転がってきた。

「取り出した方がいいが、どうするんだ。これ」

どンドンキラキラと輝きが強くなってきたのですが。

これって、あれじゃん。

爆発前のお約束みたいなやつ。

そういえば、さっきまでうるさく鳴っていた警報はなりやんでいた。

マジでどうするのこれ？

「あの、一応あるにはあるんですが。誰か、魔力をくれませんか？」

ウイズさんが、俺の方を見る。

しかし、何か悪そうな顔をして、カズマの方を向く。どうしたんだろう？

「ランダムテレポートを使って、どこかに飛ばすというのは……」

「「それだ！」」

俺とカズマとアクアはハモる。

「ですが、ランダムテレポートはその名の通り転送先がランダムです。運が悪ければ人里に……」

エリスが困った顔で説明をする。

だが、カズマはウイズさんの手を握って言う。

「大丈夫だ！世の中つてのは広いんだ。人のいる場所に転送されるよりも、無人の場所

に送られるほうが可能性は高い。全責任は俺が取る。こう見えても、俺は運がいいらしいぞ!」

カズマは力強く言う。さすがは我らのカズマさんだ。かつこいい。

ーと、このときの俺達は、それが、フラグとも知らず安堵していた。

「《テレポート》!」

――

――

気がつけば、爆発手前のコロナタイトはどこかになくなっており、部屋は少し薄暗くなっていた。

「とりあえず、外にでるか」

要塞の外に出ると、他の冒険者達はほとんどが地上に降りており、イリスは地上でダクネスやめぐみんと合流していた。

「みんなお疲れ。動力源は止めてきたから、家にも帰ってゆっくりと休もうぜ」

ここで、俺はあわてて口を押さえた。

しかし、遅かった。あれだけ人に言っておいて、まさか俺がやらかすとは。

「どうやら、まだのようだな。私の嗅覚が香ばしい危険の香りを嗅ぎとっている」

ダクネスの言う通り、機動要塞は振動音をならしながら、震えていた。

「嘘だろおい、確かに心臓部は取り除いたはずだろ！」

「落ち着いて！落ち着いて！」

カズマもアクアもテンパる。

とりあえず、デストロイヤーから距離をとると、体全身を真っ赤にしながら今まで溜まっていた水蒸気が吹き出すデストロイヤーが目に見る。

「魔力を！誰か魔力をください！爆裂魔法を打ち込んで機動要塞を相殺します！」

ウイズさんは原因を突き止めたのか、あわてて周りに呼び掛ける。

しかし、カズマは無理矢理ウイズさんの口を閉じさせる。

「なにを、いきなり言い出すんだ！他の冒険者はお前がドレインタッチを使えることを知らないんだ。リッチーだってバレたらどうするんだよ」

「でも、魔力を吸えるのは私しか、アレを止められる事ができるのは……」

ウイズさんは無理矢理カズマをどけようとする。

ああ、こうなったら一か八かだ。

「ドレインタッチは俺も使えるだから、ウイズは……」

「カズマ！」

俺はカズマを止めて、デストロイヤーの前に立つ。距離充分取れている。

カズマ達はキョトンとした顔で俺を見る。

「少し下がっててくれ」

俺の目を見たウイズさんは、全てを察したように後ろに下がる。カズマも同様にだ。

「まだ、一日しか練習してないのにな」

本当、この世界は俺に厳しい。

俺は結界から一本のマナタイトでできた短剣を取り出し、デストロイヤーに向ける。

「黒より黒く闇より暗き漆黒に我が深紅の混淆を望みたもう。覚醒のとき来たれり。無

謬の境界に落ちし理。無行の歪みとなりて現出せよ!」

俺の足元に赤い呪文が浮かび上がる。

「爆裂魔法!?!」

カズマは驚いた様子でこちらを見る。

そう、これは爆裂魔法だ。

でも、普通のとは違う。

「凍れ、凍れ、凍れ!我が力の奔流に望むのは万物全てを凍らす、絶対零度の力なり。

さあ、深淵の底から目覚めよ!」

俺はめぐみんみたいに、生まれつき魔力が高いわけではない。

かといって、ウイズさんみたいに特訓してきた訳でもない。

だが、そんな俺でも爆裂魔法を撃てるらしい。

しかし、撃てる変わりに充分な威力は出せない。

そこで、俺は昨日、ウイズさんから教わった属性付与を使うことにした。

圧倒的な威力を誇る爆裂魔法だが、元は無属性。下手に属性を混ぜる訳ではないので、詠唱さえしつかりすれば、通常の威力、もしかしたら、その倍の威力で撃てると言うことだ。

「これが、人類最大の攻撃手段、これが俺の全力全霊！《エキスプロージョン・イグニション》!!」

俺の周りを覆っていた、吹雪は爆裂魔法の破壊の光を飲み込み、そのままデストロイヤーに突っ込んでいく。

光にぶつかつたデストロイヤーは一瞬で凍結し、粉々に碎けちる。

氷となって砕けたデストロイヤーの破片は夕日に照らされ、キラキラと宝石のように散っていく。

――

機動要塞デストロイヤー討伐から数日がたった。

あれから、街はなにもなかったかのように賑やかである。

そんな中、俺達とカズマ達のパーティーは冒険者に囲まれながらギルドの職員の前に立っている。

「まさか、ユウマがあんな隠し玉を持ってたなんてな」

カズマは笑いながら、俺を見る。

「あれから、毎日。めぐみんには爆裂魔法の戦いを挑まれるよ。正直、普通には撃てないから、何かしらの被害が起きそうで怖くて、引き受けてないけど」

一応、氷の他にも、雷や、炎を付与できるが、そんなことをしたらどうなることやら。それに、あのあと、ウィズさんは成仏仕掛けるし、何故かエリスが倒れるとかで、いろいろ忙しかった。

「こぞと云うときしか使いたくない。

「それにしても、二人とも、良く街を救ってくれた。本当に感謝している」

「ええ、私からも感謝の言葉を伝えさせてください」

私服のダクネスとイリスは俺とカズマに礼を言ってきた。

どうしたのだろう。二人ともやけに、真面目だ。

そのあとカズマはダクネスに、そういえばお前なにもしてなかつただと冷やかして笑う。

それを聞いて、周りは大爆笑したがそれはすぐに止み、静かになる。

冒険者達の目線の先には、なぜか暗い顔をしたギルドの職員と二人の騎士を従えた眼鏡の女性があった。

今回は魔王軍幹部よりも、大物のだった。賞金もそれなりに弾むのだろう。

そんな、うきうきした気持ちを持っていだが、明らかに目付きが違う。

そういえば、賞金らしきものが入ったのも見当たらない。

段々、雲行きが怪しくなってきたところで、眼鏡の女性は重い口を開いた。

「冒険者、サトウ カズマ。貴様には現在、国家転覆罪の容疑がかけられている!自分と共に来てもらおうか!」

俺はその言葉を聞いた時、とつさにカズマを庇いカズマはギルドの外へ逃げようとした。

死闘！悪徳領主編

第11話 残念なフラグ回収

機動要塞デストロイヤーの討伐から数日後。

俺達はデストロイヤーの賞金を受け取るため、ギルドに来ていた。

ーが。

「冒険者、サトウ カズマ！貴様には現在、国家転覆罪の容疑が掛けられている。自分と共に来てもらおうか！」

騎士を従え、険しい表情をした眼鏡の女は、突然街を救った英雄に対して言ってきた。

「……えっと、どちら様でしょうか？てか、国家転覆罪？俺はただ、賞金を受け取りに

来たんだけど」

カズマはオドオドとした様子で尋ねる。

さつきまで大騒ぎだったギルド内は、まるでそんなこと無かったかのように静まり返っている。

「自分は、王国検察官のセナ。国家転覆罪とはその名の通り、国家を揺るがす犯罪をした者が問われる罪だ。貴様には現在、テロリストもしくは、魔法軍の手の者ではないかと疑いが掛けられている」

セナと名乗った眼鏡の女は、カズマを睨みつける。

「ちよつと待てよ。カズマはデストロイヤー討伐に大きく貢献した、言わばこの街の英雄だ。それをテロリストだなんて、ふざけるのは止めて、とつと出すもの出して貰おうか」

俺はカズマの前に立ち、セナに向かい合う。

そして、周りの冒険者達は俺の言葉に便乗され、セナ達へ野次を飛ばす。
ーが、そんなことには動揺せず、セナは言う。

「その男の指示で転送された、機動要塞アストロイヤーの核であるコロナタイト。それが、この地方を治める領主殿の屋敷に転送されました」

その一言で、周りは静まる。

その時、俺の脳裏に一つの言葉が流れる。

『大丈夫だ！世の中つてのは広いんだ。人のいる場所に転送されるよりも、無人の場所に送られるほうが可能性は高い。全責任は俺が取る。こう見えても、俺は運がいいらしいぞ！』

あ、……とんでもないフラグじゃねえかよ。

固まる俺の後ろで、カズマは動揺した様子で言う。

「なんて事だ！俺のせいで領主が爆死しちゃったのか！」

「死んでいない、勝手に殺すな！使用人を出払っていた上に、領主殿は地下室におられた

との事で、怪我人も出ていない。屋敷は吹っ飛んだがな」

セナの言葉で、カズマはほっとする。

「それじゃあ、今回のデストロイヤー戦での死者はゼロってことか。良かった良かった」
「何が良い！ 貴様は状況が分かっていないな？ 今の貴様にはテロリストか魔王軍の手
者ではないかと疑いが掛けられているのだぞ。まあいい。詳しくは署で聞く。」

ギルド内はとっくに諦めムード。

誰一人としてカズマを庇うものはいない。

おい、そんなんでいいのか？ カズマは英雄だぞ？ なんで、見捨てるんだよ！

「おい、待てよ」

カズマの肩にのったセナの手を掴む。

「貴様、なんの真似だ。国家転覆罪は犯行を行った主犯以外にも適用される場合がある。邪魔をするなら、貴様も牢獄送りだぞ」

「止めてください、ユウマ。国家転覆罪は最悪死刑になります」

「そうよ！カズマさんだって『全責任は俺が取る！』て」

アクアとめぐみんは俺をセナから離そうとする。

どうやら、こいつらはカズマを見捨てるようだ。

めぐみんの言葉の死刑という言葉聞いたカズマの顔は、この世の恐ろしい物を見たかのような顔をしている。

「離せよ。……国家転覆罪？死刑？やれるもんだったらやってみる！俺はデストロイヤーを粉碎した男だ！返り討ちしてやる。」

火事場の馬鹿力というやつなのか、普段は払えないアクアとめぐみんを振り払い、結界からマナタイトの短剣を取り出す。

その行為を見た、イリスとダクネスは俺を止めようとするがもう遅い。

「カズマ逃げろ！」

「いいだろう。二人を捕らえろ」

カズマを追おうとする、騎士の前に立ち剣を降り下ろそうとする。

——その時だった。

「ごめんなさい」

首に重い一撃が入る。

瞬間、力が抜け、俺はその場に倒れる。

朦朧とする意識の中で、エリスの声が聞こえる。

「王国の騎士に手を出したら、それこそ重罪です。我慢してください。……」

あとに何か言つたのだらうが、そこまで聞き取ることはできず、意識が途切れる。

――――

――

目が覚めると、既に夜になっており、月明かりに照らされる牢屋の中にいた。隣にはカズマが嗚咽を吐きながら泣きじやくつている。

「帰りたい……。もう、日本に帰りたい……」

平和な日本で死んで、異世界に来てみればとんでもない奴等と戦わされ、やつこの思いで乗り越えたと思えば牢屋の中。

それに、刃向かつた相手は地方を治める領主ときた。

中世ヨーロッパみたいな、この世界。

場合によっては即死刑だろう。

カズマが泣きたくなる理由は分かる。

どう声をかけようか迷ってた時に、足音が近づいてくる。

「おい、別に抵抗してねえーんだから、もうちよっと丁寧に扱えよ」

「黙れ、チンピラ風情が！とつとと歩け」

聞き覚えのある口調だ。

あれって確か。

「ほら、入れ！まったく、貴様は何度ここに来る気だ。牢屋はお前の家ではないんだぞ。今日は先客がいるから、喧嘩するなよ」

「ハイハイ。それじゃ、お邪魔するぜ。……つて、カズマとユウマじゃねーかよ。こんなとこでなにやってんだ」

牢に入ってきたのは、街ではチンピラとして有名な、金髪男のダスト。

「こんな所で奇遇だな。何やったんだよ！」

騎士がいなくなった後。ダストは嬉しそうに聞いてくる。

カズマは少しは落ち着いたらしいが、まだ話せそうにないので、変わりに俺が話す。俺の話聞いた、ダストはひっくり返えりながら大笑いをする。

「おいおい、カズマはテロリスト扱いで、ユウマは騎士に剣を向けて同罪!? 最高かよお前ら!! うひゃひゃひゃ。それにしてもざまーねえぜ。あのクソ領主、前々からうざいと思ってたんだよな。本当、よくやったぜ」

「別に狙ってやってねーし」

「そんなんで、褒められてもうれしくねーよ。てか、お前は何やったんだよ」

俺の質問に、ダストは笑いながら言う。

「俺か？それがさ、デストロイヤーの賞金が貰えるて聞いて、それをアテにツケでパーとやったんだけどよ、これが思ったよりもらえなくて返済できなくてよ。金がねえーから馬小屋で寝るしかないんだけど、この季節の馬小屋は凍え死ぬくらい寒い。だけど、こは飯はタダだし、寒くもないからここに来たわけ。まあ、そのために、無銭飲食をしたんだが、ここなら借金取りは来ねーから安心できるぜ」

なんてことだ、こいつは名前の通りただのクズ野郎だった。

そこに呆れる、ヘドが出る。

ーが、そんなダストのクズっぷりを聞いて、俺達はいつの間にか、お互い笑いあっていた。

それから、飯を食ってすぐに横になった。ダストとカズマはすぐに寝たが、さつきまで寝ていたせいで、俺は眠れないでいた。

まあ、そんなこんなで、昔聞いた曲でも歌っていた。

「ああー、幸せのどんぼよー。何処へ。お前は何処へ、飛んでいく」

俺の親父は酔っぱらう度にこの曲を歌っていた。

俺は、親父が嫌いだった。下の弟には特に言わなくせに、ちよつとやそつとで、俺には強く言ってきた。

しかし、酒の酔いでするような最悪な人ではなかった。

そんな、今になっては昔のような思い出に浸ってたとき。

突然、遠くで大きな爆発音が響いた。

その音でカズマは起きるが、熟睡しているダストは起きなかった。

「なんだ、いきなり」

「さあ？」

その時、小さな声が聞こえてくる。

「二人とも、ねえ、二人とも、起きて！」

格子の外からは月の光が射す。

だが、聞き慣れた声だ。

格子の高さは俺とカズマが2人がかりになってやっと外が見える高さだ。

俺達は周囲に警戒し格子の壁に近づく。

どうやら、声の主はアクアだったようだ。

「アクア、お前何しに来たんだよ！」

カズマは、昼間のアクア達の態度にお怒りのようで、少し怒りの入った声で言う。

「助けに来たのよ。今、めぐみんとダクネスが騒ぎを起こして署員達の気を引いてるから、これで鍵を開けて逃げるわよ！」

格子から、針金^が落ちてくる。

「それで、漫画みたいに鍵を開けて、カズマの潜伏スキルで署内から脱出しなさい。屋敷に戻ったら夜逃げの準備よ！それじゃ、私は警察署の前で待つてるから」

アクアはそれだけ言い残すと、警察署前にかけていく。

「漫画みたいにて言われてもね」

針金が拾い上げて、牢屋の入り口へ行く。
しかし、残念なことにダイヤル式の鍵だ。

「寝るか」

「だな」

次の日の昼、体温で暖まった毛布にくるまってると、いきなりセナが牢屋に入ってきて、起きたばかりのカズマを連れて行く。

「あれ、俺は？」

「貴様はあとだ。黙って、本でも読んでいろ！」

セナは厳しい視線で吐き捨てる、分厚い本を置いて、牢屋を出ていく。

「エリス教の聖書って」

一応、俺は仏教なんだけどなー。

少し重たい聖書を、壁にもたれてながら読む。

内容は普通の聖書と特に変わらない。どうしたら、救われるのかとかそんなことが書かれていた。

だが、後半にいくにつれ、内容は過激なものになっていき、

「悪魔とアンデット。悪魔の急所。身近な物で作れる悪魔殺戮グッズ……」

と最後の方など悪魔の悪口などで、固められていた。

その時、ふとエリスの笑顔が頭の中に浮かぶ。

いつのも優しい笑顔の裏にこんなえげつな思考を持っていたとは。

そういえば、キャベツ狩りの日に怖い顔で俺にアンデットの話をしてきたっけ。

そんな、事を思い出していると牢屋の扉が開かれる。

「とつとと入れ！次、クドウユウマ。出てこい！」

取り調べから帰ってきた、カズマの顔は青ざめており、話しかけられる状態ではなかった。

俺はそのまま、おとなしく牢屋を出ると、一つの部屋に連れてかれる。

部屋の中は、中央に机が置かれていて、向かい合う形で椅子が二つ置かれていた。

また、入り口の横には小さな机と椅子があり、そこで取り調べの調査書でも書くのだろうか。

「座れ」

俺は指示通りに椅子に座ると、後ろに武装した騎士が待機する。

昨日の俺の行動から、また暴れだすと思ったのだろう。

準備を終えたセナは一つのベルのような物を机に置いて口を開く。

「これは嘘を看破する魔道具だ。発言には気を付けるのだな。少しでもベルがなれば、その場で裁判所送りとする」

セナはカズマを連れて行った時よりも、威圧的な態度でいる。

さっきのカズマといい、取り調べの時に何かあったのだろうか。

「クドウユウマ。年齢は17歳で、つい最近ジョブチェンジをして、アークウイザードとして冒険者をしている。と言うことでいいな。では、まず、出身地と冒険者になる前に何をしていたか聞こう」

まあ、最初の質問はそんなものだよな。

簡単な話だけだ。

「出身地は日本。そこで学生をしてました」

当然、ベルはならない。

「……次に冒険者になった動機はなんだ？」

「魔王を討伐し、仲間のアークプリーストを故郷に返すためです」

これも、ならない。

セナは驚いた顔で俺を見る。

「どうやらこいつは、俺が地位や名誉とかに溺れたがる人間だと思ってたらしい。」

「そうか、以外とまともな理由だな。それじゃあ、領主についてはどう思う？」

「なんとも思いません。てか、領主自体いたことを知りませんでした」

ベルは鳴らないが、変わりにセナが大きな声で驚く。

「なに!?! 貴様は自分の住んでいる土地の領主のことを知らないのか」

「ええ、興味ないんで。それより、そろそろ本題を聞いてくださいよ」

セナは何か言いたげな表情で俺を見るが、まあいいと、質問を続ける。

「では、貴様は魔王軍の関係者か？」

「ああ、俺は魔王軍の関係者なんかじゃ……」

瞬間、ウイズさんの顔が浮かぶ。

そうだ、ウイズさんは魔王軍の幹部だった！

「魔王の手先とかじゃないです」

セーフ。危うく自滅するところだった。

俺の発言に音を鳴らさないベルを見ると、セナは一つ呼吸を整えて言う。

「そうですか。どうやら、私は勘違いをしていたようです。厳しい態度であたつてしま
いすいません」

セナの口調が柔らかくなる。

疑いは晴れたらしい。

「いえ、わかってもらえれば結構です」

俺は頭をかいて表情を崩す。

そうすると、セナは困った顔で言う。

「ただ、捜査に危害を加えられては困ります。もしあのまま、騎士に剣を降り下ろしてい
れば、もっと大事になっていました。今回は注意と言うことになりますので、今後は気

を付けてください」

「あ、はい。すみません」

俺は罰の悪そうに謝る。

日本なら、あの時点で公務執行妨害になっているのだが、この世界はそこら辺、少し緩いらしい。

「それでは、これからお仲間さんに迎えにきてもらいますので、今しばらくお待ちになってください」

部屋の外に出ようとするセナを俺は呼び止める。

「あの、カズマに少し言いたいことがあるんですけどいいですか？別に、話の内容とかは騎士を付けて調査書とかに書いてもらっていいんで」

セナは振り返って俺を見ると、少し考えてから言う。

「いいでしょう。本来は許されないことなのですが、私達は貴方に酷い態度で接してきました。なので、せめてもの謝罪として許可を出して置きます」

セナが部屋を出てから、俺は騎士に連れられ一晩過ごした牢屋に行く。

カズマはまだ、立ち直れてなく下を向いている。

「カズマ、大丈夫か？」

「ああ、大丈夫だよ」

言葉とは逆でカズマの体は震えている。

コツコツと近づいてくる死の宣告に怯えているようだ。

「俺は、疑いがはれたから家に帰ることになったけど、安心してくれ！絶対に無実を証明してやるから」

俺の言葉にホツとしたのか、カズマは少し元気な様子になる。

それからしばらくして、俺はセナに呼び出され、警察署の外に出る。

外にはエリスとイリスが待っていてくれて、俺が姿を現すと抱きついてきた。

「疑いがはれてよかったです！」

「ええ、本当に。それにしても、心配したんですよ、いきなり剣を出して。王国の騎士に手を出すことは大問題になるんですから、本当に罪にかけられなくてよかったです」

二人とも、俺がそっちの罪をかけられると思ってたらしく、心配していたらしい。

これからは、感情的に動くのは少し控えて置こう。

それにしても、戦いはまだ終わってない。

カズマの裁判にどう勝つかが問題だ。

俺は、二人を連れてカズマの屋敷に寄る。

しかし、中は残念なことになっており、パーティーの女性陣で弁護士ごっこをして遊んでいた。

よし、こいつらは弁護席から追い出して置こう。

第12話 この不毛な裁判に論破を！

突然だが、異世界の裁判は単純だ。

検査官の証拠に対し、弁護士は反論。あとは裁判官が有罪か無罪か決める。

ただそれだけのこと。

ちなみに、この世界には弁護士の職はないため、身内がやることになってるらしい。

そんなわけで、俺は今青い空の下、青空教室ならぬ、青空裁判所にいる。

裁判所には多くの冒険者、街の住民が、街を救った英雄の裁判を見ようよ集まっている。

「何をそんなに緊張してるんです。安心してください。私達がついてますから」

めぐみんはカズマの背中をさすっている。

カズマから直線、裁判官の後ろには首吊り台があり、どうやらそれを見て動揺しているようだ。

「大丈夫です。紅魔族は知能が高いんです。相手が涙目になるまで論破にさせてやりませう」

「安心しろ、どうしようもない事態になったら、私がどうにかしてやる」

めぐみんとダクネスはカズマを励ます。

「まあ、この私に任せなさいな！聖者であるこの私の言葉には物凄い説得力があるわよ！」

とアクアは胸を張って豪語する。

悪いが信用できない。

カズマもそう思っているらしく、アクアには黙るよういる。

だが、俺の目にはアクアだけが有害には見えてない。

めぐみん、ダクネスも有害に写っている。

「なあ、三人とも。少しいいか？」

俺の言葉に3人は振り向く。

「実はな、イリスの姿がさつきから見えないんだ。探して来てくれないか？」

「イリスは迷子になっているんですか？本当に仕方ない子ですね」

めぐみんとイリスは年が近く、普段から仲良くいる。イリスはライバル意識を持っているが、めぐみんはと言うと、世話のやける妹のように扱っている。

「ああ、この人数だと手分けしないと大変だね。俺はカズマに、伝えたいことがあるから、代わりにお願いできないか？」

3人とも少し悩んだすえ、傍聴席へと探しに行く。

ミッシェンクリア。

実はイリスにはわざと迷子になるように言っている。

これで、邪魔者は消えた。

「さあ、前準備は済んだ。ここからが本題だ」

俺は弁護席に座り、ポケットから眼鏡ケースを取りだし、眼鏡をかける。

「ユウマさん。お茶が入りました」

エリスは俺の前に紅茶の入ったカップを置き、隣に座る。

俺はお礼を言って、紅茶を一口飲み敵陣営を見る。

検査官はセナ、告発人は小太りの中年、この地方を治める領主、アレクセイ・バーネス・アルダープだ。

エリスから聞いた話では私利私欲のためにしか動かない悪徳領主とのこと。

まあ、実際に見た感じでは、ただの嘸ませなんだが。

そんなことを考えているうちに、裁判長が席に座り、木槌を鳴らす。

「えー、静肅に、静肅に。これより、国家転覆罪に問われている被告人、サトウカズマの裁判を始める！ それでは、告発人は前に」

裁判長の呼び掛けで前に出たアルダープはカズマを見下した後、俺達の方へ目を向け、俺を軽く舌打ちした後、エリスを舐めるように見て席に座る。

こいつ、視姦で訴えてやろうか？

「では、検査官は前に！」

裁判長の言葉で検査官のセナは立ち上がり、前に出て起訴状を読む。

起訴状を読み終わると次はカズマの陳述が始まり、一通り話した後、疲れた顔で裁判長は言う。

「検査官。被告人に国家転覆罪が適用されるべきだとの、証拠の提出を」

裁判長に証拠の提出を言われた、セナは立ち上がり、紙を読み始めた。

「これより、被告人がテロリスト、もしくは魔王軍の関係者である事の証明をします。証人はここへ、どうぞ」

セナの呼び掛けで前に出てきた証人達は、どれも顔馴染みの冒険者だった。

「まず、ミツルギさん。あなたは前に気絶させられたあげく、魔剣を奪われたとのことですが」

最初に前に出たのはソードマスターのミツルギ。
なんとめんどろなことを。

「ええ、確かにそうですが、それには事情がありまして、あれは僕から……」

「真実だったという確認が取れたので結構です。ありがとうございます。」

騎士達によってミツルギは傍聴席へ追い出される。

「聞けばミツルギさんは魔王軍から多額の懸賞金がかけられてるほどの冒険者とのこと。また、王都でも活躍される冒険者です。そんな冒険者の妨害をすると言うのは魔王軍の関係者であるという証拠です！」

「異議あり！」

俺は勢いよく声を出す。

「弁護人どうぞ」

「はい。まず始めに、ミツルギ氏が気絶させられた理由ですが、これは、ミツルギ氏自身がお我々に決闘を挑んできたからにあります！また、魔剣を奪われたとのことですが、これは僕がデュラハン討伐のため拝借したため、被告人には悪くありません。」

裁判長はベルを見るが、ベルは鳴らない。

「鳴らなかったとのこと、証拠不十分とします。次へ」

裁判長の木槌の音でセナは次の証人、ミツルギのハーレムに話を振る。

「えー、お二人は公衆の面前で下着を剥ぐと脅されたと。」

「そうです！脅されました！『俺は真の男女平等主義者だから、女でも容赦しない』と『女相手なら、この公衆の面前で俺のステイールが炸裂するぞ。』といやらしい手つきで言われました！」

周りの女性達の冷たい視線が、カズマの背中に刺さる。

「異議あり！その発言は確かにやりすぎた言動ですが、その二人に絡まれて困っていた僕を助けるために言った言葉です」

俺は必死に反論する。

当然、ベルが鳴らないためこれも証拠不十分だ。

だんだんセナの表情が追い詰められていく。

「ええ、では最後の証人となりますが……」

「おうおう、裁判を待つてる最中に呼ばれたから、来てみたらなんだその態度は！」

次に行われる裁判の被告人のダストはセナのうんざりした態度を見て、キレ始める。しかし、そんな態度は気にせず、セナはダストに尋ねる。

「ダストさん。あなたは被告人、サトウカズマと仲がいいと聞きますが、それは？」

「当たり前だろ？俺達は親友の仲の親友。一緒に酒や飯を食う仲だ」

「とのことですが、サトウカズマさん、本当ですか？」

「知り合いです」

カズマの一言にダストは落ち込む。

そして、裁判長達の見るベルは鳴らない。

「そ、そうですか。証人による証拠は不十分となりましたが、被告人は被害者に対し恨みを持つていると、事情聴取の取れました。この事から、被告人はランダムテレポートではなく、通常テレポートで」

セナは苦しい顔で証拠と考察を並べてくる。

この証拠にはベルの音はならない。

だか、もう結果は見えている。

いくら証拠を並べようとこちらにはそれを打ち消す、証拠を用意してある。

気がつけば、アクア達がイリスを見つけて、傍聴席の前にいた。

そろそろ頃合いだ。

「また、被告人にはアンデットの専用スキルである、ドレインタッチの使用を促す言動があるほか、魔王軍との関係があることが確認されており……」

「もういいでしょう」

俺はセナの言葉に割り込む。

「裁判長！ 長々と続けるのは、領主殿にも失礼でしょう。ここで、決定的な事を被告人から言わせてもらいます。……とその前に、さつきからベルが鳴らないので、一応壊れてないか確認のため、使用させてもらいます」

俺は席を立ち、傍聴席からアクア達3人とイリス入れる。

「では、まずアクア。お前、俺の取っておいた柿ピー、全部食ったよな？」

「な、いきなりどうしたのよ、ユウマさん？ そ、そんなことをするわけないでしょ？！」

いきなり話を振られたアクアは、動揺して否定する。

チーン。

ベルの音が裁判所に響く。

それと同時にアクアは俺に土下座する。

「お前、滅給な。次、めぐみん!」

俺に指差されためぐみんは顔をそらす。

「めぐみん。俺のデストロイヤーフィギュア。全部爆発させただろ?家に帰ったら、デストロイヤーの無惨な破片が落ちてたんだが」

「そ、それは気のせいでしょう……。なんのことか、私にはさっぱり……」

チーン。

「お前も後で覚えてろよ?次、ダクネス。……お前DMだろ?」

「そ、そんなことあるはずないだろ!」

必死に否定するダクネス。

だが、真実は残酷だ。
チーン。

「イリス。俺の作ったプリン、食べたのはお前だよな？」

俺の言葉にイリスは諦めたのか、上目遣いで言う。

「はい。ごめんなさい。美味しそうだったのでつい」

ベルは鳴らない。

イリスは正直に自白したようだ。

それにしても、可愛いな。

「偉いぞ、正直に言っつて。この裁判が終わった一緒に作ろうか」

イリスは満面の笑顔で抱きついてくる。

いいぞ、これ。

「と、まあ。お遊びはここまでにして。被告人、カズマさん。あなたは、テロリスト、または魔王軍の手先ですか?」

俺はカズマの方に向き直り、問う。

その問いに対し、カズマは大きな声で

「違う!俺はテロリストでも、魔王軍の手先でもなんでもない!!」

辺りが静まりかえる。

全員の注目していたベルは音をならさない。

ミッシヨンコンプリート。

俺らの勝ちだ。

「魔道具による嘘の判別は、曖昧なものです。ですが、貴方が、罪人である根拠は薄すぎます。よって、被告人サトウカズマ、貴方の嫌疑は証拠不十分として……」

裁判長が判決を下すその瞬間。

「何を言う裁判長、私に恥を書かせる気か？その者は魔王軍の手先であり……」

アルダープは裁判長を睨み、口を開いた。

「……」が、それに対しダクネスが口を挟む。

「アルダープ。いい加減にしないか。判決は決まっている。貴様こそ、貴族の名に泥を塗らせる気か？」

ダクネスはカズマの、前に立つ。

右手にはペンダントらしい物を持っている。

「それは、ダクティネス家の紋章。まさか、あなた様は」

裁判長とセナは動揺のあまり、固まる。

「く、やはりあなただったか。……ララティーナ」

アルダープは苦い顔でダクネスをみる。

ダクティネス家。イリスに聞いた話では王都の王家の懐刀と言われる、この国トップランクの貴族とのこと。

まさか、ダクネスがそのトップ貴族だったとは。

「わかりました。ここは引きましよう。他の貴族ならまだしも、貴方の顔に泥を塗る訳にはいきません」

「わかってくれて結構。だが、貴方の屋敷を壊したのは私の仲間だ。仲間の責任は私の責任。この責任は私が取らせてもらおう」

ダクネスはアルダープに向かう合う形になる。

その時、アルダープのダクネスを見る目に危険を感じた。

「その必要はない。領主殿、屋敷の弁償代は俺達のデストロイヤー討伐金で払う。だか

ら、ダクネスには手を出すな」

何故だろうか、考えるより先にその言葉が出ていた。

アルダープは俺を睨みつけると、席を立つ。

「ふん。冒険者風情が。いいだろう、今回はララティーナ嬢の顔を建てて見逃そう」

アルダープはそう言い残すと、護衛の騎士に案内されながら裁判所を出る。

見事、カズマは無罪。

傍聴席にいた、冒険者達はカズマを囲ってお祭り騒ぎをしている。

これで、一件落着。

そう、俺が心で呟いた時だった、凄まじい寒気を感じた。

第13話 変態とぼっちと爆裂魔と

いつもの朝。

ここ最近はいろいろありすぎてゆっくり眠れてなかったが体とは単純なものだ、いつも通りの時間に起きてしまう。

まだ脳は覚め切ってないので、少しぼーとする。

下の部屋からは油の音と朝飯の匂いがする。

二度寝したいところだが、作ってくれてる人に悪い。

下半身を覆ってる掛け布団を横にどかし、部屋をでる。

「おはよ」

「おはようございます。ユウマさん」

どうやら、今日の当番はエリスだったようだ。

エリスは笑顔で挨拶を返してくれる。

「悪い、ちよつと水借りる」

軽く会釈して、蛇口をひねって顔を洗う。

「もう、ここには手拭きしかないんですから」

手拭きしかないことに気づいて、顔から水をたらしながら静止している俺にタオルを渡してくれる。

「ごめん、ありがと」

俺は顔を拭いたタオルを首にかけて食卓の席に座る。

駄目だ。頭が回らない。

イリスは俺を待ってたようで、少しご機嫌斜めだ。

うちの食卓では、エリスから全員揃っていただきますするようにと言われているため、周りをしつかり待たなければならぬ。

朝飯の準備を終えたエリスは俺の正面の席に座る。

「いただきます」

今日の朝飯はベーコン、目玉焼き、野菜と典型的な物となっている、ちなみに白米かパンかは個人で決めたものになっている。

俺は水を一口飲んでから、白米を口に入れる。

ああ、味噌汁が飲みたい。

この世界では基本野菜の値段が高い、が、その中でも大豆はずば抜けて高い。

理由としては、すばしっこく逃げるため手に入りきくいからだ。

そのため、大豆を原料とする物は基本高い。

「エリスの料理は美味しいですね。典型的な料理でも、作る人によつてはここまで変わる」とは

「まあ、ありがとうございます。デザートに、ヨーグルトも用意してるのでよかったですね」
おぞぞ

「これは！デザートもあるとは。エリスは本当にエリス様のように慈悲深い人ですね」

何を言ってるのか。ここにいるのはそのエリス様、ご本人だよ。

……ん？

俺は横の席を見る。

そこには、当たり前な雰囲気です座っている、めぐみんがいた。

「さつきからエリスの顔を見て、いやらしい顔をしてると思えば、いきなりこちらを見て驚くとは、あなたは表情豊かですね」

「な、なんでお前がここにいんだよ！てか、別にいやらしい顔なんかしてねえーし。人の家に勝手に上がっておいて、失礼なやつだな！」

俺はめぐみんを指さしながら必死に否定する。

すると、めぐみんはやれやれとした顔で言う。

「本当、男は単純ですね。やっぱりあなたは、毎朝アクアやダクネスを見ては同じ反応をするカズマと大差はないようです。どうせいやらしい夢でもみてたんでしょ？」

己、めぐみん。

貴様というやつは！

「ユウマさんはそんな人じゃありませんよ」

エリスは俺のカバーをしてくれる。

ああ、やっぱり女神様だ。

俺がうんうんと頷いていると、ご機嫌斜めなエリスは一つの紙袋をエリスに差し出す。

「確かに、ユウマさんはそんな人じゃないですよね」

エリスは差し出された紙袋の中を見る。

あ、それは！

「ま、待ってくれ！それは！」

だが、遅い。俺の必死な呼び止めは空に消え、エリスのほうから鬼の気迫が溢れ出す。「後でお話願えますか？」

「はい」

俺は諦めて、下を向きながら言う。
オワタ。

そのまま朝食の時間はなんとも言えない空気のまま終わり。
めぐみんとエリスが後片付けをしている中、俺は和室でエリスに怒られる。

「別にいいじゃん！俺は思春期なんだよ！」

そんな言葉を心で眩き、エリスの怒りが消えるのをひたすらに待つ。

台所のほうからはめぐみんの笑い声が聞こえる。

こいつ、後でカズマに頼んで、大衆の前で服剥がしの刑にしてやる。

いや、それはまたエリスに怒られるな。

それから、一時間。ついにエリスの怒りは沈下し、「まだ、思春期前の子がいるんですから」と言う言葉を残し、紙袋を手を持ったまま外へ出る。

さらば、地球での思い出……。

落ち込んでいる俺の背中を、腹を片手で抑えながら笑う、めぐみんがさする。

「ま、まあそういうときもありますよ。ハハハハ」

畜生、殴りたい！こいつが男なら殴ってたのに！

「で、お前は何なんだよ。朝から飯たかってきてよ」

終わったことは仕方がない。そんなことより、こいつがなんで朝から来てるかが謎だ。

「ああ、つついっ面白くて本題を忘れてました。少しいてきてくれませんか？」
俺はめぐみんに連れられ、家を出る。

「さあ、決着を着けましょうか」

アクセルの街の正門、デストロイヤーを向かい討った高野でめぐみんは言う。

「私はあなたがデストロイヤーを爆裂魔法で粉碎したあのときから、決着をつける日はずっと待ってました。どちらが上であるか早く決めたいと！ですが、戦いを挑もうとしても、牢屋に入れられるわ、裁判をやるわで、そんなことをする暇がなく」

めぐみんは熱弁をし始める。

まあ、簡単に言うのと、どちらの爆裂魔法が凄いのか競いたいようだ。

「別にいいけどさ。お前一発しか打てないだろ？」

俺の言葉にめぐみんはハ？とした顔で見てくる。

「いやさ、俺は魔力の回復が速いらしくてさ、撃とうと思えば何発でもやれるんだよ」

まあ、打ち過ぎれば魔術回路が焼かれてそのままおじゃんなんだが。

「別に一発勝負だからあれだけど、おわー！」

「爆裂魔法を何発も打てるなんて、どんな事をしたんですか！」

めぐみんは俺の襟を掴んで揺らす。

「別になんもやってねーよ。ある日突然、回復速度が上がったんだよ。てか、揺らすの止めろー！」

俺は無理矢理、めぐみんの腕を離す。

本当気性が激しいな。もう。

「ほら、やるんだったとつととやるぞ。じゃないと帰る。俺はこれからどうエリスの機嫌をどう治すか考えなきゃいけないんだ！」

「そうですか、わかりました。いいですよ、やりましょうか」

めぐみんは仕方ないという表情で前の丘に振りかえり、杖を出す。

競いたいという気持ちは本当だったらしい。

めぐみんはいつもより、丁寧に長々と詠唱する。

「我が狂気を以て現界せよ！穿て！《エクスプロージョン》！」

大きな音とともに地鳴りが、響く。

俺が見てきた、めぐみんの爆裂魔法の中ではトップランクの一撃だ。

少し高くできていた丘は、まるで月のクレーターのようにはこむ。

これは負けられないな。

「こんなもん見せられたら、頑張りたくなるじゃないか」

「さあ、ユウマの番ですよ」

めぐみんは仰向けに倒れ、俺を見る。

当の本人と最高の出来だと満足した顔でいる。

「悪いが、俺は極度の負けず嫌いだな」

結界から短剣を取りだし、爆裂魔法によってできたクレーターを見据えて詠唱を始める。

「燃えろ、燃えろ、燃えろ！すべてを燃やす破滅の焰よ」

「詠唱が違う!？」

俺の使える爆裂魔法の属性は一種類じゃない。

全属性使えるんだよ！

「今、その姿を現し、その目に写る全てを焼き尽くせ！穿て！《エクスプロージョン・イグニシヨナル》！」

黒き破滅の光を飲み込んだ炎はめぐみんの作ったクレーターへ一直線に向かい、爆ぜる！

大きな爆発音とともに砂煙が視界を遮る。

そして、視界が晴れた時、めぐみんの作ったクレーターの倍の大きさのクレーターができていた。

「……。」

「まあ、俺にかかればこんなもん、おわ！」

めぐみんが足についてくる。

「私に、その爆裂魔法を教えてください。お願いします。なんでもしますから」

ん、今なんでもって？

おっと、癖が出てしまった。

「いや、駄目だ。」

「何ですか！貧乳な私では不満ですか！」

「貧乳は別に関係はない。そんなことより、お前これ覚えても、むやみに打ちまくるだろ。だから駄目」

俺の爆裂魔法の悪い点。それは周りに対しての被害が大きいことだ。

例えばこの前の氷の爆裂魔法。あれを畑とか水産業をやってる水辺の近くで使えば、凍って迷惑になる。この炎の爆裂魔法だって、森とかの木が多い場所で使えば山火になる。使うときは場所と属性を選ばなければいけない。

かつこよさやその場の気持ちで使うものではないんだ。

「わ、私がそんなことやるわけないじゃないですか！な、何を言ってるんですか」「諦めないと置いて帰るぞ」

と、その時だった。

突然視界からめぐみんが消える。

「もしかして、」

そのもしかしてだった。

気がつけば、爆裂魔法の爆発音で目を覚ましたジャイアントトードに囲まれていた。

「めぐみん！大丈夫か！」

「私はお気になさらず。蛙の中は暖かいのしばらくこうしてます。最後に救ってでもください」

めぐみんは蛙の口から顔を出して言う。

よし、朝の仕返しだ置いてってやる。

一匹の蛙が舌を俺の方へ出してくる。

「甘いな！《固有時間制御・二倍加速》！」

体内の時間を加速させ交わし、結界から短剣を放ち、蛙の目を潰す。

痛みからか、苦痛で開いた口に爆発ポーションを投げこむ。

流石に、蛙が四散するほどの威力ではないが、内蔵はめちゃくちゃ、まず一匹撃破。め

ぐみんの蛙を抜いてあと4体。

いい感じだ。そのまま前にいる3体も同じように目潰しからの内臓爆散！

あとは後ろを片付けて離脱する。

その時だった。気づけば蛙の舌が、俺の胸に巻き付いていた。

「《ライト・オブ・セイバー》！」

その透き通った声と同時に俺を飲み込もうとした蛙は体を真っ二にして倒れる。

蛙の体を貫通される魔法といったら、上級魔法だろうか。

「ありがとう！助かったよ」

俺が礼を言うのと、とても素晴らしい体の少女は頬を赤くしてもじもじとする。

「あの。そろそろヤバイです。助けてもらえないでしょうか。今朝のことは謝ります。

だからお願いしまふ」

声のする方へ顔を向けるとめぐみんが蛙の口の中へ吸い込まれていった。

「はあ、わかったよ。全剣連続投射！」

蛙の首元に短剣を向け、結界から短剣を射出する。

すると、蛙はぐちゃぐちゃとした何かと一緒にめぐみんを吐き出し倒れる。

「ほら、立て。今日は許すけど、次あんな状況を作ろうとしたら、カズマにえげつないこと頼むぞ。」

俺はめぐみんの腕を引つ張り無理矢理立たせる。

「ーがまだ、魔力が戻ってないのか地面に倒れる。」

「仕方ねえな。ほら」

俺はめぐみんはおぶる。

「カズマやダクネスより高くていいですね」

「そりやどーも。悪いけど俺はお前の乗り物じゃないことを肝に命じといてくれ」

なぜかめぐみんはその言葉には返事をしなかった。こいつ、もしかして乗り物だと思ってるな。

俺は少しいらいらしながら街へ帰ろうとしたとき。

「待って、めぐみん！」

俺は振り返る。声の主はさつき助けてくれた、たわわな少女だった。

「久しぶりねめぐみん！約束通り、修行を終えて帰ってきたわ！あのときの約束を果たすときよ！」

少女はめぐみんを指差す。

おお、揺れた！揺れだぞ今！

俺はおぶっていたためめぐみんを見る。

するとー

「どちら様ですか？」

「ええ!？」

めぐみんはとぼけた声で少女に言う。

だが、少女を見るとなんとなく、かつこがめぐみんに似ているのがわかる。瞳もめぐみんと同じで紅い。

こいつ、わざとだな？

「私よ私よ！紅魔の里の学校で同期だった！めぐみんが一番で、私が二番で！上級魔法を使えるようになったら決着をつけるって約束した」

少女は今にも泣き出しそうな顔で言う。

おいまて、今なんて!?

「めぐみん、お前が学校で一番だったってマジかよ?」

「ええ、本当ですよ。私は紅魔族随一の魔法使いです」

「へー。じゃあそれに勝ったら俺は紅魔族より強くてことだな」

「ち、ちよつと待つてよ!」

俺の言葉に怒って、ポカポカと殴ってくるめぐみんに少女は慌てて言う。

「ねえ、めぐみん、本当に忘れちゃったの? あなたに負ける度にお弁当を巻き上げてきた私を!」

一番腹が減る昼の救世主である弁当を巻き上げていただと!?

こいつ、朝といい、本当食い物に飢えるな。

「お前、最低だな」

「なんのことでしようかね」

めぐみんは顔をそむける。

少女はガクリと膝から地面に崩れ落ちる。

流石にかわいそうだ。

「本当はお前、覚えてるだろ? せっかくの友達なのにそんな態度はあんまりだろ」

「知りませんよ。大体、名前を名乗らないなんて怪しいじゃないですか。これはあれです、アクアに教わった、オレオレ詐欺ですよ」

めぐみんは俺の背中トントンと叩いて、帰るように言う。

てか、アクア、お前は何を教えてるんだ？

「ちよつと待つてよ！わかったわよ。名乗る、名乗るから！……我が名はゆんゆん。アークウィザードにして、上級魔法を操る者。やがては紅魔族の長になる者……！」

ゆんゆんと名乗った少女は胸を揺らしながら、着ていたマントを翻る。

とてもゆんゆんしてますね。

「とまあ、彼女はゆんゆん。紅魔族の族長の娘で、自称私のライバルを名乗るからストーリーです」

「おい、本当お前は最低だな。友達を粗末に言うなよ。俺はさつきめぐみんを爆裂魔法で負かしたユウマです。よろしく、ゆんゆん」

「やつぱり、覚えてるじゃない！……て、ユウマさんは私の名前を聞いても笑わないんですか？」

ゆんゆんは顔を真っ赤にして聞いてくる。

さつきの名乗りといい、紅魔族はこんな感じなんだろう。

「別に。せつかく親が考えてつけてくれた名前を笑うなんて、失礼だろ？」

驚いた表情で俺を見てくるゆんゆん。

まあ、俺なんてアクアの事件以降、街の一部じゃ酷い言われようなんだよな。

「いい仲間を見つけたようねめぐみん！流石、私のライバルね」

ゆんゆんは嬉しそうにめぐみんを指差す。

「どうやら、彼女のうちの俺の評価が上がったらしい。」

「どうだ、外は寒いし立ち話じゃなんだから家にこないか？めぐみんも今日は魔力切れでしばらくは動けないし、なにより、背負っている俺が辛いんだ」

「え、ほ、本当ですか!?!じゃあ少しお店によつてお菓子でも用意しないと……」

「ほんと、めんどくさい女ですね。こういうのは遠慮せず行くもんなんですよ。だからあなたはボッチなんです」

「こら、お前は遠慮がなさすぎるんだよ。少しはゆんゆんみたいに気を使えるようになって」

「と言うことで俺達は家に行くために街の商店街に行くことになった。」

第14話 クリスの花

平原から歩いて10分程度。

俺達は街の商店街に着ていた。

「今日はなんだか騒がしいな」

「小さなお祭りをやってるらしいですよ」

俺の言葉に、背中におぶってるめぐみんが返す。

ほーん、それなら納得だ。

「そ、それじゃあ、私はケーキを買ってくるので20分後くらいにここに集合という形で」

「おう、了解了解」

「私はイチゴのショートケーキで。なるべく大きなイチゴを選んでくるんですよ」

「おい、本当に意地汚いなお前は」

食べ物に飢えすぎてるなほんと。

この子は、わきまえる事を知ってるのかしら。

「貰えるのなら遠慮せず。それが我が家の家訓です」

「はいはい」

適当にめぐみんの言葉を流して人混みの中を歩く。

それにしても人が多すぎて、露店が見えないな。

「さあ、挑戦者はいませんか!? 伝説の鉱石アダマントタイト! 見事、破壊できたら高額賞金をプレゼント」

「へー、伝説の鉱石ね。面白いこと考えるな。て」

俺の背中を乱暴に降りるめぐみん。

なにも蹴ることはないだろ。

「お前はもう撃てないだろ。大人しくして。」

「いえ、ご安心を。以前アクアからいただいた魔力回復ポーションがあります」

キラキラした水の入った試験管を見せつけてくる。

これは要望が多くて現在は販売中止にしてるやつだ。

めぐみんは勢いよくポーションを飲み干すとマントを翻しいつもの登場をする。

「そこのお店の方。そのアダマントタイト、私が見事粉碎して見せましょう」

「おや、君は?」

「我が名はめぐみん！最強の攻撃魔法。爆裂魔法を操る者!!」

毎度お馴染みの名乗りをあげて、やる気十分なめぐみんを見て周りの冒険者達は騒ぎ始める。

「兄ちゃん、逃げろ！こいつが例の爆裂魔だ!」

あーあ、知らね。日々の行いてやつだな。

アダマタイトの店に野次馬が集まってきたのをいいことに、空いてきた道を歩く。すると、アクセサリーの並べられた店が見に写る。

RPGゲームと違ってアクセサリーに特別な能力があつたりするんだよな。さて、この世界にはあるのか。

見た感じだと、どこかのダンジョンとかのお宝物って感じの物が多いな。

「何かお探しの物でも?」

中腰になって商品を見てみると横から声をかけられる。

多分、店の店員さんかな?

「珍しい物が多いてついつい。……て、サツキさん!」

青いエプロンを着けたこの店員さんは微笑む。

茶色い髪色に、スレンダーな体。一度見たことのある微笑み。間違いなくサツキさんだ。

「はい。後輩に幸運の女神を、同期に水の女神を持つ、記録の女神サツキです。お久し振りでですね、工藤さん」

サツキさんは、それはそれは丁寧な自己紹介を交えた挨拶をしてくれた。

「ええ、お久し振りでです。……てそんなことより、仕事はどおしたんですか!?!それに女神様がこんな所で商売だなんて」

俺の混乱した様子をみてクスクスと笑うサツキさん。

「話すと少し長いんですが、あなたをこの世界に送った後、全能神様からエリスの仕事を引き継ぐよう言われました。それでエリスの隠れ仕事だった神器回収をしていたのですが、資金が底を尽いてしまい、今はダンジョンで手に入れたお宝を、売って商売してるんです」

「資金が尽きるって……」

まさか、神器は女神様直々に回収したりしているのか。

まあ、悪用されたら大変そうだが、そういうのは能力とか使って集めてたりしてるのかと思っただ。

「まあ、私の力を使えばすぐに集められるんですけどね」

「は!?!」

「一応私は記録の女神なので、世界に記録されてる能力ならなんでも使えるんです。」

まあ限界すると、その能力も弱体化しちゃうんですけどね。なら、天界で使えてことですけど、それは面白くないですし」

開いた口が塞がらない。世界に記録されてる能力ならなんでも使える!? そんなのチートを越えてるじゃん。

「サツキさん、会計の整理終わったよ。ん？誰と話してるの？」

レジの後ろのテントから女の子が出てくる。

見た目は銀髪のショートで右の頬には傷がある。

あれ、誰かに来てる気が。

「お疲れ様、クリス。この人が工藤さんですよ。工藤さん、こちらはクリス。エリスがこの世界に限界していた時の分体です」

「へー、君がユウマ君か。よろしくね」

「よろしくです、クリスさん。……そのエリスの分体でことは」

クリスさんの出してきた手を握り、握手をする。

すると、クリスさんは右手の人差し指で頬の傷をかきながら照れる。

「クリスさんだなんて、呼び捨てでいいよ。ああ、私はエリスの分体だったけど、今はエリスが下界に降りてパスが切れたからこの通り、自我をもつて自由にさせてもらってるよ。」

安心してと、笑いながら言う。

「パスが切れてるから、情報の共有もできないよ。あの子、ああ見えて結構焼きもち焼くから。尽くすタイプだけど、めんどくさいんだよねー」

「え、いや、別に俺とエリスはそういう関係じゃ……」

「あー。ユウマ君は女性経験はないのか」

「仕方ないですよ。前の人生では男の人の汗に囲まれて生きてきましたから」

「サツキさん、止めて！それじゃ俺がホモに聞こえてくるから！」

俺の言葉を聞いて2人は腹を抱えて笑う。

すると、クリスは俺を見て。

「大丈夫大丈夫。ユウマ君が大の女好きなのは分かってるから」

はい？

「ええ、街の冒険者の間では有名ですよ。魔道具店の店主さんを、赤字を弱みにして、経営をよくする代わりに昼間から楽しいことをしに行ってるとか。」

「ご、誤解ですから！別に弱味なんて握ってないし、二人で楽しい事やってただの魔法の修行ですから！」

俺の必死の説明に二人は大笑い。

もしかして、俺のからかってる？

「いや、そんな顔しないで。くすす。あまりにユウマ君が必死に説明してくるから、面白くて。ユウマ君でピユアなんだね」

「そうですよ。別にけなしたりとかはしてませんから。あまりに必死なのがかわいくて、少しからかっただけですから」

「どうやら、俺の純粹な心はもてあそばれてたらしい。」

「もう、ぐれちゃおうかな。」

「俺のむすつとした顔を見て慌てて話を換えようと、サツキさんは言う。」

「そ、そういうええどうです、このネックレス。エリスへの贈り物にしてみては？」

「薄紫色の花のネックレス差し出してくる。」

「これは？」

「クリスの花をモチーフとしたネックレスです。クリスの花とはこの世界の花でして、

花言葉は諦めない心です」

「諦めない心。こういうのは陸上時代に欲しかった。」

「それにしても、なかなかの出来だ。花の一枚一枚が綺麗に丁寧に作られている。サイズも小さいし身に付けてても邪魔にならない。」

「エリスへの贈り物はこれにしようかな。」

「じゃあこれください」

「10万エリスになります」

サツキさんは笑顔で手のひらを出してくる。

え、この雰囲気だとただでくれるのではないのか。

なかなか商売上手だな。

俺は渋々と財布から10万エリスを出し、手のひらにのせる。

「お買い上げありがとうございます。箱に入れますか？」

「お願いします。あと出来たらリボンもつけてもらいますか？」

「ふーん。プレゼントかー。いいんじゃないかな。エリスも喜ぶと思うよ」

クリスはご機嫌そうにいう。

クリスがご機嫌ということはエリスも喜んでくれるのかな。

「それじゃあ、俺は待ち合わせしてる奴等がいるんで」

「ご来店ありがとうございます。いい冒険者ライフを」

「また、機会があったら会おうね！」

二人とも笑顔で見送ってくれる。

楽しかったな。たまにはこういう買い物も悪くない。

お店の品の手入れをしているサツキに対してクリスは言う。

「それにしてもユウマ君」

「クリスも気付いてましたか」

サツキさんは作業を止めずに切なそうにユウマ君の歩いていったほうを見る。

「あれはアクアにも、本人にもまだ気づいて」

「そうとう、混ざってるのね」

少し暗くなった雰囲気を変えようように、商品の入った箱を並べ直しなが

ら、私は言う。

「次は王都を狙うんだよね」

「ええ、あそこにあると思うんですよね」

そうかと私は呟く。

王都に隠された神器。それがサツキさんの狙ってる物らしい。

「それじゃあ、いつてみよう！」

――

俺は買い物したものを結界内にしまい、再集合の場所へ向かう。

集合地点にはすでにめぐみんもゆんゆんも着ていた。

「遅いです。時間に遅れて来るとはおかと思えますよ」

珍しくめぐみんがまともな事を言うので少し驚いた。

あれな所を抜いたら結構まともな人間なのかもしれない。

「ごめん。知り合いと話してたら遅れた」

「私は全然気にしてませんから！大丈夫です」

ゆんゆんはあわあわと両手を振る。

すると、両手に合わせて胸も左右に動く。おお、ヤバイ。ゆんゆんは一つ一つの動作

がとても素晴らしい。

「なーにを、鼻の下を伸ばしてるのですか。遅れてきて、挙げ句の果てにエッチな事を考

えるとは、カズマに負けず劣らずのダメ男ですね」

「そ、そんなこと考えてないわい！勝手な言いがかりをするなら、家には入れないぞ！」

「別にいいですよ。その変わり、今のことをチクリます。朝のことから懲りずにやって
いると」

めぐみんは勝った顔で俺に言う。

ヤバイ、そんなことされたら、一生の終わりだ、

「それだけは勘弁を。俺の居場所が無くなる。……そ、そうだ。とっておきの食い物が家にあるんだ。今日の晩飯にそれを食わしてやるから。このことはノーカンに」

「ほう、とっておきのですか。それは是非いただきましょう。ユウマは話の分かる人ではないですね」

「そうだろ、そうだろ。そうと決まればとつと帰ろうぜ」

二人より先に歩きだす。めぐみんは食い意地が張ってるから食べ物でつればチョロい。

なんとか、助かった。

それからは特に何もなく平和に家つくことができた。

めぐみんはというと、俺の言ったとつとておきをとても楽しんでいるらしく、ちよっかいをだしてこなかった。

「到着。ここが俺のパーティーの家だ」

「綺麗なお家ですね。それにしても、冒険者が家にパーティーごと住むなんて珍しいで

すね」

ゆんゆんは凄く楽しそうな顔で言うが、緊張しているのか、どこかぎこちない動作をしている。

「まあ、俺達の故郷はここから遠く離れた場所にあるからね」

俺はそのまま、二人の先頭を歩いて家の敷地に入る。

すると、外の掃き掃除をしていたエリスがこちらに気づく。

「ユウマさん、おかえりなさい。あら、お客さまですか？」

エリスは俺の後ろにいたゆんゆんを笑顔でむかえる。

ーが、何故だろうか。その笑顔が俺に向いた瞬間、とてつもない、寒気が背中を襲う。

「紹介しますよ、エリス。私の横にいる彼女はゆんゆんといまして、紅魔族の族長の娘です。ゆんゆん、この方はエリスといまして。あの女神エリス様と同名にして劣らぬ慈愛を持っている、ありがたい人です」

「大袈裟ですよ、めぐみんさん。よろしくお願います。ゆんゆんさん」

「あの、こ、こちらこそよろしくお願います」

焦りぎみなゆんゆんに優しく微笑むエリス。

良き良き。

それにしても、ゆんゆんがお辞儀をした時に、また胸の揺れに目がいってしまった。まあ、仕方ないよね！男の子だもん！

「中でイリスが退屈にしているので、遊んであげてください。」

二人の後に俺も家に入ろうとする。

しかし、ジャージの端が引つ張られて入れない。

あれ？おかしいと思って振り返ると、そこには満面な笑みのイリスがジャージを引つ張っていた。

「少し、お話したいのですが、お時間よろしいですか？」

あー、駄目だ。声が怒っている。

「ど、どおして怒っていらっしやるのですか？」

目には見えない威圧に押されて、敬語になってしまう。

「いえいえ、怒ってなんかいませんよ？私はいたって平常です」

「そ、そうか！それならよかったよかった。あはははは」

「あはははは」

バキッ！固いものの折れた音が乾いた空に響く。

音のしたエリスの手を見ると、そこには竹ぼうきが無惨な姿に折れていた。

「何が、よかったですか！朝のことに懲りず、今度は女の子に手を出そうとしたんですか

「！」

「ご、誤解だ！ゆんゆんはめぐみんの友達であって、今日はめぐみんが魔法を使えないから、家と呼んだんだ。けしてやましいことは考えてない！」

これ以上はないほど、必死に弁論する。

そう、俺は100%善意で呼んだんだ。それを理解してほしい。

「じゃあ、なんで、何回もゆんゆんさんの胸を見てたんですか。」

エリスの言葉に俺は凍りつく。気づかれていた。それに関しては何も言えない。

どおする、どおする、クドウユウマ！考えろ、考えるんだ。エリスの納得いく理由を
考えるんだ！

「……そ、それは」

どれくらい考えたのか。体感では長く感じたが、実際はかなりはやくだったかもしれない。
ない。

とりあえず、気づいた時には口が動いていた。

「年頃の男の子は大きい物に目が行く習性でな。これは抗えない性なんだ」

その言葉を聞いて、エリスは笑顔になる。

よかった理解してくれた！と一瞬でも考えた俺はバカだった。

そう、けしてエリスは納得なんてしていない。

それどころか、怒りが沸点を越えてしまっていた。

どうしよう、なにかこの状況を打開する手は!!

その時、昔やったギャルゲーが頭に浮かんだ。

そして、エリスが口を開く前に、俺はエリスの手を握る。

「と、言いたいんだけど。……よく考えて欲しい。うちのパーティーにはこんなに素晴らしい女性がいる。なのに、俺が他の女性に目がいくと思うか？それに、ゆんゆんは年下の女の子、俺のストライクゾーン外だ。つまり、俺がゆんゆんをいやらしい目で見るなんてありえない！気のせいだよ。そう、気のせい！」

「……本当ですか？」

怪しいという目で見てくる。

だが、怒りはない。

あともう一踏ん張りだ！

「本当の本当。そうだ！エリスに渡したい物があつたんだ！」

俺は境界内から長方形のリボンの付いた箱を出してエリスに渡す。

「これは？」

「開けてみて」

不思議そうにリボンをほどくエリス。

完全に疑心を振り払うことができた。

箱を開けるとエリスは驚いた顔で俺を見る。

「実は今日、街の商店街で小さいお祭りがあつてさ。日々のお礼もかねて買ったんだ」
「このネックレスの花。もしかしてクリスの花ですか？」

エリスはさつき怒りの入った笑顔ではなく、嬉しそうに笑う。

「私、この花好きなんです。花言葉「諦めない心」って、え？この花はユウマさんの世界にはない気が」

「え、えっと、知り合いに教えてもらったんだ！」

ここで、サツキさんやクリスの話を出すのは止めておこう。またややこしくなる。

俺が頭をかいて笑っていると、エリスはさつそくネックレスをつける。

「ど、どうですか？」

顔を赤くして、指をもじもじとしながら聞いてくる。

「ヤバい、可愛い!!二重で可愛いぞ！」

「うん、似合ってるよ！」

「あ、ありがとうございます」

エリスは恥ずかしそうに顔を下に向ける。

そして、少ししてから俺の手を握り

「さつきは、疑つてすみません。ネックレス、ありがとうございます」

俺の顔を見上げるように今までで、一番の笑顔を見せてくれる。

んー、マーベラス。素晴らしいネックレスを売ってくれてありがとう！サツキさん。

「それじゃあ、私達も中に入りましょう。いつまでも外にいたら風邪引いてしまいますし」

そのあととはとてもほのぼのとした時間だった。

みんなでトランプをしたり飯を食ったりと。朝からすねてたイリスはゆんゆんとも仲良くなり、ご機嫌な感じだった。

ーが、何故か俺に張り合ってくるが多かった。

ちなみに、めぐみんと約束したとおきだが、当の本人が忘れていたため、結局俺一人で食べることにした。

第15話 なんちゃって幹部のバニルさん

その日、自分が買い出しの当番だったことを忘れ、昼寝で寝過ぎしてた俺のせいでギルドで晩飯を済ませることになっていた。

「今日のご飯は本当に悪かった。そうだ！好きな物を好きなだけ食べていいぞ！」

ご機嫌斜めなイリスに声をかけるが、ぶいっと背けられる。

「ユウマさんもわざとではないんです。許してあげてください！」

イリスの言葉に今まで閉ざしてた口を開いて言う。

「ギルドのご飯は美味しくくないんです。私はイリスさんのご飯が食べたいんです」

エリスの手にしがみつき俺のほうを見る。

うちのパーティーのシェフであるエリスの腕前はそれはなかなかのものであり、俺が作り方を教えて作ってもらっている。

本人いわく、料理はそんなに得意ではなかったらしいが、アクアやサツキさんに無理矢理教えられてできるようになったらしい。

おかげさまで、エリスの料理は三つ星シェフもびつくりのレベルに到達している。これぞ、女神クオリティーだ。

「あ、そういえばいい忘れてた」

エリスのご機嫌を、直すことに気を取られていて完全に忘れていた。

目線をエリスからエリスに変える。エリスは頭に？を浮かべて見てくる。

「お酒、禁止ね」

その言葉にエリスは顔を下に向けて落ち込む。

そう、エリスが酒を飲むと本当にたちが悪い。いつものおしとやかさとかは何処かに消え、パリーイーピーポーになってしまう。そのため、家では酒を使う料理やアクアを呼んで酒を消費していた。

そんなこんなで、変な雰囲気な状態でギルドにつき、扉を開く。

ギルドの中は相変わらず、酒の匂いが充満しており、酔った冒険者達でお祭り騒ぎだ。そんな冒険者達を横目に席につこうとすると、一人の少女がランプで遊んでいるのに目が行く。

めぐみんの友達のゆんゆんだ。

食い意地の張った爆裂魔いわく、ゆんゆんは極度のコミュ障らしく、未だにパ-

ティーを組めていない。ついこの前パーティー募集を読んだが、なかなか心にくるものだった。

「よーゆんゆん」

俺が後ろから声をかけると、うわっと驚きトランプのピラミッドが崩れる。

「ゆ、ユウマさん!?!」

おもいつき振り返ったことで胸が左右に揺れる。んーいつ見てもいいものだ。

「いやーごち、……、今日はパーティーで飯を食いにきたんだけど、ゆんゆんもどう?」

危うく本心が出てきてしまうところだった。

ゆんゆんは顔を赤くしている。ん?どうしたんだ?

ーと後ろからイリスがゆんゆんに飛びつく。

「ゆんゆんさん!!」

「い、イリスちゃん!?!」

「あら、ゆんゆんさん、こんばんわ」

いきなり、飛び付いてきたイリスに動揺しながらも、エリスの挨拶に笑顔で返す。ゆ

んゆんはあの日、うちのメンバーと打ち解けあったようで、楽しそうにしている。

「ねえ、ゆんゆんさんもご飯、一緒に食べよ!」

「それはいいですね。どうです?」一緒に食べませんか?」

二人の、主にイリスのペースに乗せられているゆんゆんは満々の笑みで了承した。嬉しさのあまり涙が流れていることに気づいた俺は、つられて涙をながした。幸せそうでありよりです。

それから、それぞれ席についてオーダーを取ろうとしたときだった。受付のほうから大急ぎで職員の人が走ってくる。

「ご休憩の所申し訳ございません。ただいま、近隣のダンジョンで未確認のモンスターが現れたら情報が入ってまいりまして、ギルドからの派遣として出向いてもらえないでしょうか？」

これから夕食だから無理です。そう言いたいところだが、職員さんの必死の顔に断るにも断れない。

「行きましよう、ユウマさん！さつきから、怪しい感じがしていたんです。これは多分、悪魔だと思えます」

なにやら、やる気十分なエリス。他の二人も行くしかないという感じだ。「了解しました。その依頼受けます」

「ありがとうございます！場所はつい最近、隠し部屋が見つかったとされるキールのダンジョンです」

未確認モンスターの見つかつたとされるキールのダンジョン。以前、カズマからその場所ですアンデットを成仏させたと聞いたが何が起きているのだろうか。

俺たちがダンジョンにつく頃には、他のパーティーも準備をしており、その中にはカズマ達もいた。

「おう、カズマ！」

「お、ユウマも来てたのか」

相変わらずのお疲れ様モードでいるカズマさん。何があつたのか、それは酒の席で聞くとして周りを観察する。

すると、小さい仮面を被った物が一列に行進をしていた。

「なんだ、これ？」

俺は規則正しく行進していた、一体を持ち上げる。女うけしそうにみえて、逆に不気味に見えるな。

手を離して列に戻そうとしたとき、頬をかするように何かが通過し、その人形を串刺した。

「ユウマさん。むやみに触らないでください。下手に触るとばい菌が移っちゃいます」

エリスは感情のこもってない、冷たい言葉を放つと共に、槍をおおきく振り回し、人形達の首を跳ねていく。

「な、何をやってるんですか!」

俺はエリスの威圧に押されて敬語になる。それにしても、無害な人形を襲うのはさすがにやりすぎだと思う。

「これが、無害に見えましたか? でしたら、あれを見てください」

槍の指す方向を見ると人形にくつつかれ、爆発にのまれて歓喜の声をあげているダクネスが目写る。

お、おうふ。

「あれは生物にくつついて爆発する物なんです。ですから、ユウマさんも気をつけてください」

それだけ言い残すと、別の人形達のいる方へ行く。

なんであんなに怖い顔をしているのだろうか。

そんな、素朴な疑問を浮かべていると、遠くで人形達の乾いた爆発音が響く。

「ユウマー。こっち来てくれるか?」

ダンジョンのほうからカズマの声が聞こえる。

何があるのだろうか？

俺は小走りでカズマの方へ向かう。

すると、険しい顔をして俺の耳元で話す。

「実はな、この前このダンジョンにきたとき、アクアが結界を張ってな。今回の騒ぎ、それが関係あると思うんだ」

「ほうほう、安定のトラブルメーカーだな。それで？」

「それでさ、今からその結界を消しに行こうと思うんだが、めぐみんは爆裂魔法だけで使えないし、アクアはついてきても問題を起こしそうだから、ダクネスを連れていくことになったんだが、どうも不吉な予感がするんだ。一緒に来てくれないか？」

うーん。カズマの判断は正しい。俺もカズマの立場なら全く同じ選出するだろう。

それに、ギルドでエリスの言っていたことがある。二人だけじゃ危ないし、ついていったほうがいいな。

「いいぜ。エリスとゆんゆんはここでアクア達といてくれ。それと、エリスが暴走しないように見張ってくのもよろしく」

エリスは頷いて、めぐみんの方へ行く。

まあ、エリスならいざというとき、一人でなんとかできそうだな。

俺は真つ黒焦げになりながら喜んでいる変態の鎧を引つ張るカズマとともにダンジョンの中へと入る。

ダンジョンの中はいたって静かで、人形以外のモンスターがいなかった。

そのため、あっけなく最下層についてしまった。

「それで、結界の話なんだけどさ」

「ちよつと待ってくれ。誰かいる」

俺の言葉をあわてて切るカズマ。その顔はいつになく真面目な顔で奥の壁をにらんでいた。

「ふむ、こんなところに客人か」

カズマのにらんでいた方から、男性の声が響く。

薄暗い視界の中、だんだん目が慣れてきたのか、目の前に黒いタキシードをきた仮面の男がいるのがわかる。

俺達はその姿をとらえ、戦闘体制に構える。

すると、仮面の男は口元と歪める。

「ようこそ！我がダンジョンへ冒険者達よ。我輩こそこのダンジョンのボスにして諸悪の元凶！魔法軍幹部にして、悪魔達を率いる地獄の公爵！この世全てを見通す大悪魔、バニルである！」

最悪だ、まさかこんなところでとんでもないのにでくあすとは！

——初心者向けのダンジョンとして有名なキールのダンジョン。その最下層にて、俺達はとつもない緊張感につつまれていた。

魔王軍幹部と名乗った大悪魔、バニルに対し後ずさる俺とカズマに反してダクネスは真剣な顔で相手に剣を向け、出方を伺う。

それにしても、状況は最悪といってもいい。

相手の放つオーラだけでも、体が締め付けられていて、一瞬でも気を抜けばくるのは死だと本能が教えてくる。

それは、カズマも同じだったのだろう。大声でダクネスに撤退の指示をする。

「おい！ダクネス。俺達だけじゃ駄目だ！ここは一回逃げるぞ！」

「何を言うか！私は女神エリスに仕える身。魔王軍幹部、それも悪魔を目の前にして、背を向けることはできない！」

ダクネスはカズマの言葉に聞く耳を持たない。

駄目だ、完全にモードに入ってしまった。このままでは戦闘も時間の問題。

そう、思つときだった。目の前のバニルは面白い物を見たように口元を歪めて言った。

「ほう。このぶつちやけ、魔王より強いかもしれないと評判の我輩を前にしても逃げずに剣を向けるとは。なかなかの度胸だ。がしかし……。その平凡な小僧に風呂場で裸を見られた際、己の割れた腹筋を見られたかと心配する娘よ。何を怒っているのかは知らぬが、少しは落ちついた方がいいぞ。そのままでは人生、肝心な時に失敗してしまうと言ふものだ」

「な、何を言うか！カズマ、こいつの言っていることは嘘つばちだ！私は腹筋はそこまで割れてないし、そもそも心配などしていない！」

「わかった！わかったから、一回落ち着け」

バニルの盛大なカミングアウトによって、暴れだすダクネスを無理矢理おさえるカズマ。

その様子を歪んだ笑みを浮かべながら見守るバニル。

「まあ落ち着くがいい。我輩は、別にお前達と戦うためにこの地に来たのではない。魔王の奴に頼まれた調査。そして、アクセルの街に住んでいる、働けば働くほど貧乏にな

るといふ、不思議な固有スキルを持つ、ポンコツ店主に用があつてここにいるのだ」
その言葉に、一人の女性が頭に浮かぶ。なるほどね。

隣で、ダクネスが警戒しながら剣を向けるなか、俺とカズマは座つてバニルの話を聞いていた。

まあ、聞いた感じバニルは人に危害どころか、魔王軍の結界を維持するために雇われているなんちゃって幹部だった。

「まあ、なんだ。あんたはあんたで頑張つてくれ。俺達は結界を消しに來ただけだから。ほら、とつとと取りかかろうぜカズマ」

「ほう、それはありがたい。この何処の頭のイカれた輩が作ったかわからん結界のせいで我輩もとても迷惑していたのだ。どおだ、お礼として夜中に笑うバニル人形を進呈しよう。」

「いいよいいよ、この結界は俺達にとつても残つてたらめんどくさい物だし。」

カズマが言った、何気ない言葉に首を傾げるバニル。

「なにゆえ、この結界が汝達に不都合を？ちよつと汝の過去を拝見して……」

いきなり、黙りこむバニルに対し俺の直感が語りかける。これはとんでもないことになる。

「フ、フハハハハハ！そうか、そういうことだったか。貴様らの仲間のプリーストが、大悪魔である我輩ですら入れぬ魔法陣を作ってくれたとは、そのプリーストはよもや……！」

その時、とてつもない寒気が体を通りすぎる。

ゆらりと立ち上がりこちらを見るバニルの目は魔族特有ともいえる赤い瞳になっていた。

「ほう、見える、見えるぞ、地上に二人も！」

間違いない、その二人とはアクアとエリスをさしていた。

俺は怯える本能を無意識に払いのけ、バニルの前に立っていた。

「さあ、最近知り合った娘の体に発情し、仲間の機嫌を損ねてしまった男よ。そこを開けてもらおうか！安心するがいい、人間には手は出さん、……『人間』にはな！」

「うるせえ！結果的に機嫌は直せたんだ！それに、あんな体を見て、欲情しねえー男なんて男じゃねえ！」

結界から、短剣取りだそうとする。

ーが、短剣が手元に握られた時には、視界からバニルの姿は消えていた。

後ろで風を切る音がする。

振り向けば、ダクネスがバニルに斬りかかっていた。が、軽々と交わしていくバニル。

ただ、そこには俺を追い越した時のスピードは無く。まるで遊んでいるようだ。

「フハハハハ！腹筋ににて頭も固いようだ！そんな剣技では長い夜もあつというまに過ぎてしまうぞ！」

そんな挑発に構う暇も無く、顔をしかめるダクネス。

実力の差は歴然、このままやっても一生当たることはないだろう。

「ふ、ふざけるのも大概にしろ！」

「グハ！」

そう誰もが思ったときだった。ダクネスの剣がバニル胴体を切り裂く。

「フ、見事なり……」

体を砂に変え、朽ち果てていくバニル。

最後に彼のトレードマークだったであろう仮面がダンジョンの床に落ちる。

「え、倒した!？」

「な、なんだ思ってたより速く終わったな。それにしても、ダクネスの剣が当たるとな。それじゃあ、とつとと結界を消して帰ろうぜ。」

緊張感が一気にとけ、笑いあう一行。

さつそく、当初の目的を果たそうとカズマが背を向けて奥の部屋へと向かおうとしたときだった。

ダクネスがいきなり、血相を抱えてカズマを弾き飛ばす。

「おい、何をすんだよダクネス！」

ダクネスは倒れたまま、起き上がろうしない。

心配して近寄った、その時だった。

「フフフフ、フハハハハハハ！」

奇妙な笑い声とともに突然、仮面を押さえて立ち上がる。

「今我輩を倒したと安堵したな？フハハハハ。……そなた達のその絶望。とても美味である」

この手の相手がそう簡単にやられる訳がない。俺とカズマが固まる中、ダンジョンにはバニルの笑い声が響く。

「一つ言っておくが、今この娘の体には激痛が走っている。今すぐそこを開け、我輩の目的が達成されればこの娘を開放しよう。さあ、そこを「どかなくていいぞ！私のことは心配するな。この少しでも気を抜けば全てを持っていかれるほどの激痛。こんな痛み、生まれて始めてだ！」話している時に割り込むではない！」

さっきの騎士としての誇りは遥彼方へ。こんな状況でも自分の性癖に正直なダクネスさん。ある意味尊敬しますよ。

「このままではこの娘の命はない！さあ、開放したくば「お構い無く」……」

「……………」

一同沈黙。もう駄目だな。なるようになってくれ。

俺とカズマがそう思ったとき、パニルは勢いよく飛び出し地上への階段を駆け上がる。

「行くか」

「おう」

パニルの後を追って、階段を駆け上がる俺達。

だが、流石は鍛えているダクネスの体。俺達に差を詰めることを許さず、地上に飛び出る。

その時だった。

《セイクリッド エクソシズム》！

「ああああああ」

アクアのウル○ラマン光線をくらい、勢いよくその場に倒れるパニル。

そして、その顔の横に聖槍を向けるエリス。

「おい、アクア！何やってんだ。その体はダクネスのぞぞ！」

「そうだ、エリス！いいから槍をどけろ！」

「だって悪魔の気配がしたんですもの」

「いえいえ、アクア先輩。これは本物の悪魔ですよ」

女神の漫才コントを始める二人。その二人を見ながら呆れて仮面に表情を表すバニル。

「会ってそうそう、浄化魔法を打つとは、礼儀を知らないようだな発光生物達よ」

「人の悪感情を吸うことでしか生きることのできない下等生物に尽くす礼儀などありません。大女神様から授かったこの槍で成仏させてあげましょう」

「ほう、やれるものならやって見るがいい。頭のおかしい発光生命体よ」

お互いにらみあう、エリスとバニル。

エリスの方は完全に入ってしまった。こうなったら誰にも止められない。

周りもそれを承知しているのか、見守ることに徹してる

「《ニケの聖歌》！」

スキル使用を唱えると槍から光が溢れだし、槍全体を包み込む。

すごい。言葉では説明することのできない魔力の量。静かだった森の木々達はざわめき始め、一つの聖槍に風たちが集まる。

その圧倒的な光景に、その場の誰もが言葉を失いたただ突っ立っているだけだ。

ーだが、ただ一人。ただ一人の悪魔は口元を歪めたままエリスを見据える。

「悪しき力を絶て！ 《シャイニングスピア》！」

「……。」

聖槍から放たれる神気の光帯は、バニルに乗っ取られたダクネスの体を貫く。そう誰も目の目に写った。

瞬間、バニルはエリスの後ろに移動していた。

「なっ！」

エリスはすぐさま振り返り槍を振るい、剣撃を払う。

さすがはダクネスというのか、その一撃一撃は当てれば致命傷を与えられる重い一撃だった。

「フハハハハ！ どうした！ 目がチカチカするほど輝くシスターよ。さっきまでの威勢は風に流されてしまったのか？」

「クッ！ 口を開けばくだらないことばかり」

苦い顔で槍を振るうエリスとそれを嗤うバニル。

だが、力の差は五分五分。どちらかが引けば負ける戦い。そう、俺の目には写っていた。

ーが、それは大きな間違いだと次の瞬間気づかされる。

今まで、引くことなく小バカにする笑い声をあげながら剣をふるっていたバニルは一歩後退する。

そして、エリスはその瞬間を見逃すまいと前に一步振り込む。

その時、確かにバニルの口元が歪んだのがわかった。

「引け！エリス！」

俺の言葉に困惑するエリスだったが、バニルを見たとき、自分の置かれていた状況を理解した。

「《六式結界》」

突如として現れた結界が、エリスの間接を固定する。

そう、始めからこの戦いは五分五分なんではなかった。すべてはバニルの演出。

わざと、引けない状況を作り出して打ち合っていただけだった。

「どうだ？我輩に勝てたと思ったかシスターよ。残念ながらそれは貴様の幻想だったよ
うだ」

「ツ！」

身動きを取れない無防備なエリスの姿を見て笑うバニル。

勝負ありだ。完全にバニルの圧勝だった。

それにしてもだ。何故、バニルはわざわざこんな自作自演を始めたのだ？

そもそも、バニルの狙いはエリスではなくアクアだったはずだ。

なら、わざわざこんなめんどくさいことをせずにエリスを払って、アクアに照準を合

わせればよかったはずだ。

すると、パニルはエリスから俺に顔の向きを変えてくる。

「さて、ここで一つ。悩める時期にある坊主よ。このシスターは今無防備にあるが、我輩が場所を整えてやると言ったらどうする？」

「!？」

それつてつまり、好きにしてもよいと？

そんなことを考えて動きを止めていると。周りの視線、おもに女性陣の視線が背中を貫くのがわかる。

「お、お前は何を考えさせるんだよー！」

「おお、これはこれはなかなか美味な悪感情」

そんな会話をしていたとき、何かが割れる音がする。

俺一点に集中していた視線はその音のするほうへ、向けられる。

一同、無言の驚きでエリスを見ている。つられて見てみると、エリスの動きを止めていた結界は粉々に消えており、聖槍からは水蒸気が出ていた。

「ほう、我輩の結界から抜けるとは、まだ青いひよこだと思っていたが、ただの力任せのゴリラであつたか」

これは誤算だったと、愉快に笑うパニル。

こいつは本当、楽しそうだな。

飽きてれ、俺はバニルに視線を戻した、その時だった。

（我輩は女神なんか成仏させられるのは真つ平だ。貴様ら人間の力で我輩の破滅の願望を叶えてはくれぬか？）

一瞬、こちらを向いたと思うと、突然心に問いかけてきた。

そして、エリスが動き出す前に俺はカズマのもとへ走る。

「なあ、カズマ。エリスが仕留め損なったときのために、めぐみんの爆裂魔法を準備できないか？」

「なに言ってるんだよ。いくらダクネスでも、爆裂魔法は……」

一応用意させとくと、めぐみんに指示をするカズマ。

別に俺が撃つてもいいのだが、その場合周りへの被害が尋常じゃない。

「この世、全ての我が眷属達に幸運の女神エリスが命じます。人々の生活を脅かす、悪しき力を討つために。祈りを力に変え、我にその力を与えよ！」

聖槍に再び光が満ち溢れる。

それはこの世のエリスを慕う人達の祈り。

全ての生命を平等に愛す慈愛の光。

周りの木々達はみなぎるようにその葉っぱを生き茂らせる。

きっと下級の悪魔やアンデットならこの光を見ただけで成仏するだろう。知識の無い俺でも、それを理解できる。

「闇を飲みめ! 《スターバースト》!」

勢いよく、聖槍を投射するエリス。

慈愛の光纏った槍はパニルの仮面目掛け、風を切って突き穿つ。

ーが、それを目にも止まらぬ速さで交わして、聖槍の攻撃範囲外へ抜けるパニル。そこへ、今度は人類最大の攻撃魔法の破滅の光が落ちる。

—————

なんちゃって幹部パニルとの戦いから数日後。

俺とエリスはダクネスのお見舞いを終らせてウイズさんの店へと続く道を歩いていた。

「それにしても、ダクネスさん。元氣そうでなりよりでしたね」

「人類最大の攻撃魔法すら、ご褒美として受け取ってしまうあの変態には驚かされたよ。

この世界であいつを屈服させることができる攻撃はないんじゃないか」
さすがにこれにはエリスも苦笑い。

めぐみんの爆裂魔法を受けて、数ヶ所の骨折だけで済ませてしまうことになって、普通では考えられない。

まあ、その変わりに防具はガラクタになったのだが、後に国から一級の防具を贈呈されたらしい。

とりあえず、大事にならなかつただけましかな。

「そういえば、ゆんゆんさんのことなんですけど」

「ああ、ゆんゆんが俺達のパーティーに入りたいって言ってたことだろ？もちろん俺は賛成だよ。エリスも遊び相手が増えて喜ぶだろうし、魔法使いとしての実力もトップレベル。なんなら、こつちから頭を下げてくださいよ」

後から聞いた話だが、俺達がダンジョンに入っているとき、バニル人形の大軍がアクア目掛けて攻撃を開始したらしい。

そのとき、誰よりも速くそのことに気づいて戦いを終わらせてくれたのがゆんゆんだっ
たらしい。

あのアクアが人に頭を下げて感謝を伝えているのを見たときはさすがに俺も自分の目がおかしいんじゃないかと疑ってしまった。

「また、賑やかになりますね」

「そうだな」

春の暖かさを運ぶ風が、冷えた手を撫でるように通り抜ける。

もうすぐ、この世界で始めての春か。

そんなことを頭の片隅で考えていると、ウイズさんの店の扉の前までついていた。

俺は今月分の聖水が入った箱を取りだし扉を開ける。

「いらつしやいませー！」

いつも通りの、のんびりとした声で迎えてくれるウイズさんを見て、あることを思い出す。

「働けば働くほど貧乏になるといいう、不思議な固有スキルを持つ、ポンコツ店主に用があつてここにいるのだ」

そういえば、パニルはウイズさんに用があるつて言つてたよな。持つてきた箱の中身を確認するウイズさんを見る。

「私の顔に何かついていたりしますか？」

不思議そうな顔で俺を見るので、何となくと話を反らしてカウンターを見る。

すると、カウンターには高身長で、タキシードにエプロンを身に付けた男性が立っていた。

「へい、らっしやい！自ら修羅場を作っていく坊主よ。親切な我輩から一つの忠告をしよう。汝、軽はずみな行動は控えよ」

なんとそこには爆裂魔法で己の願望を叶え消えてった大悪魔が口元を歪めていた。

「なんで！お前生きてるんだよ！」

第16話 彼の商売がこんなに辛いわけがない。

「へい、らっしやい！」

カウンターの方から響く、明るい挨拶。

その声の主は、数日前キールのダンジョンで倒したはずの地獄の公爵バニルだった。

「なんで、お前が生きてるんだよ！」

「まあ、落ち着け坊主。確かに、我輩は爆裂魔法を受けて消滅した。ほれ、ここを見てみよ」

仮面の上のほうを指してくる。

……Ⅱ。

「何がⅡだ！なめてんだろ！」

「そうかつかするな。こういう時は骨を食べるといいと聞くぞ。ちようど我輩の仮面には竜骨が入っているのだ。食うか？」

「食うか！」

スツと何処からか出した仮面を無理矢理押し返す。

別に今、俺のカルシウムが足りてる足りてないとかはどおでもいい。

こいつがなんで、いるのが問題なんだ！

「ほう、どおやら、我輩がここにしていることがおかしいと思っっているな？坊主よ、我輩は言っただけだ。アクセルの街で働いているポンコツ店主に用があると」

「それは、お前の破滅願望を叶えるための金稼ぎだろ？でも、それもこの前の戦いで叶っただけだ。ここに意味なんてないだろ？」

すると、バニルはそんなことかという表情で言ってくる。

「坊主よ。一つ勘違いしてるようだが、我輩はもう魔王との契約を切っている。そもそも、魔王と契約したのはあの我輩だ。今の我輩ではない」

「なんだ？つまり、今のお前は前のお前とは別の個体と」

「そういうことだ。だからその貧相な槍をしまっただけはくれぬか？これから我輩はこの坊主と商売の話をしなければならなくてな」

バニルの言葉でこの場にエリスがいたことを思い出す。

「大丈夫だ、エリス。バニルはもう敵じゃないんだから」

「何を言っているんですか!?!これは悪魔ですよ!何か面倒なことを起こす前に始末するべきです」

相変わらず、悪魔には厳しいエリス。

だが、今の現状を見るとエリス、君のほうが面倒なことを起こすように見えるよ。

「師匠。エリスの世話をお願いしてもいいですか？」

「別にいいですよ。エリス様、どうぞこちらに」

ウイズさんに連れられカウンターの奥に入っていくエリス。ちなみに、ウイズさんはエリスの正体を知っている。どうやら、アンデットになると女神などの神気を持つている者は光って見えるらしい。

とりあえず、これでこの部屋からは邪魔者がいなくなつたということ、バニルはいつの間にか用意していた椅子に座り、紅茶を入れる。

「まあ、座るといい。砂糖は二つでよいな」

「ああ、ありがと。それで話して言うのは？」

紅茶を一口飲んで、バニルの顔を見る。

珍しく真剣な表情だ。

「話と言うのは他でもない。あの聖水についてだ。絶対的な効力にちようどのいい量。駆け出し冒険者にも優しい値段とこの店、唯一の人気商品と聞く。しかし、王都の商人達にも売ってるらしく、この店で売れる数は少ないと」

「まあ、そうだな。あのときの俺はすぐに金が欲しかったから、影響力の強い王都に売り

出したわけだし」

今となつては、魔王軍の懸賞金やらで別に商売をやる必要も無くなった。

ただ、これを止めてしまうとウイズさんの店がつぶれてしまうので、普段の恩義も兼ねて継続しているのだ。

「坊主よ、少し勘違いをしているな？」

「は？」

「周りを見渡してしろ。どおだ？ 最初貴様がここに来たときと変わった部分はないか？」

バニルは困った顔で指摘してくる。

言われた通り店じゅうを見渡すが特に変わったところは……。ん、!?

「その通りだ。商品が増えていだろう。それも、使えるかどおかすら怪しいガラクタばかりだ」

「いや、確かに増えてはいるが、別になんも問題はないだろ？ その分、聖水が売れてる訳なんだし、それに始めに交渉で渡した5千万エリスもまだ……」

「我輩がこの店の金庫を見たときには、1エリスすら入ってなかったぞ」

……は!?

そんなはずが無い。5千万エリスだぞ！ アクアみたいに豪遊したり、めぐみんみたい

に爆裂魔法を乱用して道の整備費を取られたりしない限り、そう簡単には減らないはずだ。

「……」

「そういうことだ。あのポンコツ店主はなんも変わってない。自分の置かれている状況すら理解しないで、ただ本能のままに動いている。止まることを知らないマグロだ」

マグロ。もはや人としてすら扱われていない。

それにしても、あのバニルがこんなに頭を悩ましているとは、ウイズさんは想像以上の強者だ。

「そこで、坊主に頼みがある」

「頼み？」

「聖水の特許を我輩に譲ってはくれぬか？」

真面目な声で言ってくるバニル。

いつものふざけなど微塵に感じない。生死がかかっていると云わんばかりの重圧を感じる。

「もちろん、ただではない。毎月、この店の収益の5割または分割になるが1億エリス払おう」

「別にそこまでしなくても。それに、店の収益って……。んー」

正直、金には困ってないから、タダで渡してもいいと思っではいる。

ーが、聖水を作っているのはアクアだ。勝手に決める訳にもいかない。

「わかった。俺はその条件でいいよ。ただ、俺一人じゃ決定はできない。営業パートナーの許しが必要だ。だから、少し待ってくれないか？」

バニルは俺の顔をじっと見たあと、ご機嫌な顔で席を立つ。

「いいだろう。よい返事を待っているぞ」

「まあ、期待はしないでくれよ。エリス、帰るぞー」

多分、バニルの名前を出したら破談確定になるだろう。どうやって説得させようか。

俺の呼び掛けで奥の部屋から出てくるエリス。

相変わらず、バニルへはきつい視線だ。

「ユウマさん、どんな話をしてたんですか？」

「仕事の話だよ。ほら、俺って聖水売ってただろ？あれの話」

「そういうことだ。まあ、力まかせで脳と体の発達が遅れている発光ゴリラのお主では理解などできんだろうがな」

バニルもバニルだ。火に油を注ぐことしかしない。

完全に堪忍袋がキレたエリスを見てウイズさんは怯えている。

「あの一。エリス様？お店の中でだけは……」

「私が下手に出てれば。人から栄養をもらえないと生きていけない、蚊以下の分際でごちやごちやと」

いえ、エリスさん。全く下手じゃなかったですよ。ものすごく睨んでましたよね？
気がつけばエリスの手には短剣が握られている。

いつのまに！このままじゃ、店がぶっ壊れる。

「結局、力しか思い浮かばないのか。まことに残念である」

やれやれとため息をつくバニルを見て、ついに動きを仕掛けるエリス。

これは止めるしかないな。

正直、筋力値がとてつもなく劣っている俺の腕は粉碎されるだろう。

この状況で止められるのは俺くらいだ。

さらば俺の腕。

短剣を振りかざすエリスの後ろに入り腰にしがみつく。

「……」

「――」

場が静まり返る。上手くいったのだろうか。

ん？なんだこの柔らかさは。女性の体つてそういうものなのだろうか？

手をグーパーさせて感触を確かめる。この薄い盛り上がり方、腰にしては骨を感じない

ような。

俺は粉碎する恐さで閉じていた目を開ける。

すると、呆然とした表情のウイズさんとにやにやと笑みを浮かべるバニルの姿が。それにしてもエリスの頭が目の前にあるのは何故。

「へ？おかしいな。なんでエリスの頭がここに？これって腰なんじゃ。……ゴフ」
強烈な打撃が腹に入る。俺はその衝撃で意識を持つていかれる。

――

あれからどれくらい経ったのだろうか。目を覚ますと窓から赤色の光がベットの上を照らしていた。

「どうやら、夕方らしい。」

「よく眠れましたか？」

横を見ると椅子にエリスが座っていた。

いつもの笑顔だが、なんだろう。すごく恐い。

「ああ、いい眠りだったよ。それにしても、なんで俺はここに？ 確か、師匠の店行ってバニルと商談をしていたんだけど」

「帰りにいきなり倒れちゃったんです。ほら、あれ以来めぐみんさんと毎日爆裂魔法を競っていましたし、疲れていたんですよ」

確かにあれ以来めぐみんとは爆裂魔法を打ちあっている。正直面倒くさいのだが、特にやることもないので断るに断れない。

だが、果たしてそれが理由なのだろうか？

なんか記憶が抜けているのか。

「そういえば、今カズマさん達が入らしているんです。どうやらカズマさん、クエスト先で不慮の事故にあつたみたいで、ユウマさんと話したがってましたよ」

必死に思いだそうとしている俺に何故か狙うように伝えてくる。

「わかった。もう少ししたらおるから、先おりてて」

「わかりました」

エリスは椅子から立ち上がってドアを開ける。

が、部屋を出る前にこちらを向く。

「ユウマさんはそういう人じゃないって信じてますから」

ばたんとドアが閉まり、足音が遠ざかっていく。

そういう人じゃないって、どういう人？

ふと、手元に紙切れがあることに気づく。

『セクハラは駄目ですよ（呆れ）……』

それはイリスの書いた字だった。

なんのことだろうか。

下の部屋からはめぐみんに訴えかけるゆんゆんの声と賑やかな笑い声が聞こえてくる。

そろそろ下に行こうかな。

第17話 自信を胸に

アクセルの街の少し外れにはエリス教が運営する孤児院がある。

この孤児院のすごい所は募金活動で集めた金以外にも自分達で稼いだ金などを使って運営しているところだ。

さすがはエリスの信者達。国教になる理由も十分わかる。

「エリスさん。今日は貴族の方がおみえになるので、その補助に回ってもらえないかしらっ。」

「ええ、わかりました。それじゃあ、子供達のことは……」

お年寄りの修道女の人と仕事の話をしたあと、外の正門へ走って行くエリス。

その様子はとても嬉しそうな感じだった。

「さすが名前の通りの素晴らしい方だ。もう少し胸のほうが育っていたら。……おいしい。」

「確かに、もう少し胸が……」

俺の近くで男話に花を咲かせているエリス教の男達。

お前ら、自分達の信仰す神にすごいこと言ってるぞ。やっぱり、男は宗教に入ろうが変わらないらしい。

エリスが何故ここで手伝いをしているのかだが、本人に聞いてみたところ、自分の信者達との交流を深めること、この世界に限界したことをきっかけに天界にいたときに出来なかった、手助けをしたかったかららしい。

この話を聞いた時、やっぱりエリスはすごいなと思えた。

ただ、エリスは女神と言うよりはシスターというイメージが強い。逆にアクアは女神らしいと思う。

俺の中の女神の像は自分勝手なイメージが強すぎるからだ。

ーとサッカーボールのような物が足元に転がってくる。

「ほれ」

「あ、ありがとうございますー！」

見た目は小学4年生くらいだろうか。なんでない茶髪で小柄な少年がこちらにボールを取りに来たので、手渡ししてあげた。

少年はボールを受けとると軽く会釈して、友達のほうへ走っていった。

その後ろ姿に、なんだか懐かしさを覚える。

「優しい方なんですな」

後ろの方から声がしたので振り返るとなかなかイケメンが立っていた。年は俺より少し上くらいだろうか。

「これくらい、当たり前のことでしょ？」

「そうですね。確かに本来なら当たり前です。」

隣に座ってもと聞かれ、座っていたベンチから荷物を結界内にしまいスペースを作る。

「ここにいる孤児達は国民から嫌われているんです」

イケメン青年の人はベンチに座って少し悲しい顔で話始める。

このアクセルにいる孤児達、そのほとんどは敵国の戦争孤児やストリートチルドレンだという。

そんな子達が何故、国民に嫌われているのか。

それは、とても単純すぎることであった。

敵国だから。

食い物が無いからという理由で盗みを働いたから。

たったそれだけのことであった。

ただ、後者のほうに関しては国の問題にもなっているらしいが、当の本人達もなりたくなっていては訳じゃない。

だが、現実是非情だ。ある程度生活の水準が高かった日本に比べ、この世界の生活の水準は低すぎる。

みんな生きるのにいっぱいいっぱいなんだろう。他人のことなど考えてる暇などない。

「そりゃ、辛いな」

「ええ、本当にです」

ため息をつく青年につられ俺もため息を出してしまう。

「そういえば、自己紹介をしていませんでしたね。僕はアレクセイ・パーネス・バルターといいます」

笑顔で握手を求めてくるバルター。

あれ？アレクセイってアルダープの性と同じだよな。もしかしてアルダープの息子か？

これは、たまげたな。まさか、あんな性悪からこんなまともなイケメンができるとは。俺はクドウユウマ。けちな冒険者だよ」

「クドウユウマ……。あの有名なクドウユウマさんですか!!」

「そんなに驚かなくても……。お偉いさんに認知されるようなことは特にしてないよな」

俺の名前を聞いて驚くバルター。

ただの冒険者Aなのに、どうやら貴族たちの中では有名のようだ。

いや、もしかしたらクリス達の言つてた悪評で有名になったのか？

「貴族達、特に国の政治関係者達の中では魔王軍の幹部2人、災害と恐れられていた機動要塞デストロイヤーを仕留めた冒険者としてサトウカズマさんという冒険者の方とよく話題に上がってますよ」

俺とカズマが知らないうちにこんなにビックネームになっていたとは。

正直なところ少し嬉しい。カズマも聞いたら喜ぶだろう。

「それに比べて僕はまるで駄目です。さっきの孤児達の件にしても、どうにかしてあげたいと思つても、どうにかできる権力も訴える発言力もない。僕はあなた方に比べたらちっぽけなものです」

うつむきだんだんと小さな声になつていくバルター。

彼の言葉は自虐と虚しさに満ちていた。

「そんなことは無いと思つよ」

えつと顔をあげてこちらを見る彼に言葉が続ける。

「権力や発言力が無くたつて孤児達を思う気持ちはあるんだろ？俺はその気持ちを持つてどうにかしたいと必死に行動するバルターを尊敬するよ」

ありがとうと俺に感謝を言う彼の表情はともいきいきしており、何か吹っ切れた顔だった。

それからしばらく何気ない世間話をしたあと、聞き覚えのある野太い声がバルターを呼ぶ。

「こんなに楽しい会話ができたのは生まれて初めてです。本当にありがとうございませう」

「俺も楽しかったよ。これからも厳しい獣道だろうけど、自分に自信を持つて頑張れよ」
「ユウマ君こそ、冒険者の仕事頑張ってくださいね。これからもご活躍期待してます」

握手を交わしたあと、正門の方へかけていくバルターを見て、彼ならきつとやりとげてくれるだろうと思えた。

だって、その背中には自信に満ちていたんだから。

――

バルターが帰った後、孤児院では会議が行われていた。部外者の俺は入れてもらえ

ず、会議が終わるまでの間、バナルに昨日の返事をしようとして魔道具店に来ていた。相変わらずの人気の無さと昨日の話のせいで傷の残ったままの店がなんだか虚しく見える。

正直、ここで聖水の特許を譲ったとして本当に立て直すことなどできるのだろうか？ そんな不安を胸に店に入ろうとしたときだった。

二つの足音が聞こえてきた。

別におかしなことではない。確かにこの道は普段人氣が無く、人なんか歩いてないだろうと思うほど静かだ。

だが、あくまでもここは人の住む街。

歩いてないわけがない。そんなわかりきったことなのに思わず足音のする方をむく。そこにはゆんゆんと知らない頭テカテカ中年が歩いていた。

「ゆんゆんちゃん、お父さん疲れちゃったから休んでいかない？」

昼間からどういいう神経をしているのか。ゆんゆんに危ない誘いをかける中年。

俺の国でそんなことしたら犯罪だぞ。このロリコン野郎め。

「おっとゆんゆん。こんなところで奇遇だな！」

「!？」

後ろから突然として現れた俺に驚く性犯罪者。

その顔はなんで邪魔したんだよという顔だ。

おう、邪魔してやったぜ！ざまーみろ。

「あ、ユウマさん！」

笑顔で俺の名前を呼ぶゆんゆんと、俺の名前を聞いてこちらに舌打ちをする中年性犯罪者。

こいつ、俺に舌打ちをするとは。失礼にもほどがあるだろ！

「チツ！店主どころかゆんゆんちゃんにも手をだしてたとは。クソハーレムが……」

小さな声で俺に嫉妬して消えてくハゲ。

悪は消え去った。どっちがクソか鏡を見て言いやがれ。

「え、あの……」

「おっと、ストップゆんゆん。あーゆのには関わっちゃ駄目だぞ。着いてきなさい」

ゆんゆんの腕を引いて、魔道具店へ向かう。

それにしてもゆんゆんもゆんゆんだ。

めぐみんから聞いてはいたが見境なしに着いて行くのは駄目だろ。自分のスペックを理解しきれてない。

しつかり教えてやらないと、そのうち事案になるぞ。

キシリと音をならすドアを開け店内に入る。

すると、案の定満面の笑みで出迎えてくる悪魔さん。

「おお、待っていたぞ坊主よ。それしても、またもや残念な風評がたつてしまったな。乙女の貞操を守ったのにこの有り様とはお主も苦勞してるな」

「同情ありがとう。ただ、自分のことを心配したほうがいいと思うぞ」
笑みを絶やさないういすを煽るように返るが、不発に終わる。

「どうやら、俺の中を視たよう为上機嫌に契約書と万年筆を机に並べている。

「はあ……。人の許可なく覗くのは止めたほうがいいぞ。そのうち嫌われるぞ」

「忠告ありがたいが、我輩は悪魔である。人の悪感情糧とする我等が好かれる訳がなからう」

「ごもつともですなバニルさん。」

万年筆を手に取り、契約書へ筆を動かす。

「昨晚、アクアと話し合った結果。アクアは簡単に許可を出した。」

「——というのもアクア自身、ウイズさんには結構世話になっており、その恩返しだった。」

「当然、バニルの名前を出したときには心底嫌な顔をしていたが、ウイズさんのことを思つてのことなんだとか許可を出した。」

「ただ、契約条件として月の収益の5割献上を求めた。」

これには流石はアクアと思った。

目先の報酬にしか目がいっておらず、店の現状を理解してないことがよくわかった。俺なら確実な報酬を得ることのできる3億を選ぶのだが、……まあ、アクアが決めたことならそれでいいか。

——通り契約書を書き、内容を確認する。

「安心しろ坊主。悪魔は契約には厳しい。貴様が守り続ける限り、我輩はこれに従うまです。」

この世界の悪魔は、人間との等価交換で成り立っているらしい。人間の願いを叶えるかわりに糧である、悪感情をもらう。ただ、その悪感情の種類は悪魔によって違うらしく、バニルは人の不幸、期待を裏切られた時の絶望を糧にするのだが、中には苦痛による悪感情を求める悪魔もいるので注意とのこと。

契約を交わし、店を出て時計を確認する。

すでに昼を回っており、腹がする頃合いだ。

ちなみに会議が終わるまでには時間があるので、エリスには悪いが、先に昼飯を出る済ましておこう。

「時間も時間だし、飯でも食いにいかない?」

「!!」

昼飯の誘いに顔を真っ赤にしながら驚くゆんゆん。

恥ずかしがる彼女を見て、おかしなことでも言ってしまったのかと不安になる。

「あ、あの! 本当に私なんかでいいんですか!」

「へ?」

ひどく動揺しながら、紅魔族の特徴である紅い瞳を強く輝かせる。

どうしたのだろうかこの子は? まるで年齢〓彼女いない歴の男子みたいな様子だ。

「私なんかがお食事に誘ってもらえるなんて……」

「いやいやいや。友達と飯を食いに行くのは普通だろ?」

「と、友達……! 私たちお友達なんですか!」

別に俺は告白なんてしてないのに、この興奮。

それに涙を流してまで、友達であること喜ぶなんてこの子、今までどんな過去が?

とりあえず、いつまでも立ち止まっているのは時間の無駄なので、メインストーリートに出て空いているカフェに入る。

「とりあえず俺が金は出すからなんでも好きなもん食べていいぞ」

あわあわして落ち着きのないゆんゆんにメニューを渡す。
すると、サンドイッチとコーヒーを指差す。

「そんなに遠慮しなくていいのに。すいません！オーダーお願いします」

昼の忙しい時間を終えて余裕を得た店員さんがこちらのテーブルに来て、オーダーを取ってくれる。

「3種類のサンドイッチとコーヒー、後はシェフのおすすめオムライスとアップルパイをお願いします」

愛想よく注文を取って厨房に入る店員。

ランチタイムの疲れを見せず、丁寧に接客するその様子は接客業の模範となるもので関心してしまった。

まあ、それは置いといて、目の前のゆんゆんに視線を戻す。

ゆんゆんは依然としてもじもじとしながらこちらを見ている。

とりあえず、何か話しを振るか。

「男の人と飯食ったりするのは初めてだったりした？」

「男の人というか、めぐみん以外の人とお食事に行くのは初めてで……」

「え、親とは？」

「お父さんは族長をやっていて、お母さんもそのフォローとかで忙しくて、誕生会も一人

でやったりしてて……」

衝撃で口が開いたまんま固まる。

無神経に入りすぎた上に地雷を引いてしまった。

どうする、どうやってフォローをいれればいいのか。

そんな焦りから、とんでもないことを言ってしまう。

「友達を誘ったりしなかったの？」

何気ない言葉だった。そう一般的にみればだ。

ただ、ゆんゆんに限ってはそうではなかったらしい。

暗く寂しそうな声が響く。

「私、里の人達の感性が変に思っていて、周りからはおかしいと言われて、友達ができなかったんです。それで一回悪魔を呼んで友達になってもらおうとしたんですけど……。でも、安心してください！人のお友達はいなくても植物のお友達はあるんで！」

めいっぽい笑顔を向けてくるゆんゆん。

そうか、そんな過去が。

確かにめぐみんを見ていて、紅魔族としてはおかしいとは思いますが、別に普通の人たちと比べたら全然普通だ。

少し、こじらせてしまっただけで、それなりの環境を得れば直るだろう。

俺はできるだけ優しい声で言う。

「ゆんゆんは友達が好きかい？」

別におちよくつてゐる訳ではない。

ただ、少し。少しだけ思い出してしまった。

「実はな、俺もゆんゆんと同じ年くらいの時。調度今ごろかな。周りとうまくいかなくて、孤立してた時期があつたんだ」

驚くゆんゆんの目を見ながら、俺は話しを続ける。

「なんていうのかな。ちよつとゆんゆんとは状況が違うんだけど、その頃の俺は結構なひねくれものですね。周りが見えて無くて、勝手に決めつけては勝手に離れていつて。その時の生活は本当に最悪だったよ」

そう、確か中一から中二にかけてはテニスを止めて勝手に自暴自棄になつてうじうじしている毎日だった。

でもだ、そんな時に救いの手を差し伸べてくれた人がいた。

「でも、ちよつとした、きつかけをくれた人がいてね。その人のおかげで、俺は周りを見る事を知つて、なんとかうまくやっていけたんだ」

俺がもらった救いの手。

その手を今度はゆんゆんに差し出すときだ。

「ゆんゆん。友達を作るのは簡単だったりするんだぜ。そんなに難しいことは考えず、広い視野で周りを見てみな。決めつけたり、自分を責めるんじゃないで、落ち着いて周りを見渡すんだ。そうすれば見えてくるものが必ずあるから。そういうのは案外近くにあったりするんだよ」

料理ができたらしく、店員さんがテーブルに置いてくれる。

どれも美味しそうだ。

「まあ、とりあえず今は飯を食わないとな。せつかくの出来立てが冷めたらもつたいないし」

出来る限りの笑顔でゆんゆんを見る。

すると彼女も今までよりずっと晴れた笑顔で返してくれた。

第18話 二人だけの日

中世ヨーロッパみたいなのこの世界。

交通手段は徒歩、テレポート。

そして馬車である。

お昼時の馬車乗り場にて、湯治に行くというカズマ達パーティーの見送りに来ている。

「本当にユウマは来ないのか？」

「バニルに頼まれてることがあるからな。こつちでお留守番だ。イリスとゆんゆんを頼んだ」

少し寂しそうなカズマ。

その横ではアクアが呑気にあくびをしている。

どうやら、カズマとアクアは明朝から仕度をしてみんなを待つていたらしい。

ちなみに何故俺がカズマ達について行かないかだが、前回、バニルに聖水の特許を

譲った際、今までお世話になっていた王都の商人達に話を通さなければいけなくなり、カズマ達の湯治の期間と被ってしまったため、今回は留守番となった。

だが、イリスは今回の遠出をとても楽しみにしていた。

そのため、あまりのり気ではなかったゆんゆんに頼み込み付き添いで行ってもらおうことになった。

ちなみにエリスは孤児院の会議が長引いてしまい、後日に延期になってしまったため、一緒に留守番だ。

「そういえば、なんで師匠は黒焦げなんだ？」

「ああ、実は……」

カズマイわくわくしなしの金でポンコツばかり買ってくるウイズさんに、ついにしびれを切らしたバニルは、殺人光線を浴びせたらしい。

そして、厄介ばらいとしてカズマ達の湯治に押し付ける感じで同行させることにしたらしい。

ちなみにバニルの殺人光線だが、その名の通り人を一撃で仕留められる強力な攻撃である。

それを受けて黒焦げですんだ、ウイズさんは流石リッチーといえる。

「それでは行ってきますー！」

「おう、しつかりゆんゆんの言うことは聞くんだぞ。それとカズマ達にも迷惑をかけないように。ゆんゆん、頼んだよ」

「はい！しつかり頼まりました！」

イリスの手を取り、張り切った様子で馬車に乗るゆんゆん。

なんだが、頼もしいな。

それから少しして、馬車はゆつくりと動きだし、俺とエリスは手を振って送り出す。子を送り出す親の気持ちって、なんだか寂しいものだな。

馬車の後ろでは、席に座れなかったアクアがふてくされた顔で座っている。

お昼のメインストリートは昼飯を求めた人達で溢れており、どの飲食店も満員で入れない。

「やっぱり、どの店も空いてないか」

「ユウマさんがよければ、私は食べ歩きでいいですよ」

「そうか。ならホットドックとかでいいかな」

この世界には平日という概念がないため、毎日のように祭りの屋台が並んでいる。

俺は丁度、すいている屋台へ向かう。

「ホットドック二本。その場で食べます。」

「あいよ！ホットドック二本！」

白タオルを巻いた、屋台のおっちゃんは慣れた手つきでソーセージを焼き、バンズに挟む。

肉を焼いた、この匂い。最高だ！

出来立てのホットドックにケチャップとマスタードをぶっかけ、紙で包んで渡してくれる。

2本で400エリス。妥当な値段だ。

「まいどあり！」

二本のホットドックを片手に、エリスの待つ中心の噴水へ行く。

ん？しゃがんで何をしてるんだ？

「おまたせ。何見てるの？」

「あ、ユウマさん！見てください、猫ですよ！」

エリスは噴水の外で横になっている猫と戯れている。

猫というと、最近めぐみんが使い魔の猫を連れて来た。

ーが、この猫。外見は黒く、何故か小さな翼がはえていた。

しかも、魚を渡すと誰も見てない所で口から火を出して炙り始めた。

その時は、異世界だからありえるのかな？と思っていたが、後々めぐみんに聞いたら、そんな事はないと笑われた。

この猫は見ると翼がはえていない。きつと、めぐみんの猫だけ特別なのだろう。

「さあ、お食べ」

ホットドックのパンズをちぎり、猫に食わすエリス。

馬小屋の馬をよく見ては可愛いと言ったのを思い出す。

エリスは動物が好きなのだろう。

猫を胸元に寄せて、座りながら食べているエリス。

羨ましいなあ。

「口元にケチャップついてますよ？」

「あ、ああ」

「お洋服が汚れてしまいます」

エリスに見惚れてて、口元についてたケチャップをジャージの裾で拭こうとする俺。

それを見かねてハンカチで拭いてくれる。

ヤバイ。これはかなり効く。

「どうしたんですか？」

「いい、いや特に。」

俺はこういうのにはかなり弱い。

顔を真っ赤にした俺を見て、優しく微笑むエリス。

聖女だ。

ホツトドツクを食べ終わり、猫に別れを告げて街を歩く。

季節も春になり、日が出ていると暖かい。

「もう、すっかりと春になりましたね」

「そうだな。この世界の冬はとことん寒かったから、春も少し寒さが残っていると
思ったけど、結構ほのぼのとした暖かさだね」

「そこらへんは、ユウマさんの過ごしてた日本と変わりませんよ。気温も丁度いい感じ
で、気持ちのいい季節です」

この世界で初めての春。

こんなのにのんびりとした季節なのに、桜が無いのがもったいない。

できれば、みんなでお花見したかったな。

「アクア先輩に教えてもらったのですが、この時期になると日本ではお花見というのを

やるんですよね？」

「そうだね。ピンク色の花びらの桜って木の下で、みんなで弁当食べたり、遊んだりするんだけど、本当楽しくてな。……、そうだ。魔王を倒したら、みんなで行ってお花見しようぜ」

俺の提案に、どこかせつない感じの笑顔をうかべる。

「魔王を倒した後ですか……。そうですね。楽しみですよ！」

前に桜の話をしたときに、すごい見たそうにしていたのをイリスを思い出す。きつと喜ぶだろう。

それに大勢でお花見を開けば、ゆんゆんにも楽しい思い出を作ってあげられる。

我ながらいい案だ。

しばらく、街の川沿いを歩きながら夕日を眺める。

周りには高い建物がないため、きれいなうえによく見える。

日本だと建物が多すぎて空が近く見えるが、この世界だと遠くに見える。

「あの」

突然、止まって俺を呼び止めるイリス。

振り返ると、少し寂しそうな表情で見てくる。

「どうした？」

開いた距離を縮めようと少し近づく。

「ユウマさんは自分勝手な人をどう思いますか？」

自分勝手な人。

いろいろな種類があつて、少し解答に困る質問だ。

それにいきなりな質問で戸惑つてしまう。

「自分勝手つて言つても、いろんな種類があるからなー。そうだな。人を傷つける奴は嫌いだ」

「人を傷つける人……」

下にうつむくエリス。何かに怯えているようで、その体は震えていた。

俺はそんなエリスを安心させようと、体を抱きしめる。

「え!？」

突然の俺の行為に驚く。

これ以外、どうしても思い付かなかつた。

夜、一人泣いていた俺を安心させようと抱きしめてくれた、あの感覚。

全てを受けとめてくれたエリスへの、俺ができる事だ。

「大丈夫。もし、エリスを傷つける奴がいたら俺が許さない。たとえば、国だろうが、神や悪魔が相手だろうだ、エリスを守るよ」

この世界のいろんな人達から信仰された女神。

そんなエリスだが、ゆんゆんとはまた違うとても孤独な女の子に感じた。

しばらくして震えが止まり、俺の腕の中で安堵するエリス。

「よかった。ユウマさんに守ってもらえるなら、それだけで充分です」

第19話 覚悟

カズマ達がアルカンレティアへ、出発してから四日がたった。

そろそろついて観光でもしている頃だろう。

そんなことを考えながら、昼過ぎの時間を主人のいない魔道具店で過ごす。

「なんでこんな所にライターが？」

机のはしつここに置いてあったライターを拾い上げる。

この世界には無い物のはずだが？

「それは小僧が作った物だ。お主には話しておらんかったが、我輩は小僧とも商売の話をしてな。お主から譲り受けた特許だけではやっていけぬと思い、小僧の知識を買い取ったのだ」

「カズマの知識をか。それはいい判断だとは思うが……」

ファンタジーな世界に現代技術が入るのは、なんかやだな。

片付けを一段落終えたバニルは机の上に用意しておいた紅茶をすすする。

「それにしてもだ。まさか、発光シスターとこじらせ魔法使いを口説くとは、なかなかの命知らずであるな」

「ぶはー！」

突然の不意打ちに勢いよく紅茶を吐き出す。

その様を見て、バニルは口元を歪めながら言う。

「落ち着いて周りを見ろ。まさに自分を見ろと言ってる物ではないか。それに夕日の川沿いなんかで抱きついてたら、誰もが注目するに決まってるであろう。今頃街の恵まれぬ男達は血なまこになって貴様の暗殺計画を立てているだろうな」

「おい！また、勝手に覗きやがったな！」

「何を言う。たまたま、近場を歩いていたら、偶然見てしまったただけだ。そんなに、見られたくなければ、自室でやっていればいい。」

にやにやと笑うバニル。

こいつ！俺の男心を遊びやがって！

「あのな。別に口説いてなんかいない。ゆんゆんに言ったことはな、身近に自分の事を思ってくれてる人がいるって伝えたかっただけだ。エリスの件は……」

怯えてるエリスに寄り添いたかった。

ただそれだけなんだが……。どうして、抱きついたりしたんだろう？

「ハツハツハ。そんなに、必死に弁解しなくていい。我輩がわかっていないと思つたか？」

「なら、茶化すな！」

「こんなに面白いネタを使わぬ者が何処にいる？ 貴様の悪感情なかなかの味だつたぞ。」

満足そうに笑うバニルを見て、こいつはそういうやつだったと思ひ出す。

ちくせう！

「もう、帰る！」

「フハハハハ！ またのご来店待つているぞ！」

席を立ち、勢いよくドアを開けて店を出る。

外まで響くバニルの笑い声。

相当面白かつたのだろう。

――

街のメインストリートの外れにあるエリス教の教会。

その会議室の中は、じめじめとした熱気と緊張感に覆われていた。

「国からの援助金の打ち切りが、朝の通達により決定しました。」

司祭の言葉に誰もが耳を疑い、不満の声を上げる。

「それは酷すぎませんか？こっちは国の問題を解決しようとして動いているのに！」

「そうだ！ただですら、その援助金が足りないからなけなしの生活費をはたいてるんだ
！」

「噂だと、王女が逃げたとか」

「それ聞いたことあるぞ。王女の搜索に多額の金を使つてるとか」

会議室のすみから、隅までに響きわたる批判と陰口。

信者達がこんなにも苦労しているのに、私はいったい何をしているのだろう。

止まることのない国への不満。

それは、突然の扉の音で止む。

「大変です！施設の孤児達が盗みを働いたと、領主殿が訴えにきて」

入ってきた信者の言葉にその場の誰もが立ち上がり外へ出る。

強い力を感じる。これは悪魔!?

「貴様が司祭か」

「その通りでござります」

騎士の問いかけに司祭が応じる。

周りを見渡せば、10人近くの騎士と数週間前に裁判で打ち負かした領主、アルダープがいた。

「貴様らエリス教団の管理する施設の孤児達が、先程、領主様への恐喝、窃盗を働いた」「いえ、それは何かの間違えでございます。この時間子供達は施設で学問をさせておりました」

「間違いのはずがなからう！」

「おい、待て」

声をあらげる騎士を下がらせ、前に出るアルダープ。

その背後から禍々しい物を感じる。

「領主様」

「確かにわしを襲ったのは貴様らの所の孤児達だった」

「ですから、そんなはずないと……」

「だった。わしを襲ったのは貴様らの孤児達なのだよ。」

アルダープは物凄い圧力をかける。

その時だった。背中に寒さが走る。

何かがネジ曲がった感触。

「大変、ご無礼なことを。申し訳ございません」

頭を下げる司祭。

え？子供達はこの時間には外には出ていない。そうだった、はずでは？

なんで、頭を下げてるのです？

「分かればいい。……ただ、簡単には終らす事はできぬ。わしの顔に泥を塗った始末。どう責任を取るか？」

辺りを見回すアルダープ。

すると、最近入ったばかりの女の子を指差す。

「お主。ついてこい。」

「え」

おどおどとする信者を囲む騎士達。

噂を聞く限り、一度連れてかれると、もう帰ることはできないらしい。

アルダープの顔を見ると、その顔は、己の欲望をにじませ、女を道具にしか見てない卑猥な目でいた。

ただでさえ、私は信者達の手助けができていないのだ。

こんなときにどうにかしないでどうする。

「お待ちくださいー！」

私の声に顔を向けるアルダープ。

その顔はさつきより酷く歪んでいる。

「連れていくなら、私を連れて行ってください」

「エリスさん……」

「エリスさん、何を言ってるのですか！あなたが連れていかれては……」

「よからう。おい、連れていけ」

私の身を案じる信者達を押し退けて、連れていくアルダープの騎士達。

これしかないんだ。私にできることは……。

—————

魔道具店を飛び出して、街をほつつき歩いていた俺は、自分が夕飯の当番だったことを思いだし、買い物をしてから家に帰った。

誰もいない家の中は静かな物で、初めて一人で留守番したときの寂しさを思い出させた。

それからしばらくして、夕飯の仕度を終え、エリスが帰って来るのを待っていた時

だった。

強く扉を叩く音が響く。

鍵なんか閉めた覚えはないが、まあ、出迎えるのが筋だろう。

玄関まで小走りで行き、扉を開ける。

「おかえり。それにしても遅かった……!?!」

扉を開けて前に立っていたのは、息を荒くした若いエリス教徒だった。

「どうしたんです？ エリスはまだ帰ってきてないけど」

「大変なんです！ エリスさんが領主殿に連れていかれて！」

エリス教徒の言葉に、俺はいつしか我を忘れて走り出していた。

エリスが連れて行かれた!?

なんで？

この前の裁判の仕返し？

混乱する頭の中。

領主の屋敷の場所すら分からないのに、無我夢中走り回る。

それからしばらくして、目の前に魔道具店の看板が写る。

バニルだ。

こういうときはバニルに頼るしかない。

テンパっているため荒く店の扉を開いてしまう。

「らっしやい。お、これはこれは、我輩のからかいから逃げ出した坊主ではないか。そんなに息を荒げてどうしたのだ？」

昼間の続きをしようとからかうバニル。

そんなことに付き合っている場合ではない。

俺は真剣な顔でバニルに言う。

「エリスが領主に連れて行かれたんだ！頼む。力を貸してくれ！」

俺の必死さにまともな表現になるバニル。

「ほう。それは大変なことだ。あの発光ゴリラが何をしたかは分らんが、何故我輩を頼る？」

その問いかけに、答えを浮かべる。

領主の場所がわからない。

たどり着いても、警備の騎士を相手できない。

考えれば考えるほど答えは浮かんでくる。

「場所がわからない。騎士を相手できない。だいたいの理由はそんなところか。だが、解決手段はあるはずだ。場所が分からないのなら聞けばいい。騎士の相手ができないなら、魔法で躲していけばいい。なあに、単純な答えだ。それなのに何故我輩に頼る

「？」

俺の思ってたことを全て見抜かれる。

そうだ。確かに答えは簡単だ。

でも、何故バナイルを頼ったか。

その答えの解決策は出てこない。

ただ分かることは、俺が無力だからだ。

情報が無い無知。手段を作れない無能。力が無い無力。

結局の所、俺は無力でしかなかった。

それなのに、俺はエリスになんて言っただろう。

「『守る』お主はそう言ったな。自分の無力さをよく知ってるお主が、何故言った？……理由はなんであれ守るとい言葉は重い。全てを担うということだ。お主にはその覚悟があるのか？」

その言葉に圧倒される。

言葉の重さ。それはきつとバナイルも体験したことがあるのだろう。

だが、俺は……。俺はそんなことを気にせず、言ったのだ。

『守る』と。

彼女に救われたから。何も果たせなかった俺を。無意味な努力しか積むことのでき

なかつた俺を。

それでも救ってくれたのだ。

だからあの時俺は。

「無力だろうと、覚悟はある。だから、俺に力を貸してくれ！」

それが俺の決めた道。

その言葉に表情を緩めるバニル。

！今笑った？

「そうか。なら、我輩と契約しろ。そうすれば、雑魚処理くらいは受け持つてやる。ただし、これは商売の契約とは違う。悪魔の契約だ。当然、破れば死より重いものが貴様には、かせられるだろう。それでも、お主が道を踏み間違えないというのなら、契約しろ」
差し出された手を握る。

すると、魂を縛る感覚が体を襲う。

「契約は完了だ。先に街の正門に向かっていろ。後から追いつく。」

「わかった！ありがとう」

勢いよく、扉を開けて店を出る。

後戻りはできない。ただ、後悔は無い。

これは俺の決めた道だから。

開けっ放しの扉を閉める。

本当、若い人間は何故、あんなにも活発的なのだろう？

来ていたエプロンをたたみ、カウンターに置く。

そして店をでようとしたとき、一つの鏡が写る。

「何年ぶりだろうな。自分の姿を見るのは」

相変わらずのやつれた姿の自分にやれやれとする。

その時だった。

『バニルさん！私に仲間を救う力をください！』

それは呪いをかけられた仲間を救おうとした魔法使いの姿。

『どうしても助けたいんだ！頼む。悪魔にでも何にでもなる。たがら、俺に力をくれ！』

それは不死の病に侵された幼なじみを救おうと、悪魔にすがった男の姿。

それが、言葉と共に脳裏に流れる。

「呆れた物だ。いつの時代も、人間の愚かさは変わらぬようだ」

ついつい嗤ってしまう。

酷い鏡を見せられたものだ。

500年生きた我輩が、10年ぼちちしか生きてない若僧に動かされたのだ。

こんな笑い話 שהואあるだろうか。

だが、せつかくその気になったのだ。

ここは一つ大暴れをしてやろう。

第20話 この悪徳領主に天罰を！

家と月の明かりが頼りな街の夜。

都会で見るよりも空の星は綺麗に見えた。

「これから戦いというのに、呑気に星を見る暇があるとは」

「ああ、ごめん。つつい綺麗に見えるから」

「まったく、お主をおぶってる我輩の身にもなってくれ」

確かに少し緊張感が足りてなかったな。

顔を叩いて前を見据える。

アレクセイ・バーネス・アルダープ。

この地域の領主にして私利私欲で動いては人々を苦しめる悪の元凶。

誰に聞いても悪い噂ばかりで、あのエリスですら嫌な顔をするレベルだ。

そんな奴と今から戦うも思うと手加減などいならくて逆に気が楽になる。

「着いたぞ」

バニルの背中から降りて周りを見回す。

話によるとここは王都の端にあるアルダープの別荘らしい。

デストロイヤーのコロナタイトによって屋敷を爆破されたアルダープは、屋敷の建て直しが終わるまでここに滞在することのこと。

「さあ、中に入るぞ」

「え、このまま入ったらさすがにバレるだろ?」

「お主は何を言っている。姿を隠す魔法くらい覚えていよう?」

「え?」

嘘だろと言う顔で見てくる。

俺は結界魔術と爆裂魔法ぐらいしか覚えていないのだが。

「まったく、仕方ない奴だ。《ライト・オブ・リフレクション》」

「き、消えた!」

「何をしている。さっさと冒険者カードを取り出して取得しろ」

「おう。わかった」

取得欄に追加されたライト・オブ・リフレクションを押し、詠唱を唱える。

だが、体が消えてる感じがしない。

「あくまでも、相手の視界を誤魔化す魔法だ。自分からは見える」
ほうほう、なるほどね。

歩いてて分かるが、足音などは消えないらしい。

それにしても、目には見えないはずのバニルの場所をしつかりと把握できる。

感じからして契約によって魔力のパスが繋がったからだろうか？

「さて、作戦だが。坊主。お主は考えてあるのか？」

「そうだな。屋敷の前でお前が暴れるのはどうだ？その隙に俺は屋敷に入ってエリスを助ける」

「ほう、それは単純かつ、最適な作戦だな。だが、場所は把握しているのか？」

「一応。なんとなくはだけど」

そう、なんとなくだが分かる。

最近はそれなりの距離にいれば、魔力をたどって行くことができる。

この感覚はバニルの場所が分かるのと同じ原理だと思う。

ただ、一つ謎なのはエリスとはそういう契約的なことはしてないと言うことだ。

「そうか。……なら大丈夫であろう」

木々をかけ分けて屋敷の近くまでつく。

さあ、勝負の時だ。

俺に静止を呼び掛けて屋敷の前に出るバニル。

そして、魔法を解いて叫ぶ。

「我輩はアクセルの街で道具店を営むバニルである!」

その名乗りに屋敷の中、後ろの道から警備兵が駆けつけ一斉にバニルを囲む。

「揃いも揃ってみっともない面をいておるな。そんなお主らにこの、バニルさん特製の化粧水売ってやろう」

胸ポケットから小瓶を取り出して高らかに上げて、おもいつきり地面に落とす。

そして、落ちた小瓶から液体が漏れだし、空気に触れた瞬間、煙となって周りを包む。

今だ!

草むらから飛び出して屋敷の中へ入る。

入り口で何人かの警備兵とすれ違ったが、外に集中してくれていたおかげで、こちらの魔法に気づかれずにすんだ。

あとは、魔力をたどってエリスのもとへ行くだけだ。

—

重い鎖が腕を固定していて動けない。

あれからどれだけ経ったのだろうか。

領主の警備兵に連れていかれ、気づいたらここにいた。

辺りを見回せば、趣味の悪い拷問道具ばかりで、部屋の中は薄暗い。

きつと、地下にあるのだろうか。

空気は悪くじめじめする。

本当、連れて行かれたのが私でよかった。

こんな場所、普通の人では耐えれない。

奥の入り口から複数の足音が響いてくる。

その音はとても重々しく、不気味な音だった。

「これはこれは、よく眠れましたかね？」

目の前の扉を開け入ってくる領主アルダープと謎のフードをきた者。

領主は相変わらずの卑猥な笑みを浮かべて話す。

気分は最悪だが、下手に動いてはいけない。

「まったくです。鎖にぶら下がっていたせいで腕は痛し、空気は悪いはで、気分が悪いで

す」

「フハハハハ。それは我慢してもらうしかありませんな。その鎖を解いてしまつては、我々の身が危なくなる」

その言葉を聞いて力をいれるが音一つせず、しつかりと固定されている。

これは神器?!

「ご想像の通り。それは神器《天の鎖》。神性を持つものを強く捕縛することのできる鎖ですよエリス様」

「な!なんで私の正体を!」

「落ち着いてください。私のしもべが見破つてくれたのです。なあ、マクスウエル」

「ヒュー。なんだか眩しいよアルダープ」

領主に話を振られた男はフードを取る。

瞬間、背筋が凍る。

フードの中から出てきた顔は感情の抜けた薄気味悪い表情であり、強力なオーラを感じる。

私はこの男を知っている。

あの魔道具店の寄生虫ことバニルと同じ、地獄の公爵を冠する悪魔。真実をねじ曲げるもの、マクスウエル。

「さすがにエリス様も知っておられましたか。私も最初はただの下級悪魔だと思っていたのですがな。つい最近、侵入してきた盜賊達の撃退に使ったら、これが思いのほか使えまして、本人に聞いてみたら地獄の公爵だとかで」

「民を導く者が、悪魔など従えるとは言語道断！それでも人の前にたつ者ですか！」

「何を言っておられるのです？別に悪魔を従えてはならないという決まりなどありません。それに貴女方、神が悪魔を目の敵にしているだけでしょ？我々の人間には関係がない。」

「っー！」

「まあ、貴方が何を言おうとそんなことはどうでもいい。そんなことより、私は貴方の連れに用があるんです」

私の連れ？

それってユウマさんのこと!?

もしかして、裁判の時のことを、まだ根に持っているのだろうか？

「ご察しの通り。あの冒険者にはララティーナの前で散々な目にあわされましたからね。それ相応のお礼を与えよう」と

「まさか、そのために私をここに!？」

「その通り。ここに来たあの冒険者をぼろ雑巾にしたあと、領主暗殺の罪をかけ死刑に

して差し上げましょう。」

後ろにひっくり返りそうになるくらい、盛大に笑う領主。

きつと、ユウマさんは私を助けにここへくるだろう。

状況は最悪。イリスさんもゆんゆんさんもいなければ、カズマさんや先輩達もいない。

対して相手は権力の横暴と地獄の公爵、警備兵達がいる。

ユウマさんに勝ち目は無い。

先が真つ暗などどうすることもできない状況に絶望しているとき、上の階から声が聞こえた。

「侵入者！侵入者だ！」

その言葉に大勢の足音が地響きを鳴らしながら屋敷の外へ出たのがわかる。

来てしまった。

「さつそく来たか。おい、マクスウエル！貴様も外へ行つて侵入者を捕らえてこい！なに、貴様を見た兵士は殺してよい。そのほうが、奴の刑も重くなるし、いちいち兵達の記憶を消す手間も省ける」

「わかったよ、アルダープ」

「待ちなさい！そんな、罪の無い兵士達も殺すだなんて、貴方には人の心は無いのですか

！

「人の心？はて、そんなものが生きていくのに必要ですかね？」

この領主には血も涙もない。

快樂、欲、プライド。

眼中には常に自分しか写っていない。

悪魔より悪魔のこの世に存在してはいけない生き物だ。

救いようがない。

「さて、貴方の処遇についてですが。当然こんな所を見られては返すわけにはいきませぬ。……そうだ、わしの妻にでもなつてもらいましよう。これもわしの慈悲。あの冒険者を捕らえたら、警察に差し出す前に縛つて、目の前で貴方を犯してあげましよう。死ぬ前に仲間の、女神様の淫らな姿を見られてさぞ喜ぶでしょうな。ガハハハハ」

錆び付いた臭いが響く、冷たい部屋の中に領主の声が響く。

上からは爆裂魔法には及ばないが大きな爆発音ともがき苦しく人々の声が僅かに聞こえてくる。

きつと今頃、上は生き地獄になつたいるのだろう。

コツコツと足音を鳴らし私の服に手をかける領主。

ごめんなさい、ユウマさん。

私^が自分勝手なあまりに……。

――――

――

中にいた兵は全員外に出たのだろう。

屋敷は不気味な静寂に包まれている。

バナールのおかげで楽に中に入れたが、問題はどう地下へいくのかだ。

あの、領主のことだ。速く助けないとエリスがどうなるかわからない。

その時、通路の角から何かが落ちた音が聞こえた。

まだ、中に兵が残っていたのか、結界から短剣を取り出して構えて覗く。

「うわー」

「え、え。う、うわ！」

突然の叫び声に後ろへ腰を抜かす。

い、いてー。いきなり声を出されたら、さすがにびっくりする。寿命が縮まるわ。

「あ、あれ？何故、ユウマ君がここに？」

「え、バルター？」

立ち上がり俺に手を差し伸ばすバルター。

そうか、バルターはアルダープの息子なんだっけ。

ここに居てもおかしくはないか。

さて、理由をバルターに説明するべきか？

さすがに、自分の父親をどういう人間かは知ってるだろうし、信じてくれそうだが……。

ここは仲間を増やす意味もこめて、理由を話してみるか。

「やっぱりそうでしたか。今日は、多くの兵士を引き連れていたもので、どうしたのかと思ってきましたが」

「多分地下にいると思うんだが、場所がわからなくて」

「でしたら、お連れします。これ以上、父の悪行は見逃せません。僕もユウマ君の手助けをします」

「ありがとな」

バルターの後についていき、地下への階段へ行く。

それにしてもたくましくなったものだ。

孤児院であつた時よりも胸をはって行動してゐるあたり、あれから彼の中でも何かが変わつたのだろう。

「ここが地下に繋がる場所です。父には入るなど言われてましたが、状況が状況です。」

本棚の置かれた部屋の真ん中にとつてのついた床があつた。

一人では重々しく、二人がかりで開けるのがやつとだ。

ギシギシと音を上げ開かれる扉。その先は薄暗くなつてゐる。

「行こうか」

カツンカツンと鉄でできた階段を下つていく。

そのなかは鉄の錆びた臭いとじめじめとした空気に包まれていて、気分が悪くなる。

こんな所にエリスは囚われていると思うと無性に殺気が沸いてくる。

周りを見渡すと錆び付いた檻と苔の生えた壁、趣味の悪い拷問道具があちらこちらに散らばつてゐる。

「まさか、父にこんな趣味があつたとは」

「分かるぞバルター。親の性癖を知つたときはなんか気分のが下がるよな」

辺りを見ましてながら、前に進んでいくと一つの扉が目にはいる。

ここだ。

俺はバルターにアイコンタクトを取り短剣を構える。

そして、バルターがおもいつき扉を開ける。

「動くな！」

部屋に乗り込み静止を訴えかける。

そこで目にしたものは、鎖に吊るされたエリスと服に手をかけるアルダープだった。

――

屋敷の中から出てきた警備兵の数はおよそ20人近くというところか。

手にもった剣をこちらに向けてくる兵達の足はガタガタと震えている。

坊主ほどではないが、なかなかの悪感情。

次はポンコツ店主の仕入れてきた閃光玉なんかでいくか。

「さーさ。お次は使えば周囲の敵を10秒間行動不能にできる閃光玉である。ただし、中の仕組みのせいで強烈な電気を辺りに巻き散らかすらしい」

強烈な光と共に辺りが真っ白になる。

とつきにつけたサングラスのおかげでこちらの視界は守られる。

光が晴れると周りの警備兵はそれぞれ痙攣を起こし倒れている。

これは、返品確定だな。

ふと、強い魔力を感じる。

「あれ、外れちゃったか」

先程我輩のいた場所は綺麗なクレーターができていた。

前を見ると見覚えのある者が宙に浮いていた。

「ほう、マクスウェルではないか。いきなり、爆発魔法など撃ってきて危ないではないか」

「バニル！久しぶりだね。まさか、侵入者がバニルだったとはね。でも、ごめん。アルダープの頼みで僕を見た奴は殺さないといけないんだ」

「まさか、ついさつき話していたことをすぐ忘れるお主が、主人の命令を覚えているとは、成長したな」

目の前に浮いていたのは、我輩と同じ公爵を冠する悪魔、真実を曲げるマクスウェル。

ぱっとみ好青年だが、魂の抜けた表情から気味が悪いと言われ人間からは不評な悪魔だが……。

まさか、契約者がいたとはな。

「しかたない、坊主との契約だ。マクスウェル、お主を地獄に戻してやる」
「ヒュー。その気にならないとね。《ファイヤーボール》！」

マクスウェルから放たれた魔法は中級魔法のファイヤーボール。
燃費がよく、それなりに火力もでるので使用者が多い魔法だ。

だが。

近くに倒れている警備兵から剣を取り、跳ね返す。

所詮は中級魔法。避けるまでもない。

「ヒュー《カースド・ライトニング》！」

「《固有時間制御・三倍加速》。《七式結界》！」

「《マジックキャンセラー》」

さすがは公爵を冠するだけはある。実力は本物か。

それにしても、我輩の固有時間制御についてくるとは面白いものだ。

さて、少し力を出してみるか。

「我輩も久々に使う魔法だ。失敗しても笑うなよ？ 《幻想監獄崩し》（ファンタズム・プリズンブレイク）」

マクスウェルのいる空間をつかみ結界を貼る。

中で魔法を乱発しているが無駄だ。

この結界は使用者の魔力の質で強さが変わる。

そう簡単に割れるわけがない。

掴んだ結界を右手で下へ払う。

すると、結界は圧縮しはじめ、ある程度縮んだところで、爆発する。

結界魔術の中ではトップクラスに当たる高火力魔法。

中級悪魔なら即死レベルなのだが……、どうやらマクスウェルには致命傷にもならな
いらしい。

「驚いたよ、バニル！まさか君がその魔法を使うだなんてね。いや、その魔法を使う以
上、虚無の道化師っていうのが正しいよね」

虚無の道化師。

それは確か……、クツ。こんなときに頭痛か……。

脳内を埋め尽くす限らない憎悪の数々。

今まで食べてきた悪感情が一つの記憶を呼び覚ましてくる。

コロセ……、コロセ…。

コロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセ
コロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセコロセ

それにしても、さっきの爆発音といい、外では何が起きているのか。

「クソー!バルター、そこにいる侵入者を捕らえろ!」

「何を言っているのですか、父さん!ユウマ君は侵入者などではありません。父さんこそエリスさんから鎖をとってください!」

「く、不出来な息子め。いいか、そいつは侵入者だ。侵入者は捕らえて牢にぶちこめ。」

アルダープの言葉と共に寒気を感じる。

なんだ、この何かがネジ曲がった感覚は……。

その時だった。後ろから金属の音がする。

これは、剣の音!?

「うわ!」

背中を襲う剣を短剣で流す。

何が起きたのか理解できず、前を見ると、その剣の持ち主はバルターだった。

「バルター、どうしたんだよ急に!」

「侵入者は捕らえる……。」

バルターの様子がおかしい。

どうしたんだよ。

何が起きているのか俺には理解できない。

寒気とともにバルターがいきなり剣で振ってくるなんて、なんなんだよ。

「何を払われておる。それでも、わしの息子か！これ以上わしに泥を塗る出来ない！」
次から次へと速い剣撃がせまってくる。

デユラハンの攻撃と比べれば優しいものだが、強化を受けていない今の状況では払うのがいっぱいいっぱいだ。

どうすればいい。

バルターを傷つけることなく、この場を終わらすには。

休む暇もなく襲ってくる剣撃。

その一つ一つが規則正しく、型にはまった動きだ。

……型にはまった動き。

そうか！型にはまってるなら、その動きを崩せばいいのか！

今の俺の状況はアルダープに背を向けている状態だ。

なら。

「全剣連続射出！」

無防備なアルダープを狙えばバルターは助けに行くはずだ。

そして狙い通り、バルターはアルダープに放った短剣を全て払う。

「うおーーーーー！！《固有時間制御・三倍加速》！」

バルターが最後の一本を払った瞬間。

その瞬間に背後を取り、手元の短剣の柄頭で脊髄に軽い打撃をくわえる。

そして、その勢いで回転し、結界から短剣をもう一つ取りだす。

「アルダープ!!」

怒りの一撃。

民を苦しめ、バルターを操り、そしてエリスに手を出したアルダープへの全ての感情をこの一撃に。

アルダープがとつさに取り出した石のような物をもった右手を短剣二本で砕く。

「や、止めてくれ。金ならいくらでもだそう。そうだ、なんならわしの持つている神器を全てやろう。だから命だけは…。うぐツ」

尻餅をついたアルダープの右足のふくらはぎに短剣を打ち込む。

勢いよく、噴水のように飛び散る血液。

こんな、外道でも血は赤いのか。

「何が命だけはだ。てめーは何をしたのか理解できてないようだな。…いや、理解なんかしなくていい。とにかく死ぬ。苦しめてきた民に、バルターにエリスに悔いながら死ぬ!」

左手に残った短剣を向ける。

エリスが時間をかけて術をかけてくれた短剣を、こんな奴の池で汚すのはしやくに触るが。

今はこれしか残ってない。

消えろクズ野郎。

「人殺しは駄目です！」

短剣を投げようとした瞬間、エリスの言葉に動きを止める。

アルダープは死ぬと思ったのか失神して気を失っている。

「駄目です。こんなクズの為に、ユウマさんが手を汚す必要はないんです。」

アルダープが気を失ったことにより鎖はほどけ、エリスは両手を地面につけて泣いていた。

正直、俺はこいつを殺したくてたまらない。

だが、俺がここでこいつを殺せば、汚れた手でエリスを守っていくことになる。

俺はそれでも構わないが、エリスは悲しむだろう。

「え、何を……」

俺は力いっぱい、自分の頬を殴る。

「ごめん。エリスを泣かせちゃって」

エリスの手を引っ張り、立ち上がらせる。

そうだ、俺のことを大切に思ってくれてる人がいるんだ。

日本では気づくことができなかつたけど、今は気づくことができた。もう、この人達を悲しませないために……。

――

――

砂ぼこりが晴れ、前を見るとそのには仮面の悪魔の姿はない。

消滅したのかと悪魔は安堵する。

――が。

「解除……」

悪魔の背後で、消滅したはずの男の声が聞こえた。

「な、バニル!? どうして……」

消滅したはずじゃ。

そうこの悪魔はほごうとしたのだろう。

ふざけるな。我輩は500年生きた悪魔だ。

爆裂魔法ならおろか、その劣化版ごときで消滅するわけがなからう。

「《爆発魔法》！《爆発魔法》！」

何を血迷ったのか、この悪魔は爆発魔法を乱発してくる。

まったく。それが仮にも公爵を冠する者のとる行動か。

「《時止め》」

我輩を中心に時が止まっていく。

この魔法を使うと地獄からの魔力供給が止まるだけではなく、現実世界に干渉するこ
とができなくなるため、ただの回避用にしかならぬのだが……。

仕方がない。

これも、こやつが望んだことなのだから。

「解除」

時は動き始め我輩のいた所にクレーターができる。

そうだ、その表情。絶望に震えたその感情は、実に美味である。

「私が殺す。私が生かす。私が傷つけ私が癒す。我が手を逃れうる者は一人もいない」

「ヒュー。バニル、何をしようしてるのさ」

「許しには報復を、信頼には裏切りを、希望には絶望を、光あるものには闇を、生あるものには暗い死を、休息は私の手に」

「ごめん！謝るから、あの言葉は取り消すだからさバニル！」

「永遠の命は、死の中でこそ与えられる。許しはここに。受肉した私が誓う。……マクスウエルよ。この詠唱を知っているか?これはとある世界の組織が使う洗礼詠唱だ。本来はその組織しか使えない奇跡なのだが、ちよつとしたずるをして所得したのだ。」

「え?」

「我輩は基本、怒りに身を任せることはしないようにしている。……が。一つだけ例外があつてな。俺を虚無の道化師と呼んだ奴は例外なくこの世から消し去ることにしてい!《この魂に憐れみを》!」

「うわ……!熱いよ!熱いよバニル!ねえ、お願いだよ助けてよ……!」

悪魔の言葉は虚しくも灰となつた体と共に空へ消えていく。

まったく、学習能力のないやつだ。

いや、そもそも頭がかけているのだから、ないにきまつてるか。

——

それからしばらくして、エリスを落ち着かせた俺は、バルターをおぶり屋敷の外へ出た。

「ほう、そちらの仕事は終わったか」

「ああ、なんとかな。それにしてもスーツがボロボロだな。」

「なあに、契約通り雑魚を片付けたまでだ。とくに問題はない。」

「ちよつと待つてください！ユウマさん、こんな虫けらと契約したんですか!？」

「これには事情があつてな……」

「そう嫌悪するな、間抜けな女神よ。坊主は貴様を助けようと手を打つたのだ。責めるでない。……それにしても、無様に縛られている姿、大変お似合いであつたぞ。それに、眠り粉ごときで眠らされるとは、間抜けにもほどがあろう。フハハハハ！」

こうして、いつも通りの喧嘩が始まる。

夜なのに賑やかなことですね、まったく。

「ええい、静まれ！ここは王都であるぞ！魔法の使用は禁じられている！」

気がつくと、門のほうから重装備の騎士達が整列してこちらの前に立っていた。

多分王都の騎士だろうか。

「まあまあ、彼らはアルダープの悪事を暴いた者たちだ。そう怒鳴り散らすのは止めないか。」

騎士たちの間を割って金髪で髭を生やしたおじさんが現れる。

アルダープと比べて、痩せており、優しそうな顔立ちだ。

「あの、すいません。どちら様でしょうか？」

「無礼者!このお方はこの王都を納める王家の懐刀。ダステイネス・フォード・イグニス様であるぞ!」

ダクティネスどこかで聞いた名前だ。

確か……。

あ、確かあのドMの名前だった気が!

「ダクネスのお父さん!?!」

「ホッホッホ。娘を知っているのか。確か今娘は仲間と湯治に行っていると聞く。もしかして君はクドウユウマ君かね?」

「あ、はい。アクセルの街で冒険者をやっているクドウユウマというものです。」

「そう、固くならなくていいのだよ。そうか、娘はいい友達を持ったものだ。安心してくれたまえ、アルダープは私がしっかりと法で裁く。」

「はい。お願いします。」

ダクティネスさんの笑顔で差し出してきた手を握る。

この人になら任せられる。

しばらくして、屋敷から縛られて騎士たちに連行されるアルダープが出てくる。

因果応報だ。せめて、冷たい牢屋の中で、苦しんでいればいい。

「それにしても、もう今日は遅い。どうかね、私の屋敷に止まってはいかないかな？ そちらのお嬢さんも大変疲れている様子だ」

「紳士的対応、感謝します。お言葉に甘えさせていただきます。」

その晩はダクテイネスさんの屋敷で休ませてもらうことになった。

ーののだが、バニルと同じ部屋になったため、その晩は散々とエリスのことだからかわれて眠ることができなかつた。

なにやら、悪魔は眠る必要がないようだとかで、本当迷惑なことだ。

人類最前線 紅魔の里編

第21話 そして後日……

「おはようございませす！ユウマさん」

目を開けて一発目に写ったのはYシャツ姿のエリスが、笑顔で俺の上にまたがり朝の言葉を言ってくれる姿だった。

何がどうして、こうなった!?

起きたばかりの、動きの鈍い脳をフル回転させて、状況を整理するが、まるで意味が分からない。

確か昨日は、アルダープの屋敷から帰ってきて、ダクネスの実家の屋敷に止めてもらった気がする。

それで確か……。

「……!!」

前に垂れた髪を、左手で後ろへ持つていく何気ない仕草に、全ての思考が飛んでいく。

ちよつと待つて。朝のこの状況でそんなことされたら、俺、萌え死ぬから！

「その……」

はにかんだ表情で下にうつむくエリス。

「あつー！」

その目線の先には、俺のオットセイが元気に起立していた。

「いや。違うんだ！これは生理現象であつて、俺の意思とは真逆の方向で行動するんであつて……」

「……私がお世話しましょうか……」

その言葉に体が固まる。

嘘だろおい！これつてエロゲとかである、お約束シチュエーションじゃないですか！

「えつと……、その、はい」

上目づかいなエリスに近づく俺。

この機会をくれた、ダクネスのお父さん、ありがとうございます！

カズマ。俺は先に大人になるぞ！

ーと、その時。

頭の中の曇っていた部分が晴れた気がした。

そういえば、バニルは？

思考が答えにたどりついた時。

部屋の扉が開かれる。

「おはようございませう！ユウマさん！朝食の用意ができて……。え？」

扉を開けてご機嫌な様子で入ってきたエリス。

「ーが、こちらを見るなりいきなり驚いた表情へと変える。

「え!? エリス? じゃあ、こっちは……」

恐る恐る視点を変える。

扉の前にいるのエリスが本物なら、こっちのエリスは……。

「フハハハハ！朝から、豪華な食事。感謝するぞ坊主！」

俺の手が置かれた相手。

それは、今までにないくらい、上機嫌な高笑いをするバニルだった。

「いやいや、とても美味であった。坊主よ、そなたの悪感情。我輩の見てきた中ではトツプ3に入るものだったぞ。それでは、我輩は店のことがあるから帰る。続きは二人で楽しんでくれ。なんなら、使いの者にはしばらく入らぬよう言っておくぞ」

笑いを押さええず部屋を出て行くバニル。

パタンと閉められた扉の音がなんとも言えない空気に包まれた部屋に響く。

「……」

「……」

お互いに目線を下に向ける。

そして、昂っていたオットセイもいつの間にか、空気を読んでうつむいていた。

|-----|

|

それから、ダクネスのお父さんの使いの中で、レポート魔法を使える人がいたので、すぐにアクセルの街へと送ってもらうことができた。

それにしても、帰り際にいきなりダクネスのお父さんが泣き出したのは印象に残った。

宥めるエリスの後ろで、変わり者の娘を持つ父親の苦勞をしみじみと感じた。

ダクネスよ、お父さんを大切に。

それにしても、さつきから微妙な空気でエリスと話せて無いな。

さて、どうすることか……。

そういえば、屋敷で孤児院の話があったな。

詳しい話は聞いてないが、気になるな。

「そういえば、エリス教の孤児院。国からの支援を打ち切られたんだろ？これからどうなるんだ？」

「え？あ、孤児院のことですか？実はですね、ダクネスさんのお父さんが支援をしてくれることになったんです」

どこかぼーとしてたエリスは、我に帰って言う。

本当、何から何までやってくださるとは、帰ってきたらダクネスにもお礼を言っておこう。

「明日には、司祭の下へ直接話をしてくれるみたいなので、この件については大丈夫だと思います」

「そうか、それならよかった。王家の懐刀が味方についてくれなら安心だな」

子供達を救いたい。

バルターの夢は少しずつだが、実現に向かっている。

だが、ダクネスのお父さんの話では今回の騒動で、アレクセイ家は没落したらしい。

幸い、バルターはアルダープの被害者であったことから同罪の罪に問われることはなかった。

しかし、バルターはアルダープの養子だったこととのことで、完全に後ろ楯を無くし

てしまった。

「バルターさん。養子だったんですね」

「ああ、だから孤児達を救いたいて思ってたんだな」

でも、バルターならきつと這い上がってくる。

権力や家が無くなるうと、彼は自分の夢を叶えるため努力するだろう。

いつか、また出会うとき。彼が自分の夢叶えていますように。

「大丈夫ですよ」

春風が銀色の髪をなびく。

優しく微笑むその姿はまるで聖女のように、思わず見とれてしまう。

「ユウマさん。どうしたんですか?」

「いや、ついついぼーとね」

「そうですか。そうだ!これから洋服を見に行きませんか?そろそろ衣替えの時期ですし、いつまでもジャージのままだと、耐久力が乏しいままですのぞ」

「ああ、そうだね。でも、俺って、こういう服しか来たことないからな。コーディネートとかよく分からんし」

「私に任してください!アクア先輩から見せてもらった週刊誌にのってたのがあるんです!」

エリスに引つ張られながら、メインストリートを駆けていく。
それにしてもだ。アクア、お前は本当に女神だよな？

――

それから一時間が過ぎた。

いろんな服屋に入っては、あーでもない、こうでもないとして試行錯誤するエリスの姿に少しにやけてしまった。

それはいいとして、服選びに一時間かけた結果、一般的な魔法使いのカッコとなった。別に、エリスの提案してくる服はどれも悪いものではなかった。

――が、あまりにも異世界離れしていた。

文系男子ばいシャツや謎の学ラン。

どれも、この世界とかけ離れていて、結局ローブを羽織る魔法使いのカッコになった。
「そちらにカエルが行きましたよ！」

「了解。《固有时间制御 二倍加速》。からの、《偽・壊れた幻想》！」

高速でカエルの体に短剣を差し込み、膨大な神気を爆発させる。

二本も刺せばさすがに爆発四散するのだが、一本ではさすがに致命傷までにはいかな
い。

まあ、もともと短剣では込められる魔力の量が少ないため仕方ないことなんだが。

「お疲れ様です。久しぶりのカエルクエストだったので、少し不安だったんですが、以外と楽に終わりましたね」

「最初の頃よりはレベルも高くなったからな。一面カエルじゃない限り苦戦はしないよ。それにしても、ローブで以外と動きやすいんだな。なんか、狭いイメージがあったんだけど」

「最近魔法使いも近接で戦うことが多くなったらしく、前線のローブが主流になってきてるんですよ。ユウマさんのローブもその種類のもので、前に着ていたジャージと同じくらい運動性を持ってますよ」

魔法使いも近接に目覚めたとか。

そういうえば、ゆんゆんも近接よりの戦法を取ってたっけ。

俺らのパーティー、近接魔法使い二人と、剣士、槍を使うプリーストと近接ばつかで遠距離いねーな。

「それにしても、この死骸どうしますか?」

「あ、さすがに放置はまずいよな」

「ですね」

辺りを見回せば、中途半端に原型をとどめてないカエルばかりで、ギルドに言っても罰金を取られるだろう。

仕方ない。

「食えるところは集めて、後は埋めるか」

「え？」

「嘘です。ギルドの人を呼んできます。」

しばらくして、呼んできたギルドの人には、それはもう、すごく怒られました。

クエストの受諾無しに無意味にモンスターを殺してはいけないうら、食用になるモンスターはなるべく四散させるなどそれはもう、きつく言われました。

それからしばらくして、カズマ達の迎えに行こうと一度家に帰ることにした。

「そういえば、今日が帰りだったな」

「すっかり忘れてましたね」

「ああ、綺麗さっぱりとね」

家のドアノブを握る。

一日ぶりに帰る我が家はすごい安心感をくれる。

そういえば、昨日の晩飯出しばなしだったつけ……。

「ただいまっ」と

「ユウマさーん!!」

俺が扉を開けた瞬間、とても柔らかな重圧が前のほうからのし掛かる。

よく見てみるとゆんゆんだ。

「え、もう帰ってたの?」

そんな俺の問いかけよりも先に抱きついてきたゆんゆんはいきなり爆発発言を言う。

「私、ユウマさんの子供が欲しいです!」

「あ、はい。喜んで」

突然の言葉に反射的に返してしまったことに、言い終わった後に気づく。

あ、オワタ。

瞬間、後ろからくる凍てつく重圧に体を動かすことができず、鈍い音とともに俺の意識は遠くなっていく。

第22話 新たな旅

本能のままに突っ走ると、とんでもないことしか待ってない。特に女性への接し方はそれだと思う。

「……………うっ、痛い」

ふっと、うなじ辺りの痛みで意識が戻る。

相変わらず、エリスは容赦がないな……………。

昔から友達の話話を聞いては、おっかないなと苦笑いして、自分には縁が無いことだと思っていたが、案の定、そうではなかったようだ。

俺は寝返りをうって枕に顔を埋める。

……………ん？枕？いや、この感触は枕じゃない！

「今回は速く起きたんですね」

仰向けになって目を開けると、エリスの顔が目に入った。

「そうだな、どうやら今回は速く起きたみたいだ」

「これで、3回目……。エリスさん関係では2回目ですよ。そろそろしつかりと学習しないと駄目です！」

「はい、精進します」

俺はそのままうつ伏せになってイリスの太ももに顔をうめる。

小学生くらいの年でこの柔らかさは犯罪的だ。

ちよつとそつちのけになつちやうよ！

「反省してないじゃないですか……」

「反省はしてる。ただ、俺だつて甘えたくなくなるときはある！」

「なんで、そんなに本気なんです」

そうは言いながらも、頭を撫でてくれるイリス。

これが噂のばぶみというものですか。

「ユウマさんも少しは女心を分かる人になつてください」

「え、これでもイリスの喜びそうなことは分かつてるつもりだけど？」

「私じゃなくてエリスさんのです。もう、これだとエリスさんが報われません。ああ見えてエリスさんはすごく焼きもちやく人なんですよ。今だつてこの様子を見られたらユウマさん、すごい目で見られますよ」

「え、ちよつ!!」

その言葉に俺は勢いよくはねあがり、正座で座る。

イリスはというと意地悪そうに笑っている。

「大丈夫です。今のことはイリスさんには言いませんから。そのかわり、後で一緒に遊んでください！」

元気のいい言葉についつい、頭を撫でる。

やっぱり、イリスはまだまだ子供のようだ。

「わかった。イリスが飽きるまで付き合おうよ」

「やったー！それじゃあ約束ですね。さつそく下に行つて準備してきます！旅行中にお兄さまに教えてもらった遊びがあるんです！」

そのまま、部屋を出て急いで階段を下るイリス。

その様子に少しほんわりとする。

……お兄さま!?

もしかして、カズマのことか!?

自分のパーティーに飽きたらず、イリスにも手を出すとは……。

畜生めー!

勢いよく投げたペンは壁に跳ね返されて、俺の所へむなしく戻ってくる。

なんだか、悔しい。

「これより、会議を始めます！」

パーティー全員が座ったことを確認し、周りを見回すエリス。

雰囲気的には家族会議みたいな感じだ。

俺の家はやったことないけど。

「エリス、別にこんな緊張して話し合わなくてもいいんじゃない？」

「ユウマさんは黙っていてください！」

「はい……」

どうやら俺には発言権は無いようだ。

エリスはさっきのことが許せてないのか、いまだに俺には厳しい目線だ。

「それでは、ゆんゆんさん。ユウマさんに子供が欲しいとのことですが、何があったんですか？ すごい血相抱えてましたけど」

「実は……」

なにやら落ち込んだ様子のゆんゆんは二枚の紙を机の上に置く。

「えっと、『この手紙が届く頃には、きっと私はこの世にいないだろう』」

手紙を読み始めたエリスの顔は険しくなっていく。

それにしても、手紙の内容は思っていたよりも重い内容だった。

「族長の座はお前に任せた。……この世で最後の紅魔族として、決してその血を絶やさぬ様に……」

部屋の中に漂う重たい空気。

「え、ちよつと待ってくれ。『頼りなく、それでいて何の力もないその男こそが』って、俺ってそんなに頼りない男なの!？」

「えっ、そこですか!？」

俺は納得いかず声に出してしまい、それに反射的につっこむエリス。

確かに場違いなのはわかってる。

わかっているが、これだけは納得がいかない。

「まあ、確かに頼り無くはないですよね」

「だよな！エリスはわかってくれて嬉しんだよ。」

本当イリスはいい子だ。

あとで、お菓子でも作ってあげよう。

そして、ついつい忘れかけていたがイリスを妹にしたカズマには制裁を……。

「あの！実は私、一度里に戻ろうと思うんです」

ゆんゆんの一言で騒がしかった部屋の中に真剣な空気が流れる。

きつと里を救いたいと思っているのだろう。

そりや、自分の家族や友達がいる場所だ、俺だつて同じことを思う。

「やっぱり、大事な人達が危ない状況ならほつとけないよな。俺も一緒に行くよ」

「え？」

「仲間が困っている時は助け合う。私も頑張ります！」

「そうですね。それに、今回は魔王軍幹部も相手ですし、数は多いほうがいいですね」

「ユウマさん、イリスちゃん、エリスさん」

「それじゃあ、出発は明日の昼くらいだな。ちよつと荷造りしてくる」

「あ、私もしとかないそうですね。今回は長旅になると思いますし、しつかりと用意しないとです」

「じゃあ、私達の荷物はそのまんまにしときますね。ゆんゆんさん！ちよつと、こつちに来てください！」

「う、うん」

各自それぞれの持ち場へ行く。

流れで行くことになったが、やるからにはしつかりとやるだけだ。

――

「――と言うことで俺達は紅魔の里に行くことになったんだが、カズマ達は どうする？」
「ああ、俺達も行くよ。うちのツンデレ魔法使いも行きたがってみたいだしな」

翌日、俺はカズマ達を誘いに屋敷に来ていた。
「――がどうやら腹は決まっていたらしい。」

昨日、俺とエリスが帰ってくる前にゆんゆんはカズマ達の所に来てたらしい。

そこでめぐみんは行くことを拒否ったのだが、里の妹が心配らしく、行くことを決めたらしい。

確かに、めぐみんのやつはツンデレだな。

「なんですか、その目は！なにか言いたいことがあるなら、はっきり言ったらどうです」
「いや、別に。ただ、少しは素直になればなと」

「なんですと！」

「まあまあ、落ち着け。それにしてもユウマ、私達が湯治に行っている間そちらも大変

だったと聞いてるぞ」

「なあーに。ちよつくら悪徳領主を捻つてやつただけだよ。それに、お前のお父さんにはすごい世話になったからな。改めて、ありがとう」

その後は移動手段の話になったが、どうやらアルカンレティアを経由していくのだが、馬車だと時間がかかるので、最短で着けるようウィズさんのテレポートを使うことになった。

「いらつしやい！浮気坊主に旅行先で残念な思いをした小僧にその面々よ。お主らはとてもついているぞ、さあさあ、中に入るといい」

満面な笑みで俺達を迎えるバニル。

ついでるてなんだよ。

怪しさ満載なんだが。

「そう怪しい目で見ろな。」

「なんだよ、そのお香みたいなのは」

「これはアンデット除けの魔道具だ。蓋を開けるとアンデットを寄せ付けない神気が半日ほど漏れ続けるアイテムだ。どうやらその小僧はアンデットに好かれるおかしなのがパーティーにいるらしくてな。買ってにおいて損はないだろう」

「へー、アンデットを寄せ付けない神気ね。そういうえば、悪魔は神気みたいなのは放つて

るの?。」

「もちろん放つてるぞ。ただ、どこそのポンコツどもと違って、アンデットを引き寄せることはないがな。フハハハハ」

「そうなのか。でも、神を引き付ける効果はあるんだな」

「なに?。」

バニルの後頭部を襲う二つの打撃。

だが、その攻撃はバニルには当たることなく、店の床を砕く。

「我輩に攻撃を当てようなど、500年早い。出直してくるがいい」

「虫の分際でいい気になりますね」

「そうよ、さつきから人のことを馬鹿にしてきて、いったい何様のつもりかしら。」

相変わらず、エリスとアクアはバニルに喧嘩腰のようだ。

それにしても、この床どうするんだよ。

「坊主、小僧。床の弁償は個別に後で請求しておくぞ。それと、ポンコツ店主だが、扉の向こうでこつちに入れなくて、めそめそしているから、慰めるといい」

「こつちに入れないって、あの魔道具のせいか」

机の上の魔道具の蓋を閉めるカズマ。

すると、涙を流しながらウイズさんが部屋に入ってくる。

さすがにこれはやりすぎだろバニル……。

それから、ウイズさんを慰め、後ろで起きている戦いを観戦しながら、カズマが用件を言ってくれる。

「なるほど。皆さんを、テレポートでアルカンレティアへ送ればいいんですね？」

「ええ、お願いできますか？」

「任せてください。それにしても紅魔の里ですか。私も何年か前に行ったことがあるんですよ。なつかしいです」

なにやら懐かしそうな表情のウイズさん。

……とここで、後ろの戦いが終わったのか少し静かになり、振り向くとアクアとエリスが縄で縛られていた。

「随分壊してくれたな。バニル、さっきのお香を売ってくれ、流石にこれはやりすぎだ」
まいどありと嬉しそうなバニル。

ついでにカズマも店をボロボロにしたアクアの尻拭いとして、一個買った。

「さて、行く前に一つ、高い買い物をしてくれた貴様らに忠告してやろう。坊主、貴様は今回の旅でその後の人生を大きく変える選択をすることになるだろう。どちらを選んでも貴様は辛い思いをすることになるが、せいぜい後悔しないよう選ぶのだな。」

「それでは、皆さんがより良い旅になることを祈って《テレポート》！」

眩しい光が身体中を覆う。
後悔しないように選ぶか。

今回もすごいことを言い残してくれな。

第23話 アルカンレティアで大騒ぎ

まばゆい光に包まれ目を覚ますと、アクセルの街とは少し違った造りの建物と奥にそびえる山が目に入った。

「ここが水の都アルカンレティアか。思ったのとは違うけど、気候もちょうどよくていい場所だな」

「おい、ユウマ。気は抜かないほうがいいぞ。何をされるかわからないからな」
険しく、疲れた顔で言ってくるカズマ。

「一体どんな目にあつたんだ？」

「ちよつとカズマさん！私の可愛い信者達を犯罪者みたいに言わないで！ほら、謝つて！」

「犯罪者と大差ないだろ。聞けば最高司祭は警察の取り調べ中らしいし」

カズマの言葉にプンスカ怒っていたアクアの勢いが無くなつていく。

「カズマさん。先輩をそんなに責めないでください。別に先輩は」

「いや、言わせてもらうが、100%こいつが悪いぞ。なんだあの教義は！どれもダメ人間の思想じゃないか！あんな教義だからこんな犯罪者集団ができたんだ！」

ものすごい剣幕におされて、アクアは決壊直前のダムみたいな状況になっている。

「まあまあ、それくらいにしてやれよ。流石に言い過ぎだぞ」

「こいつには言い過ぎくらいがいいんだ。ここまでしても、すぐに厄介事ばかり押し付けてくるだからな」

「イッタ」

プルプルと震えながら声にならない声をアクアはもらす。

そして、ついに限界を迎えたのか鳴き始める。

「言った！カズマが言っちゃいけないこと言った！うわー！！」

「うわ！先輩止めてください！何も入ってませんから！胸の中には何も入ってませんから！引つ張らないで！」

「泣くな！お前、前に何をやったのか忘れたのか！騒いだらいろいろめんどくさくなるんだよ！」

今の状況を一言で現すならまさに地獄絵図と言うものだ。

真昼の街の道路の真ん中で、駄々をこねるように泣き騒ぐアクアと八つ当たりをくらうエリスに、怒鳴り散らすカズマ。

そして、騒動を止めようと遠くからかけてくるポリスマン。

このままじゃ紅魔の里に行くどころじゃなくなる。

とりあえず、何とかしないと。

「ダクネス、めぐみん！お前達はアクアを！イリス、ゆんゆんはカズマを連れてけ！集合場所は紅魔の里に通じる街道だ！」

メンバーに指示し、アクアからイリスを放しそのまま突っ走る。

今はバラバラに逃げるのが一番だろう。

それから、通り行く人達を交わしながら、無我夢中に走った。

「ここまで来たら大丈夫だろう」

後ろを見るが警察らしき人達はいない。

なんとか俺達は逃げ切ることができた。

それにしても、この世界の警察を甘くみすぎていた。

基本的な警察の仕事は騎士が受け持つてるイメージで、警察は一般人と大差ないと思っていたが、まさか俺に追い付こうとしてくるとは。

なかなか驚いた。

「それにしても、皆さん大丈夫でしょうか。大急ぎで逃げたんで迷子になってないとい

「それなら大丈夫だと思うぞ。カズマは紅魔の里までの地図を持ってるし、アクアはこの教団の女神なんだし場所ぐらいは把握してると思う……」

突然言葉が止まる。

いや、正確には出せなくなったというべきか。

それなりのペースで走って疲れたのか、汗をかいてるエリス。

その汗は引つ張られたせいで、みえみえとなった胸元の谷間を流れていく。

「どうかしましたか?」

「あ、ああ。なんでもない!なんでもない!」

エリスの言葉で我に帰る。

発達途上の小さな胸がとても魅力的で見入ってしまった。

んーエロい。

「とりあえず、はい。そのかつこはいろいろ危ないから」

「え、あ!」

俺に言われて、やっと気づいたのか赤面しながらローブを受けとる。

この表情といいさつきといい、アクアありがとう。

「よ、よし。そろそろ合流しに行こうか。あいつらが向かった方向からすると、もうつい

てる頃合いだし」

「そうですね。待たせるのは悪いですもんね」

「……ごちです」

「え、今、何かいいました？」

「い、いや」

—————

アルカンレティアの街を出て森へつながらる舗装された街道を歩く。

ここが集合場所なんだが、まだ誰も来ていない。

「いませんね」

「うん。いないね」

あれから何十分経ったのか。

ベンチで座りながら、水筒のお茶を飲み空を眺める。

空はそれはもう綺麗に晴れていて、風に吹かれた木々の音が耳に入ってくる。

ーが、けして人の足音などは聞こえてない。

「おかしいな。確かに紅魔の里に通じる街道はここしかないはずんだけどねー」

地図を見直すが確かに、里につながる道はここしかない。

なのに誰一人としてこない。

置いてかれたということは無いだろう。

もしかしたら、森の中へと逃げたのか？

里までの道を知ってるめぐみんとゆんゆんをそれぞれ分けたから森の中へ入っても迷子になるわけがないだろう。

だが、冷静な判断ができるダクネスとイリスがいるため、何がなんでも集合場所には来てくれるはずだ。

そうなるよ、

「もしかしたら、まだ街の中にいるかもしれないね」

そうだ。

泣いてるアクアと爆発しているカズマを落ち着かせることはあのメンバーじゃ無理だ。

俺が思うにアクアを泣き止ませられるのは長い付き合いのエリスくらいだろうし、ゆんゆんとイリスは人を落ち着かせることは向いてない。

とつきの判断にしては完璧だったと思っただが、思わぬ落とし穴があったとは。

「でも、ここから離れるのは行き違いになったりすると、怖いんだよなー！こういう時に携帯があれば！」

こういうときに文明のすごさには気づかされる。

あーどうする。どうすればいい？

ーと、そのときだった。

街の方から一つ足音が聞こえてくる。

街道なんだから別に人がきてもおかしくないが、つつい見ってしまう。

かっことは典型的なシスター服で、綺麗な金髪の女性だ。

そして巨乳！

「何を、鼻を伸ばしてるんですか」

「え?!いや伸ばしてないから!」

「ふーん。そうですか」

ジーと見てくるエリス。

やばい、またご機嫌を損ねてしまった。

何とかしないと俺の立場が。

ーと、そのとき。

いきなり大きな音をたてて巨乳シスターさんがぶつ倒れる。

「あ！大丈夫ですか？」

ベンチから立ち上がり、シスターさんの所へ駆けつける。

「大丈夫ですか？」

「お腹が……減って……」

なんとか上げた顔も言葉にするので力尽きたのか倒れる。

よくみると痩せ細っていて精気がない。

何故、聖職者が餓死寸前になるまで何も食べてなかったのだろうか。

とりあえず結界から非常食の入ったリュックを取り出す。

「とりあえず、これをどうぞ」

エリスがリュックの中から、手作りの干し肉とところんスライムを取りだし、シスターさんに渡す。

すると、何日ぶりの食料に野獣の眼光を光らせ頬張り始める。

それにしても、この世界のスライムは食用にもなるらしいが、基本的にかなり危ない

強キャラらしい。

俺の知っている青くてぷにぷにした下級モンスターとは別物だ。

そんなことを考えているうちに、あつという間に食べ終わるシスターさん。

その表情はとても幸せな顔だ。

「ふう。ごちそうさま。本当にありがとうございます」
「いえいえ、それほどでも」

「そうですよ。頭をおあげになってください」

「なんて優しい方々で。ああ、アクア様。美男美女に食べ物を食べさせていただき、セシリー感激です」

あれ、今なんて？

「これも、毎日暗黒神エリスの教会に嫌がらせをしている行いのおかげなのね！」

いや、聞き間違えではなかった。

今この人完全に暗黒神で言ったよ。

「あの、暗黒神というのはウグ……」

「え、今何かいいましたか？」

「特に！おきになさらず。そうだ、このパンもおぞ

「え、本当に！ やっぱり私の目に狂いはなかったわ！ちよつと渋いけど、全然許容内だし。ねえねえ、名前はなんて言うの？」

エリスの口元をおさえながらシスターさんにパンを渡すと、なかなかの暴走状態で名前を聞いてくる。

とりあえず、エリスの名前は伏せといた方がいいな。

「俺はユウマつていいいます。こっちは相方プリーストのクリスです」

「ユウマ君にクリスちゃんね。私はアクシズ教ナンバー2のセシリー。見た感じ二人とも十代よね。気軽にお姉ちゃんと呼んでね」

「は、はあ……。」

アクシズ教ナンバー2と名乗ったセシリーさんは、流石はアクアの信者という感じの人だった。

目をハートにしながらハアハアいつてるのだが、自分と似た雰囲気を持ってて、辛い。「それにしても、クリスちゃん、プリーストてことはどこか宗教に入ってることよね。」

「一応、エリ、ウグ……」

「実は入ってないんですよ。先輩が、熱心なアクシズ教なため、一緒に修行してたらいつの間にかアクア様の加護がもらえてたらしく。なあ、クリス?」

「え、あ、はい。そうなんです!」

「そうなんだー。いい先輩を持ったのね。私、多分その先輩と気が合いそうだわ!今度紹介してね」

「ええ、絶対合うと思いますよ!」

だって、あなたの崇拜する女神様だからね。

「それにしても、なんでセシリーさんは餓死寸前だったんすか？」

「え、私？実は最近、エリス教の炊き出しが無くてね。大好きなところでんスライムも没収されてて、食べるものがなかったの。エリス教たら、無い胸を、勝手に捏造する変態集団のくせにケチ臭くて、本当ひどい教団なのよ！本当、崇拜する女神様は偽乳なのに、自分達は巨乳なんて恥ずかしくないのかしら？」

と愚痴をもらすセシリーさん。

それを聞いて俺の後ろで、ぶるぶる震えているエリス。

こりゃ、やばいな。

「それにしても、貴方達ここの街の住人じゃないでしょ？それなのにどうして、こんな危険な場所にいるの？」

おっとナイス質問。

「実は紅魔の里に用があつてきたんです。それで今は一緒に行く約束をした仲間を待つてるんです」

「紅魔の里ね。懐かしい子を思い出すわ。今はどうしてるのかしら」

「セシリーさん、紅魔族に知り合いがいるんですか？」

「うん、いるわよ。小さくてツンツンしてるんだけど、すごく愛らしいのよ」

小さくてツンツンとした紅魔族。

あれ、知ってるような、そうでもない気が。

「そうか、紅魔の里に行くのね。できたらお返しがしたかったけど、仲間を待つてるなら仕方ないわね」

俺達二人を見て微笑むセシリーさん。

その姿はとてもシスターらしくて。

「貴方達の旅が良いものになりますように。《プレッシング》！」

キラキラとした光が俺達の体をつつむ。

何だろう、特に変わったことはないが、なんだか特別な気分がする。

「それじゃあね！また会いましょうね！」

手を振って街へ帰っていくセシリーさん。

いろいろと大変な人だが、根はいい人だった。

「なんだか、賑やかな人でしたね」

「だな。いい人に会えてよかったよ」

お互い顔を見合わせて笑いあう。

その時、街の方から大勢足音が聞こえてきた。

「ユウマサーン！」

そこには両手を振るイリスとなんだか疲れ気味なゆんゆん、カズマパーティーの姿が

あつた。

見た感じカズマとアクアは仲直りできたようだ。

さーて、やっと紅魔の里へ出発だ。

第24話 道中

カズマ達と合流してから数分。

生い茂る森の中を鼻歌混じりで歩く。

「それにしても、全くないモンスターが出ませんね」

「ここまで奥にいくとモンスター達が多くいるはずなんですけどね」

杖にくくりつけた荷物を左右に揺らしながらイリスに返答するめぐみん。

それを聞いてゆんゆんが大きな胸を揺らしながら、

めぐみんの方を向いて言う。

「めぐみん、里の手紙すっかり読んでないでしょ？最近、紅魔の里の二……、働いてない人達を集めて、森の周りのモンスター達を退治してるのよ」

「それは丁寧に説明ありがとうございます。私は手紙しか話す相手のいないゆんゆんとは違って、ここ最近、忙しくて手紙を読んでなかったんです。」

何故、めぐみんはゆんゆんに当たりが強いのだろうか？

痛いところをつかれたゆんゆんは真つ暗な表情で落ち込む。

「くっ、せっかく危険なモンスターが多いと聞いて、防具の装甲を薄くしておいたのに。これでは楽しめないではないか！」

「おーい、メス豚。これから魔王軍の幹部と戦うかもしれないんだから、ちゃんと戻しとけよ」

「断る！」

そこまで自分の性癖を突き通すとは。

もう、呆れも通り越して尊敬ですよ、ダクネスさん。

こんな、変態は良いとして、ゆんゆんのフォローでもしておこう。

「そんなに落ち込むなって。話しなら俺が聞いてやるから」

「ユウマさん」

「ユウマは甘いですね。自分から話しができない子に合わせる必要などないですよ」

「いや、お前はもつと合わせてやれ」

「……本当、口説いてばかりいたら、その首が飛びますよ」

なんだよ、そのうんざりした顔は。

「ーって、こいつ、俺の後ろを見ている？」

どうしたんだ？

その時、背中にもものすごい寒気が通過する。

「ユウマさん」

「は、はい!!」

後ろを向くと、そこにはすごい笑顔なエリスがタツパーを持って立っていた。

「長く歩いてお疲れでしょうから、ハチミツレモン作っただんで食べますか?」

「へえ? ハチミツレモン?」

「はい、前にアクア先輩に教えてもらったんです」

おっとこれは予想外だ。

すごい嫌な感じがしたんだが、その逆、すごいいい感じがするぞ。

「私も食べたいです!」

「お、なんだなんだ。ハチミツレモンじゃーねーか!」

「ちよつと、エリス。私にもよこしなさいよ」

「大丈夫です。皆さんの分もありますんで」

四方からハチミツの甘さにのせられて寄ってくる仲間達。

この分だと、俺の分は無さそうかな。

「安心してください。ユウマさんの分は個別で用意してあるので」

「え、マジ!」

「はい。是非食べてください」

と笑顔でタツパーを渡される。

「ん、あまーい！」

「なかなかね。このレベルなら、サツキを越えたんじゃないの？ま、私にはまだまだ及ばないけど」

「なんで、お前はそんなに上からなんだよ。……お、うまいな」

タツパーのレモンを突つつきながらがやがやと盛り上がるメンバー。

それじゃ、俺もいただきますか。

めっちゃハチミツがピカピカしてるな、まるで宝石みたいだ。

それではお味わ。

……！

なんだ!?!甘味のあとにくる、この鉄の味は。

「どうです？」

「あ、……ああ！めっちゃ美味しいよ！」

「そうですか！実はユウマさんには少し隠し味をいれといたんです。気に入ってもらってよかったです」

ものすごく上機嫌でパーティーの前を歩いていくエリス。

隠し味ってまさか……。

いや、そんなわけないよな。

色だって普通のより少しキラキラしてるくらいだし。

うん、大丈夫だよな……。

――

それから何時間経ったのだろうか。

鉄の苦味と戦いながらちよつとずつ食べ進めていたが、やつとの思いで食べ終わることができた。

「まさか食べ終わるとは……。」

「……当たり前だろ。せつかく作ってくるんだ。無駄にはできない……。」

俺の肩に荷物をぶっつけながら歩いているめぐみんは、少しはやるなという顔で見てくる。

なんだろう、少し腹立たしい。

「お前、俺のこと見下してるだろ」

「いえ、まったく？ただライバルとして少し誇らしく思っただけです」

「そりゃ、どうも。本当、俺は年下によくライバル視されるな」

このツンデレもうちの小悪魔にしてもそうだが、本当俺はよく競い相手として見られる傾向にある。

まあ、考えてみれば、爆裂魔法というお株を奪った俺はめぐみんからしてみれば勝たなきゃいけない相手なのはわかる。

ただ、イリスにそういう目で見られる理由はわからないままだ。

まあ、別に悪いことではないのでいいのだが。

「そうだ。ユウマには一つ私の故郷の風習を教えてあげます。紅魔の里ではですね、夫の精気を上げるために妻が自分の血を料理にいれることがあるんですよ」

「ぶはー」

おい待て！

今こいつなんて言った？

妻が夫に自分の血の入った料理を食わせるって!?

おい、それって……。

「まあ、こんなことをするのは紅魔族くらいですよ。ただ、知識として頭の底にでも入れてください」

「だ、だよな。あくまでもお前の一族の風習だよな。ハハハハ……」

と笑っては見たが本心は全く笑えてないのと言うまでもない。

ま、まあ、エリスは紅魔族じゃないしな。

その時、前を歩いていったカズマが制止の合図を出してきた。

「モンスターがいるぞ」

「やっとおでましか。カズマ、私の後ろに下がれ。ここは私が先手をかけてくる」

「ちよつと待ってくれ。モンスターって何がいたんだ？」

カズマを後ろに無理矢理どけて、我先にと剣を構えるダクネス。

そのダクネスを止めて、カズマに聞く。

「オークだ」

オーク。

それはRPGゲームをやった人なら誰でもわかるメジャー的な雑魚モンスターだ。

見た目は豚頭で二足歩行人型モンスターで、繁殖能力が高くて年中発情している生

物だ。

ちなみに薄いボックスでは定番の攻めキャラでもある。

「確かこの辺りて強敵しかいないはずだよな。なんで雑魚敵がいるんだ？」
「俺に聞かれてもわからないけど、殺るしかないだろ」

後ろを振り向きながら言うカズマ。

そう、三大欲求のうち性欲にしか目のないオークがうちのパーティーメンバーを見れば大変なことになる。

運がいいことに敵は一体だ。

見つかって仲間を呼ばれる前に俺達で倒しに行くのがいいだろう。

「ちよ、待てー！」

「ダクネス、お前こそ待ってろよ。今はお前の性癖を優先している場合じゃないんだからな！」

ダクネスの後ろから飛び出してオークに向かって一直線に走る、俺とカズマ。

それを見て、後ろであたふたし始める女性陣。

「逃げてくださいー！」

「そうですよ！速くその場から逃げてくださいー！」

必死に呼び掛ける女性陣の血相を抱えた顔に少し疑問をいタク。

普通なら逃げるのはそっちのほうだろ。

とりあえず、この位置まできたら戦うしかないんだし、結界から短剣を取り出す。

すると、後ろの声に気づいたのか、振り返るオーク。

「え？」

俺とカズマの声が被る。

振り向いたオークはサンバラな髪をした、そこそこ立派な服とリボンをしていた。

「こんにちは！男前のお兄さん達。あたしといいことにしない？」

「お断りします」

その誘いを反射的に断った。

それにしても、なんてことだ。

オークにメスがいたのは予想外だった。

俺とカズマの返答を聞いたオークは、表情を変えることなく言う。

「あら、残念。本当は合意の上でやりたかったんだけど、仕方ないわね。まあ、私達の縄張りに入った時点で拒否権は無いんだし、強引だけやらせてもらおうわ！」

ニタリと黄色い歯をむき出しにして襲ってくるオーク。

話しができるなら、見過ごそうと思っただが、どうやら無理そうだ。

「手筈通り行くぜカズマ！《三式結界》！」

魔力を込めた短剣を敵の左右の足と地面に刺し、捕縛する。

「《ドレイインタッチ》！《ファイヤーボール》！」

行動不能になったオークを掴み、生命力をギリギリまで吸ったところで、とどめをさす。

「お疲れ。それにしても、カズマって本当タイミング掴むのうまいよな」

「これでもまとまりの無いあいつらを指揮してるから。それにしても、……お！見てみるよレベルが3つ上がったる」

「お、マジだ！スゲー！」

と、盛り上がっている俺達のところに女性陣が慌てて駆け寄ってくる。

「何やってるのよー」

「何やってるって、モンスター退治だけど？なんだよ、その言い方は。今回はメスだったからよかったけどオスだったら、お前達が危なかったんだぞ？」

「あーそうだったわ。カズマもユウマもこの世界の知識がなかったのよね。いい？この世界のオスオークはとくに全滅してるの。だから襲われるのは男だけ。それに縄張りに入ったならまだしも、倒したとなると、強い遺伝子を求めてるオーク達は血眼になってあんた達を探し回るのよ」

そのアクアの言葉と共に後ろからものすごい足音が聞こえてくる。

振り返ると、そこには文字通り血眼で俺達めがけて走ってくるオークの大軍がいた。

「嘘だろ、おい！」

「やべえよ……、やべえよ……」

「私達オークを倒すだなんて貴方達やるわね！ 気に入ったわ！」

それを言ったのはリーダー格のオークだろう。

そのオークを筆頭に二十匹近くのオーク達が間合いをつめてくる。

流石は優秀な遺伝子を集めてきたオーク達だ。

きつと本気で走つても、逃げ切れないだろう。

覚悟を決めたのか、カズマは涙を流しながら短剣を構える。

そして、見事に捕まった。

一瞬のことだった。

抵抗すらできないまま、持っていたダガーを捨てられ、上にまたがれる。

「カズマー！」

「貴方の相手は私よー！」

カズマのほうへ気を向けていたせいで、振り返った時には時すで遅し。

振るつた短剣もむなしくはじかれ、そのまま押し倒される。

「よおーし！ すぐ済むからじつとして、目を瞑りな……！」

「うわー、許して！ あんたらの仲間を殺したのは謝るからー！」

「そんなのどうでもいいわよ！ そうだ、せっかくならエロトークしない？ ふーっ！

ふーっ！」

ものすごい鼻息をあらげるオークの目はまさに野獣の眼光だった。

俺はそんな目から助けを求めるように辺りを見回すが、最悪なことに、ゆんゆんといリスはオークの大軍と戦っていた。

「ちよ、ちよいまち！ そうだ！ 俺はまだあんたの名前聞いてなかったわ！ まずは、自己紹介からで！ お、俺は工藤悠真、17歳です！」

「あら、私も17歳なの！ 名前はエレクトロニックと申します！ さあ、あんたの下半身にも自己紹介してもらおうか！」

「うわああああー！ 止めて！ 俺の息子は恥ずかしがりやなんです！ 助けて！ 助けてエリス！ エリス！」

それはまさに九死に一生という状況だった。

俺の叫びは神様に届いた。

突然軽くなった体を起こして目を開けると、そこには聖槍を持ったエリスが立っていた。

「ユウマさん、大丈夫ですか？」

「え、エリス！ うわあああああつ！」

俺は安堵のあまり、エリスの腰に抱きついて泣き叫んだ。

「もう、大丈夫ですから。ユウマさんを救出しました！めぐみんさん！お願いします！」
「ええ、任せてください《エクスプロージョン》！」

ダッシュで戦線を離脱し、俺達のいたところへは破滅の光が落ちる。

「もう、怖くないですよ。」

オーガの縄張りを越えたところで、エリスは俺を優しく頭を撫でてくれる。

こんなに泣いたのはいつぶりだろう、今まで、九死に一生を得る場面はいくつもあつたが、こんな怖い思いをしたのは生まれて初めてだ。

本当に怖かった。

「よしよし、怖かったのねカズマ。もう、大丈夫よ。みんなで守ってあげるからね」

俺の隣でアクアに慰めてもらっているカズマ。

きつとカズマもあともう少しの所までやられたのだろう。

わかる、わかるぞ、その気持ち。

――

それからしばらくして、日も暮れて進むことをやめた俺達は街道沿いの地面に、人が六人は川の字で眠れるくらいの大サイズの布をひいて寝ることにした。

空に雲がないおかげで、星が綺麗に輝き、それなりに視界は確保できたので火は焚かず、アンデット除けの魔道具の蓋を開け、中央に置いておいた。

「本当に寝ないんですか？ 明日も少し歩きますし、休んで置かないと辛いですよ」

「ゆんゆんの言う通りだ。流石に一睡もしないのはきついだろ」

「大丈夫だよ。こう見えても俺達の国だと徹夜は当たり前だったからな。なあ、ユウマ？」

「ああ。まあ、そのせいでメディアは結構騒いでたけどな」

本当、あの国では徹夜は当たり前で働かされてる人達がたくさんいたからな。

そのせいで、いろいろと大変な問題になったのだが。

「そういえば、カズマ達の住んでいた国はどんなところだったんですか？ ユウマならともなく、カズマが徹夜に強いのは少し心外です」

「ユウマさん！ お兄さま！ 是非教えてください！」

めぐみんの言葉で寝ようとしていたイリスは寝場所から飛び出して俺達のところへよってくる。

イリスはこういう話が好きだからなー。

でも流石に、子供を夜遅くまで起きさせるのも駄目だし。

「この話はまた今度な。早く寝ないと成長しないぞ。」

「そうだな、特にめぐみん。お前、ゆんゆん勝ちたいなら早く寝ろよ」

「むむ、私の体に文句があるなら言ってもらおうか！」

「あー、はいはい。いいからそういうの」

早く寝ると手ではらってイリスとめぐみんを寢床へつかせるカズマ。

まあ、確かにカズマの言うことはもつともだ。

それから女性陣を寝かせて、非常時に備え短剣を研きながら近くの気に背中を預ける。

「なあ、ユウマ。」

「ん？」

「魔王を倒したらどうするんだ？」

「え？」

突然のカズマの質問に、頭を悩ます。

そういえば、考えてなかった。

魔王を倒して、エリスを天界に帰す。

それが、俺が魔王を倒す理由だ。

ただ、よく考えてみれば、その後はどうなるんだろう？

エリスを守るとは言ったものの、魔王を倒して天界へ送れば、そのあとは会えるから怪しい。

さて、どうなるんだろう。

「んーと。今はなんも考えてないかな。カズマはどうするんだ？」

「俺か？俺もよく考えてない」

「マジか」

「マジだ」

お互い行き当たりばったりな生き方してるなと笑いあう。

多分今はそれでいいのだろう。

魔王を倒してみれば、その答えはいやでもでてくるんだから。

第25話 ようこそ紅魔の里へ!

「そういえば、紅魔の里にも学校あるんだっけ?」

森の中を歩きながら、ふとそんなことを言ってみる。

「ありますよ。ただ、紅魔の里の学校は普通の学校とは少し違って、魔法を覚えたら卒業なんです」

「へー。魔法を覚えたら卒業かー。じゃあ、ゆんゆんはすぐに卒業したのか? あんなに上級魔法をバンバン打てるんだし」

「えーと、それは……」

もじもじと指を合わせながら頬を赤めるゆんゆん。

そこへ乱暴に杖を振り回しながらめぐみんがやって来て言う。

「私の魔法取得を待ってたですよね」

「つ!!な、何言ってるのよ! そんな訳じゃ……」

「誤魔化しても無駄ですよ。そのためにわざとテストの結果を変動させてたのを私が気づかないでもっ?」

「っ……」

顔を真っ赤にさせ押し黙るゆんゆん。

それにしても、友達にここまでするのは流石にやりすぎだと思うが。

「そこまでにしとけよ。流星にかわいそすぎる。そんなことばかりしていると友達無くすぞ」

「別に結構。私には爆裂魔法だけで十分です」

「あーはいはい。そうだな。ほら、ゆんゆん、元氣出せつて」

めぐみんを適当にあしらひ、恥ずかしきで戦闘不能なゆんゆんのフォローに回る。

そのとき、先頭を歩いていたカズマが動きをとめる。

「敵感知スキルにかかった。数は……20!？」

場が緊迫とした空気になる。

この数の多さ、多分魔王軍のしたつぱだろう。

紅魔の里から近いのだし、魔王軍がうろちよろしてもおかしくない。

身をかがめ気づかれないう、敵のいう茂みへ近寄る。

その先には……。

「ブークスクス！何よ。ただの悪魔モドキじゃない！あんなのに真剣になつちやうなんて。ほら、とつとと行きましょ。あんなのに構ってたら時間の無駄よ」

「おい！こんなところに人がいるぞ！」

「おい馬鹿! お前つて奴はなんでいつもめんどろなことをしないで気がすまないんだ!」

そんなカズマのツツコミもむなしく、気がつけば周りを囲まれていた。

「ん? 紅魔族の子供がいるぞ! 今かチャンスだ、大手柄だつ!」

一匹の鎧を着たモンスターが叫ぶ。

見た目は、耳の尖った、赤黒い肌のスリムな体で、額には一本の角を生やしている。

日本では餓鬼。一般的なRPGではゴブリンといわれるものだ。

「散々煮え湯を飲まされてる紅魔族の子供が二匹だ。日頃の恨みを晴らせてやる! おい、八つ裂きにしまえ!」

その掛け声で後ろからさらに三十は越える同じ姿の援軍がやってくる。

さすがに、数が多すぎる!

「《エクスプロージョン》!」

突然放たれた爆裂魔法により、援軍として現れたモンスター達は塵一つ残すことなく吹き飛び、巨大なクレーターだけが、そこに残る。

「どうでしょうか、我が究極奥義爆裂魔法の威力は! どうですかカズマ、今の爆裂魔法は

何点ですか!」

「この馬鹿が! 0点だ! 0点! 敵がまだいるのに、開幕そうそう魔力を切らす馬鹿がど

ここにいるんだ！」

「ああ、どうしようカズマ！今の音を聞いて新手がきたぞ！このまま数で押しきられ、捕らえられたらどうなるのだろうか！」

状況はまさにカオス！

四方八方から敵が現れ、逃げようにも逃げ道がない。

イリスやゆんゆん、イリスはそれぞれ、数を減らそうと必死に武器を振るうが、増えてく一方でまったく進まない。

ーと、その時だった。

必死の血相でこちらに向かって来る新手の魔法軍の手先たち。

それらは武器をもっておらず、何かから逃げるように必死にこちらへ向かって駆けて来ている。

どうしたのだろうか？

そんな疑問もすぐに解ける。

突如として、何もない空間から黒い格好をした四人組の集団が現れた。

その四人組は格好はばらばらで、持つてる武器も統一性はなかったが、一つだけ、共通しているところがあった。

それは、彼らがゆんゆんやめぐみんと同じ紅いの瞳を持っているということ。

そう、彼らは紅魔族だ。

ウイズさんとの修行により、魔力の気配を感じとることができるようになった俺にはわかる。

ウイズさんの魔力には届きそうではないが、それでも、俺やアクセル街で見てきた魔法使い達とは比べ物にならないほどの魔力が溢れだしている。

思わぬ大物の登場に動揺し、逃げ始める魔王軍のしたつぱ達。

その瞬間。

「肉片も残らず消え去るがいい！我が心の深淵より生まれる、闇の炎によって！」

「この俺の破壊衝動を鎮めるための贄となれええー！」

「さあ、永々に眠るがいい……。我が氷の腕に抱かれて！」

「お逝きなさい。あなた達のごことは忘れないわ。そう、永遠に刻まれるの……。この私の魂の記憶に……」

それは、決め台詞だろうか？

それぞれ、格好いい言葉を言ったあと、身体強化によって強化したであろう足で、あっという間に魔法の手先に追い付く。

そして、全員まったく同じ魔法の詠唱を始め。

「《ライト・オブ・セイバー》！」

光輝く手刀で、魔王軍のしたっぱ達を一掃していく。

「す、すごい……！」

二十以上はいたであろうしたっぱ達は、無惨な残骸として、辺りに散らばっている。……と、俺が感心していると、一人の紅魔族がこちらに視線、近づいてくる。

「お、久しぶりじゃないか！めぐみにゆんゆん。こんなところで何をしてるんだい？」
さつきまでの厨二くさい口調はどこかえ消え、普通の口調で気さくに話かけてきた。

「これはこれは、靴屋のせがれのぶつころりーじゃないですか。お久しぶりです。里のピンチと聞いて、駆けつけたのですよ」

めぐみんの言葉に首をかしげるぶつころりーは、何やら俺達の方を見て

「ところで、めぐみにゆんゆん。こちらの人達は君達の冒険仲間かい？」

と尋ねてくる。

それにたいし、めぐみんは少しはにかみながらコクリと頷き、ゆんゆんはそれはもう嬉しそうに頷いた。

それを見て、ぶつころりーは真剣な表情で、ローブをバサツと翻し。

「我が名はぶつころりー。紅魔族随一の靴屋のせがれ。アークウィザードにして、上級魔法を操る者……！」

と、紅魔族の伝統的な挨拶を始める。

「ここは俺も載ってみようかな。」

「我が名はユウマ。最近アークウイザードになったもので、結界魔法を操る者……!」
と、左手を握りしめ、右手を左上に上げてヒーローポーズで挨拶を試みる。

「我が名はカズマと申します。数多のスキルを駆使し魔王の幹部と渡りあった者です。どうぞよろしく!」

俺に続いて軽く挨拶をするカズマ。

その様子を見て紅魔族の人達は、

「「「おおおおー!」」」

と驚きの声を上げた。

「素晴らしい!まさか、俺達の名乗りを見て、微妙な反応をすることなく、返してくれるなんて!二人ともいい仲間をもったね!そうだ、ここからだ!と里まではまだ距離がある。テレポートで送ってあげよう!」

ぶっころりーはそう言うのと、テレポートを唱える。

光につつまれ気がつくのと、ほのぼのとした小さな集落が視界に映った。

呆然と里を眺める俺達の前に、ぶっころりーは笑顔を見せる。

「外の人達。ようこそ、紅魔の里へ!」

紅魔の里。

人工はおよそ三百ほどの小さな集落。

住む人々すべてが、上級職のアークウイザードという、まさに才能の暴力という言葉が合う。

近くには魔王の城があり、人類の最前線だ。

とまあ、里の入り口で配っていた「紅魔の里不滅目録」を読みながらゆんゆんのお父さん、族長の住む家に向かっていいる。

「おい、ユウマー！これ」

「ん？お！これは！」

カズマの指差すマップの場所には、大衆浴場「混浴温泉とかかかっていた。

「どうする？」

「どうするも何も。行くしかねーだろ！」

「だな！」

「なーにを喜んでるのですか。ゆんゆんの家に着きましたよ」

ガイドブックから目を離し、前を見る。

そこにはカズマの屋敷ほどではないが、とても大きく立派な家があった。

「すげー。周りの家とは一線を越えてるといふか、さすが族長の家って感じだな」

「里の集会所としても扱ってるんです。それでは、私は先にお父さんの所へ行ってきましたね」

しばらくして、なかなか豪華な応接間に通された。

テーブルを挟んでソファーに座る中年の男性。

この人が、紅魔族の族長、ゆんゆんのお父さんだ。

「いやー、俺はただの、娘に充てた近況報告の手紙だよ。手紙を書いている間に乗ってきてしまつてな。紅魔族長の血が、どうしても普通の手紙を書かせてくれなくて……」

「あの、すいません。何を言ってるのか少し理解が追い付かなくて」

俺の隣で啞然としているゆんゆん。

「……えっ? お父さん? お父さんが無事だったのは嬉しいんだけど……。もう一度説明してくれない? まず、手紙の最初に書いてあった、『この手紙が届く頃には、きつと私はこの世にいないだろ』っていうのは」

「あれか? あれは紅魔族の時候の挨拶じゃないか。あ、そうか。お前とめぐみんは優秀

だったから先に卒業して習わなかったか」

「……じゃあ、魔王軍の軍事基地を破壊することができないっていうのは」

「ああ、連中がなかなか立派な基地をつくつてな。破壊するか、観光名所にするか意見が割れてるんだよ」

「……」

「お父さん。ちよつと今から時間つくつてもらえる？」

「ゆんゆん!」

短剣をちらつかせるゆんゆんに愕然とする族長。

そこに、さつきから首を傾げているダクネスが言う。

「ちよつと待つてくれ。魔王軍の幹部が来ているというのはどうなんだ？」

「ええ、手紙の通り、魔法に強いのが来てますよ。あ、もう少し速く来ていらしたら、見せてあげられたんですが」

とまるで、見せ物のように言う族長。

まあ、結果は目に見えている。

あんだけ強い紅魔族のことだ、魔王軍の幹部だつて束になれば楽勝だろう。

考えてみれば、魔王の城の近くにあるのにこんなにも平和なのはそうでない、説明がつかない。

それからしばらくして、ゆんゆん、エリス、イリスは夕飯の買い出しへと行った。

ちなみに、カズマ達はめぐみんの実家に止まるらしく、明日観光することを時間を決めて別れた。

ということ、俺は今、族長さんと二人きりという状況だ。

「ユウマ君と言ったね」

「あ、はい。いつも、娘さんにはお世話になっていきます」

「そんなにかしこまらないでくれ。娘からは手紙でよく聞いてるよ。こちらこそ、本当に娘が世話になっている」

さっきの会話は冗談かのように、真剣な表情で話してくる族長さん。

その姿は一人の娘の父親としての姿だった。

「あの子は人と話すことがあまり得意でなくてね。結構大変だろう?」

「いえいえ、そんなことはないですよ。ゆんゆんは本当面倒見のいい子で、イリスの面倒もいつも見てくれてて、戦闘面だって、うちのパーティーの主力としていつも活躍してくれてます」

「そうか。それならよかった。実は、あの子は幼い頃に母親を亡くしていてね。そんなもって、他の子とは少し感性が違ってあまり周りと馴染めてなくて、肝心私は族長として仕事に忙しくて、あまり、相手をする事ができず、辛い思いをさせてしまった。だ

から、私は心配だったんだ。本当に馴染めているのかと」

胸の中にあつた違和感がとれた。

そうか、そういうことだったのか。

初めて会ったときから、ゆんゆんの人見知りの強さに少し違和感を持っていた。

幼い時の母親との別れ。周りとの距離。父親との関係。

こんなにあつたら、そりや人見知りだつて強くなる。

その時、ゆんゆんの笑顔が頭に浮かんだ。

エリスやイリス、カズマ達に囲まれて、笑っているゆんゆん。

その笑顔は心から幸せそうな笑顔だった。

「大丈夫ですよ。ゆんゆんはみんなにしつかり馴染めてます。俺が保証します。だから安心して、任せてください」

少しでも、ゆんゆんが幸せそうにしていることが伝わるように。

俺は族長さんに言う。

その時玄関のほうから扉の開く音がした。

「ただいま」

それは買い物から帰ってきたゆんゆん達の音だった。

「お父さん。今日は私がお夕飯を作るからね」

「いや、アクセルから結構な距離だったろ。今日は私が作るから、皆さんと一緒に休んでなさい」

「いいよ、大丈夫だから。お父さんこそ座って待ってて」

と、族長さんを座らせ、厨房へ入っていくゆんゆん。

「ゆんゆんさん、お鍋はどこにありますか?」

「お鍋は右の上の戸棚です」

「私もお手伝いします!」

「じゃあ、イリスちゃんはお芋洗ってもらおうかな」

女性陣による、料理の時間が始まる。

その賑やかな様子を見て、族長さんはぼつりと言う。

「ゆんゆん、本当にいい仲間に出会えたんだな」

ああ、本当、ゆんゆんはいいお父さんを持ったものだ。

香ばしいスパイスの匂いが鼻孔をくすぐる。

今日の夕飯はカレーだろうか?

第26話 紅魔の里観光ツアー

次の日。

里の観光のため、俺達はカズマパーティーとの待ち合わせ場所であるグリフォンの石像に来ていた。

「それにしても、立派な石像だな。翼の羽も一枚一枚が細かく筋彫りされてるし。モデラーとして、これ作った人尊敬するわ」

「あ、この石像は本物のグリフォンですよ」
「え？」

「前に里に迷い込んできたので、石化の魔法で石にしたんですが、格好いいので観光名所として残そうってなったみたいで」

いや、マジか。

御愁傷様、グリフォン。

空を勇ましく見るグリフォンを見上げていると、ちょうどカズマ達がやってくる。

なにやら、カズマはげっそりしているのだが。

「お兄様大丈夫ですか？なにやら、とても疲れていらしてますが」

「イリス、その男には近寄らないほうがいいですよ」

「そうよ、クズマさんに近づいたら何をされるかわからないわよ」

と、カズマからイリスを遠ざけるアクアとめぐみん。

アクア達の対応に疑問を抱き、何があったか聞いてみた。

すると、昨晩めぐみんと二人きりになった時、何かいかがわしいことをしようとしたらしい。

それを聞き、おもむろに引くイリスとゆんゆん。

さらにはあのイリスまでもが、苦笑いをして引いている。

その様子を見て、涙を浮かべるカズマ。

「カズマ。アクアやダクネスならまだしも、未成年のめぐみんに手を出そうとするのはヤバイと思う」

「ちよつと、ユウマさん！先輩やダクネスさんに手を出すのもアウトですからね！」

イリスと軽いコントをしながら紅魔の里を観光し始める。

ちなみにカズマだが、このあと行った喫茶店でおごりまくってなんとか女性陣に口を開きいてもらえるようになった。

「ここがこの里のゴキ神体を祀ってる場所です」

そういつて、神社っぽい建物の中を案内される。

そこで見せられた物は。

「なにこれ？」

「どう見ても、猫耳スク水少女のフィギュアなんですけど」

いや、それは見ればわかる。

問題はそれじゃない。

なぜ、これがこんなところで祀られているのが問題なんだ。

「その昔、モンスターに襲われていた旅人を救ったときに、先祖様がもらったものらしく。その旅人が、命より大切なご神体と言ったので、何の神様かは知られてないのですが、何かのご利益があるかもと祀られています」

「……」

「私、フィギュアと同じ扱いされてるの少しムカつくんですけど」

「こんなの持ち込んだ奴を送ったのはどこの誰だよ！」

——相変わらずの夫婦漫才をするカズマ達と共に次に案内された場所は。

「これは、抜いた者に協力的な力を与えるとされている聖剣です」

「さすがは紅魔の里。こういうのを求めてた。それじゃあ、さっそく」

聖剣に手をかけるカズマ肩をつかむ。

「ステイステイ。こういうのはじゃんけんで順番を決めるのが相場だろ？」

「悪いがユウマ。俺はじゃんけんて生まれてこのかた負けたことないぞ?」

「残念だがカズマ。今の俺の運気は最強だ。今のこの感じ、1%のクソガチャに大勝利を果たした時とにている。悪いが勝つのは俺だ」

「熱くなっているところすいませんが、どっちが引いても多分抜けませんよ。この聖剣は挑戦者一万人目の人が抜ける仕組みになってます。今はこの聖剣ができて四年。挑戦者はまだ百人程度です」

「歴史もクソもねえー聖剣だな!」

「待つて。この剣の封印、私の魔法で解けそうなんですけど。もらっていつていいかしら?」

「先輩、さすがにインチキはダメですよ!」

続いて向かった先は、神社の裏にひっそりと佇む小さな泉。

「ここは『願いの泉』です。実はここには古いい伝いがありまして、コインや斧を供物としてこの泉に投げると、金銀を司る女神を召喚できるらしいです」

おっと待て、それおとぎ話じゃないか?

「まあ、そのおかげで、今でも時折、斧やコインを投げる人達がいるらしいのですが、親切な鍛冶屋のおじさんが、定期的に回収してくれてるので、この通り綺麗な泉を保てます」

「で、そのコインや斧の行き先は？」

「もちろん、鍛冶屋のおじさんが武器や防具の材料としてリサイクルしてます」

だと思っただよ！

「先輩何してるんですか！」

「何ってコインを拾ってるのよ。暇ならあんたも手伝いなさい」

泉の真ん中からひよこりと顔を出すアキラ。

あなた様はカッパか何かですかね？

次に行ったのはあまりにも場違いな地下への入り口。

「ここは、世界を滅ぼしかねない兵器を封印している地下施設です。中に入れた人はいないらしくてよくはわかってないのですが、とりあえず観光名所になってます」

めぐみん達もよくわかってないらしく、こんなもあるんだ程度でその場を去ることにした。

「まあ、里の紹介はこんなところですかね。他にも『邪神の墓』や『女神が封じられた地』などあるのですが、今じゃ封印が解けてるので、これといって紹介するようなどころではありません。」

「この里の封印で案外もろいんだな」

「大丈夫かよ、この里」

このあと、めぐみんが服屋にゆんゆんは学校に用があると言ったので一時解散となった。

「それにしても、本当についてきてよかったのか？」

「紅魔の里の学校ではいつでも学校見学ができることになっているので大丈夫です」

商店街をぬけ、学校へ繋がる道をゆんゆんと二人で歩く。

魔法においてトップランクである紅魔族の授業風景を見たい。

というのは建前で、本心はこの世界の学生に少し興味がわいたのでついていくことにした。

「あの、ユウマさんの学校はどんな場所だったんですか？」

「ん？俺の通ってた学校？」

なんと説明すべきか。

思い出してみれば、ただの馬鹿学校だったとしか説明できない。

それもこれも、高校受験を失敗したことで俺の頭が自然に黒歴史として忘れようとしてるせいで深く、覚えていない。

「そうだな。うん、昼休みに机で料理を始めるやつらがいた」

「ふえ？」

「あと、授業中はいつもうるさくて集中できるもんじゃなかった。うん、あれは人の通う場所じゃない。ただの動物園だ」

言葉にすればするほど、次から次へと思い出される俺の学校生活。

高校生になれば淡い青春でもできる、そんなことを思っていた昔の俺をぶん殴りたくてしようがない。

しかし、悪いことばかりではなかった。

周りに特に気を使う必要がなかったせいも、陸上に専念することができた。

今思い返せば、それだけで十分だったと思う。

「何はともあれ、高校に行くならしっかりと考えたほうがいいぞ。マジで後悔する」

「は、はあ。よくわかりませんが、学校選びはしっかりとしなきゃいけないんですか。

あ、着きました！ここが、紅魔の里の学校です」

ゆんゆんの指差す方を見る。

そこには、懐かしさを感じさせられる木造の建物があった。

「なんだろう。思ってたのと少し違うけど、里の雰囲気合いすぎててなんともいえない」

今まで見たものが、あまりにも統一感が無さすぎて、逆に正統派すぎて違和感を覚える。

とそんなことを考えていると、校舎からポニテとツインテールの女の子がこちらに歩いてくる。

「あ、ゆんゆんだ！」

「本当だ！ゆんゆんじゃん久しぶり」

「ふにふらさん！どどんこさん！お久しぶりです」

正直ゆんゆんにはめぐみんしか友達がいなかったのかと思っていたが、どうやらそれは勘違いだったようだ。本当によかった……。

久しぶりの再会で今までにないくらい喜んでるゆんゆん。

すると、やっとこちらに気づいたのかポニテの子が、驚いた表情になる。

「え、まさかゆんゆん男ひっかけてきたの!？」

「え、あ!!本当だ!」

「ち、違うよ。ユウマさんとはそういう関係じゃ……」

おい、ゆんゆん、そんなに頬を赤らめてたら勘違いされるぞ。

それにしても、どの世界でも思春期の女子中学生というのはこういうものらしい。

「でも、ゆんゆんにしては当たりを引いてきたと思うよ」

「そうだね、何て言うんだろう、本能的な感で頼りない感じがするけど、優しそうだし」

「おっとお嬢さん達、それ以上は止めてくれ。俺のライフはもうゼロだ」

初対面の子達にいきなり評価されるのは別に言いが、本能的な感で頼りないと言われるのには心に響く。

「あ、ユウマさん紹介しますね。左のツイーンテールの方がふにふらさんで右のポニーテールの方がどどんこさんです」

「アクセルでゆんゆんとかパーティーを組んでるクドウユウマです。よろしく」

「え、まさかゆんゆんの書いてた手紙が本当だったなんて」

「うん、ちよつと信じられないよね」

「ひ、ひどい。信じてくれてなかったんですか！」

実の友達にすらボツチと思われてたとは。

ゆんゆん、不憫な子。

「それにしても、なんで二人とも外に？まだ授業中なんじゃ」

「ここ最近、魔王軍がうろちよろしてるからって午前授業になってるんです」

「まあ、そのおかげで遊ぶ時間が増えるからいいんだけど」

「あー、分かる。俺もあつたはそんなこと。不審者がいるからって早帰りになったけど、遊ぶ時間が増えるからってめっちゃ喜んだわ」

「やっぱりそうですよね！」

「てことだから私たちはもう帰るわ」

「それじゃあ、ゆんゆんまたね。ユウマさんも今度は喫茶店とかで話しましょ」

「おう。また機会があればな」

「二人ともまたね」

現役中学生達とは別方向に商店街の方へ歩き始める。

とりあえず、結論学生はどこの世界でも考え方は変わらない。

なんだろう、なんか清々しきを感じた。

「それにしても、よかつたな友達に会えて」

「はい！魔王軍のこととかで少し心配だったんですが、かわりなくてよかつたです」

——その時、分かれ道の家の方でカズマダクネスが剣を構えているのが見えた。

「あれってダクネスじゃ」

「あ！ダクネスさんが剣を構えています！向かい合ってるのは、もしかして魔王軍の手先

だったりして！」

ほのぼのとした時間もつかの間、一難去ってまた一難。

やっぱり、魔王軍と戦うことにはなるのか。

「急ごう。いくらダクネスでも攻撃が当たらないと意味がない」

「はい！」

分かれ道を曲がり、砂利の道を思いつき蹴飛ばし、援護に向かう。

その先で待ってるものは……。

第27話 魔王軍幹部 シルビア襲来

何かと対峙しているダクネスを援護しようと民家へ向かと、そこでは。

「私の目が黒い内はここを通さぬ！ どうしてもここを通りたければ、私を倒して行くがいい！ 悪いが、私は魔王軍に屈服する気はないぞ」

「な、何を言っているんだこいつは！ シルビア様、こんなやつは放っておいてとつと目的を果たしにいきましょう！」

見れば、木柵が破られていた。

どうやら、ダクネスは木柵を破った魔王軍と戦っていたらしい。

そして、案の定ダクネスの瞳は喜びで輝いていた。

「ダクネス、よく持ち堪えた！ 助けに来たぞ！」

「あ、ああカズマか。そうか、もう来てしまったのか」

別方向から、他の紅魔族を連れたカズマがやってきたカズマに、がっかりするダクネス。

誰が相手だろうと、変わらないな。

「そういうことね。あなた、わざと攻撃を外して援軍が来るための時間を稼いでいたの

ね。まったく、してやられたわ。あなたの勝ちよ。ねえ、そろそろ出てきてもいいんじゃない？」

シルビアと呼ばれた女は俺達のいる林の方を見ていう。

別に隠れていたわけではないのだが。

まあ、でてくるには丁度いいか

「ユウマ、いたのか！ そうだな。ならここは一つ……。確かシルビアとかいったな。あんなならもう気づいてると思うが、そこにいるクルセイダーの実力は本物だ。なんせ、魔王軍幹部、バニルとの決戦時に爆裂魔法を耐える鉄壁の防御力をみせたからな」

「バニルですって!?! 確か、アクセルの街に行つたつきり帰つて来ないって聞いたけど。まさか、あなた達が？」

カズマの言葉を聞き、後ずさる魔王の手下たち。

「そう、俺の横にいるこのめぐみんがトドメを刺した」

それを聞いて、今度は紅魔族達もぎわつき始める。

なるほど、脅しか。

「そして先週はデットリーポイズンスライムのハンスも倒した。それだけじゃない。あんなの後ろにいるユウマは単騎でデュラハンのベルディアをさらには、大物賞金首の機動要塞デストロイヤーにもトドメを刺している。……どういう意味かわかるか？」

「ベルディアがやられたのは聞いていたけど、まさかハンスが……。最近アルカンレティアから連絡がないと思えばそう言うことだったのね」

カズマの話に信憑性を得たのか、状況の悪さを理解したシルビア。

それにしても、カズマ達、湯治先でも魔王軍幹部を倒していたのか。

流石だ。

それにしても、俺のことは流石に盛りすぎだぞ。

俺がデウラハンを倒せたのは、あくまでもアクアの強化魔法があったからだしな。

「……分かったは、今日のところは一回引かせてもらうわね。その前にあなたの名前を教えてくださいない？」

「……ミツルギキョウヤだー！」

土壇場でヘタれるのは無しだろ！

そこはちゃんと名乗ったほうがかつこよかったぞ！

「そう。それなら納得だわ。私の名はシルビア。魔法軍幹部、シルビアよ！それじゃね」

「逃がすな！《ライト・オブ・セイバー》！」

《カースドライブニング》！」

引き返すシルビア達を追いかける紅魔族達。

それを見て、感慨深げに呟くカズマに近づくと。

「魔法軍幹部、シルビア、か……」

「おーい、土壇場でへたれたのにしみじみするなー」

――

その夜、俺達は前日から練っていた計画を実行しようと、例の大衆浴場に行った。

のだが、カズマはおろか他のパーティーメンバーも来なかった。

ということ、唯一何も知らないエリスを連れて大衆浴場に入った。

「すごい、大きな浴場じゃないですか！こんなに大きな浴場を一人で使わせてもらえるなんて。贅沢すぎて、なんだか、悪く思っちゃいます」

まあ、混浴だから、俺もいるんですけどね。

ちなみに俺は、《ライト・オブ・リフレクション》で姿を隠している。
見つかつたら、殺されるからね。

「綺麗な月。ユウマさんも見てるでしょうか……」

うん、見てますよ。

湯船に入っていないから、タオル一枚で寒いんだけどね。

「四ヶ月。下界に降りてから、もうそんなにたったんですよね。長いようで、短くて。毎日が忙しくて、でも楽しくて、天界にいたときとは大違い。……私はあとどれだけこの世界にユウマさん達と一緒にいられるのでしょうか」

水の音だけが浴場に響く。

風も吹かず、草木の音もしない。

「温かい。気温がない天界とは大違い。……わがままなのはわかってます。だけど、もし願いが叶うなら……」

もし願いが叶うなら……。

その続きを聞く前に俺は静かに立ち上がり、浴場から立ち去った。

ここから先は聞いちゃいけない。

そう思ったからだ。

「本当、俺、なにしてんだろ」

「ねえ？なんであんたがここにいるよ」

まったく、予想もしてなかった声が目の前から聞こえた。

ふと、我に戻って前を見るとそこにはタオル一枚のアクアがいた。

「え？」

瞬間、思考が凍る。

なんでここにアクアが？

いや、そもそもここは混浴なんだし、いたっておかしくはない。

いや、前言撤回、今俺がいるのは男の脱衣場だ。

いるのはおかしい。

その時、一つの服が目映る。

それは、青色の修道服？だ。

つまり、俺の今いるところは……。

「ちよつと、エリ、むぐう……」

慌てて、アクアの口を押さえる。

俺がここにいるのがエリスにバレたら、即刻死刑だ。

その時だった。

背中に重々しい重圧がかかる。

「ユウマさん。何してるんですか？」

……………オワタ。

今、エリスのには、俺が無防備なタオル一枚のアクアを倒し、裸で上からまたがってる様子が映っているのだろう。

詰みだ。言い逃れなんて不可能。

さらばだ。

次の瞬間、俺の横っ腹に重い一撃が入る。

痛みなんか感じない。

感じる余裕なんてない。

くらえば次、くらえば次と無慈悲の鉄槌が俺の体に入っていくのであった。

「もう、今後は気をつけてくださいよ」

「はい。気をつけます」

あれから数十分。

これはヤバイと思ったアクアの言葉で、何とかエリスの誤解を解くことができた。

その後の治療によって、痛みと怪我はとることができたのだが、その副作用で体がだるい。

「それにしても、あそこの大衆浴場、混浴だったんですね。私、わかってなくて一方的にやっちゃってすいません」

「いやいや、元はと言うと、混浴だってエリスが知らないのを知ってて誘った俺が悪い

し。本当ごめん」

「知ってたつて。……ユウマさん、そんなと一緒に入りたかったんですか？」

「え、あ、え、……。うん」

「別に言ってくだされれば、私だつて拒否はしません」

「え!?!」

「え、いや、その、私お風呂好きなんで、誘われたら、別に拒否なんてしないつてことで、その」

顔を真っ赤にしながら、付け加えるエリス。

ああ、風呂好きつてことか。

そうか、そうだよな。

エリスは好んで一緒に入ろうとする痴女じゃないもんな。

「そういえば、なんですけど。カズマさん達、明日には里を出るらしいですよ」

「え!?!あんだだけ、また戦う的なノリ出して帰るの?」

よく考えてみれば、カズマ達がシルビアと戦う意味はない。

街に帰れば大金をバニルから支払われるらしいし、命を張つて戦つて賞金をもらう必要もない。

それに、魔王軍と紅魔族の実力の差は歴然だ。

ほって置いたって紅魔族に倒されるのも時間の問題だろう。

そう考えると、確かにここに残る意味はないか。

「私たちはどうしますか？」

「俺達か。そうだな、俺達も帰るか。この里なら時がくれば、シルビアを倒すだろうしな、長くいても意味がない。帰って残りの幹部探してもしようか」

風呂で温かくなった体を覚まさないように、少しはや歩きで族長の家に向かう。

帰ったら、イリスとゆんゆんに早速伝えて、荷造りさせよう。

族長さんにはお世話になったお礼を用意しておかなきゃな。

——と、買える気満々で道を歩いていると、どっかの誰かがフラグを回収したのか、理不尽な警報がなる。

『魔王軍襲来！魔王軍襲来！既に魔王軍の一部が里に侵入した模様！』

里の内部に侵入!?

この里のセキュリティはやっぱりガタガタすぎるだろ。

第28話 決意の瞳（前編）

毎度お馴染み、人の都合など知らない無慈悲な警報を聞き、急いでゆんゆんの家に戻る。

中では俺の指示など聞く前に、準備を終えて待っていた。

「魔王軍の現れた場所はめぐみんの自宅付近だと、さつき見回りの人が伝えに来てくれました」

「昼の所から侵入してきたのか。あれ、族長さんは？」

「お父さんは先に向かいました。荷物は用意したのは私たちも」

手渡された荷物を結界にしまい、家を出る。

周りをみれば、子供から大人まで全ての紅魔族の人達が侵入場所へ向かってた。

「ユウマさん、エリスさんとお風呂はどうでした？」

「おっと、イリス。その話はあとでな。治癒させた場所が痛くなってくる」

まるで、結果をわかってたという顔で見てくるイリス。

最近、イリスの小悪魔っぽさ強くなってきたと思う。

そんなことを考えながら、めぐみん宅に着く。

だが、シルビアはおるか魔王軍の手下たちも見えない。

いったいどおしたのだろう。

「きたか、ユウマ」

「ダクネス。魔王軍はどうしたんだよ誰もいないし、争った跡もない」

「ああ、争ってはなない。カズマを人質として連れていかれたからな」

「え、人質!? だったら速く、助けに行ったほうが」

「向かった方向から見て、地下格納庫のはずです！速く行きましょう！」

必死な顔で言うめぐみん。

地下格納庫。

魔王軍がそこに向かうということは、理由は一つだろう。

世界を滅ぼしかねない兵器。

いくら、封印が施されていても、紅魔の里クオリティだ、十中八九奪われる。

周りもそれを察したのか、急いで地下格納庫へ向かう。

――

もうダツシユで地下格納庫へ着くと、そこには頭をかきながら立っているカズマの姿があった。

「大丈夫か、カズマ！」

「おう、この通りぴんぴんだぞ」

「そうか、よかった。あれ、魔王軍は？」

「ん？あー、シルビアか。あのオカマ野郎なら、この格納庫に閉じ込めておいたぞ。中は日本語のパスワードになってるし大丈夫だろ」

遅かった。

格納庫の外ならまだしも、中に閉じ込めたとすると手遅れだ。

「一回ここから退こう。こんな場所で戦ったら、爆裂魔法を撃てない。世界を滅ぼしかねない兵器をもつてこられようと。距離を取って態勢を立て直せば対処できる」

「何言ってるんだよ。中の兵器にだって封印が施されてるんだし、日本語を知らないシルビアには解けない。あとのことは紅魔族に任せれば大丈夫だろ？」

「そうよ。見た感じここの扉も頑丈だし。そう簡単には出られないわよ。さあ、帰って飲みまくりましょー！」

「だから、この里のセキユリテイなんてすぎて役にたたないって」

その瞬間、アクアが頑丈だと言った鉄の扉が、盛大にぶち壊される。

その光景に、安心しきっていたアクアとカズマをはじめ、後ろにいた紅魔族達も開いた口を閉じられないでいる。

「あらあら、ずいぶんと強引にしてくれたじゃない。でも、お陰さまで目的は達成されたわ」

破壊された扉から出てきたシルビアは、昼間見せていた二本の脚はSF感を与えさせる機械の蛇の脚となっていた。

そんな中、一人の紅魔族が言う。

「その銀のやつって魔術師殺しじゃないか？」

「フッフフ。ご名答。これはどんな魔法も打ち消す兵器。あなた達の天敵、魔術師殺しよ」

魔術師殺し!?

どんな魔法も打ち消すとか、チートすぎる。

それじゃあ、俺の拘束魔法なんか通用しない。

……でも、紅魔族なら。

優秀と言われる彼らなら、対抗手段はあるはずだ。

まだ、逃げるにははやい。

「まずいぞ！魔術師殺しだ！」

「もう、ダメだ、おしまいだ!!」

「そうだ、里を捨てて逃げよう！もう無理だ！」

嘘だろ。

「おい、めぐみん、どういう事だ！魔術師殺して何だ？あれが世界を滅ぼしかねない兵器なのか？」

カズマが必死に揺さぶりたずねるが、めぐみんは顔が真っ青で反応が無い。

「そんなに乱暴に揺らしちゃかわいそうよ？フッフ、これは世界を滅ぼしかねない兵器じゃないわ。あくまでも魔法を打ち消す兵器。私の目的はこれを手に入れることだったのよ」

「うわぁー、逃げろ！」

「《テレポート》！うぐう……」

勝ち目がないと悟ったのか、逃げ始める紅魔族。

だが、それも叶わず、無慈悲な光線が背を向けた紅魔族を次々に撃ち抜いていく。

「どこへ行くこうというの？」

「た、頼む。見逃してくれ！」

「あそこのボウヤ達ならまだしも、あなた達を見逃す訳がないじゃない。あんた達はい

つもいつも、そうやって命乞いする仲間達を殺してきた。今度はあなた達のぼんよ」
「止めろ、シルビア！」

カズマの叫びもむなしく、名も知らぬ紅魔族の額を光線が貫いた。

「フフフフ。案外呆気ないものね」

動かなくなったそれに、興味を無くすと、逃げなとう紅魔族の所へ向かい、次から次へと蹂躪していった。

人が死んでいく。

昼間、道端で挨拶した人が、道を案内してくれた人が次から次へと襲われていく。

止めないと。

そう、頭で思っている、体が反応しない。

恐怖。

今まで、自分とは無縁だと思っていた死への恐怖が体を縛る。

怖い。死にたくない。

意味のない、救いを求めるの感情が溢れだし飲み込まれる。

その時だった。

「止めて！」

悲痛な叫びが響く。

気がつけば、ゆんゆんはシルビアの前に立っていた。

「ゆんゆん……」

「もう、止めて。これ以上、私の大切な人達を傷つけないで！」

目頭から溢れでる涙を振り払い、精一杯に訴えるゆんゆん。

「大切な人達ね……。でもね、お嬢ちゃん。私の大切な仲間達はこの何十倍もあんなたち紅魔族に虐殺されたの。それって、おかしくわないかしら？ 同じ命を持っていて、私達だけが無惨に殺される。理不尽だとは思わない？」

「……」

何よりも重たいシルビアの言葉に、ゆんゆんはおろか、俺達も何も返せない。

「こんなこと言ったらって理解できないでしょうね。所詮、私達は私達の、あなた達はあなた達の都合でしか考えられないのだから。さあ、そこをどいてくれるかしら？」

逃げ惑う紅魔族を殲滅するべく、歩き出すシルビア。

止めないといけない。

恐怖で固まっていた脳が動きだし、身体中に信号を送る。

だが、その信号よりも先に。

「……ここから、ここから先は行かせません」

何かを決めたのか、下げていた顔を上げ、シルビアをにらみつけるゆんゆん。

その紅の瞳は紅魔族が興奮したときに見せる、輝きとはまったく違う、透き通った決意の紅だった。

「大切な仲間の仇なのはわかります。でも、それでも、私の大切な人達殺させる訳にはいけません！あなたが思う仲間を思うように私にも里の人達を思う気持ちがあります！ここから先を行くのなら、私を倒してから行ってください！」

「そう。何を言っても諦めるつもりはないのね。いいわ、お望み通り、あなたを殺してから先に進むわ！」

その勢いは獲物を食らう獣の様。

へびとなった下半身で地面を砕き、その勢いでゆんゆんに襲いかかる。

「ゆんゆんー！」

「ゆんゆんさんー！」

やっとの思いで動くようになった体を動かせ、走る。

……間に合わない。

固有時間制御でも僅かに届かない。

後ろのエリス、イリスは詠唱に時間をとられ援護が間に合わない。

だが、最悪な状況の中で、決意の瞳でシルビアを睨むゆんゆんの手には魔法の効かないシルビアの

に唯一対抗できる手段が握られていた。

一瞬で詰められた間合い。

残り10mの距離。

その一瞬を使い、握っていた冒険者カードの欄を強く押す。

「《固有時間制御 三倍速》。shift change、《固有時間制御 四倍速》!!」

その姿を表すなら、まさに紅の閃光。

三倍速状態である俺を越え、その先に速度で襲ってくるシルビアを交わし、腰のナイ

フを刺す。

「I o s t i .」

ゆんゆんの詠唱で短剣が爆発し、止まっていた時間が動き出すように、異なる点が交じりあう。

「《全剣連続投射》!!」

「《スターバースト》！」

「《エクステリオン》！」

魔法が効かないなら、物理で殴る。

考えることは皆同じで、それぞれの最高火力を魔術師殺しにぶつける。

火力が火力のため、シルビアのいた地点は砂ぼこりが舞い、視界が悪くなる。

「すごい、火力だ。単純な力比べなら爆裂魔法にも勝るんじゃないか？」

「ええ、詠唱をしっかりと唱えていれば爆裂魔法とならびますね。それにしても、とんでもないのが目覚めましたね」

「とんでもないの？」

「はい。とんでもないですよ、今のゆんゆんは。里の中では私の次に位置しますが、それはあくまでも魔力の素質。才能で比べるなら、ゆんゆんは私以上でしょう」

「才能って、何か特別な力でも持つてるのか？」

「ゆんゆんは一瞬でその系統の魔法を極めることができます。その証拠が今の固有時間制御。ユウマは三倍速しか取得できません。そのため、ゆんゆんも三倍速までしかスキル欄にはのってなかったはずですよ」

「でも、三倍速の取得と同時に四倍速まで極めた」

「ええ、見ての通り一瞬で。本当どこまでも、めんどくさい子です。ゆんゆんだけにかっこいい所は持っていかせられません。格納庫の中には魔術師殺しに対抗する兵器があると聞きます。あれではまだ、トドメになってないでしょう。行きましょう！」

「しよーがねえーな！お前はどこまでも負けず嫌いだな！アクア！ダクネス！お前らも見てないでついてこい！」

「え、あれなら、ユウマ達で大丈夫よ！ほら、私はここでいざというときの援護のために

待機してるから」

「いいから、いくぞ！」

第28話 決意の瞳（後編）

徐々に薄れていく砂煙から写り出てくる影。

「まさか、あの攻撃を受けても原型をとどめてるなんて」

信じられないと声を漏らすイリス。

確かに攻撃は全て当たっていたはずだ。

それでも、それは何もなかったかのように、重たい金属音を引かず砂煙からでてくる。

「あら、ただ怯えていることしかできないと思っていたら、不意打ちをしてくるなんて。でも残念ね。魔法が効かないのなら物理攻撃で思ったのでしょうけど、私にはこれっぽっちも届いてないわ」

不適な笑みを浮かべながら、こちらを見てくるシルビア。

その周りにはビリビリと雷が走っている。

「まさか、結果!？」

「半分正解で半分不正解。これは神器をもとに作った人工神器。《熾天覆う七つの円

環（ロー・アイアス）

ギリシヤ神話の英雄アイアスの持っていたとされる盾。

投擲武器などの飛び道具に対し無敵の防御力を誇ると言われていたはず。

それなら納得はいく。

だが、それはあくまでも本物ならの話。

レプリカにそれほどの力があるとは思えない。

「待ってください！ 神器を作るなんてありえません。そもそも、神器と言うのは人理の護り手となった英雄達の武具を神々がオリジナルに近いところまで再現したレプリカ。あなた達では決して作れる訳がありません！」

「フフフ。そうね。あなたの言う通りよ。私達では作れない物だったわ。私達ではね。……まあ、そんなことはいいとしましよう。私は速く残りの紅魔族を殺したいの。昼のことでもあったから見逃してあげようかと思っただけど、私の前に立つなら話は別よ。あなた達から先にあの世に送ってあげるわ！」

尻尾の魔術師殺しをまるでハンマーのように扱い降り下ろしてくる。

当然、短剣ではとめるどころか、受け流すこともできない。

「《固有時間制御 二倍速》！」

まだ、その扱いに慣れてないのか、速度さえ上げれば余裕を持ってかわせる。

しかし、永遠にかわせる訳ではない。

こちらにも体力の限界はある。

それはあのシルビアも同じだろう。

動き続けていれば体力は無くなる。

しかし、向こうにこつちの攻撃を防ぐ神器がある以上、こちらが不利なのは変わらな
い。

「《エクテリオン》！ 《エクテリオン》！」

エリスの強化魔法を受け零距离から斬撃を加えるイリス。

だが、圧倒的な防御力を誇るアイアスの前では攻撃が通ることがない。

「ちよこまかとー鬱陶しいわねー」

「《固有时间制御 四倍速》！」

魔術師殺しを振りかざされたイリスを加速して移動させるゆんゆん。

置き土産として短剣を刺しこみ爆発させていく。

……！

それは偶然だったのか。

爆発した箇所に爆発の跡とかすり傷ができてるのが見えた。

いや、それだけじゃない。

シルビアの肌がしわになってきているのが分かる。

もしかして、人工神器は自分の魔力を使って使用しているのか？

「エリス！もう一回、フルパワーでスターバーストを！」

「はい！」

聖槍から放たれる大いなる一撃。

今日二度目となる大技をフル詠唱でシルビアをめがけて放つ。

「まさか、気づかれた!？」

残り僅かとなった魔力ではこの一撃を受けきれないと判断したのか、緊急性回避に入る。

る。

だが、その回避先にいるのは。

「光の剣よ、闇を裂け！《エクテリオン》!!」

人工神器撃破！

目をくまらずまばゆい光をまとい、聖剣はアイアスを貫く。

「グハア！」

肉を切り裂き、シルビアの腹からは血や内臓がこぼれ落ちる。

「……まだよ。まだ、終われない……!」

恐ろしい信念。

体からは内臓がこぼれ落ち、到底立ってられない状態なのに、それでも、まだ倒れる訳にはいかないと、ボロボロの体を立たせる。

「え」

「私の……、私の礎になりなさい！」

牙を剥き出しにし、最後の力を振り絞りイリスを襲うシルビア。

「まずい！ここまんまじやイリスが……。」

「レールガン発射！」

あとほんの何ミリかでイリスに届くはずだった、シルビアの体は突然現れた閃光に乗せられ集落のほうへ落ちていく。

閃光の発射されたであろう、その場所に立っていたのは。

「魔王軍幹部、シルビア！俺の名前を覚えとけ！俺は数多の幹部と渡り合ってきたカズマさんだ！」

—————わ—————

「嘘。こんなところで終るの……」

薄れゆく意識の中で、ぽつりと呟く。

思い返せば、全て不意打ちだった。
最初に紅魔の里を攻めた時。

魔術師殺しで紅魔族を狩った時も。

そして今の閃光も。

全て相手の不意打ちで終わった。

目を閉じれば私を慕ってくれた部下達の顔と無惨にやられた亡骸がうかんでくる。

ああ、理に背いている私が言うのも変だが、神というのは理不尽だ。

いや、どちらかといえば世界が理不尽なのか。

どっちにしろ全てが終わりだ。

あと数秒で私の意識は消える。

私自身に悔いはない。

ただ、一つだけ、一つだけ願いが叶うというのなら。

……やっぱり世界は理不尽なのかも知れない。

消えかかった意識の中で、最後の光を見せるのだから。

「あら、報告で城に向かってみれば、ボロボロなあなたを見つけると」

聞き覚えのある声に目を開いてみると、そこには特徴的なピンクの髪をフードから出

した女が立っていた。

「ウオ……ルバク……」

「あなた、いつか私に言ってたわよね。これを使えば封印した半身と混ざってた時と同じくらいの実力は取り戻せるって。緊急時の時のためにとっておいたのだけど、あなたに返すわ」

そういつて私の口の中にアーモンドほどの大きさの結晶を入れる。

「それじゃあね。またいつか会えたら会いましょ」

それだけ残すとウォルバクは静かに森へ消えていく。

世界は理不尽だ。

だって、やつとの思いで手にいれた希望を絶望へ変えるのだから。

ねえ、坊や？

……それじゃあ、第二ラウンドといきましょうか。

—————

「悪いな、いいところ取りになって」

「カズマ！」

腕に抱えていた銃のような物をその場に置き、俺たちの所へ駆け寄ってくるカズマ。

その後ろにはお馴染みのカズマパーティーのメンバーもいる。

「俺達は俺達で魔術師殺しに対抗できる兵器を探してただけど、間に合つてよかった」

「本当、ナイスタイミングで助かった。一步遅ければイリスが危うかったよ」

「ありがとうございませすお兄さま！」

「おう！無事でよかった」

さっきの緊張感はどこへ消えたのか、シルビアを倒したことでうかれモードになりつつある。

「今回は誰にも迷惑かけてないんだし、賞金がもらえるわよね！アクセルに戻ればカズマのお金も合わせて大金持ちよ！」

「誰にも迷惑つて。シルビアに襲われた人達は」

「それなら安心なさい。この麗しき女神様がちよちよいのちよいで蘇生してあげるわよ」

「な、駄女神お前そんなことできたのかよ」

「当たり前じゃない。つてあんたまた言ったわね！」

「待つてください！いくらなんでも蘇生は無理ですよ。サツキ先輩は死に關してはすごいシビアですから」

「何お堅いこと言ってるのよ。女神としての格は私のほうが上なんだから最悪無理矢理

こじ開けるわ。そんなときはあんたも手伝いなさい。じゃないと一生その胸が小さいままに」

「わ、わかりましたからわかりました！ぜひ手伝わせていただきます」

「わかればいいのよ」

「大人げねえー」

ここにきてアクアの以外なチート能力が判明し、株が上がると思ったら急降下。

アクアの評価はジェットコースターだ。

「何を話しているのかわかりませんが、みんな生き返るのですね」

「ええ、安心しなさいめぐみん、ゆんゆん。それじゃあ、とつとと蘇生して祝賀会でもし

ましょー！」

とアクアが張り切った時だった。

今までの会話でコツコツと積まれてフラグはついに限界点を越えたのか、それともアクアの運なのか、賑やかしかった場を切り裂く。

「■■■■□□ツ!!」

それはこの世の音とは思えない轟音。

大地に響き、生命を脅かす叫び声がシルビアの飛んでった方向、里の中心部から聞こえた。

それから数秒、地響きをたてながら何か近づいてくる。

「嘘。いや、ありえるはずがないわ……」

地響きが近づいてくる。

肌に当たる風は冷たく、裂くように痛い。

「逃げるわよーあんなのには勝てないわー」

アクアの言葉に俺とエリス以外はきよんとしている。

まさか、わかってないのか？

このヒリヒリと伝わってくる黒い感じが。

「何言ってるんだよ。そんな真面目な顔で。つて、ユウマもどうしたんだよ。エリスも

……」

その時、この世の悪を纏った風が身体中にのし掛かる。

それは圧倒的な邪気。

言葉では説明することのできない恐ろしい物。

そして、それが現れた。

「■■■■□□□□!!」

言葉なのか叫び声なのか、木々を砕きながら現れたそれは、もはや原型を止めていなかった。

体を貫いた閃光のあとはそのままで、猛威を奮っていた魔術師殺しとは一体化、赤褐だった肌は黒く濁り血管が浮き出していた。

「あれがシルビアなのか……」

目を疑いたくなるが、これは確かにシルビアだ。

ただ、理性は完全に消え、本能の従うままにしか動いていない。

「あれがシルビアよ。でも、もう理性ないわね。どんな方法をとったかは分からないけど、あれは私たち神と同等の存在になってる。魔王軍と立場が並ぶのは気に入らないけど」

冷静に分析するアクア。

いつものおちやらは消え、女神としている。

「そんな、神様なんて私達じゃ相手になりません」

「ええ、イリスの言う通りです。カズマここは逃げましょう。何をしてるのです！ダク

ネス!!」

「私のことはいい、お前たちは先に逃げてくれ。ここは私が引き受ける」

「なに馬鹿言ってるんだ！こんなところで性癖出してないで逃げるぞ！」

「カズマ、悪いが今の私はダクネスとしてじゃない、王家懐刀、ダクティネス・フォード・ララティーナとしてあの魔物を討つ。あんな物がエリス様と同等の立場であつてはならない」

剣を引き抜き怪物となつたシルビアの前に立つ。

威風堂々、そんなダクネスの姿を見て、ゆんゆんも横に立つ。

「私は次期族長となるものとして、これ以上この里を荒らさせはしません」

前に立つ二人を止めようとする前に、獲物をロックオンしたシルビアが動き出す。

「■■■■□□□□□□!!!」

最初に狙つたのはダクネスから。

重々しい体で一瞬で間合いを詰め、腕を振り下ろす。

だが、最初から防御態勢をとっていたダクネスは完璧に剣で受け止める。

「そー！」

シルビアの背中から固有時間制御で加速したゆんゆんが短剣を突き刺す。

ーが、その攻撃をまるで、気づいていたかのように、尻尾を振り上げ弾くし、その勢いで回転しダクネスを吹き飛ばす。

「ダクネス！」

カズマの声もむなしく、木にぶつかり倒させるダクネス。

そして、ダクネスに気を向けていたゆんゆんの溝に打撃が入る。

「ゆんゆんさん！」

倒れこむゆんゆんののに駆け寄るイリス。

それを見て、標的を変え間合いを詰めていくシルビア。

「ま、避けるイリス！」

叫んだ時にはもう遅い。

シルビアは完全にイリスの背後をとっていた。

グシャ。

—————

——

目を開けると一面に草原が広がっていた。

「そうか、俺は死んだんだ」

誰もいない草原で雲ひとつ無い青空を見ながらポツリと呟く。

ついさつき俺は死んだ。

イリスを庇って攻撃を受けたイリスを見て、ただ無我夢中にシルビアへ攻撃を仕掛けて燃やされた。

何もできなかったのだから無駄死にだ。

結局二度目も無駄死にとか、俺って学習能力ないな。

……それにしてもだ。

また死んだのだが、一度目にいる空間と違う。

確か、俺があの世界に言ってからあの世界の管理はサツキさんになったと聞いていたが、見たところ何処にもいない。

いや、二回目はいきなり天国？にでも連れて来られるのかな？

「……」

イリスは！イリス達はどうなったんだ？

ほとんどが戦闘不能に近い状態まで追い込まれていた。

こんなところでぼーとしてる場合じゃない！

その時、後ろから人の気配を感じた。

「安心してくれ。君の仲間なら大丈夫だ」

声のする方を向くと、そこには黒のタキシードに黒のローブを身に付けた青年？が立っていた。

「え？」

「ああ、いきなりで悪かったな。クドウユウマ君」

この人、何故俺の名前を。

でも、なんだろうか。俺はこの人を知ってるような気がする。

「あなたは……？」

「俺か？俺は……いや、それは駄目だな。そうだな、俺はただの結界魔術師さ」

「結界魔術師。てことは、……いや、そんなことはいい。エリスは？カズマ達が大丈夫だっけ？どういふことだ？」

「そう焦んな。今の所は大丈夫だ。あ、そうだな、一つ君は勘違いしてるが、ここは天国じゃない。というか、まだ死んでない」

え、死んでない？

なら、ここは何処だ。

「ここは固有結界のなりかけ。つて言っても理解できないだろうから、簡単に君の心の中だと思ってくれ」

「俺の心の中？」

「ああ、そして、この世界は君自身の世界だ。流れる時間も向こうの世界とは違う。たとえば、ここで一時間、一週間と過ごそうと向こうの世界では一瞬の出来事になる。まあ、こ

の世界が大きくなって現実世界で展開できれば、固有結界になるんだが、いまはいいか。とりあえずここと向こうは時間の流れが違うとだけ覚えてくれ」

「だから、大丈夫ってことか」

「そうだ。その代わり、向こうでは君は今絶賛炎上中だから気をつけて欲しい」

「そうか、シルビアの魔法のせいか。ちくしょう、今の俺じゃ抜け出すのは」

「そのために俺が来た」

「え？」

「来たって表現は違うか。正しくは現れただな」

現れた？

さつきから思ってたが、この人なんで俺の心の中に入れてるんだ。

「説明するのは難しいんだが、君の中に送られた魔力の中に俺はいたんだ。君がピンチな時に現れるように設定されてね」

「それって」

「悪いが、そろそろ時間がない。無理矢理ここを開いたせいで俺の魔力は長く持たない」

「は？」

「悪いな。すぐに本題に入る。」

そう言うと青年は真剣な顔で俺を見て言う。
「お前は誰のために戦う？」

第29話 一人のためのヒーロー（エリスルート）※

ルート分岐

「お前は誰のために戦う？」

結界魔術師と名乗った青年はどこか寂しそうな表情で言う。

誰のために戦う？

そんなことは決まってることじゃないか。

俺は……。

「誰かを守ると言うことは他を、あるいは自分を捨てると言うことだ。君にそんな事ができるか？今まで自分しか考えてこなかった君に」

「俺が自分の事しか考えてこなかったって……。そんなはずは……ない」

そんなはずはない……。

俺はあいつに認めてもらった時から、走るようになった時から、俺は誰かのためになるように生きてきた。

間違っても自分のためじゃない。

「なら。なぜシルビアが紅魔族を襲ったとき、助けようとしなかった？」

「え……」

「デユラハンの時は命すら捨てて戦ったじゃないか？ならなぜ、シルビアの時は戦わなかった？なぜゆんゆん達の時は体を動かさず、エリスの時は逆上した？」

言葉がでない。

いや、違う。

認めたくないんだ。

俺はそんな人間じゃないって。

「それは……」

やめてくれ。

その先を言わないでくれ。

俺はそんな人間じゃ……。

「自分のためだからだ。エリスは君を、クドウユウマという人間をたった一人尊重してくれる存在だからだ。祭 祥也も工藤悠真という人間を認めてくれたからだ。君は自分を認めてくれる存在を悲しませたくなかった。失いたくなかった。だから走った。だから戦った。彼の夢を叶えるために。彼女の大切な人を守るために」

「……」

「だから、君はシルビアに殺されていく紅魔族を救わなかった。だって、命を張るほど自

分に大切な存在じゃなかったからだ。だから死ぬとわかっている戦いには参加しなかった。わかったかい？君は決して正義のヒーローでも味方でも、ましては偽善者ではない。自分の事が大切でしようがない自己中心的で意固地な人間なんだ」

青年は理不尽な現実を突きつける。

返す言葉などない。

苦しまぎれな怒りも悲しみも沸いてこない。

あるのはただ一つ、納得だけだった。

いや、最初からわかっていた。

わかっているながら否定し続けてきた。

こんな在り方は間違えなのだから。

「やつと受け入れる事ができたか。じゃあ、もう一度聞こう。君は、クドウユウマは誰のために戦う？」

すべてを受け入れた所で、もう一度問いかける。

俺は自分勝手だ。

自分さえよければ、周りなどどうでもいい。

そんなどうしようもないことを思っていたのに否定し、正義を訴えていたクズ人間だ。

それでも、俺は……

1. エリスのために戦う
 2. 仲間のために戦う
 3. 自分のために戦う
1. エリスのために戦う を選択

「エリスのために戦うって決めたんだ。そうだ、俺はどうしようもないクズ人間だ。それでも、そんな俺をエリスは認めてくれた。だから、俺は守ると決めたんだ。俺のことを認めてくれた人が悲しい思いをしないように。俺の在り方が間違っけていても、この気持ちには間違っけてないんだ！」

例えばどんな事があったとしても、守りたいという気持ちに間違えはない。

俺は大衆の指示する正義を肯定する正義の味方ではない。

自分の信念を信じ抜く正義のヒーローにもなれないのだろう。

ましては、それらに憧れた偽善者にすらも。

でも、それでも、俺は大切な人を守る人間になる。

例え自分を捨てることになっても、俺はこの気持ち信じ抜きたい。

「そうか。この選択はどれを選んで君は辛い思いをすることになる。それでも、後悔

することがないのなら。それが君の正しい道だ」

俺の答えに青年は安堵し笑う。

青年の立つ丘の向こうには綺麗なピンクのネリネの花が見えた。

崩れゆく結界の中。

青年は言った。

「何がなんでも守れよ。俺みたいにならずに」

――

グシヤ

燃えるほど熱い痛みが肩に走る。

目の前には魔物となったシルビアが獣のような腕で私の肩を貫いていた。

これはまずいですね。

女神である私に死の概念はない。

あるとしても消滅だけだ。

だから、人間にとつてそれが致命傷でも、私達にとつてはただのダメージでしかない。ただ、今回は別だ。

今の攻撃は私を構成する霊基に直接届いた。

おそらく、あと二回受ければ霊基を壊されるだろう。

「うっ……」

耐えられなくなって口から血を吐き出す。

そうだ、イリスさんは大丈夫だろうか。

うん、返り血が少しかかっているが、傷はなさそうだ。

よかった。

「シルビアーッ!!」

かすれていく意識の中でユウマさんの声が聞こえる。

駄目です、ユウマさん。

今のシルビアと戦っちゃ駄目です。

そして、私の意識が落ちた。

結界が崩れてから、一瞬間を空けて現実世界に意識が戻る。身体中を灼熱の炎が襲っている。

そういえば、シルビアが現れた時手元には紅魔族の服があった。シルビアはキメラだったか。

この強い魔力は紅魔族の魔力も混じっているのか。だが。

魔術回路に電撃が走る。

<魔術回路起動。データ更新。外部データをインストール。データ更新完了>
頭の中に次から次へと見知らぬ武器が風景が流れてくる。

<座への接続を完了。武器データを読み込み>

ある男は女を蝕む病を治すため悪魔に命を売った。

ある男は見殺しにした仲間を悔いて、自分以外のすべてを捨てて戦い続けた。
<読み込み完了。妖刀村雨。名刀村正を召還>

きつとこの記憶は先代の結界魔術師と別の世界の未来を生きた■■■□□の物だろう。

俺はこんなヒーロー達見たいにはなれないだろう。

でも、俺は俺の正義のために。

「<モード鬼神>！」

「■■■■□□□!?!」

詠唱を唱えた瞬間、召喚された二本の刀は俺を蝕んだ炎をかきけした。

その時、本능が悟ったのかシルビアの怯えた顔をする。

次の瞬間、俺めがけて飛び出す。

「■■■■□□□ツ!!」

<インストール完了。コルト・パイソン357>

「なあ、もう疲れたよな。安らかに寝てくれ」

シルビアめがけて引き金を引く。

思ったより引き金は軽かった。

いや、軽かったというよりは、銃が引かせてくれたのだ。

引き金に指をそえたとき、俺の頭にある記憶が流れた。

誰もいない戦場。

大切な人より自分を選び、歩きつづけた男の姿を。

ありがとう。

自分の選べなかつた選択を選んでくれて。

この銃はそう俺に言った気がした。

意思を持たない無慈悲の弾丸は一つの獲物に向かって放たれる。

だが、圧倒的スピードと動物の勘を持つシルビアは当然かわす

ーが。

「〜時止め〜」

時は止まる。

宙で初弾を交わした態勢のシルビアに二発目の引き金引く。

それと同時に時を動かす。

「<ビヨンドザタイム>」

「!?!?」

一体化し感覚を持つようになった魔術師殺しに二発目の玉がはいる。

だが、痛みは感じないだろう。

しかし、この二発目こそ本命。

二発目が相手の魔術回路に当たった時、因果によってかわされた初弾と次に撃った三発目が対象者の体を射貫く。

「■■■■□□ーー!!」

「痛くて結構。そいつにはエリスの聖気が入ってる。化け物のお前には効果抜群だ。

ぐっ……」

考えることはなかった。

ただ、頭の中を流れる記憶が体を動かす。

<再インストール。プログラム名 最強の幻想>

致命傷を受けてもなお、俺を絡み付けるその目には強い憎しみがあつた。

「ああ、今ならお前の気持ちがよくわかるよ。大切な人たちを失う気持ちが。だから、次の一撃が最後だ」

夜空を包んでいた雲が渦を巻き始める。

草木はその生命力を大きく揺らす。

きつと、この剣の希望は全ての光を越えるだろう、

「なんだ、あの剣は……」

ユウマの前に現れた剣に目を疑うカズマ。

「あれは全ての正義の象徴」

「え?」

「カズマ。あんたの世界ならみんなが知ってる聖剣があるわよね。それは人々のこうであつて欲しいという願いを星が集め造つた神造兵器。でもあの剣は、うんうん。あれは違うの」

「違う?」

「うん。あれは人々が心の中に持っている正義が無意識のうちに合わさってできた物。神は星は作ってない。真正銘人が作りあげた兵器。聖剣とは違う最強の幻想<ラス トファンタズム>。」

「最強の幻想……」

「かの英雄王出すら持つてない正義の原点<オリジナル>。あいつ、ズルをしたわね」

この世の全ての正義を集めた光は今、頂点に達した。

まだ、終わらない。

最後に残った意志を奮わせ俺に突っ込んでくるシルビア。

「光は満ちた！我正義に誓い、今このとき悪を滅ぼそう。これが俺の全力全霊<因果を絶ち悪を切り裂く正義の剣>!!」

剣から放たれた色を持たない光は、シルビアを包み込み、天地を切り裂きながら彼方へ消えていく。

意識が歪む。

一度に多くの情報を読み込んだせいで脳が悲鳴をあげている。

手に握っていた剣は、空を包んでいた雲を消し、明朝の太陽が砕けた大地を照らしていた。

この仲間達／Zero エピソードオブエリス

それは、人の尺度では到底図ることができないほど昔のこと。とある暗闇で一つの光が生まれました。

そこは、先の見えない深淵の世界。

不純物などない、真水で私という霊基は確立されました。

暗く周りは何も見えないのに、何かに包まれるよう暖かく、安心感を覚える場所。

万物全ての生き物が、最初に感じる心地よさを感じたのを今でも覚えている。

それからしばらくして、何かに掴まれるように私は外へ出ました。

< 神秘が終わりを告げた次の日 >

昨日、とある国の王が神を地上から隔離し、旧神と呼ばれたお方達はその大半が眠りにつきました。

そのため、地上で西暦となったこの日、私達に第二世代神達は各持ち場を与えられることになりました。

「もう、あの王様つたら何てことしてくれたの!?!せつかくスクルドのおぼさまが未来の日本のゲームをやらせてくれるって言うってたから楽しみに来たのに、旧神の皆様は眠りについたって。一体何年待てばいいのよ!?!」

「落ち着いてくださいアクア先輩!きつとあと七年ほど経てば最初のゲーム〇ーイができます!」

「何言ってるのよ!ここは外より時間の流れが遅いのよ?人間の時間で1989年後だなんて待ってられないわよ!」

この方はアクア先輩。

水の女神の格を持っていて、女神としての素質は第二世代神の中ではトップランクの実力を持っています。

そのため、旧神の方々からはかなり可愛がられていて、一部の女神達からはよく思われていません。

ですが、私にとってはとっても大切な先輩です。

まだ、私ができるまで右も左も分からなかった頃、一番に声をかけてくれたのがこの方だった。

活発的で暴走列車みたいな方ですが、その奥にある慈悲深さと人間味に私は何度も助けられた。

この方はきつとどんな神よりも人らしきを持った人だろう。

「アクアさん静かになさってください。えー、検討を重ねた結果、くじ引きでの決定しました。それでは、配属を発表します」

人事を担当する女神の方が前に出て配属を発表し始めます。

くじ引きで決めるのは流石に雑すぎますが、こうして、私はとある世界の管理を任せられました。

<今からちよつと前>

神秘の時代から西暦にかわってから七年近く。

下界では1990年ほど経ちました。

この世界の管理を任せられたあの日から、永遠に等しいくらい長い時間、この世界で亡くなられた人たちの案内をし続けてきました。

とは言っても毎時間死者達を案内をするわけではありません。

実際は一人で静かにいる時間のほうが長かったです。

そして、この時間こそが私にとって一番の苦痛でした。

私の担当している世界には人々を襲うモンスターや、西暦の世界とは違い神秘があるため、神のレベルまで昇華した災害などがあります。

そのため、それらに苦しめられた死者や、無惨な姿をほぼ毎回見ます。

それが私にはとても耐えられなくなつて、もう何度、一人の空白の時間に苦しんだかわかりません。

そして、いつしか私の後ろにはそういった人々の負の念が幻影や幻聴となつて、付きまとつてくるようになりました。

何度泣いたか。

行き当たりのない謝罪を繰り返したか覚えてません。

それと一つ、どつから湧いたわからない魔王と言われる人類の悪が生まれたことにより人々はさらに追い詰められました。

数少ない神秘の世界を失わんと、天界も動き始め、アクア先輩を筆頭に西暦の世界か

ら転生という形で人々を移住させる策にできました。

『日本担当アクア様、死者のお待ちです。至急応接室へ』

「なんで、今のタイミングなのよ！エリス！あんた変わりに相手してきなさい！私はこの赤いやつを相手するのに忙しいの！あー、キングなんて名乗らなくていいのよ！あんたは十分強いんだから、これ以上強くないですよ！」

「そ、そんな困ります！私だつて自分の持ち場があるんです。私が向こうに行つてる間に死者の方が来たらどうするんですか！」

「いいわよ。あんたが行つてる間は、あの世界の住民全員に無敵化を付与するから。こちら！そんな動かないで!!」

ついこの前、ついに下界でゲーム発売されると、毎日のように遊びに来ては、こうしています。

それまでは下界の時間で一年に一回くらいしか会うことはなかったのですが、私も一人の時間が減り、賑やかな時間が増えて嬉しいのですが、流石にこれは酷すぎます。

アクア先輩が職務放棄に勤しんでいると、後ろからゲームのコードに手をかける手が現れます。

「あー!!!なんてことするのよサツキ！あと一撃で倒せたのよ！ねえ、どうしてくれらるの？私の努力が水の泡なんですけど！セーブもしてないからこの数時間が水に消え

「たんだすけど！ねえ、謝って！私の時間を返して！」

「仕事を放棄して遊んだ時間なんて泡になつて消えてください。あなたにはあなたのやるべきことがあるんですよアクアさん」

「アクア様でしょ！人間の成り上がりが私にたてつこうなんていい度胸じゃない！」

「その成り上がりに階級を抜かされたのはどこの誰でしょうね？」

「ウツ……」

「こんにちはサツキ先輩」

「あら、エリスまでいたの？そういえば、ここはあなたの部屋でしたね。せっかくの仕事の休憩くらい、静かに過ごせばいいのに。何も、こんな馬鹿に構うことはありませんよ」

この方は世界の記録を司る女神のサツキ先輩。

生まれつきの病弱体質で若くして、人としての命を失い、人間で在りながらアクア先輩と同等の女神としての質を持っていたことから女神になったお方です。

おしとやかで、下界で言うところのお嬢様のような方で、私が一人で苦しんでいる時はよく相談にのってくれました。

「私は賑やかなほうが好きなので別に気にしてませんよ」

「ほら、エリスもこう言ってるんだからいいのよ」

「あなたは速く、仕事に戻ってください。でなければ、私の力で誰よりも速く天界シヨツ

プで予約した赤、緑のソフトを取り消しにしますよ」

「冗談よね？わかったは速く戻るから、それだけは止めて！そのためだけにここまで頑張ってきたの！」

そう言うと、光の速さで職場へ戻っていくアクア先輩。

やっぱりアクア先輩にはサツキ先輩が効果抜群です。

「あれでは今回も昇進試験は通りませんね。実績は誰よりもいいんですが、死者を待たせませんからね。多分、書類審査で落ちますよ」

「これで、十回目ですね」

「ええ、この際、エリスが抜かしているのですよ。そうすれば本人も本気になるでしょう」

このままいくと次の試験ではアクア先輩を抜かすことになるでしょう。

もしそうなれば私は最悪な女神です。

私は今まで、アクア先輩の背中に隠れてやって来ました。

そして、いつもアクア先輩のミスを拾う感じでアクア先輩を蹴落として、周りの方達に評価してきてもらいました。

自分のためなら、大切な人すらも蹴落とす、そんな私は本当に女神なんてやっていいのでしょうか。

「それが、世の中の仕組みなんですよ。あなたのやってることは間違いではありません。そんなに悲観しないでください」

まるで、お姉さんのように優しく、励ましてくれるサツキ先輩。

私は一体、いつからこんなになってしまったのだろう。

<今から四年前の秋>

「それで、私思うの！この機体をアクシズ教団の秘密兵器にしたらエリス教なんて恐くないってね」

「何言ってるんですか。確かにこの機体は宇宙世紀最強ですけど、立体化するのには無理があります。それに25mの化け物をどこに隠すんですか？それと、私の教団を物騒なもの扱いしないでください！ユニットできましたよ」

「あなた達は本当にガンダムが好きなんです。下界では愛さえなければ作れないなん

て言われている代物を平気に作っちゃうんですもん」

「サツキ、逆に考えなさい。愛があるから作れるの。まあ、完成したら当分は作らないわよ」

「そうですね。流石にこれを作ったら当分は何も作りたくないですね。でも私この機体好きなんでディープストライカーが出たらすぐに作り始めます」

「ちよつと何いつてるのよ。ディープストライカーは地球の資源じゃ作れない代物なのよ？それに、これだって600近くのパーツなのにディープストライカーはいつたいどれだけのパーツ量になるのよ。そんなものがプラモ化されるわけがないじゃない。もし、プラモ化されたら、13機分買って、寝ないで全部作っディープストライカーのGピットごっこしてあげるわよ。……なんなのよその顔は」

何かを察した顔でアクア先輩を見るサツキ先輩。

まあ、そんなことはありませんよね？

「エリス、塗料の準備をしなさい。今回は組み立てた状態で筆で塗るからね」

「わかりました。……あ、タミヤ白が切れてます」

「もう、仕方ないわね。サツキ、タミヤ白を10個お願い」

「残念ですけど、あつちも在庫が無いみたいですよ。あ、三個ならばらく待てば用意できるとは思いますよ」

「三個くらいなら、下界で調達したほうが速いわ。エリスちよつとだけ、下界に降りて買つて来なさい。サフの準備とかはこっちでやっておくから」

「ですが、案内の方は」

「大丈夫よ。変わりはサツキがやるわ。変身すればなんとかなんでしょ」

「私は便利屋ではないんですよ。……まあ、まれには気分転換でことで下界に降りるのもいいでしょう。エリスいつてらっしやい」

「サツキ先輩、申し訳ございません。いつてきますー」

サツキ先輩とアクア先輩に一礼したあと、まばゆい光に包まれて下界へ向かいます。

向かう先はアクア先輩の管理している西暦の世界にある日本という島国。

とても、独特な文化を築いているとのことで、少し楽しみな気持ちです。

とは言ったものの、アクア先輩たら塗料分の代金しか持たせてくれませんでした。

せつかく、見知らぬ土地に来たのですから、食文化に親しみたかったのですが、今回は諦めることになりそうです。

ただ、サツキ先輩がピンポイントでお店の近くに飛ばしてくださいましたのおかげで使いは速く終わりました。

ということ、残りの時間は少しお散歩するのですが……。

周りを見渡せば小型のデストロイヤー、たしか車と言われるものでしたか、それがた
くさん走っています。

前にアクア先輩と作ったトレノと言う車とは違ってどれもライトの部分が直接出
ます。

私はあのパカパカしたの大好きだったので残念です。

それにしても、少し空気が濁っています。

私の管理している世界ではこの世界ほど文明が進んで無いのですが、どうやらそれが
関係しているように思えます。

ですが、行き交う人々の表情は変わりません。

皆さん、とても疲れた表情なのですが、精一杯生きてるとい感じが溢れています。

その中でも制服を着た学生といわれる人達は特に生命力に溢れています。

その時、アニメや漫画などで描かれる一般的な学校とは少し違った、お城みたいな少
し変わった建物に目に映ります。

「白中？」

看板を見たところ、中学校と言われるものでしょうか。

それにしては、イメージと少し違います。

流石の中に入るのは行けなさそうなので、少し移動して中を見ます。
どうやら、グラウンドと言われる場所で走ってる人達がいるらしいです。

「クッ！」

「悠真！ラストだラスト！ここで出しきれ！」

夕日の茜色に照らせれるグラウンドと少年達。

その中で先頭を走っていた何人かの集団を振り切り、前に出た少年に目を奪われました。

「っ！」

「46、7、8、9、2分50秒！」

「ナイスラン！悠真」

「お、おう……。ありがとな」

全てを出し切ったという満足げな顔でさしのばされた手を掴む少年。

その姿を私は忘れることはないだろう。

その少年の目は一切の妥協も挫折も知らない、誰かを蹴落とすこともしなかった、そんな綺麗な目。

私のように歪んだものではない純粋なものに、そんな姿に憧れを抱きました。

私はきつとこんな人みたいになりたかったのだろう。

でも、もう遅い。

私はもう卑怯な道を歩いてしまったのだから、あの少年のようににはなれない。

だから、あの少年がこれからも純粹でいられるように、私みたいに卑怯な存在にならないように、心から願おう。

「祝福を」

いつか、私は彼と出会うことがあるかもしれない。

それは彼の来世か、それとも偶然アクア先輩の仕事を変わりにすることになった時か。

けどもし、そんな時が来るとしたら、私は彼に救われたいと思うだろう。

結局、私は自分のことしか考えられてない、最悪な女だ。

周りはその何倍も辛いのに、ただ同情することしかできず、深く関われない。

それなのに、理解者が欲しいと思ってる愚か者だ。

はたして、こんな愚か者が救われるのだろうか？

ただ、私は一応幸運の女神だ。

いつか、何かのきっかけに出会えるように、今は大人しく仕事に没頭しよう。

静かに少年のいるグラウンドに背を向ける。

そして、まばゆい光に包まれて天界へと帰る。

ただ静かに照らす茜色は知っている。

この女神の欠陥を、見落としていた少年の欠陥を、そして、これから起きる運命を……。

この素晴らしい仲間たちに救済を／＼ Z e r o

エピソードオブエリス

完成

第30話 for you

「こんなものかしらね」

脈を計り、安定を確認してから近くの椅子に腰をかける。

ふと、外を見るとひと降りいそうな空だった。

あれから三日がたった。

ダクネスやゆんゆんは特に外傷もなくヒールを念のためにかけてすんだ。

ただ、以外にもゆんゆんに大きな怪我がなかったのは驚いた。

とつさに張った結界がダメージを半減させたのだろう。

流石は天才と言われるだけのことはある。

エリスにいたっては少し手こずった。

あの子は霊基の損傷をあまく見積りすぎだ。

気絶したのは本当に運がよかった。

でなければ次の一撃で終わっていただろう。

サツキつたら、何がなんでも弱体化させすぎよ。

あの子つたら不器用だから、ここまで深い傷は治しきれない。

本当、私がいことが運がよかった。

しかし、問題はユウマのほうだ。

目に見える損傷は無いものの、脳に負荷をかけすぎたことで、当初は治すのにかなり手こずると思っていた。

だが、いつこんなことをしたのか、魔術回路が急激に自己回復を始めていたおかげで、治すのは脳だけですんだ。

いや、自己回復というのは少し違う。

正確には混ざりあっていたというべきか。

いったい何をしたら他の世界の未来の自分から魔術回路を複合することができたのだろう。

しかし、最初はサツキの仕業だと思っていたが、よくよく回路を見ていくとあの悪魔の魔力を微弱だを感じる事ができた。

まさかね……。

ただ、そんなことは問題ではない。

一番の問題は混ざってはいけないものと混ざってることだ。なんで今まで気づかなかったのだろう。

この様子を見る限り、混ざり始めていたのはデユラハン戦の前からだ。考えてみればおかしいことばかりだ。

カズマと同じでチート能力もなく、あるとすればウィザードとしてのちよつとした才能くらいだ。

それなのにめぐみんですら一日一発しか撃てない爆裂魔法を何発も撃てるのだ。

普通に考えておかしいが、別にできないわけではない。

方法は二つある。

カズマのドレインタッチで魔力を移すこと。

もう一つは魔力供給をすることだ。

この魔力供給にもやり方はたくさんあるが、エリスが選んだ方法は擬似的な契約状態から魔術回路のパスを繋げる方法だろう。

そのせいで、神の魔力を通し続けたユウマの魔術回路は変質してしまった。

今ユウマは体の半分が、神のものになってしまっている。

簡単にはいえば半神半人という状態だ。

この状態は非常に危ない。

生物の体というものは繊細だ。

異物なんて入ってきたら、拒絶反応を起こす。

それは神だって同じだ。

しかし、神々はその強力な力で抑制することができる。

だが人間は違う。

人間の魔力は他の生物と比べたら弱い方だ。

この中に魔力の中で最も強い神の魔力がはいったらどうなるか。

簡単だ。

あまりの強力さに逆に飲み込まれていき、廃人化が進み最後には人として終わる。

時限爆弾のようなものだ。

それを、ユウマは二つも持つてる。

それは未来の自分の力だ。

これは魔術の使われている世界のユウマが歩んだ抑止の結末の力。

ただの人間の魔力とは力の差が違う。

普通に生きるで普通に魔法を使う分には大丈夫だろう。

だが、情報を引き出そうと酷使していけば、必ず破滅する。

遅かれ早かれ、ユウマは破滅の道を進んでいく。

救いがあるとすれば魔王を倒して、神々に願うしかない。

それまで持つのだろうか。

その時、部屋の入りが開く。

そういえば、もうそんな時間か。

「アクア先輩」

部屋に入ってから、私の不機嫌さに気づいたのだろうか。

本当、この子は勘が良いのか悪いのか。

「安心しなさい。やっと安定してきたわよ。あと少しすれば目を覚ますわ」

私の言葉にペアと表情が明るくなる。

そう、この子は意識が戻ってから、私が治療をしている間、ずっとユウマの身の回りのことをしていた。

すごく心配だったのだろうか。

「よかった。それなら安心ですね」

……安心？

その言葉に私は嫌悪感を覚える。

もしかして、この子は気づいてないのか？

ユウマの魔術回路を見た限り、あの神気は確かにエリスのものだった。

なら、気づいてないはずがない。

「エリス、ちよつと聞いてもいいかしら？」

「なんででしょうか？」

「あんだ、ユウマとパスを繋いだでしょ」

エリスの言葉が詰まる。

ああ、当たり前だ。

「はい、繋ぎました。でも、それはユウマさんのことを思つて……！」

「黙りなさい!!」

エリスの体がビクンとなる。

何がユウマのことを思つてなのか。

この子はそこまで無知だったのか。

私の中に怒りがわいてくる。

「二ついい？ 神の魔力つてのは人間に毒なの。紅魔族のような強い人々で十回が限度なのに、それをただの人間にしかも常時送り続けるなんて。あんだ何をしたか分かつてるの？ 今ユウマは背負わなくていい爆弾を一人で背負っているのよ！」

それを聞いて嘘だと疑っている。

こんなことすら分かつていなかっただなんて。

ありえない。

それでも女神なのだろうか。

「……」

無言で部屋を出ていくエリス。

「うおっと！おい、エリスどこに。って、アクアどうしたんだよ」

お見舞いに来たカズマが部屋に入ってくる。

何をむきになってしまったのだろうか。

ふと、我にかえて入り口の前に落ちたユウマのジャージが目にはいる。

そのジャージはよく見ると糸の始末が下手で、結びも甘い、それでも頑張ってやったのを感じられる。

きつとユウマも喜ぶだろう。

あの子だったら不器用な癖に本当一生懸命に頑張る子だ。

それに比べて私ときたら、勢いで怒鳴ってしまうなんて……。

「うぐ。カジユマ……」

「おい、どうしたんだよいきなり泣き出して」

「私、最低だわ。ちよつとイラツとしただけで怒鳴っちゃうなんて。あの子の気持ちも考えないで強く言っちゃった」

「あーもう泣くな。誰にだってそういう時はあるさ。ここ最近、いつもよりも頑張ってたし。そうだ、なんだ、お前がいつか言ってたマイケルさんの酒、今度買ってきてやるから。そしたら、一緒に飲もうな」

「本当？」

「ああ本当だ」

――――
――

アクア先輩から言葉で私は部屋から飛び出した。

途中カズマさんやイリスさんたちから声をかけられたが、すべて振り切って走った。シルビアの襲撃で半壊した里の復興作業も、数の減った里人達も全て見ずにただ走った。

そして、ついに疲れて足を止める。

前を見ると復興中の里全体が目に見える。

多くの人を失ったというのに、勢いを止めず作業する人々。

その姿は、あの日見た少年の姿と同じようだった。

……。

頬に水滴が当たる。

ポツリまたポツリと水滴は天から落ちてくる。

そして、少しすると体に雨が打ち付けられていた。

ああ、寒い。

体温が落ちていき体が冷め、手にはただ冷たい感触だけだ。

あの頃と同じだなあ。

私にとってここはあの冷たく暗い天界と同じだ。

いや、冷たく暗いなのは天界ではなく私自身だったのだろう。

私はまた一人、大切な人を傷つけた。

本来自分勝手だ。

あのまつすぐな瞳に憧れて、救われたくて、私は彼に酷いことをしてしまった。

これからどうすればいいのだろう。

どうやって彼の顔を見ればいいのか。

いや、私にそんな権利はない。

彼を見るどころか側にいることすら、私には許されない。

今振り返ってみれば全て自業自得。

天界を冷たい場所だと思つたもの、死者の怨念に蝕られたのも、彼に顔を合わせずらくなつたのも全部私の自業自得だ。

今さら誰かにすることがなどできない。

ならどうするか。

いつそここで……。

「エリスー！」

雨の音の中、一つの声が聞こえた。

振り向くとそこには、私の憧れたあの人があった。

—————

夢を見た。

それは一人の少女の過去。

怨念を背負い、自己嫌悪に身を蝕まれ、理解者を求めた少女の悲しい嘆き。

驚いた様子のアクアとカズマを置いて、ゆんゆんの家を後に走る。

今なら、正確に強く感じることができる。

そして、走った先に彼女はいた。

「エリス！」

俺の言葉に振り向いた彼女の顔は悲しいものだった。

「近づかないでください！」

悲痛の叫びが雨の音を裂く。

「私、卑怯者なんです。自分さえ良ければ、周りを平気に傷つけてしまう最悪な女なんです。私に近づいたらあなたまで汚れてしまいます」

ただ黙って歩く。

「駄目です本当に。私はあなたが最も嫌う自分勝手な女なんです。幸運の女神なんて名だけで、近づいた人はみんな不幸になっちゃうんです。だから、やめてください」

嗚咽混じりな言葉がむなく雨の中に響く。

「ああ、わかったよ。もう十分に」

冷えきった体を抱きしめる。

寒気と苦しみの震えが体に伝わってくる。

「エリスが自分勝手なのはよくわかったから。だから、俺はエリスの側にいるよ。約束したろ？ 何があっても守るって。たとえば、否定されてこの世の全てが敵になっても俺はエリスを守り続けるよ」

それは誓いであり願いだった。

誰かに誉められたくて、誰かのためになろうとした。

でも違った、俺が誰かのためになりたかったのは、昔見たヒーローに憧れたからだ。

ヒーローは自分の正義を貫く。

たとえば、周りから否定されることになっても。

俺はそんな姿に憧れた。

すごい痛々しいことかもしれない。

でも俺は、俺のことを肯定してくれた彼女を、自分を否定する彼女を守りたいと思っ
た。

これが俺の正義<答え>だ。

「私、あなたの側にいてもいいんですか」

「ああ」

これで、後戻りはできなくなった。

でも、後悔なんてない。

なんだって、これが俺の選んだ道なんだから。

「帰ろう」

—————

——

<三章エピローグ>

あれからお互いびしょ濡れのまま帰った。

ゆんゆんの家に着くと、心配そうにアクアとカズマが待ってくれた。

そして、アクアとエリスはお互い謝って、仲直りすることができたのだが、怪我明けの俺は、酷く怒られ、ベットのの上に戻された。

「さすがに怒りすぎだと僕は思いますよ」

「アクア先輩やイリスさんたちだっすごい心配してたんですから、くみ取ってあげて

ください」

今は部屋で俺の看病に付き合ってくれてるエリスと二人きりだ。

後にカズマが、俺の分の夕飯を持ってきてくれるそう、それまで待っている。

「その、直してみたんですがどうですか？」

愛用のジャージー渡される。

アクアのように新品同様の修復状態ではないが、ものすごく頑張ったという感じが伝わってくる。

「ああ、ありがとう。もう、これは死んでも手放さないよ」

「それは言いすぎですよ。そう、ユウマさんが寝ている間に作って置いたんです。はい、どうぞ」

そういうと、スプーンですくったハチミツレモンを差し出される。

これって確かに、めっちゃ鉄の味がするやつだよな。

普通のやつよりいっそうキラキラとハチミツが光っている。

せつかくエリスにあげるの、断るのはいらない。

……にがっ！

「あの、エリスさん？このハチミツものすごく美味しいのですが、少し苦い気が」

「実は、このハチミツ。とても珍しいものでして、レバーなどの食材より、含まれる成分

「が、いいと評判なんです！」

「あ、なるほど。」

「鉄分多いのか。」

「そりゃ、血に似た味だわな。」

「へえー。でもそんなに評判がいいんなら、手に入れるのも苦労したんじや」

「そうでもないですよ。たまたま、教団のお手伝いをしてましたら、森で遭遇しまして。」

「二、三発撃ち込んだらすぐに倒せましたんで、そのまま巢を潰したら、お礼にと少々分けてもらえたんです」

「わーを、ハチとタイマン張るなんてワイルドー（棒）」

「それにしても、めぐみんの言っていたあれは、紅魔族だけの話だったんだな。」

「いやー、身構えて損した。」

「実はこのハチミツ以外にも、体を良くする調理法があるのですが、確か……」

「いや、良いんだよ思ひ出さないで！うん、エリスの料理は美味しいからそのまんまでも十分体にいい！」

「入るぞ〜」

「扉が開くと、料理を持ったカズマと見舞いに来たイリスとゆんゆんがいた。」

「お、カズマありがと。それにイリスとゆんゆんもありがと。里の復興忙しいのに来

てくれて」

「いえいえ、元気そうでなりよりです。里の復興といつても、魔法で片っ端からやっただけです。あとで、お父さんも来るのでよろしくお願いします」

「おう、わざわざありがとな」

「ユウマ、食い終わったら呼んでくれ。こっちでまとめて洗っておくから」

カズマとゆんゆんが部屋を出ていくなか、イリスが耳元まで近づいてくる。

「乙女心は大切にですよ」

と、言葉を残してでいく。

どうやら、イリスにはばればれだったのらしい。

恐ろしい観察力だな。

世界観

地球<西暦の世界>

とある国の王が神と人を分けたことによりそれまで地上を統治していた神々は神秘性を失い、地上を去り深い眠りにつく。

アクアいわく、魔法は存在しており、気づかず使っている人もいるもよう。

吸血鬼（死徒）といわれる存在がいる。

※設定の引用

f a t e / s t r a n g e F a k e

天界

神々が眠りについたあと、アクア達第二世代神が治めることになる。

神には二種類の成り立ちがあり、無からつくられた者と人として死に持っていた才能を評価されるものの二種類がある。

時間の尺度は人間には到底測れないものらしい。

しかし、西暦の世界とこのすば世界ではこのすば世界のほうが時間の流れは早い。ちなみに、役割分担がくじ引きで決まるといいいかなところがあるらしい。

魔力

本作品では魔力の量と体力の量はイコールとなっています。※ただし紅魔族は例外。

そのため一般人のユウマがウィザードからアークウィザードにすぐにクラスチェンジできた。

ユウマは西暦世界ではそこそこの名のある中・長距離選手だったため、体力も長距離選手のなかではトップクラスのものを持っており、魔力は一般人ながらレベル上げすれば早い段階でアークウィザードになれるだけのものを持っていた。

ちなみに、引きこもりだったカズマさんは当然ながら体力なんてあっても並くらいなため、魔術師としてよ質は低い。

魔力にも種類がありその頂点にあるのが神の魔力。天才種族の紅魔族ですら扱うのは困難で、ドレインタッチで移して使うにしても使用限界がある。

普通の人間には到底扱えず、体に入れば拒絶反応を起こし、そのままドカンと。

もし起こさなかったとしても、徐々に飲み込まれていき、人としていられなくなる。

武器

人工神器

英雄の持つ宝具を神々が真似して造った神器のレプリカ。

当然普通には作れるものではなく、神の力を持つ者の力を作って製作された。

しかし、あくまでもレプリカであり、本物以上の力が出なかつたり、使用制限や耐久に難がある。

因果を絶ち悪を切り裂く正義の剣

毎度おなじみのあれのパロ。

人々の「こうであつてほしい」という概念で星につくられた約束された勝利の剣（fate作品のセイバー剣）とは違い、人々の無意識にある正義が集まり、自然的にできた剣。正義の概念。

そのため神造兵器ではない。

この剣を使用するには、何かを守つたことで得る資格と人間であるという使用条件が必要。

※この剣を使える人間として切嗣やHF士郎のような自分の正義をもつ人間にしか

使えない。

エミヤは使用不可能。

理由として、大衆の支持する正義だから

(主の勝手な妄想です)

正義の味方と正義のヒーロー

この作品ではこの二つは別のものとして扱ってます。

正義の味方は少数を捨て大勢を助ける。一般的な正義を肯定するもの。

正義のヒーローは自分の正しいと思う正義を貫くもの。(たとえ全員を犠牲にして大切な人を守るといふ考えの人でも正義をヒーローの部類に入る)

正義の味方は自分以外のため、正義のヒーローはある意味自分のためという感じ。

六花の王都 王国の女たち編

第31話 私の日常

よく昔のことを夢に見る。

目を覚ますと使いの者がいて、会釈をして着替えさせくる。

着替えを終えると次は朝食。

朝食へ向かう最中、使いの者たちはただ黙って私に並んで会釈をしてくる。

誰一人として私語を口にしない。

本当にただ黙ってだ。

朝食をとるときはいつも一人。

正確には後ろに使いの人がいるのだが、食べているのは私一人。

食事が終わるとしばらくして、二人の貴族が私のもとへ来て、勉強を始める。

そして、午後には、他国のお偉いさんや王都で活躍した冒険者たちと食事をするのだ。

私はいろんな人たちと会って話してきた。

だが、みんな同じだった。

結局は自分の事ばかり。

貴族にしても冒険者にしても、さらには家臣達も、私の顔色ばかり伺っては自分の事ばかり考え話してくる。

そこに私はいない。

彼らは自分の利益と話しているのだ。

私は家族とすごした日々が少ない。

私が生まれて、すぐに母は死んだ。

父である国王やお兄様は魔王軍と戦うため、最前線に立っていて、城には戻ってこない。

私の相手をしてくれるのは教育係の貴族たちとまれに会いにくる懐刀の貴族、ララティーナだけ。

だが、みんなどこか引け目な感じで話してくるのでつまらない。

ゲームをしようと言っても、見え透いた手加減をされ私の勝ちになる。

彼女たちにとってはただの接待なのかもしれない。

こんなことを言うのは自分勝手だと言われるかも知れないが、私を囲っている世界は鳥籠だ。

自由に外に出ることはできないし、誰も心から話してはくれない。

心も体も城という檻に閉じ込められている。

だから、私は、私は外に出たのだ。

あの方の誘いによって自由を掴んだ。

しかし、こうして夢を見てみると、私の後ろを黒いものが付きまどつてくる。

それでいいのか、それでいいのかと罪悪感がひたりひたりとついてくる。

そして、いつも、その黒いものに飲み込まれるとともに私は目を覚ます。

—————

ふと、目を覚ますと小鳥のさえずりが聞こえる。

下の方からは朝食の音と匂いが届いてくる。

「イリスちゃん起きてる？」

ぼーとしてると、ゆんゆんさんの声が聞こえる。

そして、やっと脳が起きたのか、周りの事がしつかりと判断できるようになっていく。
「はい！起きてます」

「よかった。もう少しで朝ごはんができるから、そろそろ下に来てね」
階段を下りていくゆんゆんさんの足音。

朝のランニングから帰ってきて、汗を流しているユウマさんの水の音。

そして、みんなの朝食を用意しているエリスさんの料理の音。

この音たちが、いつもの朝を告げてくれる。

ここは、無音だった城とは違う。

自然の静かさと人の営みが確かにあるのだ。

私はベットから出ると、小さなクローゼットから服を取り出し着替える。

当然、手伝いの者はいない。

部屋を出て、階段を下りリビングに行き座る。

テーブルにすでに用意されている食事たちは、到底朝の時間に用意できるレベルでないほどの芸術ともいえる盛り付けがされている。

「おう、おはよ」

「おはようございます」

料理に見惚れているとお風呂から上がってきたユウマさんが、頭を乾かしながら私の

隣の席に座る。

そして、みんなが座って食事がはじまる。

ユウマさんの前にはエリスさんが、私の前にはゆんゆんさんが座っている。

食事中は他愛のない会話でもりあがる。

今日の天気は良さそうとか、昨日の宴会は酷かったなど、まれに、ユウマさんのセクハラ発言が聞こえてくるが、にこにことしたエリスさんの笑顔に怯え、食事後にお説教が待っているのは日常茶飯事だ。

食事が終わると食器の片付けを手伝い、教会を手伝いに行くエリスさんを見送る。

そうして、残った人たちでゲームを始める。

「はい、五光」

「えっと今ので菊もとってるからのみで」

「ユウマさん。もちろん……」

「こいこいはしない」

「大人げないです！男は黙ってこいこい。お兄様が言っていました！」

「悪いがイリス。役をつくったのは俺だから、俺が決める。こいこいはしない。男じゃないって言われようと、俺は意見を変えない。だってあと少しで猪鹿蝶決まるんでしょ？」

「むうー。ゆんゆんさんもなんとか言ってく下さい！」

「……えーあつ、そうだね。でも、上がったのはユウマさんだし、決めるのは……」

ゆんゆんさんの持ち札に視線があつまる。

そのカードたちに少し引き気味になる。

「すげー、カスの枚数……」

「かわいそうな目で見ないでよ!!」

とこんな感じで午前を楽しむ。

ユウマさんは相変わらずの大人げなさで、ゆんゆんさんは、みんなでやればいと感じだ。

午後はお兄様、改めカズマさんと釣りをしに行く。

釣りをしながら、日本の話を教えてくれるが、何やら事情があつて、ユウマさんほど熱いようなお話はしてくれない。

それでも私の見てきた物、考えていることをはるかに越える事ばかりでとても面白い。

「気をつけて帰るんだぞ」

「はーい」

夕日に照らされながらサヨリとバナナの入ったバケツを抱えて家に帰る。

基本的小お兄様のパーティーは外食をメインに置いているが私のパーティーは自宅で夕食をとる。

6時間かけた釣りが、釣れた数は10匹にも満たない。

だが、のんびりと空を見ながらかかるのを待つのも釣りの醍醐味だと言うお兄様にならない私もゆつくりと空を楽しんでいる。

それでいてふと、時に思うことがある。

なぜ同じ空の下にいるのに、こんなにも気持ち軽いかと。

王城で見ていた空も釣りをしながら見ている空も特に変わったことはない。

だが、もし変わった思いを抱くとしたら、それは私の心になにかあるのだろうか。

家に帰ると、すでに夕食の準備に取りかかっているのか、おいしい匂いが私の鼻をくすぐる。

それは城ではけして感じることはないものだ。

家の扉にかけた手が止まる。

私はいったいいつまでこうしていられるのか？

いったいいつまで、みんなと笑っていられるのか？

後ろをついてくる黒い影がそんな問いかけをしてくる。

「どうしたんだ？こんなところで止まっちゃって」

後ろには不思議そうな顔をしたユウマさんが立っていた。

「ほら、早く入って手を洗わないとエリスに怒られちゃうぞ」

ガチャリと私の手に重ねて扉を開く。

「お帰りなさい。あれ、二人とも帰り道が同じだったんですか？」

「ちよつとそこだね」

結界から取り出した荷物をゆんゆんさんにみせる。

それからしてエリスさんが玄関を見に来る。

「あ、お帰りなさい。もうすぐでご飯ができるんで手を洗いに行ってくださいね」

人が帰れば、みんなで迎える。

なんとなくおきるこの状態がとても暖かい。

「ほら、手洗いにいこうぜ」

ユウマさんに引つ張られながら家の中に入る。

ああ、難しいことは今はいいのかもしれない。

今はとにかく、この暖かさに包まれていたい。

私は今日もこの場所で言う。

「ただいま」

第32話 正体

「これで大丈夫よ」

ペタンと俺の背中を押すアクア。

「おう、ありがと。それにしても、今回も早く治ったな」

「なに言ってるのよ。私だから早く治せたの。そこら辺のぺいぺいプリーストなんかと比べられたら困るわ」

「そりゃ、すいませんでした」

苦笑しながら上着を羽織り立ち上がる。

すると、アクアが突然ストツプをかける。

「ちよつと待ちなさい」

「なんだよ、治療代ならしつかり出すぞ」

「治療代はいいわよ、もうすぐカズマのところに入大金が入るから、それで遊ばしてもらわ」

「ならなんだよ?」

急に真面目な顔でこちらを見てくるアクア。

あまりに真面目すぎるものでこっちも真剣になってしまふ。

「あんた、今自分の体がどうなってるか分かってるわよね?」

「ああ、なんとなく」

「なんとなくじゃないわよ!」

急に怒鳴り出すアクアに驚いて体が固まる。

「あんたの体にはとてつもない爆弾が二つあるの!その爆弾のおかげで、魔術回路は以前より強固にできてるけど、無理をしたらおじやんなのよ。……あんた、自分の未来を見たでしょ」

「……ああ」

シルビア戦の後、俺はしばらく寝込んでる時があった。

その時、俺は自分の未来を見た。

いや、正しくは全く違う世界の自分の未来と言うべきか。

誰かに褒めて欲しくて、誰かを救うことを選んでおしようもない未来。

見殺しにした仲間のために、その在り方を通すことしかできなかつた男の悲しい道を、俺は見た。

「どうやったかはわからないけど、今のあんたにはそのあんたの記憶が魔術回路に混じっている。そのおかげか、未来のあんたが使ってきた武器に加え未来のあんたが、インチキで繋いだ座情報が入ってる」

「座？」

「正しくは英霊の座。あんたの世界で名を残した人間たちが死後、私たちからその魂をブラック企業アラヤにぶん取られたやつらが行く場所よ」

よくわからない単語が山ほど出てきて頭がこんがらがってきたな。

「つまり、英雄たちの魂が集まった場所ってことか？」

「まあ簡単に言えばそうね。で、あんたはその英霊の座から本物の英雄たちの武器を召喚できるようになったのよ」

英雄たちの武器。

神器はその武器のレプリカだと言われている。

つまり神器のオリジナルの使い放題ってことか!?

それってチートすぎるだろ。

「なに舞い上がってるのよ。さっきも言ったでしょあんたの体には時限爆弾があるって。その爆弾はあんたが、膨大な魔力を使えば使うほど針が進んでいくの。普通の魔法を使うぶんには問題ないわ。あと、一度召喚した武器の再召喚もね。ただし膨大な魔力

を使う、爆裂魔法、新しい武器の召喚は合計三回が限度。それ以上を越えたら、あんたの体は弾け飛ぶわ」

爆裂魔法も含め合計三回。

まさにここ一番の時にしか使えないな。

……。

「俺の体が吹っ飛ぶ!？」

「ええ、内から盛大にね」

平然と恐ろしいことを言う女神様だ。

恐ろしすぎて何も言えない。

「未来のあんたの魔力は膨大な魔力を消費して傷ついた魔術回路を飲み込むように回復させていくの。言い直せば、あんたはあと三回で未来のあんたに魔術回路を飲み込まれる。けど、その強大な力に体は耐えられなくて爆発するってことよ」

ああ、いつからこんな物騒なことになったのか。

いや、後悔はないが。

「丁寧な解説ありがとな」

椅子から立ち上がりアクアに背を向ける。

「もし、私とその力を失う変わりに爆弾を取り除けるって言ったらどうする?」

「悪いが断らせてもらおうよ。せつかく守れる力を手に入れたんだ。そのために死んだとしても本望だ」

ゆつくりと扉を開けて部屋を出る。

「そう。……よかったわねエリス。あんたの望んでいたヒーローに出会えて」

――
紅魔の里から帰って数日後。

俺は数週間前に捕まった領主の証人としてダクネスの親父さんのとなりに座っていた。

「それでは、判決にはいります。被告人アレクセイ・バーネス・アルダープ。あなたは、その立場を私利私欲のために使い、民を苦しめたあげく、監禁、暴力などの数々の不正を行い、あるうことかエリス様の教えに背き悪魔と契約し隠蔽をしてみました。これにより、被告人アルダープ。極刑、死刑の判決といたします！」

場は静まりかえり、裁判長の声だけが響く。

わかりきった結果だ。

さすが中世と言うべきか。

最悪人殺しに走つてないアルダープは日本では死刑とまではいかないが、この世界では宗教などの関係で一発死刑だ。

まあ、一番の理由は貴族の顔に泥を塗ったことだろうか。

今回はダクネスの親父さんがアルダープの不正を暴いたことで通つてるらしいが、国の中心に関わっている人間が横暴しただけではなく、国教まで背く始末となつては貴族や王国に対しての信用はがた落ちだ。

極刑を言い渡されたアルダープの顔は絶望の色で一色だ。

ーののだが、最後の悪あがきか。

自分ももう助からないことに覚悟をおき、それなら一発やってやろうという目。

その目は俺に向いていた。

「裁判長……」

「ん。民の前に立つのもこれが最後です。言いでしょう。被告人、最後の言葉を許します」

ここでひとつ確認しておこう。

ここベルゼルクは宗教に関してとても信仰が熱い国だ。

その中でも特に貴族たちは宗教を強く信仰するものも多い。

ダクネスがいい例だろう。

エリス教の教えに刃向かう者には彼女もきつと剣を抜くだろう。

まさに、今俺の周りにいる貴族たちがそれだ。

みんな血なまこになって腰の剣に手をかけてアルダープを見ている。

この世界では権力者と神の言葉は絶対だ。

この裁判がそれを物語っている。

神に逆らったアルダープは裁判の中、一言も話させてもらえなかった。

そんな中、アルダープは最後の言葉を言う。

「裁判長。この中にもう一人、神に背く愚か者がいる」

その言葉に辺りが静まる。

ベルは鳴らない。

「そうだろ？冒険者よ」

周りの視線が俺に集まる。

俺は必死に頭の中をさぐる。

いったい何を言ってるんだこいつは!?

そして、答えが浮かぶ。

アルダープが知っているであろう、俺が神に背いた行為。

それは……。

バニルとの契約。

「あつ……」

すくわれた。

まさか、エリスを救おうとした手で、自分の足をすくうとは。

なんて返すべきか。

嘘をつけば、このあとの裁判は俺の裁判になる。

すべての知恵を絞って探せ！

何がいい。

何がこの場を抜けられる答えだ？

それは、俺にとって長い時間だった。

どれ程たったのか、俺の異常に察したのか、傍聴席から俺の方へと足音が聞こえた。

「裁判長……」

そして、俺の前に立って裁判長と対峙していたのは……。

「あ、あなた様は！」

紋章のはいつたペンダントを前に綺麗な金髪がなびく。

「私は、ベルゼルグ・スタイリッシュ・ソード・アイリスです。この者は王国が預かりま

す」

そこに立っていたのはイリスだった。

となりに座っていたダクネスの親父さんや周りの貴族も驚いて立っている。

「イリス……」

「すいません。今まで黙っていて。ですが安心してください。ユウマさんは私が助けますから」

第33話 別れ

ベルセルク王国、その中心と言われる王都の王城に俺たちはいた。

その雰囲気はいつものものとは全く違い、誰もが口を閉ざしてただ待っている。

しかし、例外としてカズマとダクネスだけは違っていた。

王城に入る前、俺は裁判であったことをみんなに話した。

その結果、エリスやゆんゆん、めぐみんは状況を理解し下をうつむき、カズマに関してはずっとイライラしており、ダクネスはその顔を真っ青にしていた。

ちなみにアクアだが、状況を理解しているのかはわからないが珍しく黙っている。

やがて、前の扉が開かれ騎士を連れた、いかにも側近という感じの女性が部屋に入ってくる。

そして最後にいかにも王女様という感じの清楚なドレスを見にまとったイリス改めアイリスが入ってきた。

「ダクティネス卿、この度は王女アイリス様を保護してくださり、誠にありがとうございます」

アイリスのとなりから白いスーツを着た人が前に出て礼を言う。

それに対し、ダクネスは慌ててかえす。

「感謝の言葉。ありがたく頂戴いたしますクレア殿。しかし、今回の件、私よりこの後ろの者を褒めてください。この者たちの力があつてこそ、この件が無事にすみましたので」

ダクネスの言葉にクレアさんは俺たちを一通り見回すと口を開く。

「ええ、皆様のことはお伺いさせていただきます。アクセルの街に滞在し数多の魔王軍幹部と渡り合い、あのデストロイヤーまでも討伐した英雄の方々。議会でも度々話がかかります。これまでの戦果も重ねましてお礼申し上げます」

クレアさんの俺たちに対しての目には確かに尊敬の気持ちが込められていた。

しかし、そんなことは関係ないと口を閉じていた者がその口を開く。

「そんな礼はいい。なあアイリス……、いやアイリス。この状況はなんなんだ？」

今までは考えられない、怒りを込めた言葉を言うカズマ。

その言葉にうつむいていたアイリスが顔をあげる。

「おい！アイリス様に向かって呼び捨てとは！」

「いいのですよ、クレアはさがって」

クレアさんを下げ、前に出るアイリス。

その姿にいつもの無邪気な面影はなく、王女としての風格を出し、冷静な瞳でカズマを見る。

「お兄……。カズマ様。皆様、今まで黙っていて申し訳ございませんでした。改めて紹介させていただきます。私はベルゼルク王国、第一王女ベルゼルグ・スタイリツシュ・ソード・アイリスです。私のわがままから何まで聞いていただき、また短い間でしたが、皆様と冒険できたことを心から……」

「そんなことどうでもいい！なあ、アイリス。お前、俺たちと一緒にいたいんだろ？ほら、ユウマも言えよ」

なあ、とカズマにふられるが俺は何も言えない。

けてこの状況に混乱しているわけではない。

ただ、あのとき。

あのときのアイリスとの会話が頭によぎって何もいえないのだ。

「私は一国の王女です。父やお兄様、国の者たちが最前線で戦っているのに、私だけがつまでも楽しんでる訳にはいかないのです」

その声を震わして立っているアイリス。

今までのアイリスの姿から、こんな苦しそうな姿は考えられないかった。今すぐ助けたい。

そばによつて慰めてあげたい。

しかし、あの時の言葉が俺の足を止める。

『やつぱり、ユウマさんは優しい人です』

あのとき、寂しそうそう言ったアイリスに俺は何をしてされるのか。

『そうだな。俺が仲間だったら、お姫様の手助けをするよ。しっかりと、問題に向き合えるように。自分の気持ちを伝えられるように、全力で手助けをするよ』

……。

「じゃあ、なんでそんな顔してるんだよ」

カズマの言葉にアイリスは自分がどんな表情をしていたのか気づく。

「そつちの都合なんてわからない。でもな、苦しい思いをしている奴がいて、それが妹ならなおさら見捨ててられねえ。いいか、貴族ども！お前らにアイリスを幸せにできないなら、この俺がかわりにしてやるよ！」

短剣を取り出したカズマに戦闘態勢に入る騎士たち。

「く、さつきから黙って聞いていれば勝手なことを。おい、その野蛮な冒険者を捕らえろ！」

「おい、カズマ！その剣を仕舞うんだ！このまんまじゃ、今度は本当に国家転覆罪になる！」

向こうではクレアさんが、こつちではダクネスが叫んでいる。

カズマに襲いかかる騎士たちを見て、俺が今すべきことは。

「悪い」

カズマのうなじに一撃。

そして、カズマを捕らえようとしていた騎士たちを結界で捕らえる。

「なに!？」

動揺の声を漏らすクレアさん。

「自分の連れが大変失礼なことをしました。悪気があつてしたことじゃないんです。どうか、慈悲深き目で見逃してもらつてはもらえないでしょうか、アイリス様」

さつきまでの冷静さはどこへ消えたのか動揺を隠せない顔で俺を見る。

これ以上俺たちがここにいてはアイリスの覚悟を鈍らせてしまう。

気絶したカズマを肩で支え背中を向ける。

「お待ちください……いえ、ごめんなさい……」

今にも消えそうなのその声は王女アイリスではなく、一人の少女の声だった。

「大丈夫。約束は守るから」

それだけ残して王城をでる。

カズマはアイリスの本心とは裏腹の言葉に苛立ち、連れ戻そうとした。だが、それはアイリスにとって何にもならない。

彼女は一定の期間だが国を捨て、自分の好きなように生きた。

だが、彼女の立場からすれば、自由に憧れるのは仕方のないことだ。

しかし、民をまとめる立場に立つものとして、それは愚行だ。

彼女はその事に対しての落とし前をつけないといけない。

だから、だから、俺は……。

彼女を見守ろう。

彼女が助けを求めるなら助け、求めないなら見守る。

それが、仲間として友達として俺のしないといけないことだから。

こうして一人でここに来るのもいつぶりか。

ここ最近是谁かというのが当たり前だったため、一人で来ることに懐かしさを感じた。

木製の大きな扉を開けると、鼻については酔いそうになるほど強烈なアルコール臭。このおおいにしみじみしながら、酒場の席につく。

あのあとレポートサービスでアクセルに戻った俺たちは、そのまんまカズマの屋敷に行こうと思ったのだが、目を覚ましたカズマに殴られ、別行動になった。

カズマにはカズマの考えがあるのだろう。

どうしてもアイリスを取り戻そうと、屋敷にこもって何かを作っているとめぐみんから教えてもらった。

しかし、それがアイリスに強制をするものなら、今度こそ、決裂することになるかもしれない。

出された水を飲みながらそんなことを考えていると、吐き気が強くなってきた。

王城で魔法を使ってから、頭がギンギンする。

アクアの話しによれば普通の魔法の使用には問題はないとのことだが、正直問題があまりすぎる。

たった一回の使用でこんなじめじめとした陰湿な痛みを長時間受けるとか拷問レベルだ。

やっぱり、今日は家に帰って寝るか。

「おっと、珍しい人がいるね」

ふと、帰ろうと席を立とうとした瞬間、後ろから声をかけられた。

「え、クリス？」

「うん、久しぶりだねユウマ君」

目の前に立っていたのは小柄でシヨートヘヤーの盗賊職の格好をした女性。

そのつやのある銀の髪と特徴的な紫の瞳にエリスの面影を感じる事ができる。

そう、何を隠そうと彼女はエリスが下界に来てからその意思を持った分霊。

エリスの姉妹のようなものだ。

「ちようどよかった、君に用事があったんだ。時間も時間だし、私のおごりていいから食事しない？」

頭が痛いのが別に断るほどのものでもないので、一緒に飯を食うことにした。

それからしばらくして、出された料理の食べながら、ここ最近の話をした。

どうやら、俺たちの成果は結構広まっているようで話すことは部分部分のものを多くすると、苦笑、驚き、笑いと多種多様な表情を見せてくれた。

逆にクリスの話を聞くと、それは苦労の連続だった。

「まあ、君たちがあの領主と戦う前に襲撃したんだけど、まさかの悪魔がいてねー。下界

にいる私やサツキさんは使える能力が限られちゃうから、対策なしで戦うことになったんだけど、情けないことに大敗。なんとか命からがら戻ってきたけど、襲撃に用意した物は壊されたり奪われたりで、結局一文無しになっちゃってね」

そのあとは天界で溜まった仕事をこなしているサツキさんの代わりに資金を集めながら、今日までやって来たらしい。

「結構苦労したんですね。そういえば今サツキさんは？」

「今も天界で仕事だよ。本来のエリスの仕事は、その天界に残した権能を受け継いだ私がするべきなんだけど、サツキさんはサツキさんで他にもやりたいことがあるらしいから、変わりにやってもらってるんだ」

そんなことをのほほんと言っているクリス。

あれ？それじゃあクリスは天界だとニートってことじゃ。

「それはまた、なんとも言えないのですが。まあ、それは言いとして俺への用事って？」
「ああ、忘れてた。大事な話だから、この事は他言無用でお願いしたいんだけどいいかな？」

「ええ、まあ、いいですけど」

「ありがと。まず、私たちが神器を集めてるのはしってるよね？」

「ええ、使い手のいなくなった神器を悪用されないようにって」

「そう、そのことで活動してるんだけど、最近、新しい神器の情報を得てね。その神器は王都の王城にあつて王女が身に付けるネックレスみたいな物なんだけど実はとてつもなく危険な物で、人と人の魂を入れ換える効果を持つてるんだ」

え!?

「ここんところ少しの間はサツキさんも忙しいから、落ち着いてから取りに行こうと思っただけけど、行方不明の王女が帰ってきたらしく、いつその神器が害を及ぼすかわからなくなつたんだ」

王都、行方不明の王女。

そんなのこの国の王女のアイリスに決まってる。

ネックレス、ネックレス……。

もしかして、今日首につけていたあれか!?

「それで、すぐに取りに行きたいんだけど、私が一人じゃ流石にきついから」

「俺の力を貸して欲しいと」

「ピンゴー!」

……。

正直言って、ここは話に乗ってその神器を取りに行くのが正しいのだろう。

しかし……。

「ごめん、その話はのれない」

「え!？」

予想外の返答に言葉を失うクリス。

確かにアイリスが心配じゃない訳ではない。

だが、今の俺は王族の権限でバニルの契約の事実は書き消してもらっている。

それなのに王城に忍びこんで、もし見つかったとなれば、俺が逆賊かなんかなどと勘違いが強くなり、最悪の場合国家転覆罪。

アイリスへ迷惑がかかってしまう。

「今の俺には変な疑いがかかっているから、怪しいことができないんだ。それに盗賊職じゃないし、冒険者みたいにスキルで代用もできない。アークウイザードではあるけど、もう戦闘系のスキルしか持ってない俺じゃ足を引っ張るだけになる」

「でも君、時間停止スキルとか、拘束スキル持つてるでしょ？それなら大丈夫だよ」
……。

言葉に詰まる。

確か俺のスキルをクリスに話したことはないはず。

それに時止めはつい最近手に入れたばかりで、知ってる人も少ないはず……。

なんで知ってるの？

「なんで知ってるのって顔してるね。悪いけど、実はさつき権能で君のスキルを把握させてもらったんだ」

「だから、俺にこの話を持ち込んだと？」

「そういうこと。でもそつちにも事情があるみたいだし。……そうだ！じゃんけんしよ！私が勝ったら手伝って！」

じゃんけんかー。

こんな肝心なことをじゃんけん決めてるのはちよつとやだけど。

まあ、むこうにも譲れないものがあるらしいし、やるだけやってみるか。

「わかった。じゃあ、いくぞ」

「じゃんけん、しよい！」

「……」

……。

「じゃあ、俺の勝ちと言うことでお引き取りください」

「なんでさー！私、これでも幸運の女神の権能をもってるんだよ！エリスとやらない限り負けないはずは」

おっと、それってチートやん。

俺じゃなきや、危ないところだった。

「ねえ、どうして！どうして！そうか、まさかエリスの力じゃ」

「いや、多分関係ないかな。一応これでも、ここぞっていう勝負では誰にも負けない運はもってるつもりだよ俺。ここに来る前とかは俺の試合の時は絶対空が晴れたり、雨が降ってても俺がスタートにつくと雨が晴れるっていうことが日常茶飯事だったし、ゲームも例えばガチャが糞確率でも、大好きな推しキャラは無課金で引いてきたからね。そのおかげで、現実のチート持ちとか、キャラ愛（運）なつてよく言われた」

「後半の方はよくわからないけど、それって無意識で天候操作のスキルを使ってたんじゃない」

「確かにアクアいわく、無意識で魔法を使えるやつはいるみたいだけど、それなら、ここに来たときにスキル欄にそのスキルがあるはずだよ」

ポケットから取り出した冒険者カードを見るがそんなスキルは見当たらない。

「ちよつと見せて。て、なにこれ!? 運の表記がハテナじゃん。規格外だなんて私見たことないんだけど」

声をあげるクリスに少し、首をかしげる。

まあ、規格外っていうわりには先言ったことより運のいいことは起きてないんだけどなー。

それから、しばらくしてカードを返してもらい。

帰ろうと席を立つ。

「それじゃあ、手伝えない変わりに飯代は変わりに払うから」

「もう、私が払うって言ったのに」

じと目で頬を膨らませるクリスの姿は、それはもう完全にエリスでちよつと笑ってしまふ。

「なに、笑ってるのさ」

「いや、別に。やっぱりクリスはエリスなんだなーって」

その言葉に照れて頬をかく仕草なんかもそっくりだ。

すると、恥ずかしそうにクリスが手を差し出してくる。

「?」

「ほら、いいから握ってー!」

言われた通りに出させた手を握る。

するとさつきまでじわじわときていた頭痛がすつとなくなっていく。

「これって?」

「簡単なことだよ。使わない私の権能を上げてこつちがわに寄せただけ、これでもう頭痛の心配はないから」

ギルドの外に出て俺の方を向く。

「それじゃあ、エリスのことは頼んだよ」

それはまるで、大切な妹を見る目だった。

そうか、クリスはエリスと誰よりもずっと一緒にいたんだ。

「ああ、任された」

分かれ道に消えていくクリスの背中を見送り、家に帰る。

星の綺麗な春の夜。

その景色は王城でも同じように見えたのだろうか。

第34話 欠けた日常

異世界に来ててもこうしていつもの朝いちに走っている。

別に何か目標があつてやっている訳ではない。

ただ、何年も続けてきたことだからそれが日常の一つとなつてやっているだけだ。

走る場所はと言うと川辺の道とついこの前、アルダープを捕らえたさい、ダクネスの親父さんに頼んで、屋敷跡地に作つてもらつた運動公園だ。

ただ長く走ることもあれば、スピードを取り入れたり変化的な走りもする。

まれに、来るダクネスとタイムトライアル的なことをすることもある。

ふざけ半分で5kmほど勝負したことがあつたが、3kmくらいまでついてこられて焦つて本気で走つたのは記憶に新しい。

まあ、それはいいとして、時に自分は何故こんなにも未練たらしく走っているのか謎に思えてくるのがあつた。

きつと、心のどこかであつちに戻つたあと約束を果たせるようにとしているのかもし

れない。

この世界の空もあつちの空もさほど変わったものではない。

文明は違えど人の営みだつてほとんど同じ、寝て起きて働いて、学んで遊んで食べる。人間、エルフみたいな種族の関係も日本人と外国人みたいなものだ。

特に普通に共存して生活している。

ただ、違ふとすれば、圧倒的な権力の差というものだ。

向こうにいたときには特に感じなかった権力の差。

同じ人間でも、立場が違えばその差が天と地ほど離れてしまう。

ついこの間までとなりについて笑いたつていた人でさえ、今じゃ遠いお空の向こう。

最後に見たアイリスの表情はとても印象的なものだった。

まだ、半端な覚悟の中に隠れた悲しい思い。

無理をしているのがバレバレだ。

あのとき、一言、せめて一言でも助けを求めてくれたら。

そんなことを今でも考える。

ああ、駄目だな。

いつも俺は後悔ばかりじゃないか。

朝風呂を終えてリビングに行く、もうすでに準備を終えてみんな席に座っていた。

「ユウマお疲れ様です。どうぞ座ってください」

「あーユウマさんおはようございます」

みんな笑顔で言ってくるが、無理をしているのがバレバレだ。

せめてもの気遣いでお互い笑いあっているが、やっぱり居心地が悪い。

挨拶を返してそのまま座る。

本当、今までいた人がかけるとこんなにも変わってしまったものか。

「なーにを湿気た顔してるんです。せつかくのご飯がダメになりますよ」

ふと、空いているはずの自分の横からする声に心臓がはねあがる。

「な、なんでお前がいるんだよー」

そこに座っていたのは金髪ではなく、黒髪で身長は同じくらいだが、目の色が紅い、口リツ子だった。

「言いたいことがあるのなら、はっきり言えばいいじゃないか。せつかくなら、今ここで長年の戦いを終わらせてもいいのだぞ」

「や、やめなさいめぐみん！お食事中に行儀が悪いわよ！」

「私は今積年のライバルと話しているのです。拗らせハレンチは黙っててください」
めぐみんの言葉に、ゆんゆんのメンタルはぼろぼろ。

止めてくれ。ゆんゆんのライフはもうゼロだ。

「せっかくの友達にそれはないだろ。そんなこといつてるとお前がボッチになるぞ。悪いけど俺はそういうやつをたくさん見てきたから、この忠告はしっかり心に残しとけ。それとお前と会って一年もまだたつてないし、俺は爆裂魔法はここぞつてときにしか使わないっていつてるだろ」

「でしたら、あのカッコいい剣と破壊力を競いましょう」

「あれは、魔王軍みたいなのと戦わないと召喚できないから。てか、なんでお前がここに
いるんだよ」

思ってみれば、こいつ今回だけじゃなく、今みでもひよっこり現れて飯だけ食って帰っていくんだが、いったいなんなんだろうか。

「昨日、ゆんゆんに誘われたんですよ。今屋敷の中はカズマとダクネスのピリピリとした雰囲気で居心地が悪いです。アクアは教会で遊んでくるといつても帰ってきませんし。それに、エリスのご飯を夜と朝の二食も味わえるなんてうまい話乗るしかないですしね」

「もう、やめてくださいよめぐみんさん。そうだ、昨日の夜に作っておいたゼリー食後に

「どうですか？」

なるほど、昨日隣の部屋がうるさかったのはそれか、疲れてて早めに寝たから誰とまではつきり分からなかったが。

「ここ最近、お前がよく飯を食いに来る理由が分かった。でも、誘ってくれた友達を粗末にするのは許せないな。ゆんゆんに謝るまでデザートは無しだ。もし、意地でも謝らないなら今までの食事を払うか、払えないなら体で払ってもらう」

「な！聞きましたか、今の！横暴だと思っただけのセクハラですよ！」

「ユウマさん？」

「おっと、体で払ってもらうってそういうことじゃない。クエストで戦ってもらうとか、家の掃除をしてもらうとかかってこと。それに、俺がこんな貧相な体に興味あるわけないだろ？せめてゆんゆんくらいになつてから、そういう口を聞け！だから、許してエリス！なんでそんな顔するの!!」

おっと墓穴を掘ったようです。

エリスの前でこんな話をするのはNGだったの忘れてたー。

「いえ、別に怒ってませんよ。どうして、そんなに怯えてるんですか？だって、ユウマさん怒こられるようなこと言っていないじゃないですか」

「えっと、はい。ごめんなさい」

「あとで、別室で」

「……はい」

「まったく、デリカシーがないからそうなるんですよ。ほら、ゆんゆんもいつまでひねくれているんですか。エビフライ食べちゃいますよ」

ちくしょう！ 覚えてろよクソガキ！

「ひねくれてなんかないわよ！ ちよつと！ 私のエビフライかえして！」

珍しく洗い物に名乗りをあげためぐみんと手伝うゆんゆんを一階に残しエリスの部屋に連れていかれる。

しかし、エリスは怒ってる様には見えない。

いったいどうしたのだろうか？

「ユウマさん……」

いきなりの声かけに一瞬びくんと体が震えた。

別に怯えていた訳ではない。

女性の部屋で二人っきりのこの状況に少し緊張してしまったのだ。

「な、なに？」

うつむいた顔を上げ、目に写ったのエリスの表情は不安そうなものだった。

「どうしたんだよ、そんなに不安な顔をして。ほら、別に俺は……!？」

突然の出来事に思考が制止する。

それは一瞬だったのかそれともそれなりに時間が経っているのか。

ぼーとしているうちにエリスは顔を赤らめながら少し下を向いたあと顔をあげる。

「え、えっと」

「……ユウマさん我慢していたり、悩んだりすると唇の端を噛んでいるので」

その言葉でふと、唇に手をやる。

そこには確かに切れた後があった。

「私は先輩みたいに治癒力に長けてませんから、完全には治せんませんが……。ユウマさん、アイリスちゃんのことですつと悩んでいたんですね。自分を追い込まないでください。私でよければ相談にのります！だから、これ以上一人で後悔ばかり背負わないでください」

今にも消えそうな声に、さっと目が覚めた。

ああ、あれだけ守るって言ってたのに、エリスを不安にさせた挙げ句泣かせちゃうなんて。

本当不甲斐ないな。

「ごめん。いつも心配させちゃって。……おかげでやっと吹っ切れたよ。自分がしなきゃいけないことがわかった」

できなかったことをいつまでも後悔してる暇はない。

見守るって決めたんだ。

なら、どんな答えが出ようと見守り続けるのが俺のすることだ。

抱きしめたエリスの体から震えがなくなる。

こうして、慰めあっていることに居心地を感じてしまう。

口では表すことのできない、心地よさ。

もう少しこのまんまでも……。

「なーに、二人で抱き合ってるんです」

突然のめぐみんの出現にぎよっと心臓がはねあがる。

「ちよ、おま、何かってに入って来てるんだよ！てか、驚かせないでくれ！」

「いえ、めぐみんさん、別に私たちはいかがわしいこととかは特になくて！」

「なら、いつまでも抱き合ってるんで、離れればいいじゃないですか」

「ッー！」

エリスの今にも沸騰しそうな顔を見て、少しにやけてしまう。

「本当、ここには頭がお花畑な人しかいないのですか。まあ、辛気くさいのよりはましで

「すけど。はい、手紙です」

渡された手紙の宛先は……。

「アイリスからですよ。なにやら、先日はまともに話せなかったとかで、後日王都で活躍する冒険者たち集める食事会でしっかり話したいとかなんとか」

確かに、この前はいきなり城から飛び出したし、もう一度、整理した上で冷静に会話できるのならそれにこしたことはない。

「それでは、私は下でポッチの相手でもしてますので、二人で楽しんでください」

「お前は一言多い！」

「デリカシーがないのはお前だと言いたいのを抑え、招待状を結界にしまおう。」

「ユウマさん」

「ああ、行こう。アイリスの覚悟を、答えをしっかりと聞いてやるのが、仲間として友として役目だからな」

第35話 結界魔術

王城の食事会当日。

エリスたちのドレス代に手持ちを溶かし、もつたない症候群に発症した俺は、師匠に王都までレポートしてもらったことにした。

「私たちがばかり、こんなに手間かけてもらっちゃって、ユウマさんこそしつかりとしたもの用意しないと」

「そうです。なにも、悪魔と同じ衣装を選ぶなんて」

魔道具店に行く途中、何度も女性陣にはこう言われたが俺自身そんなに気にしてはいない。

そもそも、俺はオシヤレに興味がない。

服に金を使うなら、その分趣味に金を使いたいと思っていた。

そのため、あっちでは夏はポロシャツ、春秋はジャージ、が冬はウインドブレーカーとプライベートまで部活の格好でいた。

ただ、ウインドブレーカーは陸上あるあるの学校名が後ろに入っていたので自習練習で歩いていたが。

まあ、そんなことはどうでもよくて、どうしてドレス代で手持ちを溶かしたかという、最初二人ともは安いドレスを選んできたのだ。

ただ、いつも家事とかいろんなことをしてもらっているため、少しでも良いものを着てもらおうと、上限を上げていったのだが……。

問題があつた。

良くも悪くも、どことは言わないがサイズが合わなくて、パツツンパツツンだったり、ブカブカだったりしたのだ。

そのため、特注で作ろうしたんだが、調子に乗って値段も見ずに生地から選んだら、気づいたら財布の中はすっからかん。

どうしようか悩んだすえ、ふと、バニルがなりきりセットなるものを売っていたことを思い出し、テレポトついでに、タキシードだけ売ってもらおうことにしたのだ。

「別に、人生でそんなに着るもんじゃやないから、適当でいいよ。それに、エリス。バニルは近所だと結構評判いいんだぞ。カラススレイヤーだとか、子供たちの見回りとか、最近は人生相談を始めたとか」

まあ、後半に限っては金銭的な問題解決のためにやってはとかなんとか。

まあ、バニル自体は人がいいし、人気なのは分かるが……。

「らっしやい!! 人生ここ一番の選択で一番過酷なものを選んだ青年について自分のポリシーを捨て残念ボツチになった少女と発光ゴリラよ。なに、皆まで言わんでいい。店主を呼んでくるので、お会計の準備をしながら、店を回つてるといい」

こういうところだ。

変に人を煽るのさえしなければ、面倒なことを起こさずにすむのに。

神槍を取りだそうとするエリスを抑え、片手に持ったタキシードと金をレジに置く。

「へい、毎度あり。店主に関してだが、少し待つておれ。あれはまだ、手が放せなくてな。一歩間違えれば消える作業をしている。焦らせないでやつてくれ」

一歩間違えれば消える？

……。

「まさかおまー!」

「まあ、察しの通りだ。最近、ポンコツ店主のおかげで、我輩の蓄えをパーにされてな。その腹いせに、聖水を小型の容器に入れさせ、幅広い容量で売らせている」

なるほど、容量を変えてさらにお手軽にできやがったか。

しかし、どうやって移し変えているのだろうか？

「ふむ、それに関してはまだ今度だ坊主よ。そんなことより、お主。我輩に聞かなければ

いけないことがあるだろう?」

聞かなければならないこと。

そうだ、結界魔術だ。

シルビア戦の時は、頭に流れる情報でやっていたから、詳しい原理まではわかってない。

そのため、結界魔術の使い手のバニルから直接聞きたかったんだ。

「そうだ、結界魔術!」

「ああ、我輩も実際に使ってるものだから、表面くらいなら説明はできる」

「表面だけ?」

「ああ、表面だけだ。我輩はお主みたいに特化してないからな」

それからして、エリスとゆんゆんを師匠の手伝いに向かわせて、俺は出された椅子に腰を休める。

「結界魔術は基本的に2つ、結界特化と時間特化に分かれている。ちなみに、お主は時間特化、我輩はどっちもそれなりにこなせてはいる」

「それなりにということは、特化した魔法使いとくらべると、劣るってことか」

「その通りだ。しかも、使える魔法も表向きなものだけであって、深いものは使えない」
深いものは使えないってことは時間止めはそこまで深いものじゃないのか。

「そうだな。時間止めは結界魔術の中では基本の方だ。まあ、原理も結界の応用。広げた結界中の時間を止めるだけであって、結界外からの攻撃は受けるわ、結界内で相手に干渉することができない。使い道があるとすれば、回避くらいだな」

「ちよつと待つてくれ、相手に干渉できないってことは、相手の目の前にナイフを大量に仕掛けたり、時間止め中に相手を殴つたりもできないってことか」

「そうだ」

マジカ。

これじゃあ、本当に回避スキルじゃん。

「そう落ち込むでない。止まっている時間の中でやろうと思えばいくらでも、やれることはあるだろう。それを考え、使うのが使用者やれることだ」

「なるほどな。そうだ、俺の武器召喚。あれは？」

「悪いが、そこから先は我輩でも未知だ。武器召喚、見たところ時間操作の延長のようなものだろう。まあ、なんであれ回数が決まっている以上、そんなに考える必要はない」

「そう、新たな武器の召喚、爆裂魔法の使用は多くて3回が限度。」

「そこまで深く考えるものでもないだろう。」

「お待たせいたしました……。皆さんまとまってくださいね……」

ふと、気づけば痩せ細り、今にも干からびて倒れてしまいそうな師匠が扉の向こうか

らやってくる。

「さすが悪魔。ゲスい」

「ふん、なんとも言うといい。しかし、もとはと言えば、このポンコツ店主が店の貯金をガラクタにしたのが原因だ自業自得とやつであるう」

そんなことを言っていると、詠唱が読み上げられ、俺たちの下に魔方陣が浮き上がる。

「お主は魔法の原理など考えなくてもよい。ただ、思うように使っていればいいのだ」
悪魔の言葉とともに体を青い光が包み視界が白くなる。

思ったように使う。

そう、俺自身は知っていないなくても、俺の体はその使い方を原理を知っている。

俺はただ、その通りに動かせばいいだけだ。

とたんに人々の賑やかな声が耳に入ってくる。

すつと目を開けると、目の前には大きな城がそびえていた。

第36話 王城の決戦 正義の義賊対正義のヒーロー

「え、カズマは来ない!？」

予想外の状況に声を荒げてしまう。

「ええ、何やらやることがあるとかで発明品をいじってましたよ。多分、バニルとの交渉か何かでしょう」

「本人が行かないと言うのだ別にいいではないか、これで私の悩みも一つは……」

「だから、私たちがカズマの変わりに楽しましょ。そうね、まずは試しに高級しゅわしゅわの飲み比べから始めようかしら」

「やめてくれ!あとで、好きなかだけ飲ませてやるから、ここで酔って吐かなくてくれ!!」
グラスに注ぐこともせず、直接口につけ次々に飲み始めるアクアを止めに奔走するダクネス。

本当、政治の世界に入ると真面目じゃないといけないのは辛いよな。

それにしても……。

「あの……。どうですか？」

つやつやとした絹糸のような銀髪。

くいつと絞まった腰回りに控えめな胸を包む白のドレス。

あまりの神々しさに直視することすら拒みたくなるのに、当の本人の表情ときたら赤面。

尊い。

「あー!!ユウマさんが!ユウマさんが薄くなってます!」

赤い布に黒い髪。

この柔らかさはゆんゆんか。

「いや、大丈夫。大丈夫だ。ちよつと尊すぎて肉体が蒸発しそうになっただけだから」

自分でも何を言っているのか理解できないが、この感情。

そう、この感情は走りに疲れた俺の心を癒してくれる、押しキャラの絵を見たときと同じ感情だ。

「おい、見ろよあそこの二人」

「ん?お、レベル高すぎだろ。俺、ここ何年も王都で冒険者やってるけど、あんな美少女たち見たことねえーよ」

「黒の子と白の子。……なんとバランスのいいパーティーでござるか!」

おつと皆様、心の声駄々もれですよ。全く、どいつもこいつも目が汚い。

それじゃあただの視姦だ。

観賞ではない。

観賞とはがつついて見ちゃいけない。

その一つ一つを謙虚な心で、決して汚らわしいことは考えずかつ丁寧に味わわなければならぬ。

そう、三ツ星のショートケーキのようにだ。

巧みに引かれたホイップクリームを乱すような食べ方はしないでらう。

一つ一つ丁寧に、端から味わっていく。

それが、芸術に対する礼儀だ。

もし、これを理解できないケダモノ冒険者がいるのなら、雑草をむしりながら溺死しろ。

「どうかしましたか?」

「いや、大丈夫だ。問題ない。それより、ここは離れよう、飢えた野獣の眼光に気が立って仕方がない」

「は、はあ」

辺りを見回せば冒険者だらけの王城。

それも、見れば一発で凄腕だとわかるくらいのオーラを放ってるものばかりだ。ちなみにマツラギ？ミツマリ？いや、ミツ何とかさんの姿もあった。

ただ一つ疑問点があるとすれば、正装になぜ武器を持っているのかということ。まるで、今日ここが何者かに襲われるかのように。

「ユウマさん」

ふいに後ろの振り向く。

そこに立っていたのは

「アイリス……」

「お久しぶりですユウマさん」

どこか疲れた様子を隠すように笑うその少女は、少し痛々しく、切ない。

この一週間で彼女をここまで変えてしまおう、王城に怒りを覚える。

「アイリス、俺は……」

「駄目です。だってユウマさんはエリスさんのヒーローですから」

その先に言葉はない。

もし、彼女が求めるのならこの場から連れられて……。

でも、それはできない。

俺はもう自分を捨てることはできないし、そんなことはアイリス自身が許さないだろう。

バルコニーから感じる春の風が今は妙に肌に刺さる。

「そうだよな。そうだ、俺はそう決めたんだ。だけど……。アイリス。答えは決まったか？」

言いたい言葉を押し止め、ずっと聞きたかった答えを訪ねる。

「……」

それからしばらく、風に当てられながらその時を待つ。

城の中の賑やかさも感じない、止まった時間。

長く、長く、もろく短いその時間は少女の言葉で動き出す。

「少し。あと少し待ってもらえますか」

全身から力が抜ける。

ふと、安堵の息をもらっていた。

「そうか」

いつのまにかお互い笑いだしていた。

何がおかしくて笑ったのかわからない。

ただ、そう、ただ笑っていた。

その空間を切り裂くように、下から響く人々の声。

「侵入者——!!」

気づけば辺りの光は消え、人々のざわめきがいりまじわるカオスな状況になっていた。

—————

「ユウマさん——こっちに」

アイリスに手を引かれながら人波を割って進んでいく。

「どうしたんだ、いきなり!」

返事はない。

ただ、導かれるがままに階段を登っていく。

高さとしてはマーシヨンの10階くらいだろうか。

目の回るような螺旋階段を登り一つの部屋に着く。

「はいはっ。」

月明かりの照らす神秘的な部屋。

それがパツと見の感想だ。

「ここは、王家に伝わる伝説の武具たちの置かれた部屋。宝部屋みたいなところですよ」

辺りを見回せば鎧や剣。

はてには魔道書から小物の装備品が置かれていた。

「けど、どうしてここに？」

「それは、私が説明するよ」

月明かりに照らされた本棚の後ろから現れた一つの影。

いや、もう一つその後ろにある。

「目論み通りこの部屋に来てくれるとは、やっぱり賢いお姫様だね。助手君、気づかれて

るから出てきていいよ」

マスクで顔の下を隠した銀髪の少女？に言われ姿を現す仮面の男。

その男からは並みならぬ魔力を感じる。

「あなたたちが、巷で噂の義賊ですね」

「うん、その通り。まあ、義賊つてのは少し照れるけど。そんな義賊からのお願ひ、その

ネットワークスを渡してくれるかな？」

アイリスのネックレス。

銀髪ショートトの少女。

まさか。

「もしかして……」

「そこまでよー」

突然開かれた扉に視線が集まる。

豪快に扉を開けた主、そこにいたのは、何故か乗り気なアクアとめぐみん、焦った表情のエリスにゆんゆん、胃に今にも穴が空きそうなダクネスだった。

「なんでここに!?!」

「それはこっちのセリフよ! もうユウマったら、こんなに楽しいことがあるなら呼びなさいよ」

「いえ、アクア流石にそれは空気というものが。ん!? あの仮面! 私のシンパシーに触れるものが!」

相変わらず、賑やかなアクア達を置いて、駆け寄ってくるエリス達。

「心配しましたよ! どこかいなくなってしまうと、アイリスちゃんも無事でなによりです」

エリスもゆんゆんも心配で仕方なかった様子。

二人の顔見て今にも泣きそうなアイリスは再会に寂しさを感じたのだろう。

「まさか、こんなにはやく来るなんて。それに……。って！助手君!?」

それは、まさに光の速さ。

安堵した瞬間をつかれ、まったく反応できなかった。

気づけば仮面の男は片腕にアイリスを抱え窓に足をかけていた。

「なっ！アイリス！」

「アイリスちゃん！」

駆け寄る俺は無視し銀髪の盗賊はエリスの前に立ちほだかる。

「助手君たら勝手に暴走して。まあ、でも、あっちはどうにかなるかな。悪いけど、君の

相手は私だよ、エリス」

「!?」

仮面の男を追って城の屋根に着く。

文字通り天辺。

落ちたら間違えなくあの世だ。

「カズマ!!」

予想外の呼び止めに足を止める仮面の男。

「え、お兄様……?」

ふっと笑い、アイリスにバインドをかけ屋根の壁に下ろす。

「まさか、バレるなんてな。やっぱユウマは侮れないな」

「いや、侮れないのはカズマのほうだ。こんなに器用に罠を仕掛けて置くんて下を見れば数々の仕掛けが足場を埋めている。

片手にアイリスを抱えながら仕掛けたのか、あらかじめここに仕掛けたのか。どちらにしろ恐ろしい。

カズマとの差は20m。

だが、コンマ何歩かでその差はすぐに埋まる。

考えている時間はない。

見たところ今のカズマは普段より数段階ステータスが上がっている。

それは、アクアやエリスの強化スキルではなく、あの仮面が関わっているのだろう。力の差は指して変わらない上に、戦術の発想はあちらの方が上。

もし、仮に殺す気で戦うことになったとしても勝てる確率はこちらの方が少ない。どうするか。

「どうしてアイリスを連れ出したんだ?」

作戦を立てる時間を一秒でも増やすため、ふいに頭に浮かんだ疑問を言う。

「そんなのアイリスを救うためだからだろ！」

20mあった間合いは一瞬で詰められる。

カズマの手にはダガー。

チツ、バレていたか。

「遅い！ 《クリエイト・アース》！ 《ウインドブレス》！」

「クツ！ 《時止め》！」

結界が辺りを包み時間が静止する。

時を止めている中、攻撃はおろか、物の設置もできない。

だが、先回りして攻撃体制になることはできる。

「解除！」

解除と同時にカズマの後方から結界魔術を仕掛ける。

まさにベストタイミング。

回避はおろか解除もできない。

硝子の割れる音がする。

その音とともに仕掛けた右手が軽くなる。

研ぎ澄まされた集中の中。

その音が硝子の音では無いことに気づく。

「なっ！結界が……!!」

カズマは今だに前を向いている。

結界解除するにも、時止めで視界から消えた俺をに気づく暇などなかったはずだ。

なぜ!?

「スクロール。《マジックキャンセラー》」

カズマの左手にある巻物。

スクロール、確か記載されたスキルを唱えるだけで発動させる道具。

なるほど、俺が何かしらで避けることをわかった上で、準備していたのか。

「どうやらスクロールじゃ、時止めは止められないみたいだな。まあ、そっちが、時止め

中に仕掛けられないのも分かっているんだけどな」

もう、時止めからの奇襲は使えない。

この状況で勝機があるとすれば一つ。

それ以外は通じないだろう。

「なあ、カズマ。アイリスを救うにしてもアイリスは国の姫様だ。勝手にすることはできないし、無理に連れ出そうとすれば、極刑だってありえる」

「そんなの知るか！少女を祭り上げるだけ、祭り上げて苦しめている国なんかどうでもいい。俺はアイリスを連れ出す。例えば今を捨ててもだ！」

右手のダガーを振り上げ何かを口ずさむ。

左から流れる魔力。

魔力とは生き物だと、師匠の言葉が浮かぶ。

「《ライトニング》！」

振り上げられたダガーとは別の手からだされた魔法。

それを対処するにはまだ時間がある。

想像するのは二本の妖刀。

一度呼び出したその刀を再度読み込む。

視界が霞む。

アクアの話ではこれくらいどうてこともないはずだが、いや、駄目だ。

少し気を緩めれば持つていかれる。

「再度読み込み。実証完了。基本骨子の組み立て完了。再インストール！こい……、妖刀ムラマサ。名刀ムラサメ」

現れた妖刀で雷を払う。

だが、カズマの狙いはこれじゃない。

つきだした左手であのスキルを唱える。

そう、それを待っていた。

たった一つ、勝機があるとしたらこの瞬間。

圧倒的運に、確信を持つているカズマに勝てる瞬間だ。

「《ステイール》！」

ステイールの詠唱中、右手の妖刀を戻し、名刀を宙に投げる。

ステイール。

そのスキルは対象とした人の物を奪うスキル。

あくまでも、対象は物じゃない。人だ。

最初に人をロックオンし、その持ち物から奪い取る。

つまり、持ち物を一つにすれば、相手に取られる物を強制的に絞れる。

まばゆい光に包まれ、カズマの手に現れたのは短剣。

そして、それを確認したと同時に宙の名刀を振り落とす。

「ちっ！ 《アイスメイク・フリーズ》！」

たちまち、氷にコーティングされ始めた短剣に名刀はたさすく弾かれる。

「《壊れた幻想》」

魔力を暴走させ弾けた短剣を瞬時に投げ捨てるカズマ。

ちっ、あまくないか。

「せめて、剣がぶつかり合う時にやるべきだったな」

そうだ。冷静に考えればそれが得策。
考えがあまかった。

「なあ、カズマ。もう、終わりにしよう。アイリスのことは俺らがどうこうすることじゃない。アイリス自身が決めることなんだ。俺らの役割はただ見守ってやることだ」

「それは……」

黙り混み下にうつ向く。

そして……。

—————

もう、何度打ち込んだか。

決定打だと思った攻撃は全てダガーで払われる。

そして、初めから知っていたかのように、私の動作のすべての弱点に攻撃を入れてくる。

「クッー」

小回りの聞かない聖槍は受け止めるだけで精一杯。

次の攻撃に備えるすべもなく、一度防御に回れば攻撃のチャンスは与えられた時以外

やってこない。

「昔から何も変わってないね。ただ、受け入れるだけで振り払おうとしない。そうやって与えられる時がくるまで動こうとすらしない。何一つ変わってないよ、君は」

聖槍を振り払われ、お腹にダガーの裏を打ち付けられる。

「クハッ」

「自分の立たされている状況を把握できているのに、受けにしか回らないその姿勢。助けが欲しいなら声を出せばいいじゃないかな。そうすれば、彼は駆けつけてくれる。その場を捨てても。でも、君は呼ばない。仮に、彼に何もなくても呼ぼうとしない」

懐に入ってくる、その一撃一撃を交わすことはできない。

今、私にできるのは……。

「耐えることだけ。耐えれば、何とかなる。そして、誰かがその手をさし伸ばしてくれ。君の力なら私を突き飛ばすことだってできるのに、そうしない。耐えていけば、我慢してれば、誰かが可哀想だと思ってくれる。悲劇のヒロインを装うのはもう止めなよ。」

悲劇のヒロイン？

私？

「まさか自覚がないなんて。そりやそうだよ。だって、君は困ってる人に手をさし伸

ばして、問題ばかり起こす先輩の尻拭いをする面倒見のいい、みんなに愛される女神様だもん。例え、その行為で誰かを蹴落としていたとしても、例え、そのさし伸ばした手が偽善でしかなくても、周りはそんなに深くまでは見てこない。だって、君は完璧な女神様だから。そんなはずがないんだから」

「どうしてそのことを……。あなたは」

「私？ そうだね。私は私。君が一番知っていて、君を一番知っている人物だよ」

私が一番知っている人物。

その時、外で爆発音がなる。

「そろそろ頃いかな」

銀髪の盗賊は窓に足を乗つけて、振り返る。

「もう、独りよがりでないで、救われたいならばつきりそう言いなよ」

それだけ言い残すと、闇夜に姿を溶け込ませて行く。

「エリスさん！」

「エリス！」

後ろから私を追ってみんなが駆け寄ってきてくれる。

独りよがり。

私は独りよがりなんかでいるつもりは……。

「助手君！そろそろ頃合いだよ」

アイリスのバインドを解き、突然現れたクリス。

「どうやら、済ますことは済ませて撤退という感じだ。」

「それじゃあ王女様。これは預からせてもらおうね」

片手に持ったネットワークスを見せ、安心させるように笑う。

カズマはと言うと、いまだに下を向いたまんまだ。

「それじゃあ、エリスをお願いね。ほら！行くよ助手君」

カズマを片手に城から姿を消していくクリス。

彼女の最後の笑顔にははんば苦笑い的なものがあつたが、いったい下でないが合つたのか。

そんなことを考えているとアイリスが静かによつてきて言った。

「私は決めました」

その目に移つたのは、あの日城で見た、我慢の目ではない。

確かな、決意だつた。

強者だらけの王城から王女のネックレスを盗み出すと言う一大事件を終えて、俺は王城の門の横で体育座りをしていた。

ユウマに言われた見守るといふ役。

なぜ、俺はそのことに考えが至らなかつたのか。

俺が、アイリスを強引に連れ出しては、王城で勝手に縛り付けてるやつらと同じじゃないか。

パタリパタリと足音がする。

誰かがこつちにやつて来る。

門番だろうか。

そりや、あんなことが起きたんだ、こんなところにいたら捕まえられるだろう。

だが、足が動かない。

普段使つてなかつた筋肉による痛みによる不甲斐なさが乗つかつて動こうと思えない。

「あら、カズマじゃない。何やつてんのよ。こんな所で。風邪引くわよ？」

そこに立っていたのは、飲み干した酒瓶を片手に持ったアクアだった。

「アクア……」

「何よ、カズマだったら……。そう……。辛いことでもあったのね」

いつもだったら、アクアに泣きついたりなんか間違ってもしないが。

今は、別だ。

ただ、誰かに慰めてもらいたい。

その日のアクアは、いつもからでは想像もできないくらい、頼りがいがあつて、心地がよかつた。

第37話 エゴ

巷で噂の義賊からの襲撃から一晩が経った朝。

俺は城内の食堂へ向かっていた。

あの後、義賊から姫様を救ったお礼として城で朝食付き宿泊をプレゼントされた。

そんなでもってしばらくしてから、門にいた所をアクアに保護されたカズマを加え賞状何かをもらったり、騎士団への勧誘を受けた。

もちろん一つ一つ丁寧に断ったのだが、側近のクレアさんは諦めることなくしつこく勧誘してきた。

まあ、それはいろいろと吹っ切れたカズマのスタイルで諦めてもらったのだが。

その後の女性陣からの冷たい視線はそれはもうすごいものだった。

まあ、今は何とか話を聞いてもらえるようになったらしく、いつものカズマに戻っている。

なにはともあれ今回の件は一件落着だ。
終わり、閉廷！

「痛てえ」

曲がり角で何かとぶつかる。

反射的に痛いと言ったがそうでもない。

誰かとぶつかった感じだ。

「あ、エリス。ごめん」

ぶつかった相手はエリス。

なのだが、その意識は遠くボーツとしている。

「エリス？」

「ふえ!?!」

やっと俺に気づいたのか、声を上げる。

「あ、おはようございます」

「う、うん。おはよう」

やっぱりおかしい。

ぶつかったことには気づかず、我ここにあらず。

それに、いつもの笑顔に違和感を覚える。

なんというか、無理をして作っているような。

「夜はよく眠れましたか？王城の枕って大きいんですね！私わくわくしちゃいました」

本人は無邪気そうに言っているつもりなのだろうが、違和感ありありで見ていてつらい。

思えば、あの後からずっとこんな感じだ。

「エリス。昨日何かあった？」

「……。なにもないですよ」

「いや、そんなわけ」

「皆さんもう集まってると思うので私たちも急ぎましょ」

うつむいたまま急ぎ始めるエリスの袖を抑える。

無意識だった。

本当、今しかないと思ったら勝手に体が動いていた。

「ほら、皆さんを待たせるのはいけませんよ……」

「どうして、そんなに背負い込むんだよ……」

「別に何も背負いこんでなんて」

「じゃあ、なんでそんなに震えてるんだよ」

「え？」

白く綺麗なその足は、今にも崩れそうに脆く震えていた。そして、そのことに気づいたのか地面に一つ、また一つと滴落ちていく。

「私は……、好きで耐えてるんじゃないんですよ……」

消えそうな声で言った言葉。

それは確かな物。

彼女の本心だった。

「自分が独りよがりなのはよくわかってます。独りよがりでもわがままで、自分のためなら、平気で誰かを蹴落とす。そして、蹴落とした罪悪感を消すために周りに手をさし伸ばす。都合のいい自己満足。だから、耐えるしかないんですよ。こんな存在がやっぱり

救われてはいけません。本当、私はわがまま女ですよね」

切ない笑顔を俺に向ける。

ひどい自虐だ。

今、俺の前にいるのは、国教と慕われる女神でも、完璧な後輩でもない。

ただ一人の少女。

そんな少女に俺ができることは。

「それは違う。たとえばがままであろうと、なんであれ、救われちゃいけないやつなんて一人もいない」

「でも、それでは……」

「そもそも、罪悪感なんてただの自己満足、人のエゴなんだよ。そんなものに捕らわれてたら壊れるだけ。いいんだよ。そんなこと考えなくて。もし、それで誰かがエリスを責めるなら俺が守る。そのために俺がいるんだ」

これは俺のエゴなんだろう。

彼女に救いを求めた俺の自己満足。

バニルは言った。

この選択が一番過酷なものだったと。

ああ、その意味が今ならわかる。

こんなに、自分が壊れてるなんて実感してると、今にも吐きそうなくらいつらい。

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

王都から少し遠いアクセル近郊の湖。

そこに一つの厄災がいた。

「クローズンヒュドラか……」

クローズンヒュドラ。

普段は大地から魔力を吸収し、十分な魔力を貯めた時目覚め、破壊行為を繰り返す厄災。

邪神と蔑まれた自分と同じ存在に同情に似た感情を持つ。

「厄災って言うのはいつかは人に倒されるもの。せつかく魔力を貯めて目覚めるというのに、ただみすみすと倒されるなんて嫌よね」

ポケットから取り出す不気味に光る宝石を取り出す。

かつて、グロウキメラのシルビアに渡された強化石、

その改良版。

「彼女ったらこんなものどうやって作ったのかしらね。邪神の私でも知らない厄災。まあ、いいわ」

強化石を湖に投げ入れる。

同時に汚れていた湖は禍々しい魔力を放ち、荒れ始める。

「もう、休暇は充分でしょ？ さあ、目覚めの時よ。クローズヒユドラ。いえ、6の獣。こことは違う世界で神を弾圧したもの。人類を滅ぼす厄災」

『『マザーハーロト』』

第38話 厄災の獣

ラストフアンタズム。

それは人々の思いを詰め込んだ最後の幻想。

その光は星の息吹き。

流れるのは命。

説明の通り、これ自体が『人』の全てである。

生命の焼けた臭い、崩れた城壁。

人々の失望と苦痛が交えた中、これでもかと物を破壊し尽くす厄災に、一つの光を小さな背中が背負い立つ。

「束ねるは星の息吹、輝ける命の奔流」

焦がされた焼け野はらを生命の風が通る。

「七星の導きに従い、今、その全てを解き放とう。十三拘束《強制》解放」

風に纏われた聖剣はその姿を現す。

「今、常勝の王は高らかに、手に執る奇跡の真名を謳う」

神器とは、俺たちの世界の英雄達の武器や道具を神々が模範したレプリカ。

その力は到底オリジナルには届かないし、もし届いたとしても完全にそれになることはない。

——だが、例外もある。

それは……

「其は——」

王城の大きな食堂でも、普段となんら変わりなく賑やかな食事をしながら、俺はちらつとエリスを見る。

やはり、さっきのことで吹っ切れてないのか、一人元気なく、時々ちよつかいをかけてくるアクアを適当にやり過ごしている。

あのととき言ったことを冷静に思い返してみる。

エリスは女神、普段は人を見守る立場であり、個よりも全を優先しなければならない。

ああ、分かってる、分かってるさ。

それでも、たった一人に全てを背負わすのはひどい話ではないか。

アイリスにしろそうだ。

世界とは残酷だ。

誰かが幸せにいるには誰かが負を背負わないといけならしい。

本当は腹立たしい。

「あの、大丈夫ですか？」

行き当たりのない愚痴をひとりで考えていると、隣に座っていたゆんゆんが気になったのか声をかけてくる。

「いや、大丈夫。大丈夫だよ。ほら、せっかく久しぶりにアイリスと話せるんだから、たくさん話してあげないと。お互い寂しかったんだろ？」

氣遣ってくれたのはうれしいが今は一人で考えたかった俺は、話題の先をアイリスに変える。

やっぱり顔にでてしまっていたのだろうか。

こういう場で関係のないことを考えているのは無礼なものだとは分かっている。だが、やっぱり考えずにはいられないのだ。

結局、朝食が終わるまでエリスとは話すことができなかった。

昼の面会までのフリーの間、俺はこのぶつけることのできない、モヤモヤはらすため、直接エリスともう一度話そうと思った。

無意識の中、焦って早く歩いていたのか、それなりに広く距離のある通路を抜けて、俺はエリスの部屋の前に立っていた。

まずは何を話すべきか。

言いたいことたくさんあるのに纏まらない言葉を精一杯まとめて決心がつく。

そして、ドアのぶに手をかけたときだった。

『緊急——!!緊急——!!』

突然の騎士たちの声にそんなこともする時間を潰され、俺は広間に向かった。

—————

「ただちに全騎士団の集結とギルドへの要請を済ませろ」

「了解!」

白スーツことクレアさんの指示と騎士たちの声や音が行き交う広間は、一種の戦場と

化していた。

「クレアさん、どうしたんですか」

「おお、ユウマ殿！本来は客人にこんなことを頼むのは無礼極まりないと分かっています。しかし、今王都は緊急事態にあります。どうかお力をお貸しください」

クレアさんの頼みで集合をかけられた俺たちは、まさに軍隊指令部という部屋に連れられていた。

「率直にいいます。ただいまの状況は最悪、国の全滅もありえます」

「うん、帰りましょ！」

いつものように敗北主義を掲げ始めたアクアを無理やり引つ張りどどまらせるカズマ。

さすがの状況なので、そのワンシーンは軽くするされる。

「おい、騎士団長」

「はい、対象はつい先程、なんの前触れもなく現れ破壊行動を開始し始めました。カテゴリーとしては討伐指名手配クラス。姿、形からして、アクセル近郊に封印されているクローズヒュドラに酷似する点が多く、現状ではクローズヒュドラの亜種のような物だと推定。また、その出現からの推測として何らかの自然現象ではなく、テレポートを使用した魔王軍からの差し金だと推測しております」

「クローズヒュドラか……。また厄介なものか」

「そうですね。さすがに紅魔属の我々でも直接は見たことはありません。これは最悪撤退も」

「そうよ、そうよ。さすがのクローズヒュドラ相手じゃ、私のリザレクシオンだつて辛いわ！生きていればやり直すことなんていくらでもできるんだし、逃げましょ、ね！」

「いいや、やるぞ」

いつも以上に弱気なアクアを押し退けて、カズマが言う。

「そのヒュドラが魔王軍の差し金なら、もし逃げたとして、退路になにも仕掛けていない訳がない」

「袋のネズミってやつか」

「ああ、それなら黙ってやるしかないだろう？俺はやるよ。大切な妹の国が危ないって言うんだ、兄として人肌脱ぐのが当たり前だろ」

「ということだ、アクア。カズマのいう通り、逃げ場なんて無いんだ。すまないが、付き合ってくれ」

ダクネスの言葉について自分達のたち意味を理解したアクアは、やけくそになってしまった。

「助力感謝する。私も、本当なら戦場に出たいが、騎士をまとめて王城を守る義務があり

ます。ダクティネス卿、指揮はまかせても？」

「いえ、私は守ることしかできません。指揮はカズマに任せてください」

「この男にですか？」

「カズマの実力は確かなものです。あの機動要塞のときも指揮はカズマのものでした。絶対に期待に応えてくれますよ」

「ええ、姑息な手を考えるのはカズマにとって朝飯前です」

「お前ら、それ絶対誉めてないだろ？」

「そんな訳……」

ダクネスもめぐみんも目を反らす。

いくらなんでもこれはかわいそうだ。

「でしたら、私も！」

「うんうん、アイリスちゃんは待っていて。だってアイリスちゃんお国に大切な人だも
ん」

「ええ、そうです。何かあつては遅くなつてしまいますから、終わるまで待っていてくだ
さいね」

どうしても行きたがる、アイリスに諭すゆんゆんと

エリス。

そう、何かがあつては遅い。

いくら、幸運値の高いパーティーでも不幸が起きないという確証はない。
なるべく、不確定要素は減らさないといけない。

「仲間を信じてくれよ」

そんな気休め紛いな言葉を、アイリスに言う。

気休め、そうあくまでも自分に対してのだ。

仲間を選ばなかった俺に対しての……。

—————

王城の魔法使いにテレポートで送ってもらい、やって来たのは王都の外壁。

目を開けるより先には鼻についた焦げ臭さに、これまで以上にない恐怖を感じた。

燃え盛る森に、灰とかした野原、冒険者達の嘆き声に無差別に攻撃されたモンスター

達の腐敗臭。

戦場とかしたその場所はまさに地獄絵図。

朝の青空はどこかへ消え、灰色の雲が一面をおおっていた。

「なんだよ、あれ……」

震えるカズマの声の指した方向にいる何か。

黒い煙を纏い、冒険者達の攻撃を受けながらも、何ともないように進み続けるそれは、この世のものとは思えないものだった。

「あれが、クローズヒュドラなのか……？」

「いえ、違います、あんなものはこの世界には存在しません！」

ダクネスの疑問を全力で否定するエリス。

この世界を担当していて、誰よりも詳しいはずのエリス出すら知らない怪物。その見た目は7の首を持ったヒュドラそのものなのだが、何かが違う。

「ヤマタノオロチなのか？」

「いや、ヤマタノオロチは杯なんか持ってなかったはずだ、あれは……」

真ん中の頭に乗っている杯。

俺は、確かにあれを知っている。

たしか、

「バビロンの大淫婦。あんた達の世界の宗教における悪魔。666の獣。その名は

……」

遠い記憶の奥、昔遊んだゲームの敵キャラで、趣味で調べたことがあった。

もしかしたら、違うかもしれない。

何度、そう思ったか。

だが、今現実には俺達の前にいて、アクアが語ったそれは、確かにあれと一致していた。

——最悪だ。

なんてものをこの世界に召喚してくれたのか。

あれは、チートを持ってない俺らにはかなり敵しい、生きて帰ることができたら、ラツキーというくらいのものだ。

そう、なぜならあれは

「マザーハーロト」

7つの頭を持つ獣。

その背中には杯を持った、淫婦を乗せている。

のだが……、

「いや、アクア。マザーハーロトは確か、背中に淫婦を乗せているはずだ。つまり、あれってまだ不完全なのか？」

「そんなの知らないわよ。そもそも、あんた達の世界の、それも宗教で人が勝手に考えた怪物が、この世界にいるのがおかしいのよ」

「いや、多分、あれの知識を持ってたの送ったのお前」

そんな、カズマの言葉をスルーして、ゆんゆんの襟を掴む。

「いいから逃げるわよ！ あんなのとまともに戦うなんて馬鹿よ馬鹿！ ゆんゆん！ あんた

「レポート持つてるでしょ？それでアクセルまで」

「私は逃げないぞ」

剣を地面に差し、遠くの敵を睨みながらダクネスは言う。

「私はこのベルセルク王国の懐刀。決死の覚悟で冒険者達が戦っているのに、私は逃げるわけにはいかない！逃げるなら、お前たちだけで逃げればいい」

「ダクネスだったら、こんなときに。下手した死んじゃうかもしれないし、何より、あんなのに殺されたら死体だつて原型をとどめてるか分からないんだから、助けることだつて」

「構わない。今、騎士としての矜持を捨てて逃げくらいなら、私はここで朽ち果てた方がましだ!!」

逃げ腰のアクアから遠くの敵に向き直る。

口では言ったものの、体はらしくなく震えている。その様子を見て、カズマはダクネスの肩に手を置く。

「たく、しょうがねえーな！お前は頑固だからな。退路も考えていたが、逃げるのはやめだ。取って置きの策を出してやるよ！」

吹っ切った笑顔で言うと、アクアの首根っこを掴みながら言う。

「今、俺の考えられる全ての作戦だ。めぐみん！ユウマー！」

「おう」

「は、はい？」

「この二人の爆裂魔法をぶちこんで一発でけりをつける」

いたってシンプルだ。

人類の持てるすべての火力を二つぶちこむ。

もし、これで生き残られたら、もうお手上げ状態だろう。

「待ってください。そのマザーハロトっていうのはわかりませんが。元となったクローズヒュドラには高い自己再生能力があります。もし一本でも首が残ったらすぐ……」

「大丈夫だ。うつ前にある程度場を整える。エリス、ゆんゆんは全力の攻撃でダメージを稼いでくれ、ダクネスは攻撃が当たっても火力不足だから、前衛を守ってくれ。もし、死人がでたらすぐアクアのところに。そして、アクア。お前は何がなんでもめぐみんを守れ！俺はいい感じのところで、バインドを放って、首をまとめる」

カズマのメンバーの適正を細かく把握して出された作戦には、いつも感服させられるものだ。

ゆんゆんもなるほどと納得している様子。

「それとユウマ。悪いが、爆裂魔法をうつ直前まで攻撃に参加してくれ。二人だけじゃ、

少し辛いかもしれないからな」

「ああ、了解。合図は任せるから、その時が来るまでできるだけのこととはやっつく」

さあ、戦いの準備は終わった。

それぞれ、思いはバラバラだが、目標は一つ。

王都にせまる厄災を討つこと。

いつだって、怪物や悪、人類の敵は人間がけりをつける。

決戦の時だ。

第39話 永久に輝く勝利の剣

「ユウマ殿たちも戦い始めている頃でしょ。アイリス様、そろそろ避難を」

一級物の装備を身に纏ったクレアは険しい表情で言う。

民のためと私の変わりにみんなは戦ってくれている。

本当に私だけが安全な所にいるのだろうか？

本来、民を守るのは私たち王族の役目、それを放棄して私は。

「アイリス様？」

クレアが不思議そうな顔をする。

そう、私は姫だ。

姫とは国の象徴だ。

しかし、こんな非常事態で避難するのはベルセルク王家として間違っている。

「私は……、私は避難しません」

「アイリス様!？」

「ベルセルク王家は代々先頭に立ち、民を導いてきた者です。父上やお兄様がいない今、それは私の役目。私も戦場に行きます」

「ですが、それでアイリス様の身に何かありましたは」

「そこまでにしましょうクレア様」

クレアの言葉を遮るように扉が開かれる。

そこに立っていたのは、クレアと共に私の教育係を勤めていたレイン。

そして、彼女の手に持っているものは。

「どういうことだレイン！その手に持っている聖剣は！」

「見ての通りアイリス様の聖剣です。クレア様もう、いいでしょう。アイリス様のいう通り、ベルセルク王家は代々、民の先頭に立ち先導してきた者。国王様や王子がいない今、それはアイリス様の役目です」

「レイン。お前は姫様に自ら死に行けと言うのか！」

「そんなつもりはありません。ですが、もし姫様に何か合ったら私が責任を取りましょう。幸い、私の家は小さい、国王様にはクレア様や騎士達を押し切ってアイリス様を出陣させたと伝えます。クレア様には迷惑はかかりません」

「レイン、私はそういうことを言っているのでは」

「アイリス様」

クレアを押しきり私の前に立ったレインは笑顔で言う。

「私は嬉しいのです。いつもご自身のお気持ちを内に隠して我慢なされていたアイリス様が、ご自分の思いを私達に伝えてくださったことが。姫様。行ってください。今は国のことなど忘れ、ご自身のお仲間のために」

差し出された聖剣を受け取る。

「どうやら、私の考えはレインにはお見通しだったようだ。」

「ありがとうレイン。行って参ります！」

「どうかご武運を」

私は振り返ることなく、城内を抜け出した。

さつきまで快晴だった空はいつの間にか気味悪い雲に包まれ、焦げくさい臭いが鼻につく。

皆さん、どうかご無事で

私はどこで道を踏み外したのだろうか……。

次々と瀕死の重症となっていく冒険者たちを飛び越え、襲いかかってくる獣の頭をあしらう。

『たとえ、否定されてこの世の全てが敵になっても俺はエリスを守り続けるよ』

私はこの言葉に安堵し、自分を嫌悪した。

本来守る側の私が守られる側に立つなんていけないことだ。

それも、よりにもよって一人の青年の一生をかけて。

……本当に最悪な女神だ。

女神としての責務より、彼に救われることを望んでいる。

ぶつぶつと考えながら、次から次へと襲ってくる首を風呂払う。

切っても切っても次の首が襲ってきて、その間に自己再生を繰り返してくる。

正直言って鬱陶しい。

何が、神を弾圧した獣か。

ただでさえ、気分が良くないのに、さらに害してくる。

返り血は白かった私の服を汚し、生臭さが覆う。

「《スターバースト》!!」

打ち終わった後に気づく後悔。

積み重なったイライラと、早く終わって欲しいという焦りに、5本の頭が重なった瞬間、聖槍の最大火力をぶつけた。

半分以上の頭が無くなり、場が見やすくなった瞬間、それに気づくことができた。

自らの頭が一瞬にして溶けたことにより、ターゲットを私に変えたのか、はたまた、最初から私を狙っていたのか。

残った3本の頭は、他の冒険者を攻撃する道順として、その最後を私にたどり着くようにしていた。

「しまった……!」

一撃にかけた魔力の多さの余り、反応が遅れる。

そうしているうちに、冒険者たちを噛み砕いた3つの頭は、いつの間にか私の退路を塞ぎ、八方から鋭い牙を光らせる。

ああ……。

ユウマ……さん。

「《固有时间制御・四倍速》……!!」

それは一瞬のことでした。

体の自由を奪われ、獣の口に落ちていくはずだった私を、恋しくなるような温もりが覆う。

「ユウマさん……?」

「《全剣連続投射》《仮・壊れた幻想》!!」

連続投射された短剣は獣の頭に突き刺さり、次々と爆発していく。

「言つたら？何があつても守るって」

聞きたかつた言葉に私は、心のそこから安堵する。

やっぱり、私はダメな女神のようです。

地上に降り、エリスをカズマの元に避難させたのを見送った後、再び獣に向き合う。ほぼ、同時にすべての頭を破壊したことによって、回復が遅れているのだろう。すでに、動きを止め、首の根元から新たな頭を生やそうとしている。

「おーいユウマ！こっちの避難は終わったあとは頼む!!」

カズマの声を合図にめぐみんと合流を果たす。

「こんな地獄絵図な状況で、女を口説くとは、頭がどうかしているのでしょうか」

「ふん、ぬかせ！俺は俺で、約束を果たしてるだけだ」

「ずいぶんのいいようじゃないですか、それで失敗したら後で笑われものですよ」

「お前こそ緊張のしすぎで狙いを外すなよ」

「な、なにおう！」

安い挑発の言い合いをしながら、短剣を獣に向ける。

人類最強の魔法。

これを二つも当てれば、流石に消しとんでくれるだろう。

……それにしてもだが。

今になってアクアの言葉を思い出す。

武器の召喚、爆裂魔法、共にあわせて三回が限度。

もしやぶれば、ドカンといくとか。

昨夜の再インストールだけでも、意識が飛びかけたのに、使用制限のかかっていることをやったらどうなるのか。

考えるだけでも、恐ろしい。

しかし、今は不思議と戸惑いが無い。

使った後にどうなるのか、そんなこと考えることなく、詠唱を唱える。

「黒より黒く、闇より深き漆黒に我が深紅の混淆を望みたまう。覚醒のとき来たれり。無謬の境界に落ちし理。無行の歪みとなりて現出せよ!!」

詠唱の一つ一つを口ずさむごとに、フル稼働を始めた魔術回路は悲鳴を上げる。

ああ、駄目だ。

これ以上は飛ぶ。

無くなっちゃいけない大切な何かがぶっ飛ぶ。

——それでも。

「燃えろ燃えろ燃えろ。我が力の奔流に望むのはすべてを飲み込む焔の陽炎！」

身体を流れる魔力はたった一ヶ所の小さな場所に集まり。

「見るがいい！」

「朽ち果てろ！」

すべてが吹き飛んだ。

「《終焔双極爆裂魔法》!!」

——焔を纏った破壊の光は獣めがけて一直線に飛んでいき、その体を飲み込みはぜた。

その威力は確かなもので周りの木々をまでも飲み込み、気づけば山火事となってい

た。
しかし。

「嘘だろ……」

それはカズマか誰かの声だった。

消えかかると意識の中で、必死に前を見る。

しかし、災厄と言われたそれは確かにそこに健在のままだった。

「まさか、あの爆裂魔法を受けてまでも倒しきれないなんて……」

「逃げましょ！ほら、カズマ、ダクネス！突っ立ってないで、めぐみんとユウマを拾って
！撤退よ！」

終わった。

確かに体のすべての魔力を使った一撃だった。

文字通りの人類最強の攻撃魔法だったはず。

だが、結果はこの有り様だ。

倒し切ることはなく、最悪なことに、首が完全復活していた。

「クギガ■□□□ー!!」

到底人智では理解できない、鳴き声と共に視界が光る。

そして、目を開くと辺りは一面火の海とかがしていた。

幸い、俺たちの場所までは届かなかったのだろう。

爆風で身体を吹っ飛ばされただけで、打ち付けられた痛み以外、特に変化はない。

「うう、目が、目が……!」

「痛いよお、誰か。母さん」

耳につく、人々の呻き声。

目を開き、最初に見えたものは、皮膚の溶けた元冒険者だった何かだった。

しかし、それを見てもなお、何も感じない。

いや、感じないのではなく、感じられないのだ。

この地獄にいて、あるのはただの絶望。

厄災（あれ）を倒せなかったことへの絶望が、身体を締め付ける。

「大丈夫ですかユウマ」

「ああ、なんとか。とりあえず、お前は起き上がらない方がいい。最悪な状況だ」

なんとか、めぐみんの安全を確認し状況を整える。

とりあえず、めぐみんが無事ということはエリスたちも大丈夫だろう。

俺の魔力は全快。

短剣は残り12本。

爆裂魔法はあれには効かない。

倒すことができるかすれば《因果を絶ち悪を切り裂く正義の剣》のみ。

しかし、何故か使用できない。

しかも、あの厄災ときたらもう一撃、今度は王都内を狙うつもりらしい。

流星に打つ手なしだ。

「ちっ。結局このざまかよ」

詰めが甘いと今まで何度言われたか。

それなのにこの絶体絶命の状況でもやってしまうとは。

何にも言えない。

すつと目を閉じて、途切れかけの意識を起こす。

とりあえず、ここから逃げるしかない。

めぐみんを担いで、カズマたちと合流。

ゆんゆんのテレポートでアクセルに戻って対策を練つて。

途切れかけの意識で何とか考えたのに、体が動かない。

その時だった、地べたを這う身体を持ち上げられる。

顔を起こすと、透き通るような綺麗な金髪が俺の目映る。

「アイリス？」

「お疲れ様ですユウマさん。他の方々には城壁付近で保護させてもらっていますのでご安

心を」

岩に身体を預けながら、アイリスを見る。

「ま、待ってアイリス！一人であれと戦うなんて」

「大丈夫です。ユウマさんや皆さんの頑張りは無駄にはしません。どうか見守っててください」

アイリスは優しく微笑むと、鞘から聖剣を抜き構える。

すると、炎に焼かれ無かった草木から光が溢れ出す。

それは生命の光というものか。

瞬く間に聖剣を包み始める。

アイリスの持つ神器。

それは彼の王が持ったとされる聖剣のレプリカ。

さりとて、レプリカであってもその剣はオリジナルと同格の在り方を持つという。

ラストファンタズム。

それは人々の思いを詰め込んだ最後の幻想。

その光は星の息吹き。

流れるのは命。

説明の通り、これ自体が『人』の全てである。

生命の焼けた臭い、崩れた城壁。

人々の失望と苦痛が交えた中、これでもかと物を破壊し尽くす厄災に、一つの光を小さな背中が背負い立つ。

「束ねるは星の息吹、輝ける命の奔流」

焦がされた焼け野はらを生命の風が通る。

「七星の導きに従い、今、その全てを解き放とう。十三拘束《強制》解放」

風に纏われた聖剣はその姿を現す。

「今、常勝の王は高らかに、手に執る奇跡の真名を謳う」

くだいようだが、もう一度言う。

神器とは、俺たちの世界の英雄達の武器や道具を神々が模範したレプリカ。

その力は到底オリジナルには届かないし、もし届いたとしても完全にそれになることはない。

ーだが、例外もある。

それは……

「其はー」

命の暖かさを纏った聖剣。

それは彼の王の聖剣とは違った光を放ち、たった一つの厄災を捉え。

「《永久に輝く勝利の剣》（セイクリト・エクスカリバー）!!」

光は大地を削り、すべての負という負を、厄災と共に飲み込んでいく。

ーやがて、空を覆っていた雲を吹き飛ばし、青空が枯れた大地を照らし始める。レプリカのはずだったその剣はその時一つのオリジナルとなった。青年はその瞬間を見届け、少女は満足げに空に笑った。

〈第四章エピローグ〉

かくして、突如として現れて国を騒がせた厄災は小さな王女によって討たれた。短時間で、ひとつの戦争並みの被害出した戦いであったが、国民は誰一人として失った恨みをぶつけることなく、王女を称え、魔王軍をよりいっそう嫌悪した。

「アイリス様！よくぞご無事で！」

王城を飛び出してアイリスに飛び付くクレアさんを、誰もが笑いながら見ていた。

「一時はどうなるかと思いましたが、ユウマさんもめぐみんも無事でよかったです」

「そうよ、ゆんゆんてばめぐみんを探しにいきたいって、顔をくしゃくしゃにして言ってたわよ」

「ちよつとアクアさん！」

「ほーう。自分の仲間より私の心配をするとは、ユウマ少しは怒っているのですよ」

「いいや、怒らねえーよ。親友を一番心配するなんて当たり前だろ？」

「ちよつとユウマさんまで！」

顔を真っ赤にさせるゆんゆんを見て楽しんでいると。

「ユウマさん、少し」

エリスに呼ばれ、その場から少し離れた場所に移動する。
どうしたのだろうか？

「その、さつきはありがとうございます」

「さつきも言ったろ？何があつたつても守るつて。安心してくれ、これからもしっかりと守るから」

「ユウマさん……」

「ん？」

「本当に私は、あなたの命を張るまでに守る価値があるんですか？」

「命を張る価値つて。そんなの大有りに決まってるだろ。だって……」

「なくにを二人でやってるんですかね。今回の主役はアイリスですよ？そんなところで営んでないで、少しは場をわきまえたらどうですか」

また、空気を読まずにめぐみんが現れる。

こいつはいつも、肝心なところで!!

「こんの、めぐみんー!!」

「おっと、これはいけませんね」

流石にこれはまずいと、すでに逃げ始めるめぐみん。

「おま、待てこの！畜生」

「ふふふ。めぐみんさんの言う通りです。今はアイリスちゃんのところに行きましょう」

「……はあ。そうだな」

ため息ひとつつけて、アイリスのところへ向かう。

そうだ、アイリスの勇気がなければ今馬鹿なことをやることだってできなかつたんだ。

今日はおもいつきり遊んであげよう。

その後、一段落つけてから王城の一室に通され、そこで、アイリスはクレアさん並びに王城の人々に思いを告げた。

の、だが、なんと城の人たちはアイリスの気持ちに気づいていたのか、それをこころよく受け入れ、俺たちとまた魔王退治することとなった。

ちなみに、クレアさんが最後まで駄々をこねアイリスを引き留めようとしていたが、見てられないと思つた教育係のレインさんに鎮められていた。

「ふう、何とか荷物はまとめ終わったな。それじゃあレインさんお願いします」

「ええ、かしこまりました。どうかアイリス様をお願いします。それでは」

「あ、忘れ物をしましたので先に行っててください」

「え、ちょアイリス……。わかった。レインさん」

「はい。《テレポート》！」

光に包まれ、視界が暗くなったと同時に場面が切り替わる。

気がつけば、そこはいつもの街並みが広がっていた。

どうやら、アクセルは特に何もなかったようだ。

「アイリス様」

「ありがとうレイン。私のわがままを聞いてくれて」

予想外の言葉にレインは微笑みながら私を見る。

「確かに、一国の王女が城を空けるのはあってはならないことです。しかし、国を救った英雄が冒険者たちを導き魔王に立ち向かうとなれば、民も理解してくれましょう。幸い、ジャステイン王子が急ぎよ城に戻られることになりましたので城のほうもなんとかなりました」

そう、一線で戦っていた兄上は、魔王軍との戦いの過激化にともない、城に戻ることにした。

本来なら、そんな中城を出ることは禁じられるのだが、今回の件や同行するパーティーが多く、幹部を討ち取った成績を持つということで、ある条件の中、同行が許された。

私は、その事をほほえましく思いながら魔方阵に立つ。

「アイリス様。アイリスはユウマ殿のことを」

「いえ、レイン。私が好きなのはあくまでもお兄様です」

私が異性として好きなのはあくまでもお兄さまである、カズマさんだけ。

しかし

「私はユウマさんに憧れたんです」

自分を犠牲にしても大切なものを守る生き方に、そのまっすぐな背中を心の底から尊敬し、憧れたのだ。

だから、私もあの人に救いを求めたのだ。

「そうですか。それではアイリス様。よい旅を」

綺麗な光の粒に身を包まれ、体が軽くなる。

さあ、次の冒険は何でしょうか。

世界最大のダンジョン編

第40話 戦いの次はまた冒険

ここ最近はずっと眠れる日が少なく、久しぶりの熟睡に気持ちいい朝を向かえる。とはいっても、まだ日が出てから一時間くらいで、下のリビングには誰もいない。

顔を洗い、朝一発目の水を片手に、昨日帰ったときに玄関にぶちまけられていた新聞を取り上げ目を通す。

『王都郊外にて、謎の怪物現れる。死者多数、魔王軍の差し金か』『隣国の王子、宰相と共に謎の失踪』……』

予想通りと言うべきか、やはり王都での戦いが新聞のほとんどを占めていた。

その中には、庶民の声を書かれ、魔王軍に対するヘイトがつもり積もっていたが、そ

れと同じくらいアイリスが称えられていた。

昨日、レインさんも言っていたが、この一件は被害も多かったが、それ以上に落ちた貴族の評判を上げ、国の士気を上げられるものだったらしい。

それが、今回アイリスを王城から送り出させた理由の一つだろう。

話を聞けば、アイリスの失踪は捜索に膨大な資産をかけたらしく、国の運営に支障がでるものだったらしい。

それも、今は何とかチャラになら一件落着と言うものだった。

「エリス祭？」

新聞の間から落ちたチラシを拾い上げる。

見た感じだと、この国全体のお祭りだろうか。

国の士気が上がった状態で、さらに追い風を吹かすように国教のお祭りときた。

これには魔王軍ももう一騒ぎ起こして来るだろう。

空になったコップを台所に置きに行きながらも、片手に持ったチラシ読み続ける。

ーと、

「幸運の女神エリス様に日々の感謝を伝えるお祭りです」

久しぶりの冒険で早起きしてしまったのか、機嫌よくアイリスが部屋に入ってくる。

「おはようございますユウマさん」

「ああ、おはようアイリス」

にっこりと笑う姿にさらさらとした金髪。

とどめの熊の絵柄の入ったパジャマは大きなお友達たちも発狂レベルの破壊力。

そこに、王女としての責務からふっ切れた感じが合わさって年相応の少女という感じがよく伝わってくる。

正直の所、朝だからとか関係なくいろいろとやばい。

別にロリコンという訳ではないが、アイリスのたまに出てくる無邪気さは、エリスやゆんゆん以上にドキドキさせるものがある。

「ユウマさん、浮気はだめですよ」

「う、浮気って！まだ、俺たちは付き合ったりとか」

「でも、キスはしたんですよね？」

「あれは……、その、なんというか。……、つか、何でそれを知っている！」

「ふふふ、やっぱり、ユウマさんはおもしろいですね」

あの現場を見たやつといえ、ただ一人。

あの爆裂女！

次から次へと言いつらしやがって！

「でも、ユウマさんもユウマさんです。エリスさんの前で今のことを言ったら当分は口を聞いてくれませんか？」

「だから、そういう関係じゃ。確かに守るとは言ったけど、そんな奥深いことじゃ」

「だーかーら。どうやら、ユウマさんには乙女心は理解できませんか。痛い目にあつて、気づいてください」

呆れた表情でこちらを見るアイリス。

さすがの俺もここまで言われれば理解はできる。

しかし、俺は生まれてこのかた女性との交流は小学生以来ほぼ皆無だ。

経験値が足りなすぎる。

さすがにどうしたものか。

「そういえば、アイリスは起きるの早いな。そんなに楽しみだったのか?」

「はい、すごく楽しみです。なんだって、今回はベルセルクの国を出るんですから」

そういえば、そうだ。

今回は今までにない未知なものだ。

少し時は遡り、昨日の王城でのことだ。

アイリスを魔王退治のパーティーとして連れていくためのレインさんからの条件。それはカズマ達を抜いた俺たち4人のパーティーの平均レベルを40超えにするこ
と。

または、世界最大にして最果てのダンジョン。

そのベルセルク王家もまだ未探索の階層を探索することだった。

ここで、一つ確認として我がパーティーのレベルを見てみた。

エリス、アークプリーストでレベル26。

ゆんゆん、アークウイザードでレベル24。

アイリス、英雄仮（冒険者ギルドへの職業登録無し）レベル30。

そして俺、アークウイザードでレベル20。

……、おかしい。

アイリスは小さい頃からいいものを食べたり英才教育でレベル上げてたし、つい最近大物を倒したからそれなりのレベルの高さなのはわかる。

エリスやゆんゆんは魔王軍幹部を倒したりなどはしてないが、教会の手伝いや修行でモンスターを倒してるからレベルが上がってるのもわかる。

しかしだ。

なぜ、2体の魔王軍幹部を倒して、デストロイヤーだって完全破壊したはずの俺が一

番レベルが低いのだろう。

ウイザードからスタートだったからか？

めぐみんにいいとこ持ってかれたりして、経験値が半々になってるのか？

理由は謎だが、パーティーが一番レベルが低い。

そんなこんなで絶望した俺は、何年かかるかわからないレベル上げを諦め、世界最大のダンジョンの探索を選んだ。

まあ、おかげ様でアイリスは久々の冒険者に心踊らせていてよかったといえよかつた。

しかしだ。

「そのお祭りが気になるんですか？」

「ああ、このパーティーでお祭りとか行ったことないしな、できれば行きたかったけどちやうど期間が重なったからな」

「こう言うのはあれですけど、私も毎年、挨拶としてお祭りには参加していたんです。ですが、皆さんで騒いで楽しむというよりは、お祈りをして静かに楽しむもので、そ

れほど楽しいものではないですよ」

「え、そうなの？」

これは予想外だ。

エリスのためのお祭りだと思ったら、祈りを捧げる感謝祭だったとは。

少し残念だが、エリスからしたらやっぱり大切な日だろう。

できたら参加したいのだが。

「まあ、こつちも期限付きだからな。遅らせる訳にはいけないよな」

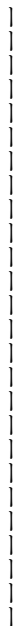
「で、でも一つ、エリス祭といえば花火大会といわれるものが、最終日に行われます。早く終わらせて、レポートで帰ってきて見るのはどうでしょうか？」

花火大会だと!?

相変わらず、文明が遅れているのか進んでいるのか、ごちゃ混ぜすぎて頭を悩ませられるが、そんな一大イベント見逃す訳にはいかない。

「そうだな。さっさと終わらせて、みんなで見たいな」

上り始めた太陽の薄い光が部屋を照らす中、アイリスはただ静かに、俺に笑い返した。



祭の用意でいつもより賑わうメインストリートを抜け、いつものあの店を目指して通りを歩く。

「こちらはいつもと変わりませんね」

「祭の中心はメインストリートの大通りをまつすぐだからな。住宅地側は寂しいまんまだよ」

というわけで、魔道具店に行くと言うとほぼ絶対ついてくるエリスと一緒にです。

まあ、なんというかこの前の一件以降、いつも通りの調子に戻ったのか、バニルに力チコミに行こうするいつものエリス戻っている。

元に戻ってくれたことは確かにうれしいのだが、バニルのめんどくさそうな顔が今から目に浮かぶ。

まあ、実力的にはバニルの方が上だから大丈夫だろう。

「それにしても、今回の冒険。私たちだけなのは初めてですね」

「ん？あ、そうだな。いつもはカズマ達パーティーと一緒にだもんな」

実は、今回初めて俺たちパーティーだけの冒険だ。

理由は簡単だ。

単純にカズマを誘ったら断れたからだ。

ここ最近では冒険続きで、あつちこつち国の中を回って、行く場所場所で魔王軍幹部やらと戦ってたせいで疲れたらしい。

思い返せば確かにそうだったと、無理に強要はしなかった。

なにげに、俺たちパーティーだけの冒険で、しかも初めて国の外にでることに心のどこかで楽しんでいる。

ちなみにだが、俺たちが冒険に出ている間カズマたちは、たまたまなつた祭の実行委員会を魔改造するらしい。

忙しいもんですね……。

「あーユウマさん。あの方は」

突然、驚いた表情でエリスが指差す。

「あの人って……」

そう、そこにいたのは以前アルカンレティアの街道で会ったアクシズ教の残念シスターのセシリーさんだった。

「何か探しているのでしょうか。さつきほどから、左右を気に歩いています」

「なんで、この街にいるのかはさておき。今日の昼過ぎには出発したいから、やり過ぎそう、って気づかれた！」

ちようどこちらが物陰に行こうとしたとき、目があつてしまった。

「あー！ユウマ君にクリスマスちゃんじゃない!!久しぶりー」

「はい……、お久しぶりですセシリーさん」

宝物を見つけた子供のように目をキラキラさせたセシリーさんに少し引きつつも、エリスの方を見る。

……、どうやらエリスも引き気味のようだ。

「と、ところでセシリーさんはどうしてこの街に？確かセシリーさんは総本山アルカンレティア担当だったんじゃない」

「あー、それね。実は司祭のゼスタ様からの特命でね、この街のアクシズ教会の責任者に任命されたの！」

「え」

空いた口が閉じられないとはまさにこの事か、あまりの衝撃に俺もエリスも次の言葉を出せずにいる。

この街のアクシズ教会の責任者だと。

つまり、これからこの街に住むと。

「どう、どう？うれしい？もちろん私はうれしいわよ。これからはあなたたちにも毎日会えるし、それに、紅魔の妹にも会えるからね」

紅魔の妹……。

なるほど、わかった。

完全に理解した。

あのとき感じた、違和感はまさにあれだ。

あの爆裂マセガキのことだ。

それしかない。

この街にいる、紅魔族は二人。

だけど、ゆんゆんじやこの人にはついていけない。

そう確信できる。

それなら同族みたいな雰囲気を持つているめぐみんこそセシリーさんの妹？なんだろう。

よし、終わり、閉廷、解散。

「その、もしかして妹っていうのは……」

「あ、そうだった！もうこんな時間！せつかく会えたのに、私もういなくなっちゃ。今度は教会でゆっくり話ましょ！じゃあ」

その言葉はちょうど12時を知らせる鐘の音に妨げられ、嵐のように現れたセシリーさんは、まさに嵐のように消えていった。

「忙しい人ですね」

「ああ、もう疲れた」

エリスの苦笑いに答えながらも、今の意味不明な時間は何だったのかと、歩きを再開し始めた。

第41話 旅立ち

「何度言ったら分かるのだ、この駄目店主!!」

毎回毎回同じことの繰り返しに、呆れを越えた怒りは周りの家々に響いた。という状況を店の扉の前で見ている俺とエリス。

「……、あの」

「いや、言わなくていい。うん、いつものことだ。ちよつと深呼吸して」

空気を大きく取り込んで、1、2。

よし、行くか。

呼吸をおいて扉を開ける。

その時だった。

「ええい！今日という今日は容赦せぬぞ、馬鹿店主！《バニル式殺人光線》！」

「ウギヤアー」

「うおっと、危ね！」

乱射され、流れ弾として飛んできた殺人光線を結界で弾く。

名前からして当たってたら死んでいただろう。

ちらつとこちらを見たバニルは、俺がかわすこと前提で乱射したらしい。

「おっと、らっしやいお客様。そちらの客人もまた華やかな姿ではないか。フハハハハ！」

さっきのやり取りはどこかえと、パツと切り替えて対応してくるバニルはいきなり笑

始める。

そちらの客人……？

「ええ、おかげさまでおろしたばかりの服がボロボロになってしまいました。弁償してもらいましょうか。あなたの命で」

いつの間にか取り出した聖槍を構えながら、バニルに微笑みかけるエリス。
もちろん目は笑ってない。

「ストップ！ステイ！ステイだエリス！喧嘩を売るために来たんじゃない」

「いえ、私は喧嘩を売られたほうです」

「うむ、我輩は別に悪気があつたわけではない。ただ少し、質素であつたため付け加えてやっただけだ」

「止めろバニル。あんたも油を注ぐな」

いがみ合う二人を止めながらも倒れこんだ師匠を起こす。

さすがリツチー、焦げてはいるが元から死んでいるからか、戦闘不能なだけで消えてはいない。

「それにしても坊主よ。今からでも遅くはない。選択肢を変えるがよい。我輩が手伝ってやる」

「せっかくのお誘いだが、選択肢は変えないし、あんた、前に選択肢は変えられないって言っただけでなかつたか？」

「冗談だ。その通りだ選択肢は変えられぬ。それにお主はいろいろ手遅れだからな」

「？」

アクアにしろバニルにしろ、最近は特にその事について言ってくる。

どうということなのか？

何度か質問したことがあるがいつも適当なところではぐらかされるので、もういいやと個人的には思ってきているのだが。

「まあよい。そのうちわかることだ。それでだが、坊主。お主が言おうとしている用件だが一つ条件がある」

仮にも見通す悪魔。

俺がここに来た理由などつくに見通し済みらしい。

「また、勝手に見通しのか。まあ、あまりいい気分はしないが条件って?」

「なあに簡単だ。今回の冒険、そのうつけ店主を連れていってくればよい」

「なっ!」

まったく予想外の条件に、エリスまでも驚いている。

師匠ことウイズさんは仮にもこの店の店主。

それを厄介ばらいするとはなんと言ったらいいのか。

「別に引き取れとはいってもおらぬ。ただ少しの期間この店から遠ざけてくれればよいのだ」

「でも、師匠はこの街の冒険者の中では人気者中の人気ものだ。それなのに当分いなくなったらどうなることか」

「そこは安心するといい。我輩が化ければいいからな」

なるほど、どうやら本当に師匠は厄介ばらいのようだ。

「勘違いするでない坊主。このままでは我輩が夢を叶える前に人類が減んでしまう。いくら貯めても、すぐにゴミに変えられ、仕舞いには家賃まで払えていない。進んだと思えば、振り出し以下に戻される我輩の気持ちを分かってくれ」

どうやら相当心にきているらしい。

七大悪魔のメンタルをブレイク近くまで持つていける師匠の才能にはある意味驚か

され、バニルに同情してしまう。

「わかった、引き受けるよ。エリス、悪いけど師匠のことは頼む。それで、例の物だけど」

くたくたになった、体で奥の部屋に取りに行くバニル。

一応、なんでここに今日来たのかについて話すとしよう。

簡単にまとめると武器のオーダーメイドをしたのだ。

以前、シルビア戦でインストールした武器の中にあるコルトパイソン。

この銃の弾をオーダーメイドしたのだ。

剣と魔法のファンタジー世界に科学の産物を使うのは少々気が引けるのだが、俺がインストールできる回数は2回。

安全を考えれば1回だけ。

しかもこの回数は爆裂魔法の回数も含まれている。

そのため、今ある武器でなんとか戦えないか模索した結果、このコルトパイソンを使用することにした。

「ほれ、坊主。例の品だ」

バナルに渡された箱を早速開ける。

その中には水晶のように透き通った、銃弾が10発綺麗に並ばれていた。

「お主の体を用いて作った最低限の物だ。さすがにこれ以上を作るなら、お主の肋骨が必要になるぞ」

起源弾。

これが今回バナルに頼んで作ってもらった弾丸だ。

名前の通り、生物の一部を触媒として作り、その触媒となった生物の起源を発現させる弾だ。

正直最初は短剣にこの仕組みを導入をしようと考えたのだが、俺の技術や知識では到底できなかったためバナルに頼んだのだが、俺の差し出した触媒で短剣を作るとさらに使用できる本数が少なくなってしまうことから、弾丸にしたのだが。

それでも10発が限度らしい。

「いや、これで充分だよ。数には限りがあったほうが、丁寧に使おうと思えるからね」

「しかし、お主の世界には物騒なものが溢れているようだな。それを作つて国に売れば我輩の夢もすぐに叶えられるのだがな」

「あんたは戦争を起こしたいのかよ！」

「冗談である。ほれ、さつさと行くといい。その脳筋女神が今にでも我輩に攻撃を仕掛ける目になっておる」

とまあ、さすがにこれ以上いるとエリスがヤバイので店を出る。

目的の物も手入れ、そろそろ時間的にもいい。

それじゃあ、乗り場にでも行くとするか。

脳筋女神を連れて旅立った背中を扉越しに見送る。

ここ最近では貧乏店主もこき使っていたのだから、まれには外に出すのも悪くはないだろう。

我輩からしても貧乏店主がいなくても金で貯めることができよいか。

「選択肢は変えない、か」

本当、どこまで似ているのだろうか。

あやつを見ていると、懐かしいことを思い出させてくる。

「何かを救うには何かを捨てるしかない。小を取るか大を取るか、正義とはいつもそういうものだ」

あやつは自分が破綻していることに気づいているのだろう。

しかし、徐々にその傷が広がっていることにまだ気づいてはいないようだ。

「壊れきるのが先かそれとも」

本当にあの女神を救ってしまうのだろうか？

どちらにしろ、結末にたどり着く際にはやつは……。

ここに来るのも二度目になる。

アクセルの街で多分二番目に人の多い場所。
それがこの乗り場だ。

「おーい、ユウマキーン！こっちですよ」

声をする方を見ると、まとめた荷物を足下に置いてアイリスとお菓子食べているゆん
ゆんがこちらを呼んでいる。

「お、悪いな乗車券の確保なんてやらせちゃつて。それにしても、うまそうなの食ってる
な」

「ゆんゆんさんのおごりなんです。ユウマさんには食べさせてあげません。あ！エリスさん食べますか？」

なにやら俺に意地悪なアイリス。

それにしても、エリスへのなつき度はなかなかのものだ。

「駄目だよアイリスちゃん。ユウマさんにもわけないと。ユ、ユウマさん……。私の食べませんか？」

「ああ、いいよ俺は。せっかく自分のこづかいで買ったんだから、自分で食べないと。もつたいないぞ」

実はちよつぱり、このゆんゆんとアイリスが手にしているお菓子、クレープのようなものに興味があった。

だが、今はこの雰囲気だけでお腹一杯だ。

「あれ？その背中の方は魔道具店の店主さんでは？」

「これにはいろいろあつてだな。とりあえず、その話は後でにして師匠も今回は同行することになったよ」

「その、なんだかウイズさん、今にも消えそうですよ」

「あ、マジだ！エリス、水と砂糖頂戴！とりあえず、乗って手当てしよう。ゆんゆんはその乗車券を運転のおじさんに渡してくれ」

「バニル式殺人光線が相当の威力だったのか、とつと乗車して師匠もの手当てをすることにした。」

「それじゃあ、乗りましたね？……出発！」

「運転のおじさんの掛け声とともに馬車が動き始める。」

「おーい、ユウマ！」

客席から顔を出すと、そこには祭りの実行委員として準備に来ていたカズマが手をふっていた。

街をながられる川を越え、アクセルの門を出る。

まだ、どこかの爆裂狂に穴あけされてない野原が一面に広がっている。

こうして見ていると、アクセルの外に冒険として出るのは初めてなことに気づく。

今まではカエルの討伐やら、デユラハン退治、テレポートでアルカンレティア、パニルの背中に乗って王都など、ゆったりと馬車に乗って旅なんてことはなかった。

これが、剣と魔法の世界での冒険。

誰もが一度でも子供の頃憧れたもの。

新鮮さと期待を持って馬車は進んでいく。

目指すは世界最大のダンジョン。

ベルセルク王国と他国の境界にある小さな街。

話によるとこのダンジョンを観光地として栄えているらしく、初心者上がりから国のトップ冒険者などが集まってるらしい。

最近のはりつめてばかりで、少しはリラックスして観光でもしたいものだ

第42話 夜空の下で

馬車に揺られて1週間がたった。

夏の暑さを照りつける太陽を恨みながらも、馬車の中でとろけている俺たち。

砂糖水と適度な栄養によってなんとか調子を取り戻しつつある師匠を交互に看護しながらも、1週間の馬車生活に名残り惜しく外の景色を眺める。

ベルセルク王国と隣国の境にある小さな街。

世界最大のダンジョンのある街につくのにあと一日というところだ。

「んっ。……あれ、(ハハ)はっ」

「あ、店主さん！おはようございます」

「イリスさん？おはようございます。……あれ、私は確かバニルさんの光線を受けて」

1週間の眠りからついに師匠が目を覚ます。

「どうやら、バニルに攻撃された所で完全に記憶が止まってるようだ。」

「お久しぶりです師匠」

「あら、ユウマさん。お久しぶりですね。それにしても、ここは？」

「とりあえず殺人光線を食らったところから説明をした。」

「そんなことでもって、アイリスのこと、世界最大ダンジョンの攻略またはレベリングを課せられたことも。」

「そんなことがあったんですか。それにしてもイリスさんがあのアイリス様だったなんて」

「様は止めてください。どうか、今まで通りに接してもらえれば」

「そういうことで師匠。手伝ってくれないでしょうか」

「ええ、いいですよ」

「あ、あつさり！」

「世界最大ダンジョン、別名最果てのダンジョン。私も普段ここにアイテム回収に来るんですよ。一応、ダンジョン内はそれなりに攻略してきたつもりです。まかせてください」

師匠は前は凄腕の冒険者と聞いていたが、まさかお散歩感覚で最大のダンジョンにアイテム回収に来るなんて。

やっぱり、俺たちとはレベルが違い過ぎる。

「ユウマさん！そろそろ席の交代の時間ですよー」
「見張りお願いします」

とここで馬車の外で見張りをしていたエリスとゆんゆんが入ってくる。

「ウイズさんもう体は大丈夫なんですか？」

「ええ、この程度なら全然です。バニルさんには徹夜で2週間もアイテム作成をさせられていたので多少の無理は無理になりません。今までお世話をしていただいた分、見張りは私もします」

「そ、それは助かりますが。……あの悪魔そこまで性根の腐ったことを。帰ったらやきいれます」

「おーい。そこ、どうせ遊ばれるんだから変なこと言わない」

と言うわけで、馬車の外に出る。

森を抜け広い高原を進む馬車は、一面緑に囲まれていた。

「爽やかですなー！」

「いえ、暑いです。師匠はなんでそんなに涼しくいられるんですか？」

「私はリッチーなので体温が冷たいんですよ。これくらいの暑さだと清々しくなるくらい」

「どうやら、死者の体とは相当冷えるらしい。

するも冬は固まるくらい寒いのか？」

「とはいえ、私は既に死んだ身です。体温と言えるものがないんですよ」

「どこか寂しそうに遠くを眺める師匠。

やはり、人肌が寂しくなることがあるのだろうか。」

「ユウマさんは私に聞きたいことがあったのではないんですか？」

「あ、やっぱりバレてましたか」

「ええ、私もいろんな方々と会ってきましたからね。それなりに人の考えは分かります」
「そうなんですか。じゃあ。えっ、へ 因果を絶ち悪を切り裂く正義の剣」ってわかりますか？」

俺の言葉に少し動揺する師匠。

そして、覚悟を決めたかのように口を開く。

「はい。これでも魔導を極めようとした身です。その剣にかんしてはそれなりに理解はしています」

「そうですね。なんと話すべきか、最強の幻想と言ってわかりますか？」

「確か、星が作った神造兵器。その最高傑作だったとか」

「そうです。それが最強の幻想へラストファンタズムですが、へ 因果を絶ち悪を切り裂く正義の剣」は少し違うんです」

「少し違う？」

「はい。へ 因果を絶ち悪を切り裂く正義の剣は星が造ったものではなく人の想いが造ったものです」

人の想い。

あの剣を握ったときに感じた光。

それは人々の望んだ、求めた正義だった。

「そのため、あの剣は選ばれた人間にした使えないんです」

「選ばれた人間」

「そう、正義を求める人間じゃないといけません。私もかつて一度だけかの剣を担う権利を得ました。ですが条件は満たせませんでした」

「私は仲間を救うために戦い、この身になりました。その正義はきつとあの剣を使うの相応しいものだったのでしょうか。しかし、私はそれを得ると共に人であることを捨てたんです。だから、あの剣を担うことはありませんでしたし、その性能を理解することはできませんでした」

師匠がリッチーになった理由。

それはかつてアクセル近隣の廃城で戦ったデユラハンの呪いから仲間を助けるためだったらしい。

何かを救おうとする気持ち、それがあの剣を担う権利。

そして、人々の想いを背負うために人間でなくてはいけない条件。

「あなたがその想いを捨てない限り、人々の正義はあなたに力を貸します」

「でも、あれつきりあの剣を使えなくて」

「それは、相手が絶対悪ではないからだと思います。あの剣は正義の象徴。人々に仇なす絶対悪にしか向けることができないんです」

なるほど、なんとなく理解はできた気がする。

あの時あの獣に剣を向けられなかった理由、あの獣自体、根から人を恨み呪うものはなかった。

だから、使うことができなかつたのだ。

「そんなに詳しくはわかりません。ですが、一つあなたが思った正義は誰がなんと言おうと正しいということです。絶対に捨てないでください」

いつもからは考えられない真剣な師匠の眼差し。

その目にはたしかな彼女自身が抱いた正義があつた。

時刻は夕暮れ時。

世界最大ダンジョンのある街、近くにある海小屋に俺たちは寝泊まりの準備をしていた。

あれから、師匠とは魔法のことについてさらに詳しく教えてもらっていた。

しばらくして、海が見えてきたことでみんなの気分は最高潮。

アイリスをはじめ、エリスやゆんゆん、さらには後ろをつく他の馬車に乗っている人達までも大きな歓声をあげていた。

基本的に馬車の運転手を中心となつて夕飯から寝泊まりの準備をしてくれたおかげで、乗客は夕飯までの間フリーの時間が与えられた。

「それにしても、広いなー」

海近くの宿泊施設にて有名な温泉があるとして、せっかく来てみたが、あまりの広さに俺一人ではもつたないくらいだ。

ちなみに、この温泉は混浴なため、エリス達を誘うのも……。

いや、それは確実に殺される。

風呂に入りながら見る夕日と海は格別だ。

心身ともにリフレッシュできる。

この世界にきてはつめこみすぎたスケジュールばかりで、正直意志に体ついてくるか不安だったが。

意外となんとかなるものだ。

それにしても、温泉は素晴らしい。

この1週間、ちゃんとした宿泊施設に止まっただけだったが、湯船がなかったぶん、リラック스는できなかつた。

「あぐづかれたー」

「あら、先客がいたの」

突然の声に体が固まる。

この声は女性だ。

「そんなに、固まらなくても。こういう場所は気持ちを和らげるところでしょ？」

「ええ、そ、そうっすよね。……!!」

振り向くとそこにいたのは、ピンク髪のナイスバディのお姉さんだった。
もう一回言う、ナイスバディだ。

「そんなに見つめられると、少し困ってしまうのだけど」

「あ！え、すいません」

「以外とピュアなのね。お姉さん、そういう子好きよ」

なんとというべきか、圧倒的大人の色気！

今までの18年間でただの一度の感じたことのなかった、圧倒的な色気だ。

「うふふ。それにしてもこの景色は最高でしょ？アルカンレティアや紅の里とかいろんな所を巡ったけど、ここに勝る所をなかったわ」

「お姉さんは温泉が好きなんすか？」

「ええ、大好きよ。ほら、生きているといろいろと大変じゃない？そんなときこうして温泉に入ると心身ともに休めるじゃない」

なんだろう。

この人から仕事に疲れた社畜の感じがするのだが。

それにしても、長く入り過ぎた。

そろそろ出ないと。

「よく理解できません。つて、そろそろ自分上がりますね」

「あら、せっかくお話できたのに。まあ、でも仕方ないわよね。あなた名前はなんというの？」

「ユウマです。ただのしがないアークウイザードやってます」

「その年でアークウイザードって立派じゃない。私はウォルバク。またどこかの温泉で会いましょ」

軽く一礼して温泉を出る。

いろいろとやばかったが、なんとか静かでいてくれた俺の相棒にはさすがとしか言えない。

「温泉か。たまにはいいよな」



それから、夕飯を食べてすぐに寝床についた。

ここ最近、毛布で雑魚寝だったのだが、今回の場所ではなんと全員分のベットがあ

るということでパーティでまとまった部屋だったが、満足に眠りにつくことはできた。

風の音がする。

自分の呼吸と自然の音以外なにも聞こえない。

鼻には何かか燃えた臭いがつく。

すでに人の生活の営みは消え、その存在も確認できない。

それなのに、空はきれいに青く澄み渡っている。

何かの戦争後なのか。

自分の意思では止まる事の無い足。

片手には銃を持っている。

ああ、これはきつとこの銃の記憶なのだろう。

選択肢を謝った俺の辿った未来。

望んだものを手に入れられたのに、全てを手放した愚かな選択の結末。

いくら進んでも、いくら辺りを見回しても誰もいない。

あるのは瓦礫の山と自分だけだ。

エリスは、アイリスやゆんゆんはどうしたのだろうか。

カズマ達は師匠はどこに居るのだろう。

ただ虚無感だけが心を蝕んでいく。

ー。

「うわー！」

慌てて目を開けるとそこは宿泊施設の部屋の天井。

月明かりが部屋の中を薄く照らし、波と鈴虫の音が聞こえる。

周りには仲間たちが。

……エリスの姿だけ見当たらない。

どこへ行ったのだろうか。

扉の方から風を感じる。

よく見れば少し開けっ放しだ。

案の定というべきか。

空の月と星の輝きに照らされて、エリスは海を眺めていた。

「眠れなかったんですか？」

「いや、ちよつと嫌な夢を見て起きちゃった」

横に並んで海を見る。

思い出せば、海を見るのは何年ぶりか。

だいぶ前すぎて覚えていない。

だけど、海、月や星はあの世界とは特に変わらない。

「星が綺麗ですね」

「海も綺麗だよ」

「ふふ、ですね」

その晩は二人で夜空の写る海を眺めた。
日々の辛さを今だけ忘れて。

きつと明日にはまたドタバタするのだろう。
そんなことにお互い備えて、ただ静かに眺めていた。

第43話 勇者佐藤

「うわー！あれが、世界最大のダンジョン」

馬車から顔を出し、嬉々とするアイリス。

初めての来る場所に胸を踊らしている姿に、自然と笑みがこぼれる。

無論、アイリスだけじゃない。

エリスやゆんゆん、そして俺も、みんなが心の底から楽しみにしているのだ。

「世界最大のダンジョン。このダンジョンを観光地として栄えていて、街の規模はアクセルと同等、その賑わいは王都とさほどかわりがないほどです」

まるでバスガイドのように説明をしてくれる師匠。

その様子は落ち着いているように見えてどこか楽しそうだ。

「ちなみに、他国の境にあるほか、海に面し港を持っていることから交通の便がよく、各地からこのダンジョンに力試しやアイテム集めにくる冒険者が多いことも特徴。私は冒険者を辞めた今でも、素材集めによく来ます」

そう、話によればこのダンジョンで採れる素材はピンからキリまで幅広く、商人の穴場スポットでもあるとか。

ちなみにこのダンジョンの階層は1階からBF99階。

最下層に近づくにつれ、モンスターは手強くなり、採れる素材レア物ばかり。

その一部は師匠の店にも置いてある。

てか、もう師匠が集めて、バニルに横流ししてもらったほうが儲けられるのでは？

「脱初心者から上級者、国の騎士達まで探索に来るのに、未だに最下層に行けたのはわずか4人。しかも、下りる場所がそれぞれ違ってたことから明確なルートはない模様。うわさによればこのダンジョンのどこかには地獄に繋がってる場所があるとかないとか、挙げればきりが無くなるほどいろんな噂がある」

「え、地獄ですか！是非見つけましょう！見つけて埋めましょう。それと先輩の大魔法で水没させて……」

「ストツープ。エリス、俺たちの目的はメンバー全員のレベル40、または最下層へのルートを見つけること。変なことで時間を使うことはできないぞー」

ぶっちやけた話、最下層へと目指していればレベルもそれなりに上がる。そしたらすぐに帰るのつもりだ。

正直、最下層はレベル40でもムリゲーだ。

まかり間違つて、行けたとしてもそのモンスターに瞬殺されるオチ。

だから、あくまでも目的は40レベ。

これ一筋だ。

「それにしても」

右手に持った新聞に目を戻す。

安全地帯日本とは違って、さすがは異世界というべきか。

普段のほのぼのの裏には問題がいろいろとある。

『少年少女の神隠し事件』、『魔王軍幹部ついに姿を現す、第一砦危機』、『隣国エルロードレヴィ政権崩壊』、『今年も迫るエリス祭、アクシズ教徒乗っ取りか』。

……。

ふあ!?

お、落ち着け、俺。

とりあえず、最後の一文は見なかったことに。

……、何やってんだよカズマー!!

「やっぱ、最下層目指すか」

「え、速く終わらせるのでは?」

「じゃあ、最低でも2週間はここにいろか」

「お話はお伺いしております。職員一同、皆様のこと心よりお待ちしていました」

気持ちのいい挨拶に出迎えられる。

さすがは公務員、作法が素晴らしすぎる。

特にこの礼！

ホテルマンもびつくりの角度に綺麗さ。

一日中見れられる。

というわけで、宿よりも先にギルドへと顔出し。

こちらのこととは分かっているようで、準備の方は先に進めてもらっている。

「冒険者カードの更新完了です。ダンジョンに挑む際は必ず、このギルドを併用してください。それと、こちらが王国調査員の証明書になります。こちらはダンジョンの係員にお見せください」

「以上が、一通りの説明となります。何か質問などはありませんか？」

「ええ、それなりに理解はできました。親切にありがとうございます」

「かしこまりました。それで、皆様のご健闘お祈りします。あ、失礼しました！アイリス様。クレア様からつい先程ご連絡がこのあと、奥の連絡室にお願いします」

「ご丁寧にありがとうございます。もう、クレアったら。皆さんは先に宿に行ってください」

「さすがに、一人にはできません。私もついて行きますね」

「おう、エリス頼む」

クレアさんの圧倒的な過保護に言葉を失う。

いや、思い返せばアイリスを見る目がかなり危なかった気がする。

王都は大丈夫なのか？

あの舐め回すような目つき。

スキル、野獣の眼光Aランクだな。

「それじゃあ、宿に向かうとして……」

いや、宿に向かいたいのには山々だが、あの調子だと軽く日暮れまではかかるだろう。

それなら、ダンジョンの下見やらやりたいが。

「おう、兄ちゃんが噂の魔法使いさんかい？」

後ろから野太い声がくる。

振り返れば、あきらか重戦士な格好をした20代？くらいの男性がいた。

「さつき、ギルドの役人の話を小耳に挟んだんだが、うーむ。その体格と杖すら持つてない必要最低限の装備、盗賊家業かと思つたぜ」

「いやいや、魔法使いだなんて。俺はそんな大したものじゃないつすよ」

「またまた。噂によればあのデストロイヤーをやったらしいじゃねえーか」

「おーい、アーチャー。何話してるんだ？」

その後ろから今度は二人。

今度はわかりやすい装備で、槍使いの男性と多分魔術師だろうか、かなりのナイスバディの女性だ。

「ユウマさん、すごいですよ！あの人たちは隣の国の最強パーティーの一角、数多の怪物や、賞金首を狩ってきた人達です！」

「あら、可愛らしいお嬢さん。あなた、紅魔族ね？」

「え、あ、はい！」

「おい、聞いてくれよ。この子たちが噂のパーティーだぞ」

「ほーん。……なるほどね」

アーチャーの人から話を聞いて、目を細めるランサーの人。

ちよつとして、なにか理解したようだが、なんなのか？

「話によればあと二人、剣士と聖職者がいるようだが。なるほど、君結構鍛えてるだろ？」

「一応、日課なので」

「走ることだけに特質し、余分なものを取った下半身。それに比べ上半身はあまり筋肉がつかないようだな」

「ほう、魔法使いと思ったら、ただの筋肉バカとききたか！」

「お前も人のことは言えないだろう。そんな重装備で弓を刀のような振り回すやつがどこにいる。とりあえず、青年。ようこそ、世界最大のダンジョンへ歓迎する」

「あ、ありがとうございます」

このランサーの人、かなりの芸達者だ。

こちらの分析をこんな短時間で、それに、当の本人も必要なもの以外は削いである体。本物だ。

「噂よりもいい子たちじゃない。良かったわね、アーチャー？」

「さつきから、その噂って言うのは？」

「なーに、ろくでもない嫉妬だ。実績を鼻にかけた、高慢ちきなるくでなしパーティーと言っている者がいてな。実際に役人の話とお主らを見たら、まったく違ったというものよ」

高慢ちきとは心にくるな。

そう言われるのは結構慣れてるが、仲間まで貶されると、言ってる奴をとつちめたくなる。

「まあ、何にせい。実に話の分かる坊主でよかった」

「話が分かるといえば、例の勇者もそうだったろう？」

「あれは駄目だ。剣の力に頼ってはだけで、ただのもやしだ」

剣の力というとミツルギのことだろうか？

「あの、その剣の使いって魔剣使いだったりします？」

「う？ああ、あのいけ好かないガキとは違う。本物の聖剣使いだ」

「そう、おとぎ話の英雄。かつて女神の導きによって、魔王を討ち取ったとされる、勇者

佐藤の子孫よ」

勇者佐藤。

この世で最初に魔王を討ち取った勇者。
デストロイヤーのできる、何百年も前の伝承で諸説は色々あり正しいことは分かってないらしい。

話によれば、ベルセルク王国を建国した初代王だったり、魔王討伐後に実は二代目として魔王をやったり、また違う話では、この世界最大のダンジョン、その最終階層の果てに玉座を構えているやら、いろんな話がごっちゃになっている。

ただ、正確に伝わっているのは佐藤という苗字と女神からチート武器を貰った日本人でことくらいだ。

しかし、よく考えればおかしなもんだ。

アイリスの剣は確かにあの最強の聖剣。

しかも、その最初の持ち主は異世界から来て（多分日本人だが）、魔王を倒したという。ルーツが同じだからといえ、聖剣が二本あるのはおかしい。

それじゃあ、どちらかが偽物になるからだ。

アイリスのあの一撃は到底偽物とは思えない。

逆に、その勇者の子孫も嘘とは断定できないし。

頭がこんがらがる。

「大丈夫ですか？」

「あ、いや、大丈夫だよ。ただ考えてただけ」

ゆんゆんが心配そうに見てくる。

とりあえず、この話はあとでエリスに聞くとして。

いい加減宿に行こう。

さすがに師匠一人に留守番はあれだ。

「あれ、工藤さん？」

ふと、前を見れば、見慣れた茶髪と神気。

「サツキさん？」

「お久しぶりですね。クリスから話は聞いてます。王都で派手にやったとか」

「派手にやったのはそちらの相方のほうなんです。あ、そうだ。紹介するよ。えーと」

「後輩のエリスと同期のアクアがお世話になっていきます。掘り出し屋と冒険者を兼用しているサツキといます。以後お見知りおきを」

「はい！こちらこそ、いつもエリスさんとアクアさんにはお世話にな、なっています！ゆんゆんといっています」

「

こんなに他人と話せたのは生まれて初めてと、泣き始めるゆんゆん。最近はこの癖が落ち着いたと思っていたが。

俺たちの知らないところでやっぱり、こじらせちゃったのかな……。

「かなり、シビアな子なんですわね」

「はい……」

それにしても、こんな所で会うとは驚きだ。

格好は前に掘り出し屋であった時とさほど変わらないが、冒険をするにも、相方の姿が見えない。

「クリスなら、今ギルドでダンジョンの探索届けを出しに行っているんです。私たち、ここにはよく来るんです。掘り出し物集めにはピッタリなんですよ」

「なるほど、横流しですか」

「そういうことはあまり見ないで下さい」

「はい」

なんとという威圧。

目の笑ってない、満面の笑み。

エリスの笑みはこんな所から、受け継がれていたのか。

「ユウマさーん。まだ、こんな所に。さすがにウイズさん一人は寂しそうです……よ」

「お久しぶりですねエリス」

「さ、サツキ先輩!? な、なんでこんな所に!!」

ついに、出会ってしまったか。

動揺が隠せないエリスとにこやかなサツキさん。

てか、エリス、幽霊が出たみたいな反応やめーい。

「私たちの知らないところで、他の女性と関係を持ってたんですね」

「おい、いきなり現れて、意味深な言い方はやめてくれよアイリス」

突如横から現れたアイリスの一言に、エリスが俺の方を向く。

サツキさんはにこやかですね。

あーらま。

こりや、ちゃんと説明しとくべきだったか。

第44話 それが一番大事

相変わらず、和やかな笑顔のサツキさん。

そして、いるはずのない相手に動揺を隠せないエリス。

まるで、やらかしたときの俺とエリスを見ているようだ。

というより、エリスのマウントをとるような笑顔はサツキさん譲りだったことにさらに驚く。

まあ、考えてみればこの二人はなんとなく似ている。

いや、アクアがこの二人よりかけ離れ過ぎているのか。

「ハックション！」

「おいおい、アクア。こんな時か夏風邪か？」

「今、誰かが、この麗しき女神様で不浄の妄想をしたわ！」

「なわけあるか。どうせ腹出して寝てるから風邪ひいたんだよ」

「いや、絶対……。て、なんであんたが私の寝相をしてるのよ。まさか、夜な夜な夜這いに」

「笑わせるなよニート女神。お前、いつも酒で寝落ちしてそこら辺のソファで転がってるだろ！」

今どこかで痴話喧嘩してる姿が映ったのだが。

まあ、いいか。

「な……。なんで、あなたがここにいるんですか!？」

「てへ」

「てへ。じゃないですよ！勝手に人を送っておいて、自分はフリーって。いいわけないですよ！先輩!!」

「先輩……。なるほど」

なんとか察してくれたアイリス。

説明の手間が省けてありがたいのだが、これはどうするべきか。

「別にフリーって訳ではないんだけどなー。って、そんな冗談きかないか」

「ききませんよ！アクア先輩にしろ、サツキ先輩にしろ、冗談が冗談で済まないじゃないですか」

「そういえば、アクアちゃんはなんですか？ちゃんとやってますかね」

「アクア先輩は相変わらずですよ。って、そんなことより、話を逸らさないください。」

もう、それより私の仕事のあとはどうなさったんですか」

「あー。そうでした！あなたの仕事ならちゃんとして適任な人な任せましたから安心してください」

「先輩の適任の人って、心配なんですけど」

「少しは信用して欲しいな」

それにしても、エリスのキャラの変わりようにはびっくりなのだが。
てか、サツキさんの言っている後継人ってクリスのことじゃ。

「かわいい後輩も見れたことですし、私は戻りますか」

「ええ、そうしてください」

呆れすぎて疲れてしまったのか。

かなり、へとへとだ。

「それでは皆さん。こんな子ですがよろしくお願いします」

表に出さないだけで、一番エリスを心配していたのだろう。

一人一人の顔を見て微笑んで言い残すと背を向ける。

なんだかんだ言つて、後輩思いのいい先輩。

このまんまで終わっていれば誰もが思うだろう。

しかし、俺は見てしまった。

背負われたカバンの中から微笑かにはみ出たお宝を。

「今回はアクセルのどこに店を出すんですか？」

「……。秘密です」

「へえ？」

まさに一瞬だった。

エリスの声と同時にサツキさんは姿を消した。

本能的なものだろうか、それはいいとして、詠唱破棄でテレポートを使えるのはすごい。

「さすがアクアさんの同期ですね」

「アイリスちゃん。口に出しちゃダメだよ」

恥ずかしさのあまり、静かに顔を赤らめていたエリスを俺も静かに見守った。

ただいま、世界最大のダンジョン地下二十階。

この世界でまさか息切れするほどの練習をするとは、思っても見なかったしだいで

す。

「ふう、一通りこのような感じでしょうか。お二人ともお疲れ様です」

「お、終わったー」

「お、お疲れ様です。それにしても、ウイズさんの教え方すごい分かりやすかったです
！」

「ありがとうございます」

ベテランアークウイザード一人とアークウイザード二人ということで、さつそくダ
ンジョンに潜って、モンスターサンドバックに魔法のトレーニングをしていた。

なによりも、俺とゆんゆんが同じ系列の魔法を使うため、特訓しやすかったといえは
しやすかった。

ちなみに、エリスとアイリスは今日もクレアさんの呼び出しに、ギルドに行っている。

「さすが一流アークウィザードの紅魔族です。基礎がしっかりしていたので私も教えやすかったですよ。お弟子君も基礎トレーニングを疎かにしていませんでしたね」

「それでも、専門分野でこうも容易く抜かれるのはちよつと悔しいな」

「そう、悲観にならないでください。紅魔族はアークウィザードのプロフェッショナル。同じ土台に立つなんて、それこそ賢者レベルじゃないと無理です。それに、お弟子君の適正職はウィザードじゃないのに、ここまで近づけるのは相当すごいんですよ」

「なるほど。絶対に超えられない種族の壁か。日本人が外国人選手に勝てないのと同じで、生まれ持った才能が違うのか。……、ちなみにゆんゆん今の固有時間制御と結界はどれくらいまで？」

「えーつと。固有時間制御は5倍速で結界は七式です」

「いやまて、レベルがおかしい」

どっちも最高値まで取得してるのはずるすぎるだろ。

俺なんて、4倍速と五式結界が限界だ。

いくらスキルポイントを貯めても取得不可で手ずまりだ。

「ユウマさんには時止めがあるじゃないですか。それにインストールも」

「そうですよ。お弟子君とゆんゆんさんは同じ分野でも、系統が違うんですから」

そう、結界魔術は二種類に分かれる。

固有時間制御と結界はその中でも初級。

結界魔術の基本だ。

本題はこの二種類に分かれること。

簡単にいうと、時間と結界、この基本から枝分かれしていくのだ。

ちなみに、俺は時間でゆんゆんは結界。

俺が結界を極めきれないのは、時間の系統に枝分かれしたからだ。

一応、ゆんゆんは時間も結界も基本は極めているけど、俺みたいに時止めや過去からそのまま武器を引つ張りだすインストールはできない。

「それじゃあ、そろそろ戻りましょうか。いつまでもここにいたら、他の冒険者の迷惑になっちゃいます」

「
そうやって師匠はスクロールを取り出す。

安心して欲しい。

これは師匠の店で取り扱っているものではなく、ギルドから支給されたあなぬけのひも、みたいなものだ。

「それでは、へ スクロール〜!!」

あれから、一通りギルドに報告し夕飯に集合と言う形で師匠とはわかれた。

ここに来たら絶対に寄っているという、冒険者時代愛用していた鍛冶屋に行くそう
だ。

さすがに一文無しは辛いのではと、受講代を払おうとしたら、どっから取り出したか
分からない金庫を笑顔で見せられた。

多分仮面公爵のものだろう。

気の毒としか言えない。

今頃発狂しているだろうか。

「そうだな。せつかく時間もあるし。本格的に攻略するのは明日にして、今日は観光で
もするか。ゆんゆんは何か行きたいところかある？」

「えーえつと、ちよつと待つてください」

携帯ポーチからなにやらゴソゴソと探し始めるゆんゆん。

そして一つの手帳を取り出す。

ちらつと目に入った、友達と行きたい観光名所ベスト100という題名に、俺はライ
フを削られる。

てか、ベスト100はいらないだろ。

「確か、ここです！国立記念公園。『ダンジョンの上にある自然豊かなこの公園から見る街は、感動の一言に尽きる。よく晴れた日には、隣国エルロードの王城やアルカンレティアの山が見える』どうですか？」

「国立記念公園か。ちょうど快晴だし、行ってみるか」

ダンジョンで有名になった街と聞いていたが、他にもいい観光名所はあるようだ。ゆつくりできる時にゆつくりするのが吉。

海が近くにあるからか、吹く風は涼しいので日向ぼっこついでに少し寝たいな。

と、いつの間にそんなに勉強しのか。

ガイドもビックリの解説に、ゆつくりどころか植物と隠れ名所の見学になってしまった。

「見てください、このサボテン！なんと100年も行きたいとかで、噂では精霊が宿つ

「てるらしいですよ！」

「お、おう……」

「凄いです！アルカンレティアの山々があんなにハッキリ！……めぐみんにも見せたかったなー」

いつもに増して紅い瞳を輝かせる少女。

本人が楽しめているのならそれで十分なのだ。

しかし、さつきからことある事に、暗そうになる。

「なあ、ゆんゆん」

「は、はい？」

「なんか悩んでないか？その……、人間関係とか」

少しの間を開けて大丈夫ですと笑って言う。

いや、決して大丈夫ではないだろう。

「なんて言うのかな。ゆんゆん、相当無理してるだろ。この前のアイリスの時にしろ、俺とかいっばいいいっばいで勝手に行動してて。その、寂しかったりしたろ？」

「さ、寂しくはありませんよ……。みんなアイリスちゃんを助けようと必死で、私だっていろいろしてましたし」

声がだんだん小さくなるのは凶星ということだろう。

前々から思っていたが、ゆんゆんには自分の意志とは関係ないことばかり頼んで、いっばいいいっばいでちゃんと関わって上げられてなかった。

「ごめんな。話とかしつかり聞けて上げられなくて」

「そんな、ユウマさんが謝ることないですよ！私からちゃんと話にいけばいいのに……」

「なあ、ゆんゆん。友達100人できるかなって、現実的に有り得るかな」

「え？」

昔、多分幼稚園くらいの頃だろうか。

日本人なら誰だって知っているこの曲を聞いて、当時はなんとも思わなかった。だが、それなりに人と関わって分かったことがある。

「友達100人なんて、なんかだるいな。だって、100人もいたら、絶対誰かとは付き合いが悪くなるじゃん」

「でも、みんなと一緒にの方が楽しいよな」

「いや、逆だ。大変だよ。100人みんなが同じ性格じゃないんだ。必ずしもみんながみんな、仲良くなれるとは限らない」

少女の夢を潰すのは悪い気がする。

でも、それが現実なんだ。

都合のいいことなんて一生で一回起きるかどうかだ。

そんなのに頼ることなんてできない。

「だからさ、無理に誰かと関わらなくていいんだ。身近の人。俺たちや、カズマたち。街の冒険者。自分を取り巻く人達との関係が大切なんだ。あとの人たちとはそれなりの関係で十分。みんなをみんな特別扱いにすることはないんだ」

「それだと……」

「だから、めぐみんから重いとかなんだと言われるんだぞ。普通でいいんだよ。変に気を使っちゃうから、相手の行動に目がたって、結果的に上手くいかないんだ」

「普通でいいんですか？」

「ああ」

何か吹っ切れたのだろう。

うつむいた顔を上げ、スツキリとした表情だ。

「ここが有名な国立記念公園ですか」

「あ！ユウマさんたちです」

後ろからガイドブックを読みながら歩くエリスとアイリスが来る。

「お、そっちの用事はもうすんだのか」

「ええ、クレアったら少し過保護すぎます」

「アイリスさんに何か合ったら大変なんですよ」

「そうだ、そうだ」

「もう……。そうです！ユウマさん私たちをエスコートしてください。エリスさんたら、私とクレアが話してる間ずっとネックレスをいじってたんですよ」

「それは言わない約束じゃないですか！」

まれに、エリスにすらマウントをとるアイリスに恐れを持つことがある。

子供の視野の広さを悪用し放題で困ったものだ。

つと、アイリスとは逆に大人しすぎる子がいる。

「分かったよ。それでは、お嬢様方。今日は慣れないなりにしっかりとエスコートさせていただきます」

いつぞやの城の食事会の時のようにそれぞれの顔を見てお辞儀をする。

まれには、うん。

本当にまれに、こういうのもありだな。

三人を連れて、公園の下り坂を歩く。

あつちの世界ではなかったことをする新鮮さが楽しい。

だが、時々思うのだ。

エリスに抱きしめられたあの日。

吹っ切ったはずのあの世界に、まだ未練を抱えているんじゃないかと。

なにかある度にあの世界のことと比べてばかり。

辛いことは、きついことが多かったぶん、今が楽しいと、そう思っていた。

紅魔の里に行く途中、カズマに聞かれたこと。

魔王を倒して願いを叶えろとすれば。

魔王倒したら、エリスは天界に戻る。

そしたら俺の役目は終わり。

じゃあ、そのあとは？

第45話 怒り

あれから数日、潜ってはレベリング、負けかければ、退散した後の一つ下の階でレベリングの繰り返し。

それなりに効率のいいがいたため、俺なんかは25レベルまで上がることができた。だが、問題もある。

「あ、アンデット……」

「ヘセイクリッド・ハイネス・エクソシズム!!」

「あの、エリスさん？あれほど、とどめを刺すのは交代でって、それはアンデットも同じって」

「なに、おかしいなと言ってるんですか。なにもいないじゃないですか」

こんな感じでアンデットを見つけるとエリスが倒しちゃうことだ。

それも、わざわざ最上級スキルで灰も残らないくらいにだ。

「こつちの敵は終わりました！」

「こつちもです」

「よし、一回休もう。そろそろエリアボスが出てきてもおかしくないし。休めるうちに休もう」

エリアボス。

この世界最大のダンジョンにて、10階ごとに現れる、いわば中ボス。経験値の塊だ。そんなエリアボスも2体屠ったのだが、レベルがレベルでそれほど強くなかった。

しかし、話によるとこの30階はダンジョン初心者卒業に繋がる相手。

本気でいかないとこつちが全滅させられる。
だからこそ、やすんでおけるうちに休みたいんだ。

「今日はこの階が終わったら、終わりですかね」

「そうだな。時間的にもまだまだあるし、終わったたらどこか食べに行くか」

「そ、それなら！ここなんてどうでしょう！家族向けのレストランで安くてかなりの量があるんですよ」

「な、なんだか楽しそうですね」

女性陣はさっそく食べるところの話が始めている。

どうやら、次のボスで気を引き締めているのは俺だけらしい。

それはそのはずか。この中で一番レベルが低いのは俺で、この中で一番弱いのも俺だ。

そう考えると、正直心苦しい。

ちなみにだが、師匠は別行動だ。

どうやら、新しい取引先でも見つけたようで、朝からバニルの金庫を片手に飛び出して行ってしまった。

バニル哀れなり。

「それにしても、なんか静かですね」

「この階の敵はほとんど倒しましたしね」

「どうやら、このダンジョンの中ボスは一定条件でランダムスポーンらしいどっから来るか分からないから。それぞれ気をつけてくれよ」

「安心してください。いざとなったらこの、聖剣で一撃です！」

「おっと、洞窟内でビーム砲は禁止な」

俺の声が響いたのを最後にダンジョン内は静寂を迎える。

やがて、誰かが強く息を吸い込むと、鈍い音がした。

「きたか」

通路の奥からこちらへと向かってくる音。

その重圧なプレッシャーはまるで魔王軍幹部のものと同等だ。

「くさいです」

「これは筋肉の腐敗した臭い。……まさか！」

エリスが勘づいた時だった。

正面から衝撃波のような咆哮が、体全体を襲う。

一瞬にして体の筋肉を縮ませた咆哮の持ち主は、ダンジョン内の影からその身を現す。

「ドラゴンゾンビー！」

ゆんゆんの動揺にパーティー全体がどよめく。

「いえ、あれはただのドラゴンゾンビではありません！桁違いなスケールと魔力。あれはドラゴンゾンビがリッチーへと進化を遂げている途中の姿。亜種です！」

ドラゴンゾンビのリッチー化。

それを決定付けるように、ドラゴンゾンビの魔力は徐々に上がっていき。

ぎゅらりゅるうううううああ!!

凄まじい咆哮と共に、アンデットを次から次へと呼び出す。

まさに今、戦闘開始の火蓋が切られた。

「エリス、アイリスでアンデットを叩いて！ゆんゆんは俺と一緒に本命を落とす」

「了解！」

遅いかかってくるアンデットを、右へ左へとかわしていく。

なるべく、エリスたちの負荷を無くそうと倒すことも考え、斬ってみた。しかし、これが思ったよりも硬い。

さすが、中ボスの眷属だ。専門職が専門のスキルを使わないと破れないらしい。

「へ 七式結界」！！

「へ全剣連続投射」！

ゆんゆんの張った捕縛結界の間を通し、聖属性付与の短剣をぶつける。

だが、本体も見た目以上硬く、腐敗した肉は鎧として短剣をはじく。

なんとなくだが、こんなことになるのは分かっていた。

そもそも、短剣を投射して突き刺さるくらいは防衛力なんかその階にはいなかった。

だから、用意した。

とっておきを！

「へ六式結界・神威」

弾かれた短剣をゆんゆんの張った結界の点と点に突き刺す。

ぎゅらりゆる？

結界魔術の結界は相手の体の関節を軸に結界発現させ、行動不能に持っていくスキル。

なら、この関節に直接、短剣を突き刺し釘付けにしたらどうなるだろう。

場所によるが、捕縛力はより強固に、そして、関節は粉々になりどちみち行動不能だ。だが、今回みたいな硬い相手はどうするか。

そこは安心して欲しい。

短剣にはへ 仮・壊れた幻想を付与してある。

つまり、短剣は中の聖気をもとに爆発しながら、皮膚を破り骨を砕く。

鬼畜やら、ど畜生だと思われるが、これこそ確実に相手を無力化できる一手だ。

「チェックメイト。あとはこいつを誰が倒して経験値にするかだが」

「へ スターバースト!!」

「へ エクステリオン〜！」

どうやら、向こうも終わったらしい。

というとり、うちのパーティー、オーバーキル攻撃を持ちすぎだな。

「とりあえず、ゆんゆんがとどめを刺してくれ」

「え、えい」

脳を完全に破壊されたドラゴンゾンビは見るも無残に朽ち果ててゆく。

こういうアンデットの仕組みは分からないが、心臓が止まっている以上、頭を破壊するのが確実だと思っている。

実際はどうなのだろう。

「案外、呆気ない終わり方でしたね」

「緊張していた自分が馬鹿馬鹿しく思ったよ。とりあえず、このあと行く場所は決めたか？」

「はい！それならさつき、このアイリスちゃんの行きたがった場所に決まりました！」
「それならよかった」

あの数分で話がまとまるとは。

恐るべし団結力というべきか。

それにしても、俺は意見を聞かれなかったことに少し悲しく思う。

「じゃ、帰るか」

「待っててください」

俺がスクロールを開こうとして時だった。

突然のエリスの静止の呼びかけに一同動きが止まる。

「どうかしましたか？」

「はい、さつきからこちらをジロジロと見られている気がするんです。多分背後を見せたらサクツと」

それは本当突然だった。

エリスの読みは見事に当たっていて、フロアー全体に、声がひびく。

「ブラボー。素晴らしい連携だったよ諸君」

ドラゴンゾンビの現れた通路から一人の男性が姿を見せる。

「友情、信頼、絆、そんなくだらないもので、私の計画が泡になったことを思い出すと今にも、腹のわたが煮えくり返りそうだ」

「あんた、誰だ一体。この階は俺たちしかいなかったはず。それに入口は俺たち側に」

「元からいた。となると納得いくだろうか？クドウユウマ君」

「下がってくださいユウマさん！」

「これはこれは赤の他人にいきなり槍を向けるとは、随分物騒じゃないか」

エリスのものすごい剣幕に顔色一つ変えず、男は話す。

いや、顔色を変えてではない。

そもそも、この男は変える感情がないのだ。

あるのは憎しみだけ。

この感じは紅魔の里の……。

「紹介が遅れたね。私はラグクラフト。エルロードの元宰領にして、魔王軍幹部だ。そう、君たち人類にとっては例えることのできない恨みを持つ相手で、私にとって君たちは計画を台無しにした張本人として憎い者。お互いがお互い、殺したいほど憎む間柄さ」

「な、魔王軍幹部！」

「ちようどいいです。アンデットばかりで飽きていました。あなたを討ち取って、早くアクセルに帰りましょう」

「フハハハハ。討ち取る？そうか、出来るものならすばいい、先程、ちようど人工の魔力保存庫が出来たところだ」

「!？」

ラグクラフトの後ろから一列に現れた子供たち。

その姿に誰もが唖然とする。

子供たちは白目をむき、ただただ、呆然と泡を吹いていてなんとも痛ましい様になっていた。

「なんて、残酷な」

声にならない怒りをあらわにし、軽蔑の目で睨みつけるエリス。しかし、その中でアイリスだけは未だに、呆然と驚いていた。

「レヴィ王子……!?!」

レヴィ王子。

聞いたことのある名前だ。

いや、その後ろの子供たちもだ。

そう、ここにいる子供たちはみんな新聞に載っていた、誘拐された子供たちだ。

「この、王子には本当に世話をやかされた。浅はかで傲慢。国なんかよりギャンブルばかりで、能力も魔法の素質もまるでない。それなのに、ベルセルクなんかに多額の王女の搜索費なんか出して、おかげで私の計画はめちやくちやだ」

「……だが、子供というものは実に良いものだ。中身はどうであれ、純粋な魔力と体力を持つている。おかげで、素晴らしい魔力の電池ができた。さあ、諸君。来るがいい。こ

「ここにいる子達を廃人にできるといふのなら、な」

「人間電池なんて……。うっ」

魔法の知識に優れた紅魔の族だから理解出来たのか、ゆんゆんは途端に涙を流しながら、腹の中のものを出した。

「とんだ下衆野郎ですね！魔王軍というのは」

「下衆なのはお前たち人間のほうだろう。人間というのはいつも自分のことばかり。我々、多種族は貴様らたちのせいであれだけの屈辱を味わったことか」

「だが、魔王様は違った。人族の末裔でありながら、その志しは常に我々のことを思つたことばかり。貴様ら下等な人族に魔王様の全種族平等という崇高な考えが分かるか」

「屑の分際で夢物語ばかり……」

「エリスさん!!」

怒りが爆発寸前なエリスに強い呼び止めが入る。

振り返れば、その声の主はアイリスだった。

「アイリスさん……」

「エリスさんは下がってください。……魔王軍幹部、ラグクラフト。私はあなたを許しません。人を、人を人以下に扱うあなたたちの考えを私は認めません」

「どの口が言うか。元はと言えばアイリス王女。あなたが責務から逃げ、お仲間と冒険ごっこをしたのが、元凶だ。あなたが大人しく、城の奥に座っていれば、レヴィ王子もこの子供たちもこうはならずすんだ。あなたが私の、魔王様の計画を邪魔しなければ!!」

ラグクラフトは自身の怒りにより、子供たちから魔力を吸い取り、自身の魔力を膨脹させていく。

この魔力の質量、先程のドラゴンゾンビなど比較にならない。
シルビアと同等、下手したらそれ以上だ！

「ええ、ですから、私はあなたを討ちます。ベルセルク王家の名と、私の懺悔のために。
あなたを討ち、民を救います!!」

「やって、見せるがいい。鳥かごの小娘よ！」

叫び声と共に二人の間合いは一気に縮まる。

互いの魔力放出のぶつかり合いによって、ダンジョンの壁は砕け、辺りに沸いたモン
スターは本能に従い逃げ始める。

魔法と剣のぶつかり合い。

もはや、俺たちの入る瞬間はない。

その一撃一撃が必殺の威力で互いが即決着を望んでいた。

「ヘカースド・ライトニング!!」

「へセイクリット・エクスプロード！！」

ほんの一瞬のことだった。

焦ったアイリスの放った大技にできた、僅かなタイムラグ。それをラグクラフトは待っていた。

「さようならだ、王女よ。永久に眠るがいい。へナイトメア！」

「クッ！」

我ながら恐ろしい反応速度だと、振り返ってみれば思う。ラグクラフトが呪文を読む前に体は動いていた。

「へ時止め」

俺のスキル発動により、周りの時が止まる。

いや、詳しくは俺の周りの空間が止まるだ。

瞬時に発動させた〈時止め〉のスキル。

自らの周りに結界を張り、その中の時を止めるこのスキルは回避スキルとして最高峰のものだ。

「間に合った」

アイリスの前に立ち、ラグクラフトに対峙する。

残念ながら、このスキルの発動中にはなにかを動かしたりと、敵の前にナイフを並べたり、周りに影響を与えることはできない。

できるとしても、手持ちの銃の装填だけだ。

つまり、アイリスをどかしたり、ラグクラフトに危害を加えたりはできない。

なら、俺がアイリスの代わりにこのスキルを受けるに他わない。

スキルの感じ的に、睡眠系だろう。

俺と比べれば、あの三人の方が力もあれば知能もある。

ラグクラフトを何とかしてくれるだろう。

あとは、起きたりするのはいこつちからできると信じて、スキルを解除するだけ。

「時止め〈解除〉」

時が動き出したと共に、体にとつともないだるけを感じる。

「なん、だと」

ラグクラフトは間抜けな声をかきけすように悲鳴が響く。

「ユウマさん!!!」

声の主は誰だったのか。

悲痛に嘆く、彼女の声を最後に俺の視界は暗くなつた。

第46話 ありうべからざる日常

ピピピピ
ピピピピ

「ん、あ」

ピピピピ　ピピピピ　カチャ

携帯に手を差しのぼしてアラームを切る。

うつすらと開けた目で横を見れば、窓から光が漏れていた。

「朝か」

ー

眠気覚ましも兼ねて、水をおもいつきり顔にかける。

力加減はそれなりにしているので、かけた水は床に落ちることなく洗面器に収まる。秋の冷えた水のおかげで、ぼんやりした意識は一気に覚醒する。

いつぶりだろうか、俺は夢を見ていた気がする。

しかし、困ったことに内容が一つも思い出せない。いや、思い出せないというより、何かが阻んで出てこないのだ。

ふと、時計に目を向ける。

時刻は8時をまわっていた。

「……。やばー！」

大会明けとあって、朝練はないが学校はある。

いつもより、一時間も多く眠れたことはありがたいのだが、時間も時間で親はおろか弟までも先に学校に行っていた。

そんなかなで、制服をきてネクタイを結んでブレザーとバックを自転車に投げ入れる。

誰もいない家の中に、俺一人のドタバタとした音が響いた。

「主将様は足が速くても、時間には置いていかれるのな」

「へいへい、言つてろよ」

時速20kmの猛ダッシュでママチャリを走らせ、チャイムがなると同時に校舎に入り、終わると共に教室に流れ込んだ。

幸い、今日は職員会議が長びいてるらしく、担任は来ていない。

おかげさまで、おしゃべり相手が欲しかったのか、クラスの部員にちよっかいをくろう始末だ。

「チャイムがなったらオンユアマーク。いい流しになったよ」

「いやいや、オンユアマークじゃ、まだセット状態だろ」

「細かいことはどうでもいい。俺は長距離選手だ」

俺の屁理屈に呆れたご様子。

話を昨日の大会に変えてくる。

「それにしても、大会新ねえー。朝もギリギリに来るやつが」

「エナジードリンクと根性があればだせる！俺が示したんだからな。それにお前達もリレーで決勝残つただろ？来年はいきなり、県大会からスタート。他の学校からすれは、地区予選で自分の種目に集中できるのは羨ましいだろ」

「それもそうだけど。俺たちはリレーだから県に行けたんだ。お前と違って、個人で勝負ができるほど強くない。あーあ、せめて0・1でも時を止められればなく」

「時止め……か」

その時、何かが頭の中を通る。

あれ？俺は。

「全員席につけー。出欠とるぞ」

「俺戻るは」

「お、おう」

やっと来た先生の言葉にタチ歩いていた奴らは席に座る。

それにしても、今日は一段と薬品臭い。

生徒に対して無愛想な先生だが、理科の専門分野は別。

しかも、自前で薬品を買っちゃうくらい、理科の教科を溺愛している。

今日も朝早くから実験の準備をしていたのだろう。

—————

「悠真、今日は走ってから帰るだろ？」

ただただ眠たい授業が終わり、帰りの支度をしていると部長の赤城が、横からやってくる。

「あー、そういえば、昨日大会だった分今日は休みか」

どうしようか。今日はなんか頭が回らないから帰ろうと思っていたのだが。

「悪い。今日は帰らせてくれ。日をまたいだ三試合がずいぶんと体にきたらしくて、体がギブなんだ」

「前日までゲームやってたからだろ。まあ、昨日は珍しくマジだったからな。ゆっくり休んでくれ」

一声返事をして学校を出る。

陸上部が活動してないこともあって、いつもはかつかつな校庭も、今日はなんだか物寂しい。

なんだ、この物足りなさは。

いつもは漂っている汗臭さが今日は全くしない。
なぜだか、少し寂しいな。

時刻は六時を回った頃だ。

学校帰りの学生たちに仕事帰りの大人たち。

駅のダブルデッキはそれなりに人混みができていた。

暇だからといって来てみたが、これといって面白いことなどない。

缶コーヒーを飲みながら電車を見る。

思ってみれば、小さい頃はよくここに来て電車を見ていた。

子供あるあるの電車派か車派ってやつで、俺は電車派だったのだ。

だが、歳を重ねるごとにここで電車を見る機会は減っていき、いつの間にか見にくくなっていった。

そして、俺は陸上を始め、ただひたすらに走り続けた。

七年間だ。

きつかけは単純、徒競走が得意だったからだ。

それでいて、認めて欲しくて、ただ褒めて欲しくて走った。

一度、陸上から離れた時期もあった。

だが、あいつに誘われてまたやり直した。

祭 祥也。

俺を認めてくれたあいつの夢を叶えるために走った。

しかし、結果は最悪だった。

俺があいつの夢を潰す終わり方だった。

結局のところ、俺はあいつをやり直す理由にしていたのだ。

気づかないところで、俺は周りに褒めて欲しいがためにやっていたのだ。

本当にクズだ。

『もう、無理をしないでください』

『いいんですよ。私が許します。あなたの失敗を。私が認めます。あなたの努力を。だから……』

彼女は言った、もう休んでいいと。
俺の全てを認めて、安らぎをくれた。

ああ、なんてことを忘れていたのだろう。
あの時、守ると誓った少女の、慈悲深い笑みを。
まるで星々のように輝いた銀髪を。
嬉しい時のはにかむ笑みを。
そうだ、これは……。

「悠真？」

突然の呼びかけに、振り向く。
使い込んだウインドブレーカーとボロボロのカバン。
そこに立っていたのは。

「祭……」

第47話 選んだ道は

「祭……」

目の前にいる青年に俺は何度会いたいと願ったか。
会ってもう一度話したい。

お前の背中を追って走っていたということ。

約束を守れなかったことを謝りたいこと。

好きな人ができて、その人を守りたいということ。

些細なことから大きなことまで、機会があるのなら話したかった。

「どうしたんだよ。今にも泣きそうな面して。お前そんな柄じゃねえーだろ」

変わらない。

二年前と何一つも変わらない声と練習終わりの汗とシャンプーの混じった匂い。

俺はそのことに安堵と違和感を感じた。

「いや、何でもないさ。本当久しぶりだなこうやって会うのは。二年ぶりか？」

「そうだな。最後に会ったのは中学の卒業式だな。隣の地区なのにここまで会わないのも珍しいよな」

「どうせだし、ちよつくら話さないか」

「ああ」

流れに合わせて軽く返事をする。

見慣れた風景、聞き慣れた生活の音。

つい半年前までは当たり前だったのに、今は全てが懐かしく思える。

「それで、どうなんだよ。来年はインターハイ、狙えるんだろ？」

「ん、あ、ああ」

「どうした、まだ疲れ残ってんのか？」

「いや、残ってはないよ」

これは夢だ。

昨日というのは、俺が死んだあの試合の日のことだろう。

半年という時間のせいで少し記憶が断片的なんだが。

それにしても、なんだろうこの違和感は。

景色も音も鮮明で、それなのに何か足りない。

薬品の匂い、シャンプーの匂い……。

「まさか……」

「どうした？」

何かあったのかと不思議そうに俺を見る。

気づいてしまった、違和感の原因を。

この世界に、この夢に足りないもの。

それは……。

「なあ、祭。腹へったな」

「そうだな、たい焼きの匂いがこんなになれば、さすがに小腹も空くか」

それは、においだ。

俺はこの夢の中で二つしか匂いを感じてない。

一つは担任の薬品。

二つは祭の匂い。

あからさまにこの二人からしか匂いを感じないのはおかしい。

夢からの覚める方法がないはずがない。

あるとすれば。

ラグクラフトを倒すこと。

現実のラグクラフトを倒しても、この夢は覚めない。

これはお約束事だが、夢の中は、夢の中のボスを倒さないといけない。そして、ラグクラフトの可能性があるのは。

担任か祭。

「どうしたんだよ、黙りこんで。そんなに腹減ってるのか？」

この祭がラグクラフトなのかもしれない。

最悪な場面だけが、頭の中に入ってくる。

「なあ、悠真」

「え？」

祭の呼びかけに俺は顔を振り向く。

祭はただ安心したという顔をしている。

「よかった」

「お前、変わったよな」

「俺が変わった？」

「ああ、昔のお前さ。他人の評価ばっか気にして、何て言うのかな。自分がないっていうのか」

眉を細めて、昔のことを振り返る祭。

「でも、今日のお前は違った。今のお前には、自信がある。覚悟がある。そんなしつかりとした目をしているんだ」

それは、五年間隣にいた友だから言えた言葉だった。

確信を持った。

だから、俺は言葉を出すことができた。

「なあ、祭。実はさ、俺、好きな人ができたんだ」

「面倒見がよくて、しつかりもの。それなのにまれにどっか抜けるところがあつて。誰にでも慈悲深いけど、怒るとめちやくちや恐くて。でも、どこか弱々しいんだ」

「俺さ、その人のこと見てると守りたいと思うんだ。誰よりも近くで、どんなものを敵に回そうと。その人のことはこの手で守りたいんだ」

突然のことに、困惑することもなく。

祭は静かに、俺の話を聞いた。

「だから、ごめん。俺、お前との約束守れない」

ずっと謝りたかつたこと。

やつと言うことができ、俺は頭を下げた。

「行けよ。待ってるんだろ？その人が」

「祭？」

「お前が、自分からそんなこと言ってくるなんて、思ってもみなかった。いつも、他人の意見ばかり優先してたお前が」

「行けよ。ちゃんと守ってこい。自分で決めたんなら、最後まで突き通せ！」

力強い声に背中を押され、気がつけば、走り出していた。

「本当、おかしいよな。夢なのに、本当にあいつと話しているみたいで。なあ、悠真」

もう、振り返ることはない。

押された勢いのまま、ただひたすらに走った。

ーそして

「ほう、まさか夢から気づくとは」

市と市を繋ぐ大橋。

その真ん中にやつはいた。

「さすがは、幹部を四人も倒したパーティーのリーダー。夢だと自覚した上、私を見破るとは。つくづく私は運に好かれてない」

「運？違うね。あんたが正体を隠す術は充分あつたはず。現実（ヘリアル）の人間に匂いがつくんなら、沢山の人間をこの夢に閉じ込めればよかつたんだ。それも俺以外の抗魔力の低いやつを閉じ込めれば完璧。あんたの実力がなくて一人しか取り込めないのか、慢心したのか」

「私が慢心した？力が足りない。フハハハハ。面白いことをいうね」

何がおかしいのか。

突然とち狂ったように笑い始める。

「確かに君は強い。それなりに頭も回るようだ。けれど、一つ勘違いをしている」

「……」

「これは君の夢ではない。私が君に夢を見せているのだ」

他者に夢を見せるんじゃない、自分の夢の中に閉じ込めるといふことか。

それなら、この夢に他の人間が入ってくるのも理解できる。

「私はもとより戦闘は苦手だ。そもそも本職は諜報。魔王様にもそれを買われて幹部にさせてもらっている」

「だが、この世界では、夢では別だ。なりたいもの、自身の能力をはね上げることなど容易にできる。さあ、私が主役の、私の世界の中で君は私に勝てるかな？」

夢とはそもそも、自分に都合のいいものだ。

現実にはできないこと、なれないものになれるのが夢だ。

ーーだが

「それがどうしたんだ？」

「!？」

「これはお前の夢だ。だけど、俺が何もできないわけがないだろう？」

「何を勘違いしている。私が貴様に制限をかけてないとも思ったか」

試しにスキルを唱えるが使用できない。

「よかった。気づかれてなくて」

「なに？」

再インストール

――分析終了

――解凍完了

――摘出完了

――具現化開始

〈因果を絶ち悪を切り裂く正義の剣〉

「なんだ。その剣は……」

俺の右手に現れた剣に動揺を表す。

「なんで。そう思うだろ。祭と話させてくれたお礼だ。教えてやるよ。俺はこの剣に魂の契約をしてるんだ。だから、俺が呼び出そうと思えばどこにでも呼び出せる。例え、

夢の中でもこいつを縛ることはできない。人を守ろうとする、この象徴はな」

「人理の護り手か……」

「その通り。それにしても、夢の中でよかった。夢の中なら、現実の本体には損傷が入らないからな」

「貴様!!」

「こいよ。手加減はいないでやるよ」

杖から放たれた炎の弾丸。

そのすべてを紙一重でかわす。

ー甘い。

戦闘は下手だといっていたが、ここまで下手だとは。

攻撃がどこに来るのか、杖の方向を見れば容易にわかる。

正直言つてど素人。

「クツ」

魔術回路はフルスロットルだ。

調子は最高だ。

魔力のほとんどを足に集中させる。

筋肉の伸び縮みに魔力のバネを加える。

地面からの反発も抜群。

「カースドライブニ……!!」

「遅い。〈因果を絶ち悪を切り裂く正義の剣〉!!」

呪文が終わる前に、光を溜めた究極の一撃を、相手の胴体に叩き込む。

「なぜだ。なぜ私の計画は……。魔王様。魔王様——!!」

「興味ないな。魔王とか。でも、あいつに合わせてくれたことには感謝してるよ。例え夢でも」

ラグクラフトが消えると共に世界が光の粒となりかすれてゆく。
切り捨てたものには後悔はある。
でも、選んだことに間違えない。

〈悠真が夢からの目覚める少し前〉

「呆気なかったですね」

「まさか、一撃で沈んでしまうとは。なにはともあれ、ウイズさんが来てくださったおかげで」

げで助かりました」

「いえいえ、たまたま通り過ぎただけですので」

ウイズさんに背負われたゆんゆんさんは、恥ずかしさのあまりか、背中に顔を埋める。

「本当にすいません……」

悠真さんが眠らせられてから、真っ先に戦闘体勢に入ったのはゆんゆんさんでした。

なのですが、あまりに意気込み過ぎたため、魔力がオーバーロード。

そのままバンと、倒れてしまいました。

幹部自体は攻撃がバレバレで、左右からの、アイリスの〈永久に輝く勝利の剣〉と私の〈スターバースト〉で簡単に沈んだので問題はなかったのですが。

悠真さんとゆんゆんさんをどうやって運ぶか問題になり、困った時にウイズさんが通りかかってくれました。

「それでは、私はギルドに報告してきますね」

「そんな、申し訳ないですよ」

「いえ、皆さんお疲れですし。商会の寄り道になりますので」

そういつて、ゆんゆんさんを下ろすとウイズは行つてしまいました。

「私はもう大丈夫なので、二人は休んでてください。悠真さんを先に寝かせてきますね。
……軽っ！」

「お願いします」

悠真さんのあまりの軽さに驚いたのか、信じられない様子で担いでいきます。

「ふうー」

「相当疲れてるんですね」

微笑みながら私を見てくるアイリスちゃん。
その目はどこか見透かしている様子で。

「エリスさん必要以上に魔力消費してますよね」

「どうして、それを？」

「前々から怪しいと思ってました。悠真さん。爆裂魔法を使っても、平然に魔法を使うんですもん」

「どうやら本当にお見通しのようです。」

「アイリスちゃんの目には敵いませんね」

「はい、これでもいろんなものを見てきたので」

誇らしげに胸を張る、その姿は年相応の子で、とてもその背に重たいものを持っているとは思えない。

「エリスさん。悠真さんのこと好きなんですよね」

「え!?!」

突然の爆弾発言に思考が停止する。

「そうではないと、釣り合わないじゃないですか。人、一人分の魔力を肩代わりするなんて、普通じゃ考えられませんもん」

「それに、好きな人にしかキスなんかしません」

「あ、あれは!」

本当に何もかもお見通しで……。

「もう少し、素直になってあげないと。悠真さん可哀想ですよ」

「は、はい」

末恐ろしいお姫様です。

本当……。

もう少し素直ですか。

そうですね。

頑固だったのは私のほうだったみたいです。

第48話 求めたもの

最果てのダンジョンでの、ラグクラフトとの戦いから二日がたった。

行方不明だった隣国の王子、レヴィ王子や街の子供たち救出され、ダンジョンは一時封鎖。

残党が残っていないかの確認が、王都からの調査団によって調査が行われている。

そして、今回の幹部討伐の実績が認められて俺たちの当初の目的は免除されることになった。

まあ、その裏にはレヴィ王子救出による、隣国エルロードへの貸しができたことが大きいのだろう。

こうして、姫様のパーティーが魔王軍の幹部をまた倒したことで、国の士気は最高潮。そんなもつて、今行われているエリス祭も合わさって、近々魔王城攻略の部隊が結成されることになった。

まあ、それはいいとして俺はポケットから冒険者カードを取り出す。

改めて何度も見るが、やっぱり俺のカードにはラグクラフトの討伐が記載されていない。
い。

夢の中のことはノーカンらしい。

もし、あのまま夢から起きられなかったらどうなっていたのだろうか。

「皆さーん！準備はいいですか？街に戻りますよ」

これはまた元気な声でゆんゆんが呼び掛ける。

帰りはゆんゆんのレポートであつという間。

なんとかエリス祭の最終日には間に合う考えだ。

「楽しみですねお祭り」

「そうですね。そういうえば、お祭りという浴衣という服を着ると先輩から教えてもらったのですが。どうでしょうか？」

祭に大きな期待を膨らませる、我らのパーティー。

ーなのだが。

俺は知っている。

今アクセルの街はアクシズ教団が占拠しアクア祭をとりおこなっていると。

「どうしましたか？お弟子君。お顔が真っ青ですよ」

「いえ、別に何でもありませんよ。師匠」

師匠に声をかけられて、我に帰る。

腹を括ろう。

これから先に何があろうと、目を背けずに。

「それではいきます。〈テレポート〉！」

—————

くアクセルく

人の熱気と賑やかな声。

恐る恐る目を開くと

「どうだい、どうだい！ジャイアントトードの黄金焼きだよ！」

「矢的！矢的はいかががてすか？」

思ったより、まとも？

アクシズ教が占拠しているとかではなかったのか。

見た感じまともだ。

ちゃんと祭をしている、だと……。

ーと、思ったのはつかの間。

「エリス様の人形焼きはいかがかね」

「アクア様の人形焼きー！人形焼きはどうだい！」

「幸運の詰まったエリス様焼きの方がご利益あるよ！」

「いや、アクア様焼きのほうがご利益ありますよ！」

「さっぴからなんだいあんた！」

「んだと！同じもん近くで売るんじゃねえー!!」

エリス教とアクシズ教。

先輩、後輩の間柄で仲のいいこの二人。

だが、信徒たちは違った。

この二つが同じところにあると必ずと言っていいほど、ぶつかり合いが起こるとい
う。

主に、アクシズ教団から吹っ掛けらしいが。

「おい、てめえーら！」

その後ろから怒鳴り入る声。

「か、カズマの旦那」

「あれほど、騒ぎを起こすなって言つたよな！」

「吹っ掛けたのはあつちからで」

「あつち、こつちじゃねえー！お前らの売上の半分は後で本部に出せ！次暴れたら、全部没収だぞ」

「「そんない」」

半シャツ腕まくりで、タオルを頭に巻いたカズマ。

その姿は、ザ・祭男だ。

「ん？ユウマじゃん。帰ってんなら教えてくれよ」

「おう、久しぶり。今帰ったよ」

この一週間でお互いずいぶんと変わったらしい。

その変化に笑いあう。

——しかし、ここに一人。説明が欲しい女神様がいる。

「カ、カズマさん……。これは、そのどういう状況で」

「ああ。そういえば言ってなかったな。今回のエリス祭さ。アクアも自分の祭をやりた
いって駄々こねてな。商店街のおっちゃんたちからも、盛り上げて欲しいって言われ
て。エリス祭と同時開催でアクア祭を開いたんだ」

なるほど、と理解する面々。

しかし、一人だけ呆然とする者がいる。

「あ、私はこれで失礼しますね。帰ってバニルさんをびつくりさせないと」

ふと、思い出したかのように、別れを言つてその場をさる師匠。
それに続いてカズマも。

「それじゃあ、俺も。馬鹿どもが暴れてないか見回らないといけないからな」

じゃ、と片手をあげて人混みに消えていく。

最後にポケットから札が見えたのは、置いとくとして。

「それでは、私たちも回つてきますね、行きましょう、ゆんゆんさん！」

「え、あ。待つてアイリスちゃん！」

そしてついに、俺とエリスだけが残つてしまった。

ふと、隣に視線を変えると、さつきまでのもやもやはどこに行ったのか、もじもじと

赤面している。

「俺たちも行くのか」

「……はい」

実をいうと、この一週間はダンジョンでレベリングばかりで体はかなり疲れていた。

だが、エリスと歩いているとそれも忘れる。

あれは？これは？と表情豊かにコロコロ変わっていくエリスを見ているとこっちま
でにやけてしまう。

思い返せば、女の子と祭を回るのがこれが初めてだ。

いつもは男友達と回ったりか、練習でつぶれたり青春とはあまり言いたくないこと
ばかり。

そう考えると涙が……。

「ど、どうしたんですか？もしかしてどこか痛い所が」

「大丈夫……。大丈夫だ。こしように目に入ったただけだから」

それから楽しい時間が過ぎて、いよいよ祭のファイナーレに。
行き交う人々の話を小耳に、もうすぐ花火が上がるらしい。

途中で、カズマの怒鳴り声や、我らのパーティーと爆裂狂の悲鳴が聞こえたり、サツキさんが出し物したりと見慣れた人たちをよく見ることがあったが、なんとなく素通りを繰り返した。

「あ、見てください。ミスコンですよ！」

「よし、止めておこう。絶対悪いことが起こる」

なにやら、興味深々エリスの手を引いて会場を避ける。

ちらつと奥にカズマとクリスを見つけてしまった。

あの場にいたら多分ひどいことになる。

あの様子から察するにクリスがエリスの格好で登場。

エリス教徒は拍手喝采。

それを見たエリスが飛び出して、自分が本人だと主張。
エリス様はそんな貧……。

これ以上はやめよう。

てか、エリスはクリスと面識がない。

絶対パニクる。

よって、障害物を全て退け見放しのいい丘に着く。

正直疲れた。

「なんか、静かですね」

「てつきり虫の音で騒がしいと思ってた」

「ふふ、この時期の虫はうるさいですからね。冒険者の皆さんも結構頑張ったと思いますよ」

俺はこのエリスの何気ない笑顔が好きだ。

時々妬いたり、怒ったりといろんな表情を見せるのだが。

この何気ない会話の時に見せる、何気ない笑顔が本当に好きだ。

「ユウマさんは、何かしたいことはありますか？」

「突然だな。んー。しいて言えばもう一度桜を見たい」

それは少し前、アイリスと出会った時だ。

あの時はまだ秋で、そんな季節ではなかったが、冬を越えていろんなことがあった。ここ最近よく思うことがある。

それは、あの時目を輝かせながら話を聞いていたアイリスや、いつもそばにいてくれたエリス、ゆんゆんやカズマたちと桜を見たいということだ。

「いいですね。私も先輩から話でしか聞いていないのですが、春にピンクの花びらを咲かせる綺麗なお花だと聞いています」

「さすが、アクアだな。本当いろんなこと教えるんだな」

いつものことであれだが、こういう稀に見せるアクアの先輩気質には感心させられる。

「それで、エリスはどうなんだ？なんかやりたいことあるか？」

えっ？とした表情のエリス。

まさか、返しがくるとは思っていなかったのだろう。

少し考えた後、切ない声で言う。

「冒険ですかね」

「冒険？」

「はい、いろんな国に行っているいろんな物を見て回って、遺跡やダンジョンを攻略して、疲れてみんなで宿に帰ってきて。今日あったことの反省をしながら、次の日の準備をして、ご飯を食べて寝て」

「そんなありきたりな冒険をしたいです。そして……」

そこで、エリスの声が止まる。

それ以上は言えない。

そんなことを感じた。

「なあ、エリス……」

「……です。……いたいです」

ポツリと今にも消えそうな声でいった。

「私は。あなたの隣に……!」

それが私の本心だった。

みんなと冒険をしたい。

それも本心であるのは間違いない。

でもそれ以上に、私は彼の、ユウマさんの隣にいたかった。
もし、隣にすることができるとしたら。

私は、自分の在り方を捨ててでも。

「エリス」

それはまるで時間が静止したみたいだった。

一瞬か数秒か。

俺は思考を追い越して、口を開いた。

「俺、あれだけ覚悟決めたのに、昨日まで進めなかったんだ」

「……」

「本当、カッコ悪いよな。あれだけエリスが許してくれたのに、ずるずると引つ張って。最後に夢に背中を押されるなんて」

涙を流す彼女に視線を合わせる。

今から言うことに偽りが無いように。

俺自身の覚悟を執念に変えるように。

「俺はエリスが好きだ。どんなに引つ張つても、進めなくても。この思いだけは決して変わってない」

彼の口から出た言葉に、私は止めようとした涙を、ついに押させることができませんでした。

やっぱり、私は卑怯者だ。

彼の口からその言葉を、一番聞きたかった言葉を待っていたのだから。

でも、これだけは、彼も自分も騙したくない。

「はい。私もあなたを愛しています」

涙を流しながら、彼女は言った。

その言葉に、彼女想いがすべて詰まっていたのだ。

そつと、エリスを抱く。

想像以上に軽く、そして、想像以上に小さかった。

後ろで空高く上がった花火が、大きな音とともに空に咲いた。

俺はそんな花火を背にしながら、柔らかな感触を唇に感じていた。

慰めと言うほど、綺麗なものではない。

どちらかといえ、傷の舐めあいだ。

お互いがお互いの傷を癒すために。

ただ静かにその夜を過ごした。

第六章 防衛決戦 アクセル編

第49話 変わったものと変わらないもの

暗い。

何も寒いし、何も見えない。

なんだ、これ？

なにかを踏んだ気がした。目も慣れてきたのか、よく見ると人の手のようなものが

……

「……て、助けて……。……助けてくれ！」

俺は逃げた。とにかく走った。

振り返れば、ゾンビのような人々が俺に手をさしのばしてくる。その人々の目は、ま

るで何かを恨んでいるようで、果てしない憎悪だけがそのにあった。

目を覚ますと、部屋が少し寒いことに気づく。そう、この世界で過ごす二度目の秋がきたんだ。

「寒い」

開けっ放しの窓を閉め、部屋を出る。

この一年で変わったことと変わらなかったことがある。

まず、変わらなかったこととして、朝練として週に五回はジョギングをしている。

まあ、ジョギングといつてもそれなりにペースは速い。

「あーやつと起きてきました」

でもって、練習をしない日は一番遅く起きてくるということ。スイツチのオンオフで起きる時間が変わる俺は、毎回腹を空かしたアイリスに急かされる。

そして、変わったことと言えば。

「……。あ、お、おはようございます」

「お、おう。おはよう」

エリスと恋人同士になったことだ。

それにしても、なぜ、お互いぎこちないのか。これには少し訳がある。俺が朝練をしない日は一緒に寝ているのだ。イチヤイチヤしているのとは少し訳が違う。実の所エリスは、紅魔の里でシルビアと戦った時に負った霊基の傷が治ってなかった。アクア祭の晩、その事を告げられどうするか話し合っ、考えた結果、一緒に寝る結論に至った。詳しく説明すると、どうやら、神の霊基は人の魔術回路とそんなに大差がないらしい。ただ、唯一の違いがあるとすれば神の霊基は自己再生ができる所だ。そのため、本来な

ら、致命傷も一日二日安静にしておけば治る。

しかし、今のエリスはそうはいかないらしく、下界に落とされた際、女神としての権能をサツキさんに限定されたらしい。そのせいで、天界からのバックアップの魔力も使った分の最低限しかこないで、霊基の修復に割けないでいるとのこと。

ということで、俺はエリスに魔力補給をすることになった。え、魔力補給で一緒に寝る意味がわからん？まあ、実際のところ魔力補給にはドレインタッチという、リッチーのスキルでやる手もある。だが、そのときの俺らはその場の雰囲気で粘膜による補給ぐらいしか浮かばなかったのだ。案の定、一線を越えることはなかったが。正直なところ、目を合わせるとお互い恥ずかしくなるだ。

お互い酒で酔った状態なら、雰囲気的でそのままもあるかもしれない。

だが、女性経験無し＋奥手×DTが俺を完全に縛り上げ、そんな手を使わせようとはしないのだ。

まあ、そんなこんなでキスをしては寝てをもう2カ月も続けてる。

「それじゃあ、いただきます」

はやくはやくと、アイリスに引つ張られ食卓につく。

それにしても、今日はいつもにまして豪華。

エビフライなんて朝の食卓にならないで。

朝からなかなか、おもたいものだ。

「あれ、そういえばゆんゆんは？」

「ゆんゆんさんなら朝からウイズさんのお店でお手伝いに行ってますよ」

「なるほど。あ、アイリス、ソースお願い」

「どうぞ」

「ありがとう」

他愛のない会話。

これも俺たちの変わらない物だ。

朝飯も済んで何をするか。

アイリスはなにやら、めぐみんと内緒の集まりがあるとかでさつき家を飛び出したところ。

エリスは洗濯物だし、俺だけが暇人だ。

……て、これじゃあただのニートじゃないか。

と、とりあえず散歩でも行くか。

—————

たどり着いたのはカズマ邸。

結局いつもカズマのところにたどり着いてしまうが、決して友達が少ない訳ではない。
い。

逆に家を持つてる冒険者が珍しいのだ。

「カーズーマー！」

「なーあーに！」

「入れてくれ」

「そこはト〇ロパロじゃないのか」

期待を裏切らないツツコミに少し感動。

それにしても、ここはいつ来てもおもしろい。

使いきれない個室に、多分アクアとカズマがインチキに引つかかって買ったエセ高級品の装飾品。

その中に稀にある、きつとダクネスが持ってきたであろう、本物の絵画や壺を探すのも面白さの一つだ。

異世界に来てまで一軒家に住み続ける俺からすれば、うらやましい。

「あら、ユウマじゃない。こんな所まで来て、ひきニートのお世話なんてご苦労ね」

「まあ、どちらかと言えば俺の遊び相手になってもらいにきたんだが。ほれ」

「流石ユウマさん！これ世界で五本の指に入る高級お酒の女神殺しじゃない！」

「この馬鹿が調子に乗るだけだから、持つてなくていいぞ。てか、アクア。お前、一人占めするきだろ？」

「当たり前じゃない。これはユウマが私にくれたものよ。DTくそニートにはもったいなくてあげないわ。ベーだ」

「んだとクソ女神！人が下手にでれば好き放題言いやがって。へスティール〜!!」

アクアの腕に大切に抱えられた高級酒は、輝いたカズマの手へ。

わかつてはいたが、ここまで予想通りの展開になるとは。

てか、カズマのステイールはチートすぎる。

「これは没収だアホ女神！お前には一口も飲ませねえー」

「そんなー、カジユマさん！私が調子乗ったのが悪かったから。一口だけでも頂戴」

「駄目だ、駄目だ！そんなに言うなら今すぐツケを払ってこい。毎回俺の名義でツケやがって。店に入れば請求される俺の身にでもなれ」

「まあ、そこまでにしといてやれよカズマ。気がつけば、高い酒ばかり並んで、毎晩エリスの悪酔いで困ってるのをアクアには助けてもらってるし」

「いや、ユウマ。こいつを甘やかすのはいけない。そうやって調子に乗らすからこうなるんだ。てか、アクアお前、毎回ユウマの家でいい酒飲ませてもらってるんならいいだろこれくらい」

「そうはいかないわ。私だってまだその子飲んだことないもの」

終わりのない論争。

まあ、アクアに助けられてるのは本当だ。

正直なところアクアよりエリスのほうが酒癖は酷い。

どっちもどちなように見えるが、そもそも、悪さが違う。

アクアは飲んで暴れて、最後は吐いて終わる。

しかし、エリスはアクア以上に酒に強く、まず吐かない。

しかも、アクアと違い治すことより癒すことに特化しているせいで、二日酔いがまずない。

そのため、終わりが果てしなく遠く、酔うと性格が変わって、酒を強要してくる。

これを振り切るのがとにかくだるく、飲んでる酒も度数が高いせいで、飲んだらこっちがすぐ酔う。

この前なんか、エリス勢いに負けて遂に飲んでしまった。

しかも、運が悪いことにめっちゃめっちゃ度数が高いやつで、一杯で記憶が曖昧にまった。

詳しくは聞いた話になるが、酷く酔った俺は聞けば、恥ずかしくなるようなことを言つてエリスを押し倒したらしい。

エリスもエリスで結構酔つたこともあって、アイリスやゆんゆんがいるなかで、行為の了承を軽くして、脱がされ始めたらしい。

思い返せば、それらしいことをした記憶があるちやある。

しかし、そのあとのことはどうしても思い出せない。

気がつけば朝になっていて、アイリスとゆんゆんからの視線が痛かった。

ともあれ、それ以降我がパーティーでは酒の規制を強くして、以来アクアに酒を飲んでもらっている。

そんじよそこの酒なら酔わないのに、エリスの酒はレベルが違いすぎる。

「とりあえず、これはお預けだ。ユウマ、この馬鹿を見張つててくれ。片付けてくる」

「おう」

そういつて部屋を出ていくカズマ。

きつと自分の部屋だろうか。

「まあ、落ち込むなよ。同じの買ってきたら飲ませてやるから」

「……」

アクアの様子がおかしい。

急にだまりこんで俺の顔を見てくる。

「どうしたんだよ、いきなり「あんた、死ぬわよ」……へ？」

いきなり物騒なことを言う。

マジでどうしたんだ？

「死ぬってどうして」

「最近、怖い夢見るでしょ。憎悪を持った人たちに追いかけられる夢」

「どうしてそれを」

言葉を失った。

いくら女神でもここまで見透せるものなのか。

「そこまで侵食してたのね」

「え？」

「こつちの話よ。とりあえず、あんたは死ぬわ。前に話した話覚えてる？」

「爆裂魔法とインストールは最大で3回しか使えなくて、それ以上使ったら死ぬってやつか？」

「そう。あんた前に蛇と戦ったとき、一回爆裂魔法使ったわよね？あと2回。それが限度だった。だけど、話が変わったわ。あんたはあと1回爆裂魔法か大技を使ったら、運がよくても半分自分が無くなるわ」

自分の半分が無くなる。

身体が無くなるんじゃない。

精神や感情、工藤悠真という人間の崩壊。

なんとなく察してはした。

しかし、それがあの夢とどう関係があるのか。
俺はそれが知りたい。

「あの子は、エリスは我慢強い子なの。世話焼きで面倒見がよくて、いつも他人のことばっか。自分ことは後回しで、結果としていつも背負い込んでばかり。それがあの夢。理不尽な死にかたをして、行き場のない怒りがあの子に向けられたの。それでもあの子は背負うしかない。多分、それしか知らないの」

「本当、私はあの子に押し付けてばっかだから言えないけど、あの子は背負い込み過ぎて今にもパンクしそうよ。あんたが死んだら、本当に壊れちゃう。だからね……」

「死なないで。あの子の隣にいてあげて」

それは、今まで見てきたアクアの中で、一番誰かのためを思った表情だった。

他の誰かより、あのサツキさん以上にエリスと一緒にいたアクアだからこそ言える言葉。
だけど、

「約束はできない……」

「エリスを傷つけるやつがいるなら、俺はそいつを倒す。怪物だろうと、世界だろうと、あの夢だろうと。俺はエリスを守るって約束したから」

目の前の女神は悲しい顔をする。

俺は彼女の期待に答えることなんてできない。

だから、約束をすることはできない。

でも、もし俺が死ぬことでエリスが自分を傷つけることになるなら。

俺は、守らないといけない。

隣にいて守り続けること、それが俺の役目だから。

第50話 最も近く、遠い場所から見た話

俺、佐藤和真から見た工藤悠真は、不思議な人間だった。第一印象は、ザ・スポーツマン。人生で多分こういう奴とは一生関わらないと思つてた人種だった。だが、これが話してみれば以外と気が合う。努力家の癖に妥協を知つていて、そのくせ突き通すと決めたら命すら捨てて突き通す。守りたい者のためなら自分すら簡単に捨ててしまう。こいつには自分が無いのかと心底驚かされた。

ぶつちやけ、俺は怠惰だ。こいつみたいに一生涯懸命になつたことなんかない。それでも、俺は自分と真逆なこいつに共感してしまった。

王都での戦いは俺と悠真との根本的な考えの違いから生まれたものだった。アイリスに答えを出させたいあいつと、無理矢理でも助けようと、アイリスの手を引つ張ろうとした俺。その結果アイリスは俺じゃなく、悠真の考えを答えにした。

正直、あのと俺は悠真に嫉妬はしなかった。逆に、この考え方こそあいつの生き方だと納得した。助けようとしたのに、結局自分のために走つた俺。最後までアイリス自

身を尊重し、考えた悠真。冷静に考えた時、俺は工藤悠真という人間を完全に理解した。他人を幸せにすることで自分の存在意義を示そうとする人間。それが工藤悠真だった。よく、あいつは『周りに認めてもらいたいだけだ』と自虐的に言っていた。だから、周りを救うのも認めてもらうことの手段だったと。正直、俺は最初の頃ピンとこなかった。

しかし、言葉を交わして、行動を共にして、王都でぶつかりあつたとき、ようやくわかつたのだ。結果的に王都の時は、アイリスを幸せにして、多くの仲間から讃美をもらっていた。

しかし、どれだけ讃美をもらっても、あいつは気づかない。なぜなら、今まで褒めてもらつたことがないからだ。結局あいつに気づかせるには寄り添うほかがないのだ。

だから、俺は悠真に共感すると共に同情した。こんな悲しいやつがいていいのかと同情した。

これが俺、佐藤和真から見た工藤悠真だった。

私から見たエリスは本当にかわいそうな子だった。何に対しても一生懸命に取り組む。

それが評価されて、私と同等の地位まで登りつめた。しかし、結果は評価されても、彼女自身を評価するものはいなかった。当然私もエリス自身に心から寄り添うことはなかった。

寄り添う資格が私には無かったの。私はサツキみたいに何か目的を持っていたわけでもなく、エリスみたいに真面目でもなかった。

だから、あの子の「先輩」て言葉を聞くたびに息苦しかった。呼ばれる資格なんてないから。あの子の背中にどれだけの苦しみが乗っかっていたのか。幸福の女神なのに人々の憎悪と不幸を背負うしかなかったその背中を見てみぬ振りをした私には。何もかもを押し付けた私には、彼女に呼ばれることも寄り添うことも評価してあげる資格はなかった。

だから、私は願った。いつかあの子がいい人と出会うことを。その人と心から寄り添ってあって、辛いこと悲しいことを共感できることを。そして、エリスという一人の

女の子としての評価をもらうことを。

私ができなかったことを、その人にもしてもらえるように。

「あ、もうこんな時間ですよ！」

「マジだ！悪いそろそろ帰らしてもらおう」

気がつけば日も落ちて、外は真っ暗な状態。

なにかを忘れていたかのように席を立った二人の姿はまるで仲のいい新婚さんのようだ。

「二人ともお腹空かせてなければいいんですけど」

「最悪なんか買ってくしかないな」

晩御飯のことを考える二人を見てみると、こつちまで幸せな気分になる。

「それじゃあなカズマ。また来る」

「……待ってくれ」

扉を開ける悠真を引き留める。とっさに呼び止めたから何を言うか決めてなかった。どうしたかという顔でこつちを見てくるが、なんて話すべきか。

「なあ、カズマ」

「………ん？」

「紅魔の里の道中の話覚えてるか？魔王を倒したらどうするかってやつ」

「ああ、覚えてるよ」

その先のことはその時の考えると云った悠真。あのときのこととは色濃く覚えてる。

「俺さ、桜を見たいんだ。エリスやアイリスにゆんゆん。そしてカズマたちと」

安心した。

自分のことを簡単に捨てて、突っ走っていた青年はこれからも変わらずに走り続けるだろう。だが、その突っ走った先のゴールが明確なものなら。たとえば、奈落に墮ちようと、道を見失つてもたどり着くことができるだろう。

「ああ、いいなそれ」

カズマとユウマが話しているうちに私も話しておこう。

「ねえ、エリス」

「なんですか？先輩」

不思議な顔を浮かべる彼女はいつものように私を呼ぶ。

私が聞きたかったこと。私が誰よりも幸せを願った子に、今までどうしても聞きたかったこと。

それは……。

「幸せ？」

私の問いに彼女はそつと微笑む。

「はい！幸せです」

それが、聞きたかった。この子のこの答えを聞けただけで、下界来た意味があった。

屋敷を出ていく二人の背中が、建物の影に消えて行くのを見守る。

「ねえ、カズマ。今日は私がご飯作ってあげようか？」

「俺が作るよ。だって、お前の料理ってマヨネーズかけご飯だろ？」

「失礼しちゃうわね。エリスに料理を教えたのは私なんですけどー」

「あー、分かった分かった。もうめぐみんたち帰って来るから。とっとと取りかかるぞ」

秋の風が玄関の中に入ってくる。

その風はどこか寂しいものだが悲観するものではなかった。

第51話 悪魔の取引

事の発端は朝まで戻る。これから一日が始まるという街に、一つの爆発音が響いた。負傷者の数は街の人口の二割を超え、正門側の建物は木っ端微塵に吹き飛んでいた。爆発の規模から爆裂魔法による可能性が大。その犯人の予想として、最近第一戦線の砦を爆破テロしていた魔王軍幹部、邪神ウォルバクが挙げられた。

「事態は既に最悪な状態に……か」

王都からの緊急外号から目を離し、辺りを見渡す。

現在、俺はギルドの椅子に座っているのだが、周りにはあわあわとしている。怪我人の治療に、壊された壁の修復を呼びかけるギルドの役人たち。みんながみんな死に物狂いで動いている。

なんで、こんな状況になったのか。そもそも、街の二割を一瞬にして飛ばすとかなんだよ。ほぼ魔王軍で確定じゃないか。それにしても、なぜ魔王軍が王都じゃなくてここに？魔王軍幹部を倒してきたパーティーがいるから？ここアクセルが冒険者育成の始

まりの街だから？王都の姫様がいるから？

考えること全てが答えな気がする。そもそも、今この国全体が打倒魔王のムードになっている。その中でも特に強いのが王都だ。つまり、王都には戦力が集中している。それでいて、こつちのアクセルは幹部を倒したくらいで特に強いパーティーが沢山いるわけではない。しかも、ここを落とせば姫を人質にできるとともに冒険者を育成できなくさせれる。

あれ？結構やばくない。

「おーい、人運んできたぞー！」

「こつちはもう虫の息だ！プリーストを回してくれ」

「人を置ける場所なんてないわ！」

ギルドの中はもう地獄絵図。あつちこつちで叫びの聲が上がっている。

「ユウマさん？大丈夫でしょうか」

「お前顔色悪いぞ」

「え」

突然役人のお姉さんとカズマに声をかけられる。そう、俺は今ギルドの奥で作戦会議をしているのだ。

「えっと、今の説明リピートお願いします」

「わかりました。現在、アクセルは正門側が壊滅状態に、幸い時期が時期なのでモンスターが入ってくることはありません。しかし、危険なのは変わりなく、攻撃が爆裂魔法だったとすると、また明日以降またいつ爆裂があるか。残念ながら、王都からここまでには早くても三日はかかります。増援が来るまで持つのは」

「この際逃げるとかないですか？」

これにはカズマもギブアップのようだ。思考を放棄している。

「残念だけどそれは無理だな。テレポート使えるのこの街に二人くらいしかいないし。歩いて逃げるにも負傷者運んだりせるのに時間とられて、その隙に襲われるに決まってるからな」

「頼むから現実を押し付けないでくれ」

「悪かった」

部屋の中は既にお通夜状態。外の悲鳴、罵声が響く。そんな中、申し訳のない顔で役人のお姉さんが口を開く。

「その、非常に言いづらいのですが。王都からの増援がくるまでの間、お二人方にどうかしてもらえないでしょうか……」

「……」

「つまり、死ねと」

「おい、カズマ」

「ユウマ、俺たちは確実に死ぬぞ。今までは他の冒険者がいたり、戦えなくはない相手だった。でも今回は別だ。王都の軍を一人で相手できる上、爆裂魔法持ちでしかも邪神だ。俺たちは確実に死ぬ」

「……」

言われてみればカズマの意見はもつともだった。確かに今までの相手はごり押しが効いたり、弱点があった。しかし、今回はそういう次元の話じゃない。相手のレベルが違いすぎるのだ。王都には俺たちとは違ってマジのチートをもらって無双している冒険者だっている。そいつらが加わっている王都軍ですら、噂の邪神と互角という。

正直言つて無理ゲーだ。

「ん、王都からの通信。……ええ？」

ファックスのような魔道具から出てきた紙を片手に固まるお姉さん。その表情は深刻で、この状態に更に迫り討ちをかけるものだった。

「王都に魔王の娘率いる魔王軍が接近。これより緊急戦闘配備につくため、増援は不可能……」

それは、このアクセルの街の終わりを意味するものだった。

「疲れましたー」

「怪我人が多くて看護大変だったね」

看護であちこつちを回っていたゆんゆんとアイリスはソファアアの上でばたりと倒れる。二人とも相当こき使われたのだろう。もう一步も動けないという感じだ。

「二人ともお疲れ様です。ユウマさんも作戦会議お疲れ様です。どうぞハーブティです」

「ありがとう。エリスこそ回復スキル使いまくってたんだから、しっかり休んでくれよ」

じゃあと笑顔で返したあと、エリスもまた二人の倒れこんでるソファアアに倒れる。三人とも街のために必死に頑張ってくれた。それに比べて俺はどうだ。策の一つ、アイデアすら出せずに諦めている。彼女たちは自分にできることを精一杯探してやっているのに。

「三人は休んでくれ。少し外に言ってくる」

考えているのが馬鹿らしくなる。家を飛び出して、例の場所を目指す。そう、この街には一人いた。邪神相手でも張り合える奴が。

「時期に来るとは思っていたが、我輩の予想より少し早かったな坊主」

エプロン姿でにやけた表情を浮かべながら、仮面悪魔は言った。

「要件は分かっている。が、お主の言葉で聞こう」

「この街で邪神相手にタイムマンを張れるのはあんただけだ。頼む、結界魔法の全てを俺に教えてくれ」

ついに笑いを堪えることができなくなったのか、その甲高い声を人気の少ない通り全

体に響かせる。

「フハハハハ！我輩に事の始末を頼むのではなく、教えを乞うか。……そのボロボロな身体で。傑作だな！フハハハハ！」

「ああ」

「覚悟はあるようだな。しかし、あの愚か者の曇りなき眼と言うのも、とんだ節穴のようだ」

「お主はあの馬鹿女神にこう言われただろう。あと二回が限度」

「バニルが細かいことまで理解していることに、今さら驚きなどしない。だが、アクアの言っていることが間違えだと言う理由がわからない。」

「別に間違えではない。確かに二回使える。そして二回目を使った瞬間にお主の精神が死ぬ」

「ああ、アクアからそう言われている」

「ゴリラに囲まれていると、どうやら同じ脳筋馬鹿になってしまうのか」

「どうということだよ」

「どうということも何も、まだ分からぬのか？」

バニルが何を言いたいかよくわからない。

あと二回が限度それに変わりはないだろう。

「仕方がない。ここまで言えば分かるだろう。二回目で精神が死ぬ。つまりあと一回は体は耐えられるのだ」

体は……。

なるほど、そういうことか。

「やっと分かったか。まあ、こんなこと考えることもなかろう。そもそも、お主の身体は既にお主のものではなくなっている」

「未来で得ただろうお主の力と、自分勝手な馬鹿の力がぶつかりあって、とつくの前にお主の力は消滅している。そして、次に魔力の大量消費を行えば、二つの魔力はお主の体の支配権を得ようとぶつかり合いが始まる。そして最後の二回目でついに力に耐えきれなくなり、体が崩壊する。だが、」

「その前に俺の精神が崩壊する」

「そうだ。何しろ、人の身に過ぎた物が体全体を埋め尽くしているのだ。今でも耐えているのが奇跡なのに、その二つがぶつかり合ったりすれば精神が死なない訳がない」

その仮面を困らせながら、バニルは言う。

「精神と言うのは身体より脆い。些細なことで壊れてしまうからな」

どうして、もう少し自分を大切にできないか。普段気遣う事をしない悪魔にここまで言わせるほど、俺は頑固らしい。

「それでも、教えを乞うのか？」

葛藤など、とうに放棄したさ。

「ああ、何がなんでも守りたい人がいるから」

悪魔は声に出さず笑った。そこに哀れみなどない。単純に嬉しかったように俺には見えた。

「いいだろう。私の全てを最短で教えてやる。報酬は高くつくぞ」

「安心してくれ。報酬は邪神討伐の懸賞金。これを全部やる」

本当に馬鹿な男だ。惚れた女の居場所のためにここまでやるのだからな。

「悪魔の契約は絶対だ。簡単には死なせぬぞ」

第52話 覚悟の瞬間

正直な所、もうこの街は無理だな。

これが俺の率直な感想だ。

そりや、デストロイヤーの時は、せつかく手に入れた屋敷を壊されてたまるか！なんて気持ちはあつたさ。

だが、今回は違う。

既に町の二割は吹っ飛んだ。

奇跡的に死人は出なかつたものの、負傷者の数は多く、手当てする側もボロボロで戦う気なんて微塵もない。

しかも、王都からの救援もないときて、終いには俺たちでなんとかしろという始末。ぶっちゃけ無理ゲーだ。

しかし、悪いことだらけでも無さそうだ。

「なんと、たまたま通りかかったブリーストが街の状況をみかねて、手当てを手伝ってくれたのだ。」

僅かな救いの光に生きる活力を取り戻すことができた街の人々。

めでたし、めでたし。はい終わり。

で、いいじゃないか！

実際問題、何の解決にもなつてねえー!!

多分、噂の幹部様は明日の朝も今度は別方向から、街を襲撃するだろう。

すると、また負傷者がでる。

最悪の場合、死人だつて。

いや、死人はアクアがいればどうにかなる、のか？

しかし、それがいつまで続くかわからない。

ああ、もし運命を司る神様がいたら、そいつはとんでもないど畜生だろう。

「なにかお困りですか？」

声の方へ振り向くと、そこには大きく素敵な物をもった女性が一人立っていた。

これはビューティフォー。

ウイズとはまた違った、大人の色気がむんむんだ。

「私で良ければ相談にのりますが」

この女性、いきなり腕に胸をつけてきた。

しかし、虚しい。転生したばかりの頃の俺ならDT丸出しで喜んでいただろう。残念だが、今の俺にはなんともない。

「その、あまり押されると」

「問題ない。どうか続けてください」

仕方がないじゃないか。押してきたのだから、押し返す。

別におかしいことはない。

「ん？よく見たら、お姉さんさつきギルドで」

「あら見ていられたのですか。私はセレナといいます。しがないプリーストです。それにしてもあの有名なパーティーのカズマさまとお話ができるなんて」

「俺、そんな有名なんですか？」

「はい、それはそれは。王都にととまらず、国境まで噂されています」

俺が国境まで噂？

あり得ないな。

しかも、もし噂されてたとしてもどこの馬鹿貴族が流した悪評ばかりで、いいはずがない。

「うちのメンバーならまだしも、俺が噂されるなんて聞いたことないんだが」

「そ、そんなはずはありません！あまたの魔王軍幹部たちと渡り合ったカズマ様はそれはもう庶民の英雄でして」

どうやらものすごい勘違いをされている。俺が関わった幹部戦でベルディア、パニル、ハンス、シルビアくらいだ。しかもともに俺が戦った相手なんてハンスくらいという事実。

「なんかやるせなくなってきた」

「元気をだしてください。そうだ、ここで会えたのも一つの縁。なにかお飲みになりませんか？」

察したのかセレナが飲み物をおごってくれるらしい。残念だが、今はそんな気分にならない。こんな状況で周りはせつせと復興に力をいれているのに、俺だけ昼間から飲んでいけるわけにもいかない。

「悪い、それは今度で頼む。今から悪友の見舞いに行かないと行けないんで」「それは残念ですわ。それではまたの機会に」

残念そうに去っていくセレナを尻目に俺はダストのもとへ向かた。

「悪いな見舞いに来てもらって」

負傷者だらけのシートの上にダストは横たわっていた。

「調子はどうだ？」

「言うほどだ。ぶつちやけここはせまつ苦しいから刑務所の中が恋しくなるぜ」

怪我の要因はウォルバクの襲撃時、路上で泥酔していたところ爆風に巻き込まれたと
のことでパーティーからも呆れられていたが、そこまでひどい怪我でなくてよかった。

「話は聞いたぜ。王都から応援はこないらしいな」

「ああ、向こうはむこうでやばいらしいからな」

「これだから貴族は。王都の冒険者も合わせればこっちに持ってこれる部隊くらいある
だろうにな。自分かわいさに兵や冒険者を一人占めしやがって」

ダストの苛立つ理由はよくわかる。正直いって王都の冒険者のレベルはかなりの
ものだ。数十人応援に持ってこようが、そう簡単に崩れるわけがない。

「畜生。こんなときに限って、俺が出られないなんてな」

ここで一つ残念な話をすると、今回の襲撃の負傷者はなぜだか一般市民よりも冒険者のほうが多かった。

まるで最初からその場所に冒険者が多く集まっていることを知っていたかのように襲撃されたのだ。

「俺たちは俺たちで戦える戦力が限られてる。それに相手が幹部となるとな」
「カズマ、これ」

差し出されたのはジグザグと曲がった不思議な短剣だった。

「昔、戦場で手に入れたもんだ。契約破棄の神器」

「どうしてこれを俺に？」

「勘だよ勘。今回はかなりやばい感じがするぜ。一山じゃ終わんない何がな」

戦闘センスや身に付けている武器といい、前々から謎なやつだと思っていたが、今回でさらに謎が深まった。

「ありがとう」

「ああ、俺たち戦えないやつの方も頼むぜ。サキユバスの姉さんたちを守るの」

「そうだ、俺は今までこの街のサキユバスたちにどれだけお世話になったことか。それはダストを含む男冒険者たちもそうだ。何とかして守り抜かないとだよな。」

「任せとけ」

短剣を腰にぶら下げてギルドを後にする。さつきまでのもやもやは何だったのかやる気がみるみる湧いてきた。

さあ、しがない最弱職の大博打の始まりだ！

第53話 針鼠のジレンマ

体内を駆け巡る血に魔力を混ぜながら酸素とともに循環させる。脳に、肺に、心臓に身体中の臓器という臓器に隅から隅まで魔力が染み渡っていく。

おかしな感覚だ。例えるなら水の中に浮かんでいるとき、まるで自分が水と一体になっっているような感覚で、そのまま流されていくような。

「そこまでだ」

突然の制止に魔力を止める。目を開けてバニルを見るが、どうやら不服なようだ。

「馬鹿者、そのまま流されるやつがどこにいる！」

「いや魔力と一体になれて言ったのはそっちだろ」

なにが納得できないのだろう。魔法の威力を上げるには魔力を常に身体中に満たし

ておくよう言ってきたのはバニルのほうからだっただけだが。……あ。

「やっと思い出したか。お主の体はお主以外の魔力が二つも混じっている。つまり魔力に流されれば、お主は戻ってこれなくなるのだぞ」

言われて気づく事の重大さだが、あの魔力はなんとというか心地のいい、受け入れ包み込んでくれるもので消して悪い印象は受けなかった。

「まあよい。オマケのようなもので教えたことだ。今後気を付けるんだな」

「ああ、わかった」

「二日でやれることはした。あとはお前さん次第ということだ。せいぜい限界まで足掻いてみる。さすればまともな結末を迎えられらだろう」

珍しく激励の言葉を残して仮面の悪魔は去っていく。

やれることはやった。一つの魔法を残して結界魔法のほとんどを修得することができた。

しかし、この二日間襲撃が無かったことは奇跡としかいえない。いつくるかわからな

い襲撃にかなり焦ったが、これならなんとかなりそうだな。

家に帰るとエリスが一人ソファアの上でノックダウンしていた。たぶん重傷者の手当てに一段落ついたのだろう。朝から晩までつきつきりで治療していれば流石に女神でも疲れるのだ。

「あ、ユウマさんお帰りなさい。お昼のご用意します」

「疲れているだろ？俺が変わりにやるよ」

エプロンに手をかけた瞬間、おもいきりソファアの方へ引っ張られる。

「ユウマさん」

「どうした？どこが悪いの……?!?!?」

ぬくもりが身体中を包み込む。突然のことで少しパニックだったが、エリスの手を感触を感じて気づいたか。小さく繊細で綺麗だった指先が紙で切った傷あとと、なんどもなごも絞った濡れタオルのせいでしわしわになっていた。

「えへへ。私、頑張りました」

「ああ。本当に頑張ったよ。ごめんな無理ばかりさせて」

「大丈夫ですよ。ユウマさんも頑張っていますから。街を救うためにいつも夜遅くまで修行しているの私知ってますから」

胸が温かくなった。誰かに褒めてもらう感触、認めてくれるうれしさ。そのすべてが愛おしく、泣きたくなるくらい温かいものだった。

「そういえば、ゆんゆんとアイリスはどこに？」

「二人ならカズマさんに呼ばれて屋敷にいます。なにやら大がかりな計画らしくて」

カズマはカズマでしつかりと考えていたんだ。この街を守るため。みんな、できることを精一杯探してやっていたのだ。俺もなにがなんでと成功させなければならぬ。

「二人には内緒で外食をしようか。エリスの食べたいものを食べに行こう」

少し間が空いたあと、彼女はにこやかに笑って言った。

「では、ピザでお願いします！」

—————

「いやー、食った食った。それにしても久しぶりだったなレストランでの飯なんて」
「そうですね。いろいろな大変でしたから」

思い返してみればここ最近騒がしい日が続いていた。世界最大のダンジョン、魔王軍幹部ラヴクラフト、アクア祭、襲撃。ほとんどが戦いの日々でアクア祭はつかの間の休みだった。

「今度はみんだで食べに来たいな。」

「ゆんゆんさんにアイリスちゃんはもちろん、カズマさんや先輩たちも呼んで大勢で考えただけでも楽しいですね」

この戦いが終わったら。そんなフラグを建てるようなことはあまり言いたくないが、せめて少しでも穏やかな日常に戻れたら。またみんなが集まって楽しみたい。血なまぐさい戦いや、面倒な事はすべて忘れて、そんな日を迎えられたら。

「もし、ここでウォルバクを討ち取ったら、あとは魔王だけになるんですよね」

「そうだな。何だかんだ他の幹部は倒したし、王都が魔王軍と交戦してるといふことは、魔王討伐もすぐそばまでできてるしな」

考えてみればエリスを天界に返すことから始まった魔王退治も、もう終盤戦を迎えている。終わりがすぐそば、あとは突っ切るだけなんだ。今がどうしようもないピンチでもそう考えるだけで少し心が軽くなる。

「ユウマさん」

「なに？」

他愛のない言葉が一つ一つ重なる。

「私あなたが好きです。何気ない横顔やふざけてるときの姿。真剣な眼差しから声の一つ一つが。あなたのすべてが好きです」

言葉が震えている。その姿は何かに怯えているようで。

「私怖くて、ユウマさんが戦う度にボロボロになっていくことが。外見が変わらずとも、内から壊れていってるようで、いつか本当にそのまま消えて無くなっちゃうと考えるよ、夜も寝付けなくて。だから……」

無理をしないで。エリスの言いたいことは痛いほど伝わってくる。でもだ、無理をしないで勝てたことなんて今まで一つもなかった。俺にできることの常に一段二段だつて飛び越えてやってきた。その結果が身体に巻き付いた時限爆弾のような魔力だ。

あと二回。それですべてが無くなる。けれどだ

「無理はするよ。今までだってそうだったし今回の相手はそれこそシルビアやマザーハーロツト以上だ。無理をしないと勝てない。いや無理をしても勝算は低い」

分かつてる。どれだけ無謀な戦いか。シルビアの時はバックアップをとってくれる仲間がいたし、マザーハーロツトのときは相手を上回る聖剣をもつアイリスがいた。でも今回は違う。カズマたちにはまだ話していかないが今回のプランは俺とウォルバクの一騎打ちだ。バニルの話しによればウォルバクは邪神としての権能のほかに大量の眷属を召喚できる。この処理はめぐみんの爆裂魔法やアイリスの聖剣でも足りない。だから、眷属の足止めはアイリスたちに任せて、ウォルバクを真っ正面からなるべく早く倒す。幸い、こつちにはへ因果を絶ち悪を切り裂く正義の剣と爆裂魔法がある。最悪、相討ちを覚悟しての戦いだ。

「大丈夫。だって俺には幸運の女神がついているんだから」
そう本当にこの一言に尽きるのだ。

「絶対に君のそばからいなくなるらない。最後まで守りつづける」

駄目だ。私はユウマさんのこの表情に弱い。揺るがない決意と優しさが込められた顔。私が彼の中で一番好きなのこの表情は、弱虫な私を前に導いてくれる。

「私だって絶対に離れません」

いつの間にか落ち始めていた太陽は、夕陽となってオレンジの光で私たちを照らす。彼と始めていたこの世界に降りたときに感じた、冬へ向かう秋の冷たい風が、素肌を優しく撫でた。

閑話 女神からまごころを込めて

それは私が天界にいた頃。大切な人からもらった大切な味。甘く優しく暖かく、とても不思議なお菓子だった。

『それはね私があなたの先輩だからよ』

泣きじやくる私にぬくもりを与えてくれた人。この香りを感ずる度に思い出す事。
それは

――

――

――

――

いつもと変わらない朝、変わらない食卓の風景。みんな揃って食べる朝飯は当たり前ながらとても心地いいもので。

「いや、今日もエリスの飯は上手い！」

「まったくですよ。このクオリティのご飯が一日三食も味わえるなんて幸せなことですよウマ」

「だよな。エリスには本当に感謝だ。あ、めぐみんの醤油取ってくれ」

「はいどうぞ」

「ありがとう」

ここだけの話、目玉焼きの黄身に醤油を加えワインナーにつけて食べると味が格段に上が……る？

ちよつと待てよ……

「おいめぐみん。貴様はなぜここに？」

「たまには好敵手に我が爆裂道を見せるのもありだと思ひ、寄つたのですよ。あ、すいませんご飯のおかわりを！」

こいつは果たしてどこまで自由人なのだろうか？いくら友人の家でもわきまえるものがあるだろうに。

「ぼーとしていると、せつかくのご飯が冷めてしまいますよ。ねえ？アイリス」

「それもそうですが、たぶんユウマさんはお頭さんに遠慮を覚えて欲しいんだと思いますよ」

「そうケチケチしなくてもいいじゃないですか。一人でも多くの人数で食卓を囲ったほうが楽しいものです。ゆんゆんスキあり！」

「あー私のたこさんウィンナーが！」

「最後に食べようなんてネチネチとしているからいけないのです」

めぐみんよ流石にそれは酷いんじゃないか？誰だってお気に入りは最後まで残しておきたいものだよ。

「お待ちせしました。おかわりのご飯です”お嬢様”」

「ありがとうございます！では朝食の続きを……え!?」

「「え!?」」

騒がしかった食卓が一瞬にして固まる。そして声を揃えて一同エリスに釘付けになる。

「どうかしましたか？」

「あのエリスさんその格好で」

「あ、これですか！メイド服ですよ！メイド服。アクア先輩に貸して頂いた漫画に描い

てあつて前々から憧れていたんです。どうですか？ご主人様♡」

朝からテンションフルMaxのエリスにどうやらついていけず、ついにみんな揃って動かしていた箸を止めてしまった。

「あのエリスさん正直言いにくいのですが」

「実は私もなんです」

「どうしたんです？アイリスさん、ゆんゆんさん急にかしこまってしまつて」

「ええい、アイリスもゆんゆん焦れたいです！エリス、はつきり言いますが、流石に痛いんです」

「え……」

めぐみんの容赦ない言葉を前に、さつきまでトップギアだったエリスに昭和の漫画みたく、ガーンの文字が落ちている。

しかし、普段のロングスカートからふりふりのミニスカートへのチェンジこれはこれで。

「いや、メイド服最高に似合ってるよ。あとご主人様コールおかわりください」

「……ユウマさん！」

「あー、もういいです。そういうイチャイチャは二人でしててください、洗い物は私たちでしますの」

呆れた様子で食器を運んでいくめぐみんたち。ここはお言葉に甘えておくとして、例のアレを頼んでみよう。

「耳搔きお願いします」

「かしこまりましたご主人様♡」

おうふ。なんて素晴らしい体験なんだ。幸運の女神様からご主人様コールだけではなく耳搔きまで。やべえ、尊くて死にそうだわ。

「いい。最高だよエリス」

「もう、あまり動かないください」

丁寧で繊細な高等技術。耳から五大全域に広がっていく快感。マジで昇天してまう。

「ユウマ、流石に男の喘ぎ声はどうかと思いますよ」

「ユウマさん……」

「最低です」

あらぬ誹謗中傷が身体に突き立ててくるがそんなものは怖くも痛くもない。いや訂正。アイリスのゴミを見るような目は流石につらい。

「もう、お嬢様方。そう旦那様を悪く言わないでください。そういうえば、もうすぐ出来たと思います。冷蔵庫から取ってきますね」

「なんと！ デザートが。流石エリスです!!」

「エリスさんばんざーい！」

「ちよいまち、エリスー。旦那様コールおかわり！」

皆さんデザートで気分変わりすぎはしません？ゆんゆんも声に出してないだけでめっちゃ笑顔だし。

「これはこれはデザートの代表格プリンではありませんか！」

「今回はプリンに挑戦してみました」

別に用意していたカラメルソースが黄金のボディにかけられていくこの瞬間、なんと神秘的だろうか。

「ふむふむ。お母さんがお父さんのなけなしの給料で買ってきた牛乳と卵で作った砂糖抜きのカラメル無しの素材の味プリンを思い出す素朴さです」

「クレアが初めてお料理に挑戦したときの焦げた甘い砂糖の風味。懐かしいです」

「ああ、これ！確か私が10歳の誰も来なかった誕生日会にお父さんが買ってくれたケーキ屋さんの味です！」

おのおのまつたくもってバラバラの思い出話を始めたのだが。ゆんゆんよ、最後の話はあまりにも悲しすぎるから、忘れさせてくれ。

「みんな味に関してバラバラな感想なんだが。ハム」

口の中に入った瞬間感じた懐かしさ。確かにこれは日本で生きてた頃、母さんが得意

としていたプリンの味にそっくりだ。懐かしい。部活で結果を出そうが出さなからうが、ちよつとしたことで毎回作ってくれてたつけ。結果が出たときは少し苦味のある大人の味のカラメルプリン。結果が出なかったときはホイップたつぷりで上にさくらんぼが乗ってたつけ。あのあまあまな味に何度救われたことか。

今となつてはいい思い出だ。

「母さんの作ってくれたプリンの味がしたよ」

「えへへ。実はこのプリン、少し特別なんですよ」

「へー何か隠し味でもあるのか？」

「それは秘密です」

彼は笑つてそうかと言つた。そう、これは特別なプリン。私がまだ新人だった頃。アクア先輩に食べさせてもらったものだ。

まだ、経験の浅い私に特別な思いをさせてくれたプリン。失敗するたびに代わりに背負ってくれた先輩。なんだかんだ、アクア先輩は私にいつも優しくかったのだ。

—————

〈カズマ邸にて〉

「めぐみんのやつまた朝早くからどこいったんだ?」

「あの子だつて、あーゆう態度をみせてたつて友達と遊びたい年頃なのよ。できた!」

「そーゆうもんなのかね。てかさつきからなに作つてたんだ?」

「プリンよプリン。ちよつとカズマ、ダクネス呼んできて」

久しぶりに作つてみたが、我ながらいい完成度だ。確か前に作つたのは

「すごいなアクア。このプリン。私が幼い頃になくなつた母上の香りがするぞ」

「いや、この味は確か」

みんな思い出ものがあるのだろう。そう、だつてこれは思い出のプリンなのだから。隠し味に使つた女神の奇跡は時にその人の一番大切な思い出を呼び起こしてくれる。記憶に残つた香りや味をこのプリンは思い出させてくれるのだ。

私も一口食べてみた。思い出すのは天界での事。神器の管理書を失くしたエリスの代わりに私が全能神様に起こられた日。あの子はそれはそれはそれは大泣きをした。

『なんで私が失敗したのに先輩が怒られるんですか?』

『それはね、私があなたの先輩だからよ』

その日はエリスを泣き止ますためにプリンを作つてあげた。それまで料理は趣味の

程度でしかやってこなかったから、失敗してしまっただが。あの子たら、涙で腫れた顔で幸せそうに笑ってて。その時だったかしら。私、この子の先輩でよかったて思えたの。

「なあ、アクア。これ隠し味てなんなんだ？」

「それは秘密よ。当ててみなさいクソニート」

これは私とエリスだけの秘密。いつか私以外の前でも心から笑えるようにと込めた願いのスパイスだ。